

---

# 魔王降臨伝

imaiwa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王降臨伝

### 【Nコード】

N9396E

### 【作者名】

imaiwa

### 【あらすじ】

ゼームス大陸の覇権を握る魔王、しかし勇者に追い詰められ魔王城から逃亡した。

その最中、空を飛行中に白い光を見つけ興味本位でそれに触れたが最後、異界へと飛ばされてしまった。

## 第一話、さよなら、ゼームス大陸。

ある惑星に、唯一あるゼームス大陸。

その大陸を圧倒的な力と恐怖で支配する魔王。

魔王は、逆らうもの全てを悉く打ち滅ぼした。

好戦的な国には魔物を送って、1日もかからずに支配下に置き、その国の長を魔物に挿げ替え、戦いを好まない国々には襲わない代わりに、貢物を定期的に献上する事を義務付けた。

そんな世界に突如勇者達が現れた。仲間の魔法使い、僧侶を引き連れた謎の一味。

彼等は誰に頼まれた訳でもなく、魔王城へ乗り込み、魔王と同じ地に立ち、決戦の時を迎えていた。

魔王城は大きな岩山を取り込んで建てられていて、決戦場は広い岩土の台地だった。

その上には大きな岩が点在している。

「勇者、本当に何しに来たんだ？ お前は」

魔王はほっかむりの黒いローブを体に纏い、ローブの暗い影から赤い目を光らせていた。

勇者には特に恨みもないし、「誰かに頼まれて俺を倒しに来たのか？」と聞いても、「……いや、別に」って言葉少なく答え、襲ってくる様子もないものだから、魔王からしてみれば、本当に不可解な存在なわけで……

何しにきたのが、どうしても聞きたかった。

「特に目的はない……」

「何かあるだろ？」

勇者にしつこく質問する魔王。

その様子を見ていた魔法使いが魔王を睨みつけながら勇者の前に躍り出てきた。

ピンクの魔法ローブに薄い紫色のヴィザードハット、帽子の真ん中には月のマークを象ったブローチが付けられていた。

緑色の髪は肩まで伸びていて、先が外側に撥ねている。

紫色の瞳に大きくぱっちりした目が印象的な美形の少女。

「あのねー、あんまり勇者様に一杯言わないでよね、困ってるですよ」

岩に座りながら黙って目を瞑る勇者。

短い金色の髪が上に伸び、鼻はすらっと高く、青い眼が美しい美形の青年。

シルバー色の爽やかな勇者マントを背につけ、頭に青と白のストライプのバンダナ、ドラゴンを象った堅そうな鎧、両肩の先は丁度角のような物が出っ張っていた。

鞘に納まった大きな剣の先を地面に突きたて、その柄を両手で掴み杖代わりにして、体を起こした状態で固定していた。

「勇者様はね、気まぐれなの。今日何しようかって三人で町歩いてたら、うちの僧侶が魔王狩りしようって言ったから、特にすることも無かったんでOKって言っただけなの。つまり、成行きでそうなの、だから、あんまり深く聞いてあげないで」

勇者を巧みな言葉と身振り手振りで擁護する魔法使い。

魔法使いは勇者の熱狂的なファンだった。信者と言ってもいいか

もしれない。

その様子を後ろで見ていた僧侶が、魔法使いより苛立った様子で割り入ってきた。

ほっかむりの薄緑のローブに長い白髭、節くれだった木の杖。

一見僧侶に相応しい身なりをしていた。

僧侶といえば、慈愛の精神で、補助系魔法や回復魔法で仲間をサポートする知恵ある優しい老人と言うのが相場だろうが、彼は違った。

「グダグダ言ってんじゃねえ！俺が言っただよ、てめえを斬るってな！　いくぞ！」

荒々しい口調で魔王に罵倒を浴びせたかと思うと、有無を言わず血走った目で魔王に襲い掛かる。

僧侶は魔法を唱えるかと思いきや、杖の先を横に捻ると長い剣を引っ張り出す。

杖だと思っていたものに剣を仕込んでいた。

「一刀両断！」

剣を振り上げ、助走をつけて空高く舞い上がり、上から魔王を切りつける。

魔王は首を傾げそれを楽々交わすと、素早い動きで僧侶の後ろへ回り込んだ。

「要はお前等は俺を殺しに来たって事だな、じゃ敵じゃねーか、とことんやらせてもらっぞ……」

僧侶は剣を振り回して、魔王に当てようと頑張るが、巧みなフツ

トワークで全て交わされてしまう。

僧侶が剣を連続で振る合間を縫って、魔王の堅い拳が何度か顔面をとらえ、段々顔の形が変わってきていた。

このままでは僧侶がやばい

「魔法使い！ 魔法だ！」

重い腰をやつとあげ、勇者が珍しく口を開け指示を飛ばした。

「うん、わかった、勇者様！」

右目でウィンクを飛ばし、それに答える魔法使い。

「ファイアボール……」

魔法使いが杖を横にして詠唱を終らせようとした時、僧侶の血まみれの顔を、魔王は右手で掴んで体ごと持ち上げ、自分の前に僧侶の体を持ってきた。

「打てるものなら打ってみな、こいつにあたるぜ」

「卑怯な！」

魔法使いは詠唱を一旦止め、杖を握る手を震わせながら、その場で立ち尽くす。

そして、困ったような顔を勇者に向けた。

「勇者様どうしよぉー？」

魔法使いは首を小さく傾げながら、目に涙を浮べ勇者にぶりぶり視線を飛ばしていた。

面倒くさいな……勝手に突っ込んでいった拳句、捕まって俺達に迷惑かけるし

しかし、今見捨てたら後々面倒だな

しばらく、勇者は下を向いて考え込んでいた。

やがて、何か決意をしたのか、勇者は一人頷くと岩に腰掛けたまま、指先を魔王に向けた。

「待て、魔王！ 複数でお前を襲おうとした俺達が悪かった、俺とサシでやるっ」

青い眼を真直ぐ魔王に向けて、渋い台詞を口にする勇者。

しかし、その台詞を言い終えると、力なく下を向いてため息を放った。

「勇者様かつこいい……」

魔法使いはその場で飛び跳ねながら黄色い声を勇者に向ける。

勇者は彼女に冷めた目で手を振り、苦笑いを浮かべた。

本来人見知りが激しく、目立つのが苦手な勇者は彼女にいつも振り回されていた。

今日も彼女の手前台詞多めだが、普段は無口な青年だった。

魔王は実は正々堂々とか、タイムンという言葉が大好きだ。

多勢に無勢で、さつきは僧侶を盾にして保身に奔ったが、その行為は彼からすれば本意ではなかった。

しばらく、物思いに耽っていたが、やがて僧侶をその場に捨てて口を開いた。

「ははは、人間のくせにまともな事いいやがる、その心意気は良し。やってやろう！」

勇者を見据えながらゆっくり歩み寄る魔王。  
黒いローブを右手で剥ぎ取ると、薄いグレーの武道着を外に晒した。

この格好は魔王が本気で戦う時にだけ見せる、言わば勝負着。  
その姿を見て勇者は目を細め、静かに鞘から剣を抜き取るとその切っ先を魔王に向け構えた。

「ちょっと離れて見ててね」

勇者は魔法使いに視線を送り言いはなつと、心配そうな顔で見つめ返してきた。

「お、俺は大丈夫だから、僧侶を頼む……」

「分かったー、勇者様頑張つて！」

勇者の真剣な顔に促され一言励ましの言葉を返すと、傷つき倒れた僧侶に駆け寄った。

そして彼を肩に担ぐと引きずりながら、300Mほど離れた岩の陰に移動した。

離れすぎだろ……まあ……いつか。

多少人任せにされた感は諫めないが、その辺は寛容な勇者。



「用意はいいか？」

魔王が前方姿勢で背を低くして、左足を軸にして右足を前に出す。青い両腕を前に突き出し、その手のひらを揃えて勇者に向けた。

「魔光波！」

魔王がそう言い放つと、合わせた手のひらから突然ロケット砲のような

光の球が飛び出し、勇者目掛けて飛んでいった。

周りに熱気を放ちながら、眩い光の球が勇者に迫る！

「こんなもの……」

勇者は右手を前に突き出すと、突っ込んできた光の球を易々と掴んで、握りつぶした。

光の粒子が握り拳の隙間からいくつか飛び散り、その後煙のようなものが

外へ吹き出た。

「なんだとー！！」

渾身の力を込めて放ったエネルギー球を軽々握りつぶされ、魔王に動揺が奔る。

顔を歪ませ、こめかみに冷たい汗が流れ落ちた。

こいつ強いぞ……

魔王は左足で地を思いつきり蹴った。

次の瞬間勇者のすぐ前に現れると、右足を振り上げ横から蹴りつける。

それを難なく左手で受け止める勇者。

それとほぼ同時に体を動かさず、右拳を左側に素早く突き出し、から明きの魔王の腹に捻じ込んだ。

魔王はその拳の衝撃で背中から大きな岩に吹っ飛ばされた。

岩は魔王の体に押しつぶされるように粉々に砕け散る。

大小さまざまな岩片が四方に飛び散り、その一部がその場に倒れこんだ魔王に降り注いだ。

辺りを砂煙が覆い尽くし魔王の姿が隠される。

痛え！！　なんてパンチ力だよ……

岩に埋もれながら、悶える魔王。

糞お！！

魔王に降り積もった岩が振動し始めると、中から魔王が飛び出てきた。

岩と砂と一緒に巻き上げ、空高く舞ったかと思うと、勇者の前に緩やかに着地した。

魔王の後ろに砂塵が立ち込め、後方の景色が遮られる。

出てきたはいいが、勝ち目はないぞ。

魔王はさっきの攻撃で勇者の力量をほぼ把握し、歴然たる力の差を感じていた。

どうする？ どうする？ どうする？

自問自答しながら打開策を練り始めるが、今の實力では勇者に勝つ方法が見出せないでいた。

その場で息を荒くして勇者を見据え、立ち尽くす魔王。

「まー……、やる気なかったんだけど、成行きって事で、死んでくれる？」

頭を掻きながら、勇者は面倒くさそうに魔王に近寄ってくる。

こいつはやばい、今は逃げるしか……

そう思うが先か、地面に落ちているロープを引っつかむと、魔王は地を蹴り空に舞った。

ある程度の高さまでくると、体を勇者に向けて口を振るわせる。

「お…… お覚えてろよ！」

そう一言言い残したかと思うと、魔王は逃げるように轟音と共に遙か上空へと上っていった。

「まあ…… いいか」

その姿をぼーっと見つめて佇む勇者。

しばらくして、勇者は剣を鞘に納めて一息つく、仲間のいる方へ駆けて行った。

その頃、魔王は悔しさに唇をかみ締めながら、空を縦横無尽にかき回すように

飛んでいた。

前から襲ってくる風圧を諸共せず、前へ前へと突き進む。

勇者があんなに強いとはな……ん？

魔王は空の上で急停止した。

蝶々が飛び交うように、光の粒がいくつもの同じ場所を行き交っているのが目に入ったからだ。

その不思議な光景を前にして頭を傾げる。

なんだ、これは？

その見たこともない物に好奇心が掻かれたのか手を突き出しその光の集まる場所へ近づけていく。

ん？ あれ……？ 吸い込まれる？

魔王の手の先が見えない空間に、すっぽり吸い込まれて抜けられないに引き抜こうと力むほど中へと引き込まれていく。

だんだん手だけじゃなく体ごと吸い寄せられ始めると、魔王は大きな声を上げていた。

頭だけ残し体がすっぽり入ってしまうと、落ち着き払った顔で最後一言言い残した。

「駄目だこれは……」

スポッ！

## 第二話、魔王異界に降り立つ

「……」

吸い込まれた先で、魔王は微動だにせず佇んでいた。

なんなんだこの狭い空間は

自分を覆うように立ちほだかる白い壁が、天井にまで延びている。  
前の壁には取っつてのような物が付いていた。

「ん？」

魔王が下に視線を落とすと、なんとも形容しがたい形の容器に水が少したまっていた。

その容器は……ひどく薄汚れていて、鼻がひん曲がるほど臭い。

「こりゃたまらん、魔光波！」

魔王はその狭い空間から脱するため、前の扉に手の平を翳したかと思うと

弱めの光球を放つ。

光球は扉を焼き払い、その先の壁をも突き破っていった。

周りの白い壁には今の衝撃により、火がついて赤く燃えていた

前の壁が崩れた事により外の風景が魔王の目に飛び込んでくる。

「宵闇？」

体を少し地から浮かすと、魔王は光弾がつくりし道を、滑るように移動して外へ躍り出た。

ここは……

外はすっかり日が落ちていて、闇が辺りを包んでいる。近くに点在する外灯と雲から差し込む月明かりだけが、薄っすらとその場所にあるものを浮かび上がらせていた。

土の地面が広がる広場には、変わったものがいくつかあった。歪な外枠から垂れ下がった鎖につながれた椅子。砂が溜められた一帯。

丸い籠のような大きな球体。

魔王が初めて目にするものばかりだ。

うーん、取りあえず飛ぶか？

浮いた状態から、夜の空へすーっと上昇し始める。

「な、飛んでる？」

高く上がりきらないうちに、魔王の耳に誰かの声が聞こえてきた。声のする方を振り向くと、広場の隅に黒い影が見える。

「何者だ？ 姿を現せ」

魔王の声に促されるまま、その影は外灯の近くまでやってきて、光のさす一帯に姿を晒した。

薄汚れた白い服と茶色の履物を纏った白髪の男。

袖が擦り切れ、汚い染みがあちこちについている。

魔王はその男を見据えると、彼の前に静かに舞い降りた。  
着地場所の土が一塵の風により舞い上がる。

「あんた、大道芸の人かい？」

その男は魔王の怪しい外見を意に介せず、落ち着いた様子で話しかけてきた。

「貴様、俺を知らないのか？」

魔王はそう男に言うと、彼を睨みつけながら考えていた。

ローブを被っているのと暗闇のせいで、この男に俺の本当の姿が見えていない。だから、怯えずに易々と声を掛けてくるんだな

魔王はそう結論付けると、ローブのほっかむりを後ろに払い、その異形の姿を彼に堂々と見せつけた。

青いスキンヘッド頭にバッファローのような角が、二本後方に反る様に前頭部から生えていて、口からはみ出た鋭い牙が明かりに照らされ鈍く光っている。

「ほお、これはこれは、妖怪さんかな？」

その姿は確かに外灯に照らされ、男に見えているはずだ。

しかし、まったく身動き一つみせず、その皺くちやの顔に微笑みを浮かべて、その男は気さくに声を掛け続けてくる。

「おかしな、人間だ……」



魔王はその男といくらか会話を交わし始めた。

話しているうちに今いる世界が、元いたゼームス大陸でない事を理解した。

今いる場所は日本という国にある、公園という所である事も分かった。

「なるほど」

男に誘われてやってきた青いテントの中で、座して話を交わす魔王。

「あんたはどうやら違う世界から来たお人のようだ」

「うむ、俺はゼームス大陸を支配する魔王、人間が容易く声を掛けれる存在ではないんだぞ。今日は特別だ、お前の物怖じしない態度に免じて、口を聞いてやっているんだ」

魔王はテントの中を見回しながら、強気な発言を男に飛ばしていた。

臭くて狭くて汚い場所に住んでいやがるな、こいつも何やら臭うし

「ところで、お前名は何と言う？」

魔王が人間に名前を尋ねるという事はあまりなかった。  
大抵、相手が逃げるか、すぐに殺してしまうからだ。

しかし、この男は自分の姿を見て逃げるところか、全く恐怖すら  
顔に滲ませることなく、自然な態度で自分と話し続ける。

魔王はそんな彼が嫌いでは無かった。

「ワシの名前なんぞ……聞いてもあんたさんには……」

公園で乞食生活が長い男は、もう何年も自分の名前を口に出した  
事が無かった。

ましてや、異界の魔王という役職につく偉い人に、自分の名前を  
聞かせても意味がないとすら思った。

「いいから言え」

魔王は多少凄んで聞いてはいるが、彼に敵意は一切ないようだ。

「幾三……」

幾三は罰が悪そうな表情を浮かべ、自分の名前をか細い声で呟い  
た。

「イクゾーか、いい名前だ」

「……………」

イクゾーは魔王の言葉を聞き、一瞬目頭を熱くした。

いい名前か……褒められた事なんぞ、いつ以来やる……

その日魔王はイクゾーのテントで寝る事にした。  
多少臭かったが、雨が急に降ってきたので移動する手間を考える  
と、ここで朝を迎えた方が楽だと考えたからだ。

太陽が昇り始め、公園を日の光が照らし始める。  
公園の端に植えられた木の傍に青いテントはあった。  
そのテントの中にも平等に、眩い光が中へ差し込んできた。

「む……朝か……」

魔王は胡坐を書いた状態で腕を組んで寝ていた。  
彼は眠る時目を瞑らない。

それはすぐに敵に対応するためだというのが、彼の部下の魔物達  
に広がる噂だったが、実を言えば、唯の習性、生まれ持ったものだ  
という事は彼だけが知る事実であった。

「ふあゝあ、良く寝た」

魔王は大きな欠伸を一つすると、テントの中に視線を巡らしたが、  
イクゾーの姿が見えなかった。

どこ行つた……

ゆつくりテントの出口から、比較的大きな体を屈ませ外に出る。辺りを見回すと、公園の端っこに何かを拾って袋にいれるイクゾーの姿があった。

魔王はその姿を目で捉えると、勢いよく空へ舞い上がり、弧を描くように飛んで、彼のすぐ横に舞い降りた。

「なにしてるんだ？」

魔王の突然の姿に目を丸くして驚いたが、一息つくと魔王に笑顔を向けた。

「おはようさんです、ああ、空き缶拾いですよ。これ拾ってあるところに持っていくと、金を貰えるんですわ」

イクゾーはそう魔王に説明すると、また額に汗を滲ませながら、空き缶をせっせと袋に詰めては歩くの作業を繰り返していた。

「金か」

魔王はこの世界も同じだな……と心で呟いた。

「イクゾー」

魔王は一際大きい声でイクゾーに声を放つ。

「はい？」

魔王は彼に何かを放り投げた。

イクゾーは反応が追いつかなくてそれを受け損なったが、すぐに

慌ててぬかるんだ地面から拾い上げる。

「なんですかこれ？」

イクゾーは受け取った物を手のひらに載せ、目を凝らして覗き見る。

青く丸い円状の金属の板に、何か不思議な文字が浮き出ている。

「それは礼だ、どうしようもない困難にぶつかった時、そこに書かれた文字の表面を額に当ててみる。面白い事が起きるはずだ……」

魔王は薄笑いを浮かべると空を見上げた。

そして、視線を上に向けたまま静かに呟いた。

「達者でな……」

そう言い残すと、魔王は地を強く蹴り、風を辺りに撒き散らせながら

轟音と共に空彼方へ飛んでいった。

「……………」

「不思議なお方だ……」

イクゾーは貰った金属の板を、汚れた服の内ポケットにしまいこむと、魔王の飛んでいった先を眩しそうにいつまでも眺めていた……

### 第三話、そんなあなたは！？

「ふあゝあ、どうすっかな」

魔王は標高500M付近の空の上を、頭の後ろで両手を組んで、仰向けに寝転ぶように飛んでいた。

格好よくイクゾーと別れたものの、行く当てがなかった。これと違ってする事も見当たらず、部下もいなければ知り合いもない。

魔王は悩んでいた。

冷静に考えてみると、問題が山積みな事にきづいたからだ。

この後どうしようか？ 俺の飯はどうなるんだ？ ゼームス大陸に帰れるのか？ など……

ただ、さし当たったの最重要項目はやはり飯だ。

魔王は腹に右手を当てながら、力ない顔を表面に浮かべていた。

もうだめだ、腹が減りすぎて眩暈が……取りあえず、地上に降りてみるか。

魔王は短い命を夏の間燃焼させ、死の瞬間を迎えた蝉のように、ふらふらと地上へ落下していく。

あれはなんだ？

落下してゆく魔王の弱弱しい目で捉えたものは、白い正方形の建物らしきものだった。

その建物の横には黒っぽい地表の広場が見える。

「とりあえず、あそこに着陸だ」

着地地点を広場の真ん中にロックオンすると、魔王は一直線にその場所へ頭から滑降していく。

風を切る魔王の黒いローブは激しく波打つ。

ほぼ重力に逆らわず、落下していく魔王。

徐々にだが、確実に目で捉えている風景が大きなものへと変わっていく。

地上から30M付近まで降りてくると、上昇する力を解き放ち、落ちる速度を少し弱める。

そして、地上擦れ擦れの上空で、魔王は空中で前転するかのよう  
に、頭を腹の方へ引き込みその反動で、一回転して足から地面に舞  
い降りようとした……

しかし、距離の計算が空腹のせいで曖昧になっていたため、足よ  
り先に頭から広場の堅そうな地面に舞い降りた……いや、突き刺さ  
った。

広場の黒い地面に、魔王の頭がめりこんだ辺りを中心にして、放  
射線状に大きな無数の亀裂が走る。

「いてえ……」

魔王は生きていた。人間や並の魔物なら首の骨が折れて、死んで  
いるところだが、ぴんぴんしていた。

鋼鉄よりも堅い頭、鎧のような鍛え上げられた筋肉、魔族特有の  
丈夫で太い骨が、派手に頭から落ちたにも関わらず、首の捻挫程度  
で押し留めたのである。

頭が刺さったまま体を内側に折りたたみ、両足を地面につける。  
そして、両手の平を地につき、地面にめり込んだ頭を引き抜こうとする魔王。

しかし首と腕の力だけでは、いくら力んでも抜けなかった。

「この野郎……」

その無様で苦しい姿勢に嫌気が差してくる。

同じ方法で駄目なら……と頭を冷ややかにし回転させる。

よし、これでどうだ。

四肢をたわめ、力を溜め始める。

「ぬおおお」

魔王の力が四肢に行き渡り、辺りの地面が微かに振動し始める。

そして、それらを一気に伸ばしたかと思うと、体を勢いよく上に持ち上げた。

「オラー！」

スポッ

ビールの栓が抜けたような音とほぼ同時に、魔王の頭が地表の石を巻き込みながら、引き抜かれた。

抜けたまでは良かったが、その反動で体勢を崩し、後頭部から後方の堅い地面に激突した。

仰向けになったままピクリとも動かない魔王。



「おい、どうしたんだ君！ 変な仮面つけて……おい、生きてるか？」

偶然近くを通り、魔王の地面に横たわる姿を発見した男が、安否を気遣い魔王に近寄って声を掛けた。しかし、反応がない。

「これは……」

それを見て、咄嗟に魔王の左手首を掴み脈を確認するが、脈自体が見当たらなかった。

魔族は人間より少し深いところに脈があるため、相当怒りをむき出しにでもない限り、外へと浮き出る事はまずない。

脈がだめなら、ってことで魔王の胸に男は耳を当てると、心臓の鼓動が聞こえてくる。

それを確認した男は、次の行動に移る。

えーっと、車の講習思い出すんだ、落ち着いて、次は、呼吸確認だ

男は暑い太陽の日差しが照りつける中、汗を顔一杯に掻きながら迅速に行動する。

魔王の鼻に手をあてると、冷たい空気の流れを感じ取れた。

その冷たさに異様さを感じたが、取りあえず息をしていると判断した彼は、握り締めていたバッグから何か小さな四角いものを取り出し、真ん中で折りたたまれていたそれを開いた。

そして、中に閉じ込められていた表面に、規則正しく並ぶ丸いボタンを三つ押すと、開かれた片方に耳を欹てる。

「×所です」

「あ、コンビニの駐車場で男の人……た、たぶん男の人が意識を失い倒れています。すぐに救急車寄越してください、場所は、えーつと、どこだここは？」

男はこの場所の特定が出来なかった。

あまり普段は来る事がないこの場所。

たまたま、仕事先へ行く途中で通りがかっただけのようだ。

「あーちよつと待つて……」

男はそう四角い物体に話しかけると、白い建物へ近付いていく。

真ん中で割れた透明の扉までやってくると、自動的にそれは外側へ開いた。

その扉が完全に開き切る前に、男は慌てながら中へと駆け込むと、大きめの声で叫んだ。

「すみません！ 外で男の人が倒れてて……救急車呼びたいんだけど、住所分からなくて、教えてください！」

男は外の広場を指差しながら、カウンターの向こうに陣取る年若い女性と白髪の男性に向き直り、早口でまくし立てた。

「あー、はい、ち、ちよつとまって下さいね」

女性の方が先に男の訴えに反応して、カウンターの下に手を伸ば

すと白い紙を取り出し、そこに書かれている文字の羅列を読み始める。

「x市 x区 x町 2 - 3」

「あー、もう一回言つて」

男は聞き取れなかったらしく、向かいの女に復唱させ、途切れ途切れに放たれる言葉に少し遅れて、四角い物体に同じ言葉を掛けていく。

「分かりましたー、分後すぐ向います、そこでお待ちください」

四角い物体から人の声が男の耳に届き途切れると、多少安堵の表情を浮かべその場で立ち尽くす。

額の汗をグレイの履物の袋から取り出した白い布で拭いさると、透明の窓を通して魔王の姿を建物の中から見やった。

男は外に放置された魔王が気になり始めたのか、白髪の男性に「ちよつとみてきます」と声を掛け、また外へ踏み出て行った。

「おい、君、もうすぐ救急車が来るからね」

男は魔王に近付き、心配そうに震える大きな声を魔王にひっきりなしに掛けていた。

魔王はその懸命な声にも、意識を取り戻す様子はまだ見えない。

白い建物の中にいる女性が、隣にいる白髪の男性と会話をいくらか交わすと、外へ飛び出してきた。

「大丈夫ですか？」

外の倒れた人の安否が気になり、様子を見に来たようだ。ストライプの白の縦線が、明るい青の布地に流れた上着を羽織った年若い女性。

その下に白い肌着、 그레이のスカートが垣間見える。

肩より少し長めであろう栗色の髪を後ろで一つに束ね、大きな金色の瞳を震わせながら、魔王の姿を見下ろす。

「あれ、どこかで見たような……」

その女性は魔王の姿を見て何か思い当たったのか、首を傾げながら食い入る様にその姿を眺める。

男はその女性の言葉と様子から、曖昧な確信を含んだ言葉を投げかける。

「どうされたんですか？ お知り合い？」

「いえ、こんな変……いえ、たぶん違うと思います」

女性は　こんな変質者みたいな格好をした人と知り合いな訳は無い、と言いかけたが、その言葉を途中で止めすぐに飲み込んだ。

どこかで、会った事がある気が……ま、真っ黒な服、ま、間

抜け……

女性はどうもこの倒れてる人を見ると、『ま』の字が頭をよぎって離れなかった。

しばらく彼女の連想は続いていた。

『ま』で始まる言葉集合！ まっ ろくろすけ！ マント ヒヒ！ 丸顔！ アン ンマン！ ちが……

途中で「ん」を言ってしまい、しりと리では無いんだけど、何か落胆した様子で頭をうな垂れる。その女性の顔に不審な目を送る男性。

もう少しよ、頑張れ、卑弥呼！

どうやら彼女の名前は卑弥呼らしい。

魔物、魔界……魔、あ！？

「そんなあなたは 魔王ちゃん！？」

女性はとうとう正解を導き出したようだ。

その正体を知って面くらい、思わず間の抜けた言葉が外へと飛び出た。

「ん？ 魔王ちゃん？」

「いえいえ、なんでもハハハ……」

どこかごまかす様な口調で苦笑を浮べ、その場を取り繕う卑弥呼。  
ぎこちない会話を男性と交わす傍らで、魔王の青く尖った耳の先  
が微かに揺れた。

#### 第四話、姫じゃん。

「まあ、もうすぐ救急車きますし」

男が卑弥呼と話しながらふと視線を降ろすと、仰向けに気絶していた魔王の姿がなかった。

「あれ？ここに居た人は？」

「あら……」

男がそう問いかけてきて、初めて魔王の姿が消えていることに卑弥呼も気づいた。

「おいおい、どこへ消えたんだ、救急車ももうすぐ来るってのに……」

男は焦りと驚きが交錯したようななんとも言えない素振りで、辺りに挙動不審気味に視線を這わせていた。

魔王ちゃん、意識取り戻したのかな、だとすると……上だ！

卑弥呼はそーっと男に気づかれないように、空に素早く顔を向け一瞥した。

そして、0.5秒視線を空に向けて捉えたものを頭で分析し始める。

青い空に、黒いローブの顔色の悪い人が突っ立ってました。おそらく魔王ちゃんかと思われます。どうしますか？ 放置します。

そう頭で卑弥呼独自の思考パターンで迅速に処理すると、取りあえず、救急車が来るまで待つことにした。

#

ピーポーピーポーピーポー

「ああ、救急車来ちまったよ。しゃーねーなー」

男は苦々しい顔で舌打ちをした。

救急車がコンビニの駐車場まで入ってくるとすぐに止まり、車の中から慌しい様子で救急隊員が飛び出してきた。

男は面倒くさそうに頭を掻きながら、その隊員達のいるほうへ歩み寄っていく。

「あなたが連絡をくれた方ですか？」

「はい、そうです」

「で、けが人は？」

「それがええっと」

男はこめかみに滴る汗を拭きながら、罰の悪そうな顔で俯き言葉を濁す。



「消えちゃいました……」

嘘をついても仕方ないので、思い切って本当の事を隊員に伝えた。

「消えたってあんたね〜なにしてたんだい？」

「いやそれが……」

救急隊員と男がぶつぶつやり取りをし始めたのを見計らって、その場からそろりと離れる卑弥呼。

取りあえず、ややこしい事はあの人に任せて……魔王ちゃんをどうにかしないと。

#

コンビニから10メートルほど上空に移動した魔王。

目が覚めたとき、視界にまず入ったのはグレイのやぼったい履物を纏った、冴えないしよぼくれた男の顔だった。

男が会話を交わしている女らしき姿は、魔王の角度からでは後ろ頭しか見えなかった。

取りあえず、二人の会話を早いうちから、眠った振りをして聞いていたので、何故自分の傍に集まっていたかは大体分かっていた。

しかし情けない、この魔王ともあろうものが、人間の前で気絶した姿を晒すとは……

その姿を見られる醜態に耐えかねた魔王は、彼等の隙を窺い、そーっと背中を地から少しばかり浮かせて、死角になるであろう壁の隅に高速で水平移動し、その場所からはるか上空へ音も立てずに素早く飛んだのであった。

魔王は上空から下の様子をぼーっと眺めていた。

なんか、下の広場に色々あるな、赤い光を放つ白い箱物、銀色の箱物もあるし。

物珍しそうに観察をし始める魔王。

その興味はそのうち無生物から人間に移っていった。  
視線を救急隊員2名から男に巡らし最後に女の顔に置いた。

「うーん……んー、あの女、どこかで見たような」

魔王の目はとても良かった。

上空2500メートルからでも地上に歩く、蟻の姿を観察できるほどであった。

もちろん、今眺めている人間の顔、その顔についているホクロから、服装の刺繍の細かい部分まできっちり見えていた。

その双眼鏡のような目で女を見ると、以前にも会ったような不思議な感覚を覚える。

「あれ？ あの耳飾り、どこかで……」

魔王は女の耳に注目していた。

女の耳を飾るイヤリングは独特な形をしている。

獅子のような胴体に鷹の頭がくつついた、変わった動物を模った金色のイヤリング。

「あれは、サルビカス王家の紋章！」

『サルビカス王家』

ゼームス大陸に幾つかある国の一つサライアを統治する王族。彼等は戦う事を放棄し、早くから魔王に白旗を揚げ忠誠を誓った者達。

その王族だけが身に着けることが許される、王家の紋章を模ったイヤリング。

そのイヤリングを耳につける女。

それを見て魔王は、更に女に熱い視線を送る。

あの女は間違いない、ゼームス大陸のサルビカス王家の女だ

女の顔をマジマジ見つめると、喉仏の少し下辺りにある青い型のホクロが見えた。

あのホクロは！

魔王は女の水クロの形と位置に見覚えがあった。

そしてはつきりその正体を確信してしまう。

「姫じゃん……ソフィア姫じゃん」

ボールから空気が漏れたような声を発し、呆然と姫の姿を見降ろす。

魔王はその女の髪型と化粧の仕方が姫と全然ちがっていたために、

すぐに姫だと気づかなかった。

しかし良く見ると顔のパーツが姫と同じものだった。

とぼけた目つきに、丸い小さな鼻、金色のぱっちりした瞳……Etc。

「なぜここに……」

ゼームス大陸にあるサライアの国を治める王族の姫が、異質のこの国になぜか居た。

魔王は驚きを隠せない。

何であの姫が……

魔王は過去での姫との触れ合いが、頭をよぎり回想し始める。

#

ゼームス大陸を支配する魔王は、自分の支配下に置いた国々に、食べ物やその国特有の調度品を決まった周期で、魔王城に献上させる事を義務付けていた。

それはサライアを治めるサルビカス王家も例外ではなかった。

ゼームス大陸での一年前、サルビカス王家の者が調度品などを献上しに魔王城へやってきた。

その者達はターバンの真ん中に赤い宝石をつけ、独特の簾のような白いひらひらを重ね合わせたような服装を纏っていた。

その姿はとても印象的で魔王の目に深く焼き付いていた。

しかし、その中でも一際目についた存在が                      ソフィア姫である。

周りが王家の装束を身に着けているのに対し、彼女だけは桃色が鮮やかなゴージャスな宝石が散りばめられた、目が痛くなるようなドレスを着ていた。

魔王はその姿を見たときこう思った。

『何このデーハーな女は？』

しかし、魔王はその派手なドレスを着た姫に、どういっわけか興味をそられ、その出会いをきっかけに、彼女を度々魔王城へ招待するようになっていった。

#

「なー姫よ、お前はなんでそんな派手な格好してるんだ？」

「魔王ちゃんは、なんでそんな気持ち悪いローブ着てるの？」

質問に質問で返す姫。

「ああ？ そんなもん決まってるじゃないか。目立つからよ！ 見た目は大事だ。まず相手と対峙するとき、舐められたらいけないからな、只者じゃないと思わせなければいけない、だからこの格好を択んだわけだ」

魔王は力強く独自の理論を振りかざし、姫に向って得意げな顔を浮べ言った。

「なら同じよ、私も只者じゃないって思われたいし、目立ちたい」

「へ？」

魔王は間の抜けた顔で口を半開きにして、姫の顔を覗き込んだ。唇をきゅっと締め、魔王城のテラスから夕日を眺めるその瞳はどこか力強く、そして清流を湛える水のように澄んだものだった。

「同じ種類の同じ模様をした魚の群れに身を任せる人生なんて嫌。私はその魚の群れを離れていつか……」

姫は唇を一瞬かみ締めたかと思うと、最後まで言い切る事無く、言葉を紡ぐのを止めた。

そんな姿を優しく包み込むような目で眺める魔王。

姫……遅しい娘よ、王族の娘にありがちな箱入り女とはまるで違う。

魔王はこの時から姫に少しずつ惹かれていく。

何度も魔王城へ姫を呼び寄せ、その度に姫と濃厚な話を交わす。

#### ある日の会話

「姫、痒いのか？ 背中かこうか？」

「うん、右肩の拳3つくらい下搔いて」

「分かった！」

「ああ、気持ち良い、ありがと魔王ちゃん」

#### また違う日の会話

「姫、動物好きか？」

魔王はそう優しい瞳で姫に問いかけると、可愛い子犬を木箱にいられて

姫に手渡そうとした　それを見た姫は

「犬はいらない、猫にして」

魔王の温かな思いを、そっけない一言で打ち砕く姫。  
しかし魔王は怒らなかつた。

「ははは、猫か、姫らしい」

そんなやり取りをする毎日が何日か続いたが　ある日  
サルビカス王家に魔王直筆の文書が届いた。

『ソフィア姫を嫁にくれ　以上』

たった一行で纏められたその文書に、王様はあっけに取られた言う。





## 第五話、追跡。

そう、あの時確かに城へあの文を送り、姫は俺の嫁になるはずだった。

しかし、すぐに速達で、文を送る3日前に、王家から忽然と姫は消えたという返事が魔王城に届いた。

初めは疑った。城へ怒鳴り込んで、隅々まで探したし、王家の奴等締め上げて本当の事を吐かそうとした。

だけど、居ないものはいない。どうしようもなかった。

俺は城で何日も姫の事が忘れられず、悲嘆にくれる毎日を送っていた。

だが、俺も魔王、ゼームス大陸の支配者が、いつまでも女一人に氣を捕らわれているわけにはいかなかった。

そして諦めた、断腸の思いで姫を記憶の片隅へと追いやった。

#

その諦めたはずの姫が、魔王が迷い込んだ異界の国にひっそりいる。

魔王は目を疑った。人間違いという事もあるかと思い、何度も何度も確認した。

しかし、姫だった。多少痩せたようには見えるが、全ての体のパーツが姫と同じものだった。

そしてさっきのイヤリング、ホクロ。もう疑いようがなかった。

「ぐわ、なんだ、眩しい」

魔王は眼下にいる姫を攫ひらっていこうかと考えていると、地上から

眩しい光が魔王の顔に注がれる。

「だから、眩しいって、誰だよ、やめろってば」

両手でその光を遮り、その僅かな隙間から視線を通して、しつこくしつこくこちらに光を向けてくる不貞の輩を特定しようとしていた。

見ると、姫が手鏡のようなもので、太陽を反射して自分に向けていた。

「あ、姫の奴、やっと俺の事に気づいたんだな」

「相変わらず、変なことしゃがって、ちょっと小言の二、三も言っ  
てやらないとな、言いたいことが山ほどあるんだから」

魔王はそんな粗暴な言葉とは裏腹に、久しぶりの再会に胸躍らせていた。

顔には自然と笑みが毀れる。

多少緩んだ間の抜けた顔で、姫のもとへ降下していく魔王。

#

姫は手鏡で魔王の目に太陽の光を反射し、しつこく当てていた。  
それは、こちらに興味を惹かせ、魔王を違う場所へ誘導するミッシ  
ョンの一つだった。

あの姿は目立ちすぎるし、それに放っておいたら、何しでかすか  
分かったものじゃない。

気まぐれに、この辺りを爆破だってしかねない。

ちゃんと、自分が姫である事を魔王に話して、どこかへ連れ込み教育する必要がある！

そんな使命感に突き動かされ、ミッションを遂行しはじめた姫。

ちよつとまずいわ、今降りてこられると、知り合いだと思われるてしまう！

まだ救急隊員とさっきの男が、だらだら話している。

そして、コンビニに出入りする客、コンビニの中からこちらの様子を窺う店長。

目撃者が多数居る中であからさまに不審な姿をした魔王と、会話をするわけにはいかなかった。

姫に『世間体』と言いつがらみが重く押し掛かる。

それだけは、それだけは絶対阻止しないと。

そんな姫の都合など知るはずもない魔王は頬を緩ませ、黒い口―ブを風に揺らめかせながら、こちらに近付いてくる。

その間の抜けた顔から姫は、魔王が自分の正体に気づいた事を悟る。

咄嗟に空から接近してくる魔王に向けて片手を突き出し、手を交差させた。

その場で一時停止 来るなの合図だった。

魔王はそれを見て、動きを止める。

その合図は良く分からなかったが、姫がいつか昔見せた事がある

冷たい目を、手の隙間から垣間見せていたからだ。

あの目は……

ある日の魔王城での姫との出来事。

「姫〜、姫〜、焼き芋もってきたぞ」

姫はソファーに横になり熟睡していた。

魔王の野太い声で起こされ、不機嫌そうな顔で目を覚ます。

「焼き芋〜？ う〜ん……ちようだい！」

姫は焼き芋は大好物だった。

不機嫌が上機嫌に光の速さで変わり、跳ね起きたかと思うと、鼻歌を口ずさみながら芋を手に取り、細かく皮をはいで、むき出しになった部分を口に放り込んでいく。

「おいしい〜、ありがと〜魔王ちゃん」

「ははは、良かった、喜んでもらえて」

「ブツ!!」

魔王は姫の方から届いた怪音に、咄嗟に思ったことを口に出した。

「屁こいた？」

姫は背中を魔王に向けていたが、芋を握る手が震えていた。そして、おもむろに握っていた芋を皿に置くと、振り返り、今ま

で見せた事のない形相で魔王を睨みつけてきた。

「ど、どうした？ 何か気に障ったか？」

鈍感な魔王はその意味が良く分からない。

口を開いたまま、こめかみに汗を一筋垂らし、姫の動向を見守る。そんな魔王の横に回りこんできて、姫は静かに顔を近づけ、耳元で囁く。

生暖かい息が耳に吹きかけられ、栗色の髪が魔王の鼻を掠める。

「今の他の人に喋ったら、コ・ロ・ス」

その耳元で囁く姫の顔を目にした魔王に、戦慄が走る。

絶対零度を遥かに超えるであろう、凍えるような冷たい目。

魔王はそれを見て恐怖した。

「ひ~~~~！ しゃべらん、しゃべらん！ 魔王の名においてしゃべらん！」

「そう？ それならいいわ、良かった」

姫はそう言うと、何事もなかったような笑顔に瞬時に変えて、また芋に手を伸ばしていた。

#

魔王はあの目を思い出した瞬間、体を強張らせ小刻みに震えだした。

取りあえず、迂闊に動くとは逆鱗に触れかねないので、その場で止まり、姫のよくわからない合図を読み取るうと努力を試みる。

手の平をこちらに突き出し、手をクロス〃×マークをこちらに向けるってことは……

分かった！ 『魔光波』は打つなって事だな。

そう魔王は解釈すると、右手の人差し指と親指で小さな円を模り、OKの合図を姫に送った。

そして、「分かった分かった」と何度か頷きながら口元を綻ばせ、再度接近し始める。

#

何も分かつちやいね！

姫は魔王を止める術をなくすと、コンビニの手前に置いてある自転車に跨がり、服のポケットに入っていた鍵を差し込んだ。この自転車は通勤用に姫が使っているママチャリだった。前に備え付けられた白い網目の籠が目に見える。

その慌しい卑弥呼の様子を見て、店長が中から出てくる。

「どうしたんだい？ 卑弥呼ちゃん」

「店長！ 母が病院に運ばれたって姉からメールが……、ちょっと行って来ます！」

姫は外に覗きに出てきた店長に、青褪めた顔でそう伝えた。

「ええ、そりゃ、大変だ、行って来なさい、カードは通しとくから」  
「すみません！」

顔を引きつらせながら店長に会釈を一度すると、ハンドルをコンビニの敷地外にある道路に向けて切る。

そして、ペダルに足を掛けると、接近してくる魔王から逃げるように、物凄い勢いで自転車を発進させた。

取りあえず人気のないところへ……

#

うお、姫が良く分からないカマキリみたいな乗り物に跨って、移動し始めたぞ、どうしたってんだ。

魔王は姫の不意を付く行動に面くらい、慌てて空から追いかけていく。

あまり、低空で飛ぶと、建物から出る突起物やら、建物自体にぶつかりそうになるので、それよりは高所を飛んで追跡する。

姫は乗り物の横から伸びた、小さな金属の板を足で踏んで、凄まじい勢いで回転させていた。

まだ日の照り付けが厳しい道路は、姫に向って強烈な熱気を浴びせてくる。

額に汗を滲ませ、ハアハア言いながらも、ひたすら自転車を漕ぐ姫。

時折、ブレーキを強く掴んで、左足を地に付いて停止し、空を見上げて魔王が付いてきてるか、逐一確認していた。

姫の動きが止まったのを確認すると、魔王が降下してくるので、また急発進する。

その一連の動きを繰り返しながら、姫は魔王をある場所へと誘導していた。

姫は視界に目的の場所を捉えると、その中へ入っていき、奥で自転車を止めた。

息を整えながら、空と入り口の両方を交互に見ながら、魔王の到着を待っていた。

#

「なんだ？」 高い木があちこちに茂る一帯に姫が入ってくぞ、降りてみるか」

魔王は急降下して、姫が入っていった辺りに足から舞い降りた。

目の前に赤い大きな歪な形をした枠がある。

魔王はその枠の間にゆっくり足を踏み入れていく。

石畳の道が奥まで続いている。

黒いローブが歩を進めるたびに、旗が靡くような音をたてる。

周りにはゼームス大陸では目にする事がない木々が、外側を囲むように生えていた。

その石畳の道の前には古びた大きな建物が見える。



やがて、魔王はその建物の前に立ちはだかる金属の乗り物に猛々しく跨り、汗が眩しく光る姫の姿に釘付けになった。

「姫、ソフィア姫！」

目を潤ませながら姫に向って叫んだ。

ゼームス大陸で嫁にまでしようと考えた姫。

そして、その願い空しく、忽然と幻のように消えた姫。

その姫が目の前にいる……

喜びに打ち震え、飛びつきたい衝動に駆られるが自重した。

魔王はゆっくり歩み寄り、姫との距離を徐々に縮めていく。

姫は自転車を足でスタンドを立てて固定すると、地に両足を着けて魔王に向き直る。

「おひさしぶり、魔王ちゃん……」

姫は愛想笑いを浮かべるものの、どこかよそよそしい雰囲気で魔王に話しかけた。

## 第六話、変身。

「久しぶりだな、姫、随分、痩せちゃって」

魔王は姫の足先から頭の先まで、視線を巡らす。

ゼームス大陸にいた頃の姫は、全体的にふっくらしていた。

決してデブだった訳ではないが、いつも血色よく、ふっくらしていたイメージが魔王の脳裏にこびり付いていた。

それは、魔王城での食っちゃ寝や、王家での怠惰な生活が影響してるのは想像に難くない。

しかし、目の前にいる姫はなぜか痩せていて、小さくさえ見える。

何があっただんたろうと思わせる程、頬は多少こけていて、手や足に少なからず付いていた贅肉も消えて、逆に筋肉がそれに取って代わり、引き締まっているくらいだ。

「見ないで、そんなにジロジロ見ないで」

肩を竦ませ半身を擦って肩を突き出す事で、全体の姿を見られまいとする姫。

それは魔王が目を大きく見開き、嘗め回すように自分の体に視線を這わせる事で、怖気が走ったせいもあるが、以前の自分の姿を知っている魔王に、変わり果てた今の姿と見比べられる事への恥じらいが、自然とそういう行動を取らせたのも事実である。

姫もつら若き乙女である事に違いはなかった。

「姫……」

魔王は肩を竦ませ俯いた姫の横顔に、恥じらいと悲哀さえ漂わず表情を見て取り、思わず口を噤んだ。

どこからともなく流れ来る冷たい風が、二人の再会の熱を冷ますかのように吹き付ける。

「変わったでしょ、私……ここへ来て、一年になるわ」

何かをふっきるように、胸に流れてきていた栗色の髪を後ろに払うと、空を見上げて言葉を紡ぎ始める。

「本当に色々あった……事の発端は……」

姫は何かを言いかけたが、途中で言葉を紡ぐのを止めた。

これ以上話すと長話になるのは避けられないし、人氣がない神社にいるとは言え、ここで長居するのは得策じゃないと瞬時に判断したからだ。

魔王に向き直り大きな金色の瞳を向けて、場所を変える事を告げる。

姫は変わっていた。表情や言動が以前より更にテキパキしてて、どこか逞しささえ感じさせる。

そんな姫に半ば自然に先導され、魔王はその後を付いていく。

「姫さつきから細い暗い道ばかり、歩くのはなんでだ？」

姫は自転車を魔王に担がせ、細い人氣のない路地ばかり通って、目的地へと移動していた。

明るみが差す場所へ出ると、まず姫が先に出て様子を窺う。

人がいない事が分かると、魔王を傍らに呼び寄せて行き先を指差し、こそ泥のように踵を浮かせ、忍者のように次の路地へと体を吸い込ませていく。

魔王は比較的大きな体（推定190CM）に自転車まで担いでるため、時折、細い路地につつかえて四苦八苦していた。

「だって、魔王ちゃん、目立つじゃない、その姿がいけないのよ。この国にはね、世間体っていうのがあってね、私も色々大変なのよ、ゼームス大陸にいた頃のように、自由奔放ってわけにはいかないの」

姫はスルスル路地を素早く移動しながら、魔王に振り返らずに口早に言葉を重ねた。

魔王は腹がまだ満たされていない。

そのせいか段々疲れが見え始めていた。

姫に気を遣って、抑え気味だった愚痴が毀<sup>こぼ</sup>れはじめる。

「疲れた〜、腹減った〜ああ、もう、そんなにこの姿がいかななら、人間の誰かに変身するぞ」

魔王の言葉を聞いて、姫が動きを止めた。

そして振り返り、魔王の顔をまじまじと見つめてくる。

「どうした？」

魔王を黙ったまま、訝しげな目でじーっと見据える姫。

その様子を見て魔王は、変な事を言ってしまったかな〜と視線を足元に向け舌打ちをした。

「なんだ変身できるんだ〜！ それ早く言つてよ〜！ もう〜馬鹿みたい〜！」

顔の近くで突然、弾けたように大きな声で捲くし立てる姫に、魔王は思わず両肩を吊りあがらせ、体を後ろに逸らした。

びっくりしたあ、心臓止まるかと思った……

魔王のすね小僧に蹴りをいれながら、口を尖らせブーを垂れ始める。

そんな姫の言動にどこか懐かしさすら、魔王は感じていた。

やっぱり、姫だ、この変わり身の早さ、手慣れた非人間的扱い、やっぱり姫はこうでなくっちゃな！

足を何度か蹴りこまれながらも、魔王は気味の悪い笑みを浮かべている。

姫は額に汗を二、三浮かべながら、目を細めてその奇異な顔を不審げに覗き込んでいた。

#

姫は細い路地で魔王を待たせながら、その先の道を通る人間を物色し始めていた。

やっぱり、どうせ変身するなら、格好いい男の人になっても

らわないとね」

姫は面食いだった。

遠くから近付いてくる男性の顔を、路地のコンクリートの壁に身を寄せて、顔を少しだして覗き込む。

その姿は良く言えば、片思いの男の子に心臓を高鳴らせ、電柱の影から熱い視線を送る女子高生。

悪く言えば……、ストーカー、息を潜めて様子を窺う盗人、スリ、暗殺者、スナイパー……etc。

魔王は姫の後ろで座り込んで、力ない顔を浮かべ、ため息を何度も付いていた。

空腹が頂点に達する今、立っているのも苦痛のようだ。

おじーさん……却下、眼鏡のオタクっぽい学生……却下、頭の薄いリーマン、却下、却下、却下、却下、却下

姫の却下の嵐がしばらく続く。

却下、却下、却下……

中々決められない姫。既に30分は経過していた。

日は既に西に傾き始め、橙色が青い空に霜降り始めた頃……

あ！ あの人格好いい、ちょっと若いけど、好みだわ、大学生くらいかしら。

見ると、道の向こうから一人男性が近付いてくる。

魔王とほぼ変わらない程の背丈、お洒落な黒っぽいズボンに、落ち着いた黒の高そうなシャツを身に着け、鼻がずっと高い端正な顔立ち、黒髪を短めに纏めた清潔感漂わす二枚目な年若い男性。

「魔王ちゃん！　魔王ちゃん！　あの人よ、あの人に化けるのよ！」

二枚目を見つけた喜びから、その場で笑顔を浮べ軽く跳ねる姫。魔王に左手を差し出して、振り向かずに声を掛けるも反応が返ってこない。

それもそのはず、魔王はあまりの長い姫の選択に、疲れも重なって、その場で眠りについてしまっていた。

「あー、もう、起きてよーお願いだからー」

姫は体重をかけて、両手で魔王を揺するが、中々目を覚まさない。その間にも、路地に近付いてくる男性。

姫は焦っていた。

このままでは通り過ぎてしまう、せっかく長時間かけて見つけた理想の男性が　そんな焦りからか、頭をフルに回転させ、さつき魔王が空腹を訴えたのを思い出すと

「そうだ、後で一杯ご飯食べさせてあげるから、ね！　起きて！」

その言葉を耳で受け取り魔王の脳に信号が届いたのか、それとも条件反射か、虫の知らせか定かでは無いが、魔王は目をつと見開き、跳ね起きて大きな声を上げる。

「飯！？　飯だな？　飯と言ったな？　姫言っただよな？」

ものすごい剣幕で捲くし立ててくる魔王に、少し気後れを覚えな

がらも、視線を合わせて小刻みに頭を縦に何度も振る姫。

「あの人よ、あの人に変身して！」

かなり接近してきていた二枚目男性を路地から指差し、魔王に希望を伝えた。

魔王は血走った目を男性に向けて

「奴だな、殺してもいいんだな」

とんでもない言葉を吐き出した。  
それを聞いて、瞬時に姫の顔が青褪める。

「違う！ 違う！」

魔王はあまりの空腹に我を忘れ、言葉の判断が曖昧になっていた。  
必死に魔王の顔に両手を振りかざし、行動の修正を求める。

修羅場の様相を呈する路地裏。

魔王は低く唸りながら爪を鋭く伸ばし、男性に飛び掛ろうとした。  
それを姫は咄嗟に魔王のロープの端を足で踏んで、阻止する。

「イタタタ！」

ロープを踏まれた反動で、前のめりに倒れこんで、額をコンクリートの地面に派手に打ち付ける魔王。

「魔王ちゃんは、あの人に変身するの、変身するの、変身するの……」



姫はその上に素早く飛び乗り、耳元で呪文の様に何度も希望を繰り返す。

「ああ、すまぬ、分かった、任せろ」

その姫の必死の行いが功をなしたか、魔王は冷静さを取り戻し、地に伏した状態で前を歩く男性を路地裏の影から、視界に捉える事に成功した。

「OK！ 奴に変身すればいいんだな」

「そうよ」

魔王は両手を交差させ、何やら呻き始め

「メタモ！」

呪文の言葉を口ずさむと、体が眩しく光り、姿が変わっていく。

「これでどうだ！」

「おお、素晴らしいわ、魔王ちゃん」

魔王はさっきの二枚目な男と瓜二つの姿に変貌した。

姫に爽やかな表情を向けると、はにかむ口元から白い歯が毀れる。

「格好いい！ あなたとならそこが、大通りでも、東京タワーでも、パリの凱旋門でも付いていきます」

うつとりした顔で手を胸元で組み、変身した魔王に妄想を語り続ける姫。

魔王はそれが自分に向けられているものと勘違いし、頬を緩ませ鼻の下を伸ばしていた。

## 第七話、潜入！ 姫の部屋。

二枚目に変身した魔王と姫は終始笑顔で、街中を堂々と並んで歩いていた。

姫は解けかけたアイスクリームのように緩みっぱなしの顔で、魔王にこれでもか！　っつてくらいベタベタして愛想を振りまく。

姿変われば　　というところだろうか。

普通に街中を歩いて最短距離を進むおかげで、姫の目的地はもう目の前だった。

目的地が近づくにつれて心なしか、姫の笑顔にかかる雲行きが怪しくなっていく。

「姫よ、ところでどこ行くんだった？」

まだまだ笑顔一杯の魔王が、姫の表情の変化に気づく事無く、ぶっきらぼうに言った。

「自宅よ……」

「ああ、そうだな、この世界にもう一年も住んでるんだもんな、自宅は当然あるよな」

「うん」

姫はどんどん声のトーンが低くなってきていて、鈍感な魔王も雰囲気が変わった事に気づき始めていた。

コンクリートの地面に冴えない視線を降ろして、両手の平をへその辺りで組んだまま、黙り始めた姫の姿を見ると、さっきまでのハイテンションが幻にさえ思える。

「どうしたんだ？」

「別に」

姫はそのままの姿勢で力なくため息をつく、細い路地を右に曲がった。

左に薄汚れた石作りの家の壁、右には雑草が生え放題の空き地。一見とても寂しいその場所を、更に真直ぐ姫は歩いていく。

やがて、薄汚れた白い外壁の2階建ての建物が二人の視界に入った。

姫はそこを一時は通り過ぎたかのように見えたが……、5歩ほど歩くとピタリと動きをとめて、そのまま振り返らずに急に、後ろ歩きで戻ろうとした。

しかし、付いてきていた魔王の体にぶつかり、また動きが止まる。

「姫？ 何がしたいんだ？」

魔王の口から尤もな意見が姫に投げかけられると、

「アハハ……、ごめん、そこだったわたしんち」

姫はそのボロい建物に向き直って、引きつった笑顔で自白した。プライドと見栄っばりの固まりのような姫。

このアパートが自分の住む場所だと告げるのに、ありったけの勇気をこめたのは間違いない。

魔王はそのアパートが姫の住む場所だと、聞かされて初めは驚いた。

ボロいし、汚いし、とても姫が住むような所ではないとさえ思ったが、敢てそれを口に出さなかった。

姫の性格をそれなりに知っている魔王の氣遣いだ。

「い、良いところに住んでるじゃないか」

「え、ここが？」

魔王は返答に困った、ここは更に肯定した方がいいのだろうか？それとも……

選択を誤れば、姫の弾幕のような言葉が飛んでくるに違いない。額に汗を一滴垂らし、次の一手に悩む魔王。一見、大雑把に見える彼だが、その性格は極めて繊細な部分を持ち合わせていた。

悩んで、悩んで、出た言葉が

「うむ、犬小屋よりましじゃん」

これだった。

繊細だが……口下手な魔王。

魔王は言った後に、とんでもない事を口走った事に気づき、姫のコークスクリューパンチが顔面に飛んでくる事を見越して、左頬を体を少し屈ませ、姫に突き出す。

目を瞑ってその衝撃をずっと待っているが、中々飛んでくる様子がない。

あれ？ どうしたんだ？

片目だけ開けてみる事にした。見ると、姫は背を向けて、しゃがみこんでいた。

その後姿はとても寂しげに映り、自分がさつき放った言葉を後悔する魔王。

姫に謝ろうと、ゆっくり近付き自分も屈んで、姫の横顔をそーつと覗き込むと

……猫とじゃれていた。

思わず首が前にかくんと折れる。

心配しすぎか……

前足を揃えて姫に愛らしい顔を向けて、愛想を振りまく白猫。首には赤い輪っかが付いている。

「そいつは？」

「白猫のジジよ」

そうだった、姫は無類の猫好きだった、そして俺は犬好き……

……

魔王は額に出た汗を手で拭い、姫の横に屈む。

とても愛想の良いジジ。

お腹を出して服従のポーズを姫に向けている。

姫は口元を綻ばせ、お腹を摩る。

その様子を見て、結構付き合い長いな？　　っと魔王は思った。

姫は気が済んだのか、立ち上がって猫に優しい目を向けて手を振った。

「じゃ〜、犬小屋よりましな場所へいこっか」

どこか陽気な目をした姫が魔王に快活にそう言つと、多少魔王は苦い笑みを浮かべるものの、姫が歩む後をゆっくりと付いていった。

#

錆びた鉄の階段を上っていく姫。

そこを上り終えると、細い通路がある。

色んな染みと傷がついた石の地面、左側に落下防止用と思われる錆びた青い鉄の柵、右側には薄汚い白い壁を寸断するかのように、これまた薄汚い木の扉が、三つほど等間隔に並んでいた。

近くによると、更にその汚さが浮き彫りになり、益々魔王はここに姫が住んでいることに、違和感以外のものが感じられなかった。

ああ、しかし、姫のことだから、中は豪華にしてるんじゃないかな？

姫が真ん中の扉に鍵を差込み扉を開けると、そんな見解が音も無く崩れ去る。

「どうぞー汚い所だけど、中入って〜」

「げ、マジ汚ねえ……」

魔王は心で言うはずの言葉を、思わず外へと出してしまった。

姫が顔を小刻みに震わせながら、眉をひそめて鋭い視線で魔王を

睨みつける。

「ごめん、つい、ハハ……」

頭に右手を当て、ぽんぽんと二回叩き、苦笑を浮かべてごまかす。だが、自分の感じたものまでは、ごまかしきれない。

それほど壮絶なこの部屋の様相。

とにかく酷いって言葉じゃ言い表せないほど、まずゴミが散乱していた。

白い袋に細い木が二本、いや4本、その中には食べ物のカスみたいなものが付いた箱。

薄汚れた布類、衣服、花柄の 下着？

魔王はそれを見て多少ときめくものの、すぐにその気持ちが沈む。茶色く汚れていたからだ。

茶色の箱が幾重に積み重なっている先に、辛うじて見える金属の何かに、衣服が無造作にいくつか掛けられていた。

真ん中には……ここで魔王は部屋に漂う悪臭に気をとられ、思考を閉じる。

そして、なぜかイクゾーの住まいが頭をよぎった。

「どうぞ、座って」

「おう、すまぬな」

姫が手を差し伸べた場所を見ると、周りの白い袋や茶色い箱を姫が押しのけて作った空間に、四角い薄桃色の座布団が置かれていた。その座布団の表面を覆う布も擦り切れているし、何かの染みがついていた。

こめかみに汗を掻きながら、大きな体を屈ませ、尻を落とし込み胡坐を掻く。



「なあ、変身もう解いていいか？」

魔王は今の姿がどうもむず痒くて仕方がない。  
本来の体より筋肉の付き方が甘く、気に入っていなかった。

「うーん、残念だけど、いいよ」

姫は惜しむように目を眇め、舌打ちをした。

魔王はその場で何かを口ずさむと、眩い白い光が体を包み、元の姿へと変わっていく。

「あー肩こったー、腹へったー、疲れたー」

魔王は自分の姿に戻り、一時の安息場所を得た事により、押し込めていた鬱憤が波濤のように口を突いて出てくる。

黒いローブを頭の先を掴んで剥ぎ取ると、それを自分の後方に敷いた。

中に着ていた灰色の武道着が頭になる。

両手を上に伸ばし大きく伸びをして、敷かれたローブに、そのまま背中を落として寝転んだ。

まるで自分の家にでもいるかのような、完全に安心しきった顔で横になっていた。

姫はそのどこか無邪気な魔王の姿を見てみると、心が和んで自然と口元が綻ぶ。

#

「ご飯できたよ」

「おお、待ってました！」

姫は約束どおり、魔王にご飯を作ってやった。

片隅に置いていた丸テーブルを持ってくると、折りたたまれていた足を伸ばして魔王の前に置いた。

そして、その上にあり合せの物で作った料理を並べていく。

内容は……玉子焼き5つ、ポークウィンナー3つ、キャベツの炒め物、前の夜の残り物のほうれん草のおひたし、そして味噌汁。

口に合うか心配だったが、

「おお、姫、料理上手だな、しかも食べた事ないものばかりだけど、みんな美味しいぞ」

とても幸せそうに飯を口の中へかきこんでいく。

ゼームス大陸とは違う文化のこの国。

食べ物もやはり魔王にとって珍しいものばかりだった。

元々雑食な魔王に『まずい』という言葉は浮んでこない。

なので、その料理が本当に美味しいかは 謎だが、魔王の食べる姿は、料理を作る相手には評判が良かった。

もちろん、姫は上機嫌でその姿を見つめていた。

しばらく姫は満面の笑顔で魔王の姿を見ていたが、ふと、ある事を思い出し表情が途端に固くなる。

魔王ちゃんにあの事を話しておかないと……

姫は魔王がご飯を食べ終わった後に、とても重要な事を話す決意をした。

それはコンビ二前で思い付いたミッションの一つ、『この世界での過ごし方』、『気まぐれは悪』、『激怒した時のリラックス呼吸法』も含まれるが、それ以上に深刻で絶対話しておかないといけない話があった。

姫は陽気に飯を頬張る魔王の横顔を、多少緊張した面持で眺めていた。

## 第八話、陰謀。

「あー食った食った！」

魔王は犬食いを止めると、顔を上げ、後方に両手をついて姫に満足そうな顔を向けた。

口元に食べ物のカスがこびりつき、赤いケチャップが右頬についていた。

「生き返った、姫ありがとな〜」

「どういたしまして〜」

「じゃちよつと散歩行ってくる」

魔王は後方のロープを引っつかむと、部屋の窓を横にスライドさせ開け広げ、窓の棧に右足を掛けた。  
窓から飛び立つつもりらしい。

「魔王ちゃん待って！」

そんな魔王に突然、大きな声を浴びせる姫。

魔王はその声を聞くと、足を下ろして姫に向き直る。

「どうした？」

「ちよつと話があるの……」

姫は正座したまま上目遣いで、魔王にどこか影のある目を向けて

くる。

魔王はこんな姫の目を今まで見たことが無かった。  
ゼームス大陸にいた時でさえ、見せた事がない鬱々とした力ない  
瞳。

これは並大抵の話じゃないな……

「分かった」

魔王は真剣な表情で姫にそう言つと、黙って座布団に腰を下ろし、  
胡坐を掻き腕を組んで姫を見やる。

二人の間に重々しい空気が漂う。

外から吹き込む冷たい風が、部屋中にあるゴミを揺り動かし、ピ  
ニールの擦れる音が細波のようにざわめく。

「魔王ちゃん……」

「うむ、なんだ？」

魔王は思わず喉をぐくりと言わせた。

姫のただならぬ雰囲気吞まれている。

「なんで、私がこの世界にいると思う？」

「なんでって、そりゃあ……」

魔王は、そっぴや、なんでいるんだろ？ と心で呟く。

語尾の「あ」を伸ばしながら、その答えを導き出そうと頭を捻る。

やっぱり、姫もあの蝶々が戯れるような光に、うっかり触れ

てしまったんじゃないのか？　そしてこの世界にやってきた。うむ、  
そくに違いない。きっとそうだ！

魔王は素晴らしい答えをひねり出すと、自信満々に姫に伝える。

「白い光にうつかり手を突っ込んだんだろ？」

「うん」

姫は平然と魔王に答えた。

導き出した答えがジャストミートしたので、魔王は少し浮かれかけたが、

「ただし、うつかりじゃないよ、ある人にはめられたの……」

微妙に間違っていたので、ため息を漏らした。

俯き暗い表情で、膝に置いた両拳を震わせながら握りこむ姫。

その異様な様子を敏感に察知した魔王が、思わず胡坐を正座にゆ  
っくり変えていく。

姫に体を傾け、黙ったまま顔を覗き込んだ。

そして、いつになく真面目な顔で姫に問いかける。

「何があつたんだ……？」

姫は目元に涙が薄っすら滲んでいた。

気位が高く自信の固まりのような姫が涙を　　魔王に多少なりと  
も動揺が走った。

しかし、それを意思の力で押さえ込み、平然を保つと、姫に優しい  
面持で話しかける。

「話せば楽になるぞ、鬱憤ってやつあ、溜め込むもんじゃない、吐き出すもんだ」

魔王のあけすけだが、どこか温かみのある言葉を聞くや、姫の目から押し込めていた感情と共に涙が溢れ出てくる。

畳に前のめりになって、顔を伏せ両腕をついて泣きじゃくる姫。

魔王は、その震える姫の頭にそっと右手を添えた。

姫はしばらく泣いていた。

しかし、魔王にどうしても話しておきたい事を思い出すと、徐々に声を小さくしていく。

目を擦りながら半身を起こすと、嗚咽を上げながらも、赤くはれ上がった目を魔王に向けた。

そして、何度か深呼吸しながら、息を整え始める。

大分落ち着いてくると、近くにあった白いタオルを掴み顔に押し当て、ぶーっと水を吹き付け、顔を何度も擦った後、視線を魔王に戻した。

その様子を眺めていた魔王は、不謹慎だと思いつつも、汚ねえ……と心の中で呟いた。

「ぶー……、でね……」

不意に姫が切り出した言葉に、魔王は気後れしながらも相槌を打った。

姫はほんのり赤い顔と充血した目はそのままだが、多少泣いたことで落ち着きを取り戻したのか、さっきより幾分雰囲気や和らげて語り始める。

「詳しく話すと、長いけど聞いてくれる？」

「どんとーい！」

魔王は胸を右手でぽんと叩くと、力強い口調で姫に言った。

その言葉に魔王の思いやりみたいなのを感じた姫は、にこりと笑うと静かに語り始める。

#

魔王が治める魔族の王国ラフレシア。

その国がゼームス大陸で最強だとすると、次に名前が出るとすれば、サルビカス王家が統治するサライアである。

この国は魔法科学、即ち魔術に関する研究が進んでいて、それは膨大な恩恵を国にもたらし、国は隆盛を極めていた。

高度な魔法を使う魔術師、卓越した剣術と魔法を組み合わせた魔法騎士。

そんな屈強な兵士を持つサルビカス王家が、王の意向で初めから戦いを放棄して、魔族の軍門に下った。

王家の者、サライアに住む民衆は動揺を隠せなかった。

戦わずして、何故魔王の軍門に下るんだ？ 王様は弱虫だ！

そんな言葉があちこちで飛び交う。

ある日、王様はそんな臣下と民衆を大広場に集めて、自分の思惑を彼等に忌憚なく語った。

「謹んで聞いて欲しい……我等は確かに魔術において、優れたものを持っているが、それは魔王を含め、魔族たちも同様である。そし



て、数において魔王軍と我等の軍は圧倒的な戦力の差があり、例えば様々な策を弄し、魔法を駆使して立ち向かって、数の力に押し負け、多大な被害、即ち死傷者や損害が出る事は避けられない。」

王様は息を荒立たせながら更に言葉を紡いでいく。

「それならば、一層の事抗う事を放棄し、早いうちから白旗を上げて、魔王の軍門に下るのも悪くないと判断した。魔王は一定の貢物をすれば、我が国に出すぎた干渉はしないと断言してくれた。ワシは彼を信じようと思う。無駄な血を流す事無く、平穩に彼等と共存共栄する道をとる事に決めた。ただ、お前たちの意見をないがしろにするつもりは無い。異存があれば聞こう」

王様がそこまで言うのと、周りから拍手と歓声が湧き起こる。

彼の演説を最後まで聞き遂げた者から、不満の声は上がらなかった。

民衆は顔を綻ばせ王様の選択を支持したのだ。

その様子を見て、王様は笑顔を浮かべ、自分が決断した事に間違いはなかったと安堵の表情を浮かべたと言う。

~~~~~

「それでね、一見治まったように見えたの」

「ふむ」

魔王はその話を聞いているうちに、ゼームス大陸の事を思い浮かべ、自分が魔王という地位につく支配者である事を改めて思い出した。

そうだな、ゼームス大陸にも早く帰ってやらんとな、部下どもが心配しておるかもしれんし。

だが、帰り方が分からないし、取りあえず当分の間は良いかな、姫もいることだし

「だけど……」

姫が短く呟くと、表情が曇り始める。

魔王は咄嗟に頭の中のゼームス大陸から、姫の言葉に意識を戻した。

「私はある日、叔父の部屋を通りかかった時、聞いてしまった。盗み聞きするつもり無かったんだけど、ドアが開いてたの……」

姫はその様子を回想しながら、魔王に語っていく。

#

「ワシはいつまでも、魔王にこびへつらう今の状態は我慢できん」

憤慨した様子で大きな声を放つのは、姫の叔父に当たるグランパ。彼は兄である王様の決定に、すこぶる不満を抱いていた。

濃い紫の法衣を身に纏い、高そうな宝石が連なる首飾りを頭から下げた初老の男性。

短い白髪、顎から白い髭が首根っこのあたりまで伸びている。

「そう言っても父上、王様の意見は民衆に支持されてるし、今更凄んでも変えられるものじゃないよ」

彼の息子、スパークシアが父に震える声で宿めるように言った。  
金髪が真直ぐ、肩より少し上の辺りまで伸びていて、黒い瞳、鼻は高く整った顔立ちをしている。

「それはどうかな？　スパークシアよ、ワシが時空魔法をどれだけ研究してきていると思う？」

「確か、１０年と聞きましたが……」

スパークシアは俯いて、薄っすら残る記憶を呼び起こし、父に顔を向けて曖昧な答えを返した。

「そうだ、１０年の間、ワシは時空魔法を一から洗いなおし、あらゆる可能性を探ってきた」

顎髭を摩り、得意な表情で言葉を紡ぐ。

「そして、その努力がやつと身を結び」

グランパは目を細めて、怪しい笑みを浮かべた。

「次元転送魔法　エンゲルを編み出したのだ」

「それは一体……」

スパークシアは喉を鳴らし、グランパに好奇心に満ちた眼を向けた。

「これさえあれば、この国、いやゼームス大陸さえ我が手中に収める事ができる！」

自信に満ちた眼で、内に秘める大きな構想を外に漏らしたが、扉の向こうに気配を感じると、

「ん？ 誰だ！」

大きな声を上げながら、扉に詰め寄る。

姫は走り去ろうと思ったが、気位の高い性格が災いして足が止まる。

そして、覚悟を決めると、自らドアを開け、堂々とグランパたちの前に姿を現した。

「ソフィア姫！？」

スパシアは姫の名を発し、ぎょつとした目を向けた。

「これはこれは、王家の姫君がなぜこんなところで、立ち聞きを？」

息子と比べて、グランパは落ち着き払った様子で、姫に棘のある質問をなげかける。

「通りすがって、扉が完全に閉まってないところに、叔父様が大きな声でしゃべってたからつい聞き入ってしまっただけよ」

姫はつんとした表情をグランパに向け、淡々と自分の正当性を主張した。

グランパが訝しげな目を姫に向けると、姫はそれに睨み返し言葉を連ねる。

「悪いけど、話全て聞いていたわ、そして最後の言葉、あなたたち

何をするつもり？ まさか我が父、国王に謀反をはたらく気ではないでしょうね？」

「そんなこと……」

スパシアが姫に何かを言いかけると、グランパは左手を彼の顔の前に伸ばし制した。

低く笑いながら、姫ににじり寄って来る。

姫から2Mほど向かいまで来ると、足を止めにつこり笑った。

「まさか、私たちが王に謀反など起こすわけありませんでしょう」

「そうかしら？ 信じられないわ！ 私この事父上に話してきます！」

姫がグランパを睨み、踵を返し背中を向けた瞬間、姫の首に鈍い衝撃が走る。

グランパが一足飛びに姫に近付き、手刀を浴びせたのだ。

姫は一瞬で意識を絶たれ、糸が切れた人形のように、その場に崩れ落ちる。

頭から倒れこむ前に、グランパがその背中の中のドレスの端を掴みあげた。

#

「うう……」

姫が目を覚ますと、真っ暗な部屋の天井を眺めていた。

「痛い……」

曖昧な意識の中、体を起こそうとすると、首に鈍い痛みが走った。思わず顔をしかめるが、痛みがだんだん引いてくると、周りに意識を巡らし始める。

右手を首に当てながら、辺りを見渡すも光源が無いこの部屋は、真っ暗で何も見えない。

姫が手で地面を探っていると、突然部屋に明かりが灯り、聞き覚えのある嫌味な声が姫に届いた。

「お目覚めですか？ ソフィア姫」

声のするほうへ視線を向けると、グランパの姿を捉える。石壁が周りを覆うこの部屋の真ん中に、彼は立っていた。

姫は傍らに目をやると、大理石で出来た平坦な台に自分が乗っている事に気づく。

すぐに、台座から足を下ろし地にゆっくり両足を置くと、ドレスを手で叩き、体を起こしてグランパに向き直った。

姫は眉を潜めて少し後ずさりながら、警戒をする。

「叔父様もとい、グランパ！ 私に何をするつもり？」

姫は強気な口調でグランパに言った。

「別に何もしませんよ、ただ二人でお話がしたくって、ここにお呼びしました」

グランパは姫を見据えながら、近くにあった木の椅子に腰掛ける。そして姫の傍にある椅子に手を差し伸べ、座るように促した。

「知らない！ 私は立っていますから！」

姫は目を閉じ、顔を背けて、それに座る事を拒否する。  
グランパがその様子を見て、鼻で笑った。

「我が兄の娘、ソフィア姫よ、その高慢ちきな顔つき、兄にそっくりだよ」

グランパから地の言葉が飛び出し始める。

「うるさいわね、不細工で陰湿でドブネズミみたいな顔した、あんなに言われたくないわよ！」

実の叔父にとことん駄目だしを浴びせる姫。  
グランパが眉根を下に引っ張り、鼻息を荒くして憤る。

「言わせておけば――！」

「ふん、本当の事しか言っていないから！」

姫はこの状況でも全く強気な様子を崩す事無く、淡々と軽口を叩いてグランパを煽っていた。

グランパは怒り心頭で顔を紅潮させていたが、所詮小娘の戯言と自分に言い聞かせ、頭を冷やすと、すーっと息を吐いて言葉を発す

る。

「どうやら、お前を説得しようなんて、考えた私が馬鹿だったようだな」

グランパが立ち上がると、姫は彼を睨みつけながら、着ているドレスの両端を手で掴む。

だんだん、本性を現し始めると、グランパの形相が悪びれた顔へ変わっていった。

「残念だが、姫にはこの世界から消えてもらうしかないようだ」

グランパがそう言うと、両手の平をへその辺りに持つてきて、平行にして何か呪文を唱え始める。

姫はその異様な雰囲気には危険を感じ、咄嗟にドアに擦り寄りノブを回すが、鍵が掛かっていて開かない。

その間にもグランパが平行に揃えた、両手の平の間に白い光が、灯り始める。

「姫よ、この光りをじっくり見るのだ」

姫は体が動かなかった。

その光りを目にした時から、体の自由が奪われ、なぜかその光に近寄って触りたいとすら思い始める。

意識と相反して体が、白い光へと吸い寄せられていく。一歩二歩と足が勝ってに歩を進める。

それに抗おうと声を荒げるが、体が言う事を利かない。

気がつく、光はもうすぐ目の前だ。

手が光に向けて伸び始める。



「そうだ、この光を触るんだ」

姫は目を咄嗟に瞑ろうとするが、もう遅かった。

右手の平の半分ほどが、光の中に入ってしまったている。

そして、次の瞬間……

姫が悲鳴を上げるが先か、右手から右腕、さらには体全体がその中に勢い良く吸い込まれてしまう。

この世界から姫の存在そのものが消えてしまった。

「ははは、姫を異界に飛ばしてやったぞ！ 大成功だ！」

グランパは高らかに笑い、両手を閉じると、白い光りを煙のように消し去る。

しばらく、その場を右往左往しながら、喜びを体で湛えるグランパ。

ある程度気が済むと、その場で立ち尽くして目を細めて呟く。

「後は……フフ……ハハハハハ！」

何か言おうとしたが、笑いが先に込み上げてくると、それを最後まで言わずに、上機嫌で部屋を後にした。

部屋の床に落ちた姫のイヤリングの片方が、鈍い光を放っていた。

## 第九話、シンデレラ。

「グランパ……」

拳を膝元できゅつと握り締める姫。

最初は回想をしているうちに、それが今起こってるかのような、憤りと悔しさに満ちた顔で小刻みに体を震わせていた。

だが、次第に顔や体に走る怒気を抜いていくと、深く息を吐いて、吊り上がった肩が力なく下がった。

魔王は長い話を聞き終えたあと、あまりピンとこない様子で、姫の動向だけ注意して見ていた。

自分から言葉をかけ難いし、何を言ったら良いのか思い浮かばなかった。

「魔王ちゃん……」

「うむ」

不意に姫が口を開いた。

一年の間、押し込めていた感情。そして久し振りに心の片隅に置かれる箆笥の奥から、引き出された過去の話。

それを魔王とは言え、ゼームス大陸の唯一の知り合いに全て打ち明けた。

多少気持ちがさっぱりしたんだろう。

姫は憑き物が落ちたような爽やかな表情を浮べ、穏やかさが戻りつつあった。

「私異界の向こう側にでると、どこにいたと思う？」

魔王は自分のときの事を思い出した。

あの時は確か……狭く暗い臭い場所に立ってたよな、俺

「ここくる時にあった、空き地あるでしょ、あの真ん中に立ってたの」

「うむ」

目立たないという意味じゃ、似たような場所だと魔王は思った。

「飛ばされた時は、悔しさ一杯で、すぐにでもアイツの所に戻ってコテンパンにしてやろうって息巻いてたわ、でも、どんなに頑張っても、ゼームス大陸のある世界には戻れなかった」

淡々と一定のリズムで話す姫。

気負う事なく、平常心で言葉を紡ぐ。

その口調に強弱は感じられない。

「飛ばされてきた場所で、穴を掘って見たり、魔法剣を作り出し、空間に切り付けてみたり、色々したけど、全て徒労に終わった……」

姫は立ち上がると窓に手をつき、空き地に視線を流す。

空き地に向けられる目には郷愁すら漂っていて、複雑な笑みを浮かべている。

魔王は何か言いたかった。

何かないか？ 何でもいい！ 姫を慰めるような言葉を考えるんだ 魔王はそう思い頭を悩まし、浮んだ言葉を言ってみることにした。

「俺は思っんだが、帰れないんなら、無理して帰らずとも、ここで

楽しく暮らせばいいじゃないか」

「楽しく？」

姫が魔王の言葉を聞くや、敏感に反応して、素早く魔王に向き直る。

右指を魔王に向けると、2歩3歩と詰め寄りながら、大きな声でまくしたて始めた。

「魔王ちゃん、分かってないわね！ 異界の国に急に飛ばされて、知り合いもなければ、住む家すらない、お金もない、行くあてもなければ、ここがどんなところかも分からない。これがどういうことだか分かる！？」

姫は目尻に薄ら涙を溜めながら、怒気を孕んだ形相を魔王に力一杯向けてくる。

魔王はその迫力に押され言葉が出てこない。

いや有無を言わさない姫の剣幕に押さえ込まれていた。

「最初はね、ゼームス大陸の事、父上の事、その他もろもろ、心配したわよ！ でも帰れないの、ならここで生きていくしかないの！ そう開き直って血の滲むような努力をしたわ、一週間もしたらゼームス大陸の事なんか頭の端っこに消えていた。それほど大変だった。ただ生きていくのに必死だった。何も持たない私にとつて、ここでの生活は想像を絶するものだった、楽しいなんて感じる暇なんてあると思う！？」

そこまで姫は語ると、息をハアハア言わせながら、魔王の前に両手をついて腰を下ろす。

魔王は言葉はまだ出てこないが、姫が想像を絶する苦勞をこの一

年してきた事を薄っすら感じ始めていた。

魔王は姫の言葉の弾幕をあびて、正座が崩れて後ろ手をついた状態で固まっていた。

しかし、それが止んだので体を起こすと、姫に視線を合わせ静かに口を開く。

「姫、頑張ったんだな、すまぬ。俺は馬鹿だから、つい適当言っちゃった」

魔王は窓に目を向けると、立ち上がった。

姫を見下ろしながら、静かな口調で言葉を連ねる。

「俺、出て行くわ、いたら、姫も大変だろうし」

魔王が窓に手をかけた瞬間

「待って！ 待って！ 行かないで！」

姫は我に返り、大きな声で魔王を呼び止めた。

ちよつと自分がヒートアップしてた事を反省して、冷静な思考を頭に張り巡らせる。

魔王ちゃんを今放したら、この世界は……、それに

姫は魔王を放っておいては、何をしかすか分からないと言う心配もあったが、ゼームス大陸の唯一の知り合いであり、理解者？とも言える魔王を、このまま行かせるには忍びなかった。

「ごめん、私が悪かった、言いすぎた」

姫は立ち上がって、申し訳なさそう胸で手を組み、俯き加減で魔王に謝った。

魔王は別に拗ねたとか、怒ったとか、そんな稚気な気持ちで出て行く事を告げたわけじゃなかった。

ただ、純粹に迷惑を掛けたくなかったただけだ。

姫に謝ってもらうと、多少心苦しいものがある。

「魔王ちゃん、ここに住む？」

魔王は思わぬ姫の言葉に、顔を姫に素早く向けて息を呑んだ。

姫の事を愛する気持ちは、今も昔も変わっていない。

グランパの妨害がなければ、今頃姫とゼームス大陸で結婚もしてたはずだ。

それに、姫はあの手紙が届く3日前に失踪していた。

魔王の告白は未だ姫には伝わっていない、魔王としても何も言えぬまま、ここから立ち去る事が本意でないのは明らかだった。

「良いのか？ 俺みたいな厄介な奴、一緒に住ませても……」

姫は魔王にそう言われて、即答ができなかった。

良く考えると、この狭い部屋に魔王と二人つきり。

魔王は魔族だが、男性である事には違いなかった。

そして厄介な奴である事にも違いはない。

だけど 姫は悩んでいた。

悩みの原因を少しづつ魔王に漏らしていく。

「住んでもいいんだけど、ほら、部屋狭いでしょ……」

「うむ、狭いな……（臭いし、汚いし）」

何気に心の中で付け加える魔王。

「それに私一応女だしね」

「そうだな、うーん」

魔王は姫が言わんとする事は、きっちり理解していた。  
隣に姫が寝ていたら、理性を無くして、狼のごとく襲い掛かるなんてこともあるだろうなとも思う。

そして何より、大きな体の魔王にはこの部屋は窮屈すぎた。

掃除や、片付けはワシがするにしても、やっぱりきついよな  
狭さだけはどうしようもない。何かないかな……そうだ！

「姫、なんかさ、箱ない？」

「箱？」

「そう、できれば金属性の丈夫な蓋のある箱がいいな」

魔王は何か思いついたのか、淡々と姫に言った。

「箱ね、箱、箱、あ、この間大家さんに頂いた、上等なクッキー  
が入ってた金属の箱があったわ、ちょっと探してみる」

姫は押し入れを開いた。

中には やはりゴミが積みあがっていて、魔王はそれを見て思  
わず顔をしかめるが、後で掃除をする場所のリストにひっそり組み  
入れた。

「あつたー！」

「これどう？」

姫は顔のゴミと額の汗を左手で払い、笑顔を向けて魔王に言った。

「お！？ いいかんじだ、それなら立派な世界が作れる」

「世界！？」

姫が魔王の突飛な言葉にきょとした目を向けて言うと、

「ふふふ、まあすぐに分かる、ちと、俺外行って材料集めてくるわ」

魔王は得意な顔で、また窓に右足をかけると、ふわっと浮いてふらふらとどこかへ飛んでいった。



## 第十話、現実。

「あのへんにするか」

どこかの山間部の上空まで来ると、魔王はスピードを落として、青々とした木々が茂る山の中へ降りていく。

草木が生い茂る場所へ足から舞い降りると、目の前にある背の高い木に近付き、しばらくその木を眺めていた。

「うむ、いい木だ、丈夫そうだし、いい匂いもする」

木を右手でポンポンつと叩いて、揺らしている。

ウンウンと何度が頷くと、突然、手刀でその木の幹の部分を薄く切り取る。

それを繰り返して、10枚ほどの木の皮を箱に詰めると、上空を見上げその場を飛び立った。

「やっぱりこの国にも畑があるんだな、よしあそこだ」

山間部を越え畑が見えてくると、また魔王はそこへ降り、畑の土をしゃがみ込んで手に取り口に放り込んだ。

「うん、悪くない土だ」

魔王は人様の畑の土を適当に掴み込むと、箱に詰めた。

そういつた魔王の何かの収集がしばらく続いていたが、やがて姫のアパートがある方へ上空で旋回して進路を取ると、疾風の如き速さで大気を貫いていく。

「ただいま」

魔王は姫のアパートまでやってくると、姫の部屋の窓の外からコンコンと手の甲で打った。

姫は開けっ放しだと風が吹き込み、寒かったので窓を閉めていた。畳に寝転がっていたが、その音に気づいて窓に近付くと、横にスライドさせて開け広げる。

「おかえり、早かったね」

「うむ」

魔王は浮いたまますーっと部屋の中に入ると、泥だらけの木の靴を脱いでその辺に転がっているビニールの上に置き、座布団の上にふわっとお尻を置いて胡坐を掻いた。

「よし、じゃあ、ちよつと作業するかな」

魔王は姫に貰った箱を畳に大事そうに置いて、蓋を開けると中に入っているものを指を差しながら確認する。

姫は魔王の傍らに足を崩して座り、ぼーっとその箱の中身を見つめていた。

「うむ、揃っているな、あ！ 姫コップ一杯に水おくれ」

「ん？ はい」

魔王に言われるがまま、姫は立ち上がり水道場でグラスに水を注ぐと、それを持ってきて魔王に手渡した。

そのグラスの水を箱の中に注ぐと、魔王は顔を綻ばせた。

「よし〜いくぞ〜」

魔王は箱をテーブルに置くと、両手の平を組み、人差し指だけ揃えて伸ばして、何やら代わった言葉を口ずさむ。

「  
」

魔王は謎の言葉の語尾に一際気合をこめた。

すると、箱が白く光り始める、思わず姫はその眩しさに瞼を閉じた。

「よし、できたぞ」

魔王の声にゆっくり目を開けると、テーブルの上に何ら変わらな  
いさっきの箱が置かれていた。

「ただの箱じゃない」

姫は拍子抜けした様子で、魔王に低い声で呟いた。

「ふふふ、それが違うんだな」

魔王は箱の蓋に指の鋭い爪を突き刺して、一つ小さな穴を穿つ。  
その穴に懷から取り出した、コウモリを模った黒い粘着性の紙を  
貼り付けた。

「できたー!」

魔王は両手をかち合せ、喜びを顕にする。

「じゃ姫、取りあえず行こうか？」

「どこへ？」

「いいから、いいから」

魔王は姫の右手首を左手で強引に掴んだ。

姫は思わず魔王の腹に蹴りを入れる。

しかし、そんな事を気にせず魔王は、右人差し指をコウモリの紙に近づけた。

その先が触れた瞬間

「うわ、なにこれ！ ちょっとくきゃああ」

魔王と姫の姿が箱の中に瞬時に吸い込まれる。

急激な自分を吸い込む力に、姫は驚いて目を閉じ悲鳴をあげた。姫は宙を漂うような尻がこそばゆくなる感覚に襲われる。

#

「姫目開けてみ」

魔王の声で我に返ると、姫は恐る恐るゆっくり目を開けていく。

最初に目に映ったものは、自分を覗き込む魔王の笑顔だった。

次に青い空、白い雲、眩しく光る太陽、足元に青々とした芝生、少し遠目に森林も見える。

どこからか水の流れる音も聞こえてくる。

姫は振り返ってみた。

すぐ後ろに幅10メートルはあろう透き通った綺麗な水が流れる川があった。

目の前で、楽しそうに跳ね回る魔王。

姫をそれをばーっと見据えたまま、黙っていた。

#

「魔王ちゃんここ何？」

姫は放心状態が解けて、思考が正常に戻ると魔王に問いかけた。

「箱の中だよ」

なんとなく姫はそうだろうな〜って思っではいたが、そのまんまの答えが返ってきた。

姫が聞きたいのはそこじゃなかった。

「箱の中は分かっているけど、どうしてこういうものが箱の中にあるのですか？」

当然の疑問だった。

まず、姫が思ったのは、調子が良いすぎるって事だった。

箱の中に木のかげらや、泥、草が入ってたのを見ていた。

それが魔法の力だけで、ここまで再現されるものかと、姫は半信半疑だった。

「そら、ワシの魔法のなせる技だ、俺はここに棲むことにしたぞ」

予想は当たっていた。

魔王の魔法は絶大で、本当に都合がいいものだった。

しかも、案の定、住むつもりらしい。

こういった魔法は人間に使えない。

姫は不公平感を顔に滲ませていた。

魔王がその横顔を見て取り、不意に口を開く。

「どうした？　姫、何でそんなに機嫌が悪いんだ？」

「魔王ちゃんがずるいから」

「なんでずるいんだ？」

その質問に眉を潜めると、姫は面倒くさそうに語る。  
話しても魔王に、伝わるわけないとすら思っていた。

「こんな簡単に魔法で住む場所手に入れちゃって、この国じゃ土地  
って高いのよ、それにアパート借りるのだってお金がかかる、そう  
いったものを簡単に魔法で手にいれられる魔王ちゃんはずるいでし  
よ？」

更に姫は怪訝な顔で言葉を紡ぐ。

「私はこの世界で生きるため色んな事をしてきたわ、あのアパート  
借りるまでどれだけ苦労したと思ってるのよ」

魔王は姫の苦勞というものを、分かりようが無かった。

絶大な魔力を秘める魔王と多少魔法は使えるものの、ただの人間

でしかない姫。

分かりようが無いのも当然かもしれない。

それならせめて　その苦勞の聞き役になるのが自分の役目では無いか？

魔王はそう思い、姫のブーを敢て導き出す事に専念し始める。

「姫、そういや、あのボロ家に済むまでや今までの苦勞とやらを聞かせてくれないか？」

「ふん、そんなつまらない話聞きたい？」

「うむ、聞いてみたい気がするぞ」

「そこまで言うのなら、聞かせてあげる」

姫は瞳に力をこめ過去を振り返り、静かに語り始める。

〃

姫は元の世界に帰れないことを悟ると、諦めて空き地から出て、アパートの敷地内の傍を通りかかる。

見ると、その中に猫がいたので、思わずその白い猫に近付きしゃがんで可愛がっていた。

そこへアパートの大家さんが、出てきたので会話を交わした。

白猫の名前がジジという名前だと教えてもらった。大家さんの飼っている猫らしい。

色々話しているうちに姫は、この世界の基本的な知識を得たくなり、大家さんの不意をついて、『魅了』（放心状態にしたまま、操る魔法）の魔法を掛けた後、指先を大家の頭に当てて、『吸引』の

魔法で、大家が持っているこの世界の情報を、自分の頭へイメージとして流し込んだ。

#

大家から魔法を使って、姫はこの世界の一般的な常識や知識を得る事に成功した。

色々な事が分かると、姫はやるべき事を知り、行動に移った。

まずお金がいる。

指にしていた宝石を質にいれ、この世界のお金を少しばかり手に入れた。

その後、役所に行き、魅了で操ったりして、この国で戸籍を取る事に成功。

住民票ももらった、保険書も手に入れた。身分を固めた。

そして、あのオンボロアパートを借りる事にした。

あのアパートを選んだのは、保障人無し、敷金礼金なしという大家の有り難い言葉も効いたが、それ以上にこの世界に現れた場所が近かったせいだ。

姫はあの場所を忘れないためにも、近くに住む事に決めた。

仕事も始めた。

働いた事がない姫は、まず簡単な仕事をしようと思い、コンビニでのアルバイトを始めた。

週6日、朝から夕方まで働いている。

ただ、その仕事で得たお金だけでは、暮らしていくには苦しかった。

家賃もあれば、光熱費もある。食費も、etc……とても足りなかった。

そこで、手放したくなかった純金製の王冠も質にいれた。



そのおかげで銀行に今 800 万ほどの貯金がある。  
今はバイトのお金と、その貯金を減らしながらギリギリの暮らし  
をしていた。

~~~~~

「大変だったんだな、でもさ、ここ人間は魔法使えないんだ  
ろ？」

「うん、使えないけどそれがどうしたの？」

「なら、多少なりとも魔法を使える姫の方が上じゃないか」

「ぶちのめして金を奪ったり、操って金を盗み取ったりすればいい  
だろ？」

魔王なら当然の選択だった。

姫は流れる雲を目で追いながら、やんわりとした口調で言葉を紡  
ぐ。

「最初は確かに魅了とか使ったけど、あれは本当にどうしようも  
なかったから、仕方なく使ったの、この国じゃ身分を整えないと何  
もできないから」

姫は一呼吸置いて更に言葉を連ねる。

「だけどね、ゼームス大陸に帰れない今、この国が私の生きて行く  
舞台なわけ、一生を送るかもしれないこの国で、反則めいた魔法  
を頻繁に使って、生きて行く事はしたくないの。この国の人たちと  
同じ土俵で生きていく。自分の力で道を切り開いていく。それが楽

しんじやないの？」

姫はそこまで言うと、ぼーっと空を眺めて目を虚ろにしていく。  
魔王が姫に目を向けると、気持ち良さそうな顔で眠りについてい  
た。

## 第十一話、魔王の僕。

「ふー、なんかな」

魔王は姫が芝生の上で熟睡してしまったので、川の上流に移動して大岩の上に腰を下ろし、足を組んだ上に頼杖を付いて物思いに耽っていた。

姫の話を散々聞いたまでは良かったが、どこか姫の考え方につつかえる物があつて、なんだか胸の辺りにもややもやとした感情が留まっていた。

「あんな調子でしんどくないかな？」

魔王は姫の苦労話は確かに、辻褄は合ってるような気はしたし、姫のこれからのここでの生活を応援したい気持ちもあった。

だが、姫から、ゼームス大陸にいた頃の好き放題やりたい放題、自由奔放に振舞っていた面影が消えていて、逆に型に嵌った、何かに掟われすぎている面が垣間見えて、どこかやるせない思いが胸の中で渦巻いていた。

「ま、姫は姫だ」

そんな思いに掟われつつも、人は人、魔王は魔王と独自の思考回路で取りあえずの結論を確立すると、それに関する思考を閉じる。

魔王は気持ちの切り替えは早かった。

悩んでも仕方がないものは仕方がない      と悟ると、今出来るこ

とに思いを馳せる。

このへんは前向き志向とでもいうべきか。

足を崩して左足をポンと手で強く叩くと、空を見上げた。

勢い良く立ち上がると、すーっと体を浮かせ上空へと飛び立つていく。

#

この世界はいわゆる魔法空間。

一見どこまでも茫漠と続くように見えるが、そうでもなかった。

この箱の入り口のコウモリマークは、触れたものを1000分の1の大きさに変える事ができる魔道アイテムだ。

体を縮めて中に入った者には、箱の中がとてつもなく広く感じる仕組みだった。

だが、小さくなっただけで、この世界はクッキーの箱の中に存在している。

それ故、空の先や地の果てがどこまで続くように見えても、大きなには限りがあった。

魔王は空を注意しながらゆっくり飛んでいる。

どこが境になっているか分からず、下手をすれば箱の壁に激突するからだ。

青々とした空、白い雲、眩しい太陽、これ等は少しは幻影も混じっているが、一応魔法によって水と熱を操作して作られたもので、外の世界と同じように雨も降らずし、空気の流れもあった。

地上に広がる森林、芝生、土の地面、これらも魔王が外で集めたものが魔法で姿を変えたものであり、実在していて、外と同じように機能する。

魔王は一通り箱の中の世界を飛んで、果ての確認をし終わると、小高い台地に降り立った。

「ここいいよな」

足を踏み鳴らし何かを確認しながら、その場所を右往左往していた。

「よし、ここに決めた」

魔王は地盤がしっかりしている土の地面を見渡すと、何かを決意した。

「さて、どうしようかな」

ここに自分の家を建てたかった。

木の丸太小屋を魔王はイメージしていた。

それは今決めた訳じゃない。

この世界を作る前からログハウス（丸太小屋）を自宅にしようと考えていた。

そのために、家に使う材木用に木の皮を集めて、森林地帯を形成したのだ。

木の皮は、魔王自ら足を運び選んだ、ログハウス向きの丈夫で太い木から得たものだ。

「俺建てれないんだよな」

材料と台地は確保されていたが、肝心の家を建てる技術は魔王には無かった。

だが、そこは頭の回る魔王。余念は無かった。

ある方法を使えば、この家を建てることは出来る。

それは分かっていた　　が魔王は悩んでいた。

「生意気なんだよな……」

魔王は懷から何か黒いクリスタルのようなものを取り出した。  
太陽の日差しが反射して鈍い光を放っている。

どうすっかな……

頭を時計回りに回し、悩む素振りを見せる。

「仕方ない……背に腹は変えられないしな」

魔王は何かを決心したのか、一度頷くと、その場にしゃがみこんで、クリスタルの先を地面に突き刺し垂直に立てた。

ゆっくり立ち上がると、深く息を吸い、吐くのと同時に何かの呪文の詠唱を紡ぐ。

「魔王の名において命じる、暗黒の申し子マランガよ、その力クリスタルより解き放ち、我の『従順』な僕として、この地に降臨せよ」

魔王は詠唱中の言葉の『従順』に一際力を込めた。

最後まで詠唱を言い終えると、魔王は両手の平を揃えて翳し、網状の黒い雷のようなエネルギーの迸りをクリスタルの中へ注いでいく。

「さー！　でて来い！　我が『従順』な僕マランガよ！」

また魔王は従順に力を込めて大声で言った。

クリスタルが一瞬明滅すると、辺りを黒く染めていく。  
視界が遮られるも、魔王はその闇の中で一点を凝視していた。

次第に辺りを包む闇が弱まり、陽光が中へ差し込みはじめる  
と、何か黒い影が見え隠れする。

魔王はその様子をじっと目を凝らして眺めていた。

#

完全に闇が払われると、そこには黒い甲殻類のような大きな虫みたいなものが横たわっていた。

魔王はこめかみに汗を一筋垂らして、その動向を見守る。

一見、クワガタ虫のように見えるその外見。

その尻の部分の辺りから、黒い太い足が突如二本によきつと延びる。

更に胸の上方の両側面から二本、更にその下から二本。

合計6本の足が伸びると、一番上の両手？　を地に強く突き出した。

「エツコラッセつと……」

一声おっさんのような声を発すると、下部の二本足を地にどっしり付け、体を持ち上げた。

その場で足を屈伸したり、腕の先についた人間の手のようなものをガチャガチャ音をさせて開閉し、何かを確かめている様子。

しかし、背中の硬い甲羅を魔王に向けたまま、振り向く気配がない。

魔王は声がかけ辛かった　が、『俺は魔王！』だと自分に言い聞かせながら、マランガに声を放つ。

「我が僕マランガよ！　良くぞ我が元に現れた」

大きな声でマランガに魔王の威厳に満ちた言葉をかけた。

マランガがその言葉を聞くや、体がぴくんと跳ね反応したかのようにはみえたが、まだ黙ったままだ。

振り返る気もないらしい。

やはり、生産タイプの魔物は技術はあるが、頭が弱いせいで忠誠度が低いな。

魔王の僕である魔物は先ほど取り出した『魔石』を核にして作られる。

暗黒の魔力を魔石に注入する事で生まれる魔物。

それにより生成される魔物にはいくつもタイプがあった。

魔物表。

Aタイプ 戦闘に秀でた魔物、格闘術、剣術、魔法に優れ、知性も高く忠誠心も高い。魔道師、戦士タイプ。

Bタイプ 治癒系や補助の魔法に秀でた魔物。知性は魔物の中でも最も高く、忠誠心も高い。魔王の執事役を務めたり、雑務をこなすインテリタイプ。

Cタイプ 省略。

Dタイプ 省略。

Eタイプ 生産に向いている魔物、畑を耕し、材木を加工し、建物を建てたり、工芸品を生み出す職人タイプ。職業柄、力もあるし技術もあるが、知性が低い、忠誠心も低い。

マランガは这其中ではEタイプの魔物だ。もちろん知性が低いし忠誠心も低い。

魔王はこの事が分かっていたからこそ、生成する前に悩んだ。

だが、家が無い事には、外の世界で雑魚寝するのと変わらない。

魔王は時々現れる、比較的知性と忠誠心がある生産タイプの魔物が生まれることに賭けていた。



「コラ、俺は魔王様だぞ、さっさと俺の前に跪かんか！」

魔王は開きなおって、マランガに強い口調で捲くし立てた。

マランガはやつと気持ちが悪かったのか、魔王に大きな体を向ける。内側も甲殻類特有の姿をしているが、一つ違つたとすれば、頭の部分に黒い人間の顔のようなものがあるところ。

眉毛は太く、虚ろな眼差し、無精髭のようなものが鼻の下と顎に生えている。

「オラ！ 跪け！」

魔王はもうこうなつたら力づくで と思い、実力行使で跪かせようと、マランガの頭を押さえつけようとすると、

ガキン！

突然、マランガの頭の後ろのギザギザの大きなハサミが力強く閉じた。

魔王は思わずバックステップして後ろに距離を取る。

マランガは魔王を荒んだ目で睨みながらぼそと呟いた。

「何でも力づくか……」

魔王はため息を付いた。

またこのタイプか……と心で呟く。

Eタイプに力押しすると、駄目な事は身に染みて分かっていた。痛めつける事もできるが、このタイプはそうすると、結局自分を見限つて出て行くことになるからだ。

いつもの丸め込み作戦しかないか

「すまん、悪かった！ 調子のりすぎた、許してや」

魔王は話し方まで変えた。

Eタイプにはこのしゃべり口調が受けが良かった。

マランガは魔王の態度が変わると、細めていた目を多少開いて、息を大きく吸い、

「まあええけど、おっさん、ところで何でワイをこないなところへ呼んだんや？」

重い口を開いて、魔王に溜め口で話しかけた。

関西弁がきつい。

「いや、俺さあ、家たてれへんくてな、途方にくれとったら、お前さんの事思い出したんや」

更に魔王は同じ口調で淡々と言葉を紡いでいく。

「お前さんは、生産に精通してる真の職人やって聞いているからな、あんたに頼めば立派な家建ててもらえるんやないかと思ってな！ だから！ な！ 頼むわ！ 住む家ないんや！ 手貸してくれんか？」

魔王が低姿勢で揉み手をしながら必死で懇願すると、マランガの表情が緩んでいく。

さっきまでの荒んだ目にどこことなく清涼感のようなものが漂い始める。

「まあ、確かにわい、『真の職人』やしな、それにこんな殺風景な場所で家無しとか、辛いわな」

マランガは少し考える素振りを見せて俯いた後、魔王に視線を戻し、魔王の肩を右手でポンと叩いた。

「よしや！ 分かった！ だけど只やないで、後でなんかそれなりのもん渡しや！」

「おお、さすが！ お前さん最高！ それでこそ真の職人！ いや神職人！」

魔王はわざと大きな素振りで、マランガを褒め称える、ジェスチャーを最大限に駆使して、持ち上げると、マランガにだんだん間の抜けた笑顔が浮び、完全にやる気がでてきているのを、魔王が表情から読み取ると、

「あそこに森林があるから、あそこにある木使って今立つてる台地にログハウスお願いできるかな？」

「お、準備いいやんけ！ 任せときな！ ほな切り出し行ってくるわ！」

「頼みますわ！ いつてらっしゃい！」

マランガは完全に丸め込まれると、鼻歌を口ずさみながら背中の大きな羽を広げて森林のほうへ、ブーンという羽音を立てながら、ふらふら飛んでいった。

その後ろ姿に笑顔で手を振りながら、視界から消えるのを確認すると、魔王は大きなため息を付いて頭をうな垂れた。

魔物社会にもそれなりに苦勞はあつた。

「さてと、家が出来上がるまで、姫といちゃついてくるか……」

魔王は前にうな垂れていた体を起こすと、気持ち切り替え、砂漠のオアシスに向うような満面の笑顔で、姫が寝ている場所に向けて空へ飛び立った。

## 第十二話、ロックオン！ 勇者一向。

「姫〜姫ったら姫〜！」

魔王は姫のところへ戻つてくると、姫は口から涎を垂らしてまだ寝ていた。

幾らなんでも寝すぎだろ？ と大きな声で名を呼びながら、姫の体を揺さぶる。

「あん？」

姫が目を擦りながら薄く瞼を開けるものの、その瞳はとても冷ややかで殺気さえ漂わしていた。

「クロス……わよ……？」

魔王は思わず冷や汗をかき、尻餅をつき後ろ手を地に置いた。

地の底から響くような低い声と凍えるような冷たい瞳が、魔王を否応がなしに恐怖させた。

あ、相変わらず寝癖悪いな……仕方ない……

「メタモ！」

魔王は変身魔法『メタモ』を唱えと、この前姫が苦勞して選んだ男に姿を変えた。

白い歯を零しながら、そっと姫の頭の下に手を滑り込ませ抱きかかえる。

美形の男の優しい視線を浴びた姫が、白雪姫のようにゆっくり目

を開けていく。

その姿を白く濁った視界に捉えるや、

「王子様……！」

魔王の胸に抱きつき、顔を気の済むまで擦り付け、美形の顔を拝もうと顔を上げた。

「なんだ、魔王ちゃんか……」

見ると、既に変身を解いた魔王が、姫の抱きつきの快感に酔いしれ、悦に浸っていた。

そのまま、魔王は姫を抱き込もうとすると、

「調子に乗るな！」

と怪訝な顔を浮べ、姫が魔王の顔面を右足で蹴り上げた。

「いてえ！ 何も蹴る事ないだろうに」

左頬を摩りながら魔王は姫に情けない目を向けていたが、姫は一連のやりとりで、意識がすっかりしてくると、ある事を思い出して、魔王の前に座ると、まじまじとその顔を見つめる。

「そっぴや、魔王ちゃん！ この世界に来たからには、最低守って欲しい事がいくつかあります、聞いてもらえるかな？」

「ん？ 聞こうか」

案外素直に姫の要求に応じた。魔王もこの世界の事をまるで知ら

ない訳で、一応ここではそういう意味で先輩になる姫の話を聞くのも悪くないと思った。

「じゃー、色々話すけど、取りあえず魔王ちゃんも私から吸引……」

姫ははっとして、言葉を途中で止める。

『吸引』と言う魔法は、対象者の知識や思想までイメージとして吸い込む事ができる魔法だが、自分から直接魔王に吸わせるに当たって、知られたくない感情や、後ろめたい記憶がある事を思い出した。

そうだわ、魔王ちゃんに知られたくない事が山ほどあるんだわ、あんなことやこんなことや、そんなことや、ああいったことまで！

姫は相等魔王の知らないところで色々な事をしているようで、

「取りあえず、大家さんから取るうか、ハハ……」

姫がなにかごまかすような引きつった笑みを浮かべそう言つと、ある事が気にかかり魔王に尋ねる。

「そう言えば、魔王ちゃん、ここからどうやって出るの？」

「ああ、教えてなかったな、簡単なこつた、『リターン』と叫べば良い」

姫がそれを聞くと、さっそくりターン！ と大きな声で言い放った。

魔王はその瞬間、姫の右肩に手を触れる。すると、二人が瞬時に箱の外へと放り出される。

部屋にふって沸いた様に現れる二人。

「じゃ、魔王ちゃん、この世界で第一に守ってもらいたい事、それは、私に迷惑を掛けないって事ね」

魔王は呆けた顔で、姫の人差し指を振りながら、したり顔で話すのを聞いていた。

更に姫はその意味を掘り下げて魔王に伝えていく。

「まず、第一に私以外の人間から見られている時に、その素の姿で私に話しかけない、半径50M以内に寄らない事、当然一緒に歩く時はさっきの格好で、人と会う時もその格好に変身する事。第2に、素の姿でこのアパートの出入り口から入らない事、アパートに近付かない事、アパートに帰ってくるときは100m手前で誰にも気づかれない場所で、人間の姿に変身する事」

姫は息付きをせずに言葉を並べ立てたので、息をハアハア言わせていた。

魔王はそんなに一片に言われても……と思うが、まあ適当でいいやなつと安易に考え、言われた事の半分程度しか理解できていないが、笑顔で頷いて、姫に分かったと呟いた。

#

魔王は変身した後二人で部屋を出ると、姫は鍵を閉めて、一階にある管理人部屋へ並んで歩いていく。

その部屋の前まで来ると、古びた木の扉を右手の甲でコンコンと2回叩いた。

少し遅れて、ガチャッと金属が擦れる音と共に扉が中へと開かれ



た。

「大家さんこんにちわ」

「あら、卑弥呼ちゃん」

高齡と思われる老婆が中から現れた。

白髪がもつさり上に持ち上げられ、頭の天辺で寄り添うような髪型が玉ねぎのように見える。

落ち着いた花柄模様のワンピースを着た大家さん、目尻が優しげに下がり雰囲気柔らかい。

「どうしたの？」

「あのー、あ！」

姫が大家の後ろに見える何かに、驚いたように目を大きく開けた。それに吊られて、大家が振り返ると、自分の指先を大家の頭に向けた。

すると、大家が虚空を見つめながら、ぼーとした様子で動きを止める。

姫が指を右に動かすと、右に、左に動かすと左にと、大家の体が揺れた。

「あ、魅了か」

「うん、じゃ魔王ちゃん『吸引』使ってください」

「うむ」

魔王は右人差し指を大家の額に当てると、吸引の魔法で大家の知り得る全てを自分の頭の中へと流していく。

「うおおおお、何じゃこりゃあ」

魔王は吸引している間、身悶えしながらその新しい知識に敏感に反応していた。

暫く吸引が続いていたが、魔王が体の揺れを止め、落ち着き始める。

「よし、全部吸ったぞ！」

「じゃあ、このまま大家さん置いて、部屋に戻りましょう」

姫は大家に向けている指を降ろすと、そそくさと魔王の背中を押しながら部屋に戻っていく。魅了の魔法は解けてから1分はぼーつとした状態が続くので、その間に退散する事にした。

一分後、我に返った大家は、姫が尋ねてきた気がしなくても無かったが、そのへんは高齢のために、まあいいかと大して気にも留めず部屋の中に戻り扉を閉めた。

二人は部屋に戻ると、姫のちよつとした講義が中で開かれていた。魔王と向き合って座り、知識を得た魔王と話を酌み交わしながら、姫の蘊蓄が長々と交わされていた。

#

その頃、二人が忘れかけているゼームス大陸では……  
ドロンパが魔王をうまくエンギルの魔法で異世界に送った後で、

次の策略を実行に移そうとしていたが、その前に魔王はどうやって異界へと送られてきたのか？

ドロンパは姫を異界に送った後、エンギルの次の標的に魔王を選んだ。

ゼームス大陸を支配するに当たって、一番邪魔な存在である事は想像に難くない。

だが、魔王をエンギルを使って異界に飛ばすまで丸一年かかった。魔王は宙に浮ぶ白いエンギルの光に、あたかも偶然ふれてしまつてこちらへ来たと思い込んでいるが、実はそうでは無かった。

その裏にはドロンパの血の滲むような苦勞が隠されていた……

）

ドロンパが魔王を異界に飛ばす方法として、まず考えたのが魔王城に貢物を送る謁見の時だった。

もう既にこの時、実際の王様をある場所に幽閉する事によって、サライアの王座にドロンパは即位していた。

当然王様として、謁見に出向いたのだが、

「魔王様、私、最近手品を覚えましてね」

「ほお、見せてみる」

魔王の前でエンギルの魔法を披露する。

したり顔で暗い笑みを浮かべるドロンパだったが、エンギルの白い光を見た魔王が、ピクリとも反応しない。

「うむ、綺麗な光だ、だがそれだけか？」

ドロンパは動揺していた。エンギルは白い光を見たものを引き寄せる強烈な魅了の魔法と空間転移を併せ持つ究極の魔法だと自負していたが、それには欠点があった。

強い魔物やある程度のレベルの人間には、強烈な魅了魔法とは言え、効果を発揮しないのだ。

謁見の場所で知ったその驚愕の事実には、一度は断念しかけたドロンパだが、彼のドス黒い野望が再び燃え上がると、あの手この手で魔王を異界に飛ばす方法を思案し続けていた。

魔王と表立ってケンカを売れば、勝ち目は無かった。

そこで、エンギルを白い球体として、体から離れた状態で遠隔操作できるよう半年修行をした。

ようやく、100メートルほど離れた位置から操れるようになる  
と、魔王が城から一人出てきて

散歩している所を狙って、球体を魔王目掛けて飛ばすものの、簡単に避けられてしまう。

魔王は飛んでくるものに簡単に当たるほど、鈍くはなくその方法は失敗に終る。

色んな方法を試すが、魔王はそれに触れる事が無かった。

そのうち姫が消えた悲しみで、魔王が城から出てこなくなると、更にそれは困難となった。

だが、諦めずに魔王を異界に飛ばす方法を頭で考える。

その間、魔王城の近くに偵察を置いて、魔王が外に出てくるのを監視させていた。

ドロンパは考えた……、魔王が魅了にひっかからない上に、直接ぶつけようとしても避けられるのなら、エンギルを触りたくなるようにさせるしかない。

それには触りたくなるような形状にするしかない。そこで頭を捻って考えたのが蝶々がひらひら舞うようなエフェクトを伴うエンギルの改良した姿だった。

ただ、これを他に色々ある場所で、魔王に見せても、興味は惹けないだろうと予想する。

何も無い空に変わった形をしたものが浮んでいれば、さすがに、魔王は興味を惹かれ自発的に触るんじゃないか？ ドロンパはそれに賭けた。

魔王が空を飛んで外に出るときを、監視と綿密にテレパシーでやり取りしながら待った。

ある日、監視から思わぬ情報が入ってくる。

勇者が魔王城に乗り込み、魔王と対決すると言う。

ドロンパは思った、もし勇者が勝つなら、魔王は死ぬからそれはそれでいいし、死ななくても逃げるなら空を飛ぶはず その予想は的中した。

魔王が城から飛び立つのを見た監視がテレパシーで、ドロンパに伝えた。

監視がその飛ぶ方向とスピードを測定器で割り出すと、B1087地点に魔王が10分後に到着する事をドロンパに伝えた。

それを聞いたドロンパは先回りし、その地点までやってくると、改良されたエンギルを魔王が飛んでくるであろう位置に留め置き、離れた場所でそれを見守っていた。

魔王は奇跡に近い確率で、その場所にやってくると、案の定、蝶の舞う姿に目をとらわれ、手を突っ込んだ事で異界に飛ばされてしまう。

こうしてドロンパは魔王を異界に飛ばす事に成功し、今また、あの者をエンギルのターゲットにしていた。

魔王を凌ぐほどの実力を持つ勇者達。いつか世界を我が物とするとき邪魔になってくるのは明白だった。

そこで、ある日、魔王を追い払い、魔族に打撃を与えた功績を称えて褒美を取らすという旨を書いた文を、勇者一向に送り届けた。

勇者達はその文を受け取ると、サライアの王宮に三人揃ってやつ

てきた

）

「勇者様、この城綺麗だね！」

「……そうか？」

勇者は面倒くさかったが、報奨金を王様がくれるというので、仕方なくやってきた。

僧侶と魔法使いを加える三人のパーティだが、三人とも働く事をしていないせいで、お金は当に尽きてしまい、窮迫していた。

「いくくらい、くれるんじやろな？」

「さあね……」

強欲な僧侶がにんまりしながら、過大な妄想を頭で描いていた。

勇者はこんな目立つ所に呼び寄せられて、気が進まないといった様子で歩を進めていた。

「勇者様がこられました」

兵士に案内され、王の間に案内される三人。

僧侶と魔法使いは目を輝かせていた。それとは対象的に、さつさと金もらって帰ろう……と勇者が力ない目を浮かべて、重い足取りで王の前に来ると取りあえず、腰を屈めて平伏した。

「良く来た、勇者一向よ、楽にしてよいぞ」

### 第十三話、勇者の決断。

「勇者よ、今回の働き真に見事であった」

「有難きお言葉……」

勇者は形式ばった言葉で、ドロンパ王と言葉を交わしていた。

王様と話を色々した後、側近から今回の栄誉を称えお金の入った子袋を渡された。

すぐにその場で仲間と円陣を組んで、中身を確かめ合う。

「うおーすごい、金貨じゃ！」

「うわー一杯美味しいもの食べれるね！」

「ふ……」

王様の前で喜びのあまり、小躍り乱舞しだした僧侶と魔法使い。

これで暫く生活に不自由しなさそうだと勇者は安堵の息を漏らすも、恥ずかしかった。

王の間で見境無く下品な笑顔で踊る僧侶と魔法使いに落胆していた。

勇者は比較的、常識のある人間で、場をわきまえない人間が嫌いだった。

なんでこんなのか俺のパーティには……とは思ったが、敢てそれを押さえ込んで、王様にしゃがんだまま向き直った。

「勇者よ、ご馳走も用意してある 誰ぞ、勇者一向を案内しなさい」

「はい……」

「ささ、勇者様こちらへ」

濃紺のローブを身に纏った家来が、手を差し出し勇者一向を食事の場へと促した。

「お、飯か、行こう！」

「わーい、お腹減ってたんだ！」

僧侶と魔法使いは家来の後を満面の笑顔で付いていく。

（何食えるんじゃない？ わかんないけど、いい物よ！ 見た事ないような！ そうかそうかアハハハ！）

大きな声で街中でのいるのと全く変わらないような会話をする二人。

「……………」

その浮かれた二人を横目に勇者は、辟易してため息を付いた。

もうちよつと慎み深くなれよ……

だが、自分もここ3日間まともなものを食べていなかったせいもあり、内心王宮での食事に期待していて足取りは軽い。

「ささ、この白い光の先に用意してあります」

「何これ」

「テレポーターの魔法ですよ、一瞬で食事の場へ行けます」



「おお、素晴らしい、じゃワシが先に」

僧侶は腹も減ってたし好奇心も重なって、勢い良くそれに飛び込む。

「ああ、ずるい！私も、勇者様一緒に行こう」

勇者は何かその白い光を見ると、心に引っかかるものを感じていた。

だが 魔法使いが右手を無理矢理引張ってきたので、結局は成行きで自分も中へと踏み込んでしまう。

こうして、三人はあっさり異界へと飛ばされてしまった。

ドロンパは魔王のときと違い、あっさりその罠にひっかかる勇者一向に拍子抜けしたとか

#

「わーい、あれ？」

「ここは一体……どこじゃ？」

「……」

白い長方形のテレポーターを潜った先で、最初に三人の目に映ったものは豪華な部屋でもなく、テーブルに並べられたご馳走でもなかった。

「ここは……海？」

足元の砂浜に寄せては返す小波、海の方こうから潮風も吹き付けてくる。

しばらく、呆然と三人はその場で立ち尽くしていた。

「う、海のようにゃが、どついう事じゃ?」

「こっちは……」

……見覚えがあるぞ……

勇者は何か思い当たって辺りを見渡しながら、砂浜を右往左往し始めた。

「い、この看板は!」

『×市 ×海水浴場、花火禁止』

×市……やつぱりここは日本!……まさかそんな事が……

勇者が半分思考が宙に浮いた状態で、体を小刻みに震わせていると、それを不審に思っ魔法使いが駆け寄ってきた。

「どうしたの? 勇者様」

「そんな馬鹿な……」

「おい! それより飯はどこじゃ!」

勇者がめつたにみせない動揺した姿に、魔法使いはどうしてもい

いか分ならず、寄り添う事しか出来なかった。  
その二人の様子を意に介せず、飯にありつけない怒りで砂浜を闇雲に走る僧侶。

#

勇者は呆然としながらも頭の中で整理していた。

あの白いテレポーターに何か仕掛けられてたようだが、あれはたぶん、時空魔法の一種、あれに触れたものを一瞬でどこかへ飛ばす魔法だったんだ。だが、なんで俺の住んでいた世界、しかも日本に繋がってるんだ？

勇者は実際は押し黙っているが、心の中では様々な言葉が交錯していた。

訳わからないが、あの魔法で日本に飛ばされた事は事実のようだ。さて、どうしよう？ 俺も2年もこの世界離れていて……困ったな……

勇者は自分の腕に寄り添い心配そうに見上げる魔法使いと、浜辺を慌しく走り回る僧侶に、視線を往復させているうちに、なにか使命感のようなものが心の底で生起し始める。

俺がすっかりしないと……こいつらが路頭に迷う……

勇者は凜とした目つきに変わると、一度頷いて胸元で拳を握り締めた。

「僧侶！ こつちこい！」

「え？ ど、どうした、そんな大きな声で……」

僧侶は焦った。普段無口で大人しい勇者が凄惨な形相で怒鳴ったのだ。

こんな勇者の姿をあまり見た事が無かった。  
その迫力に否応が無しに足が止まり、僧侶はゆっくりと勇者の前までやってきた。

「魔法使いルージュ、僧侶ドンゴロ！ 俺の話を黙って聞いてくれるか？」

勇者が久し振りに彼等の本名を口にした。

普段は何か気が抜けるので、魔法使い、僧侶と呼ぶ事になっていた。その方が格好良いと三人の意見が一致していたからだ。

本名を呼ばれてしばし、ぼーっとしていた二人だが、勇者の真剣な表情を見て、何か感じ取ったらしくすぐに大きく頷いた。

それを見た勇者は、この世界の事、自分がこの出身だという事、三人がこの世界に王様の謀略で飛ばされてしまったという事実を、惜しげなく二人に話して聞かせた。

「え〜〜ここは異世界なの……？」

「なんと」

話を聞き終えた二人が、目を丸くして動揺を見せる。  
ルージュとドンゴロは顔を見合わせて目を白黒させていた。

「しかし、何で王様が私たちを？」

「さあな」

「む……」

勇者は王様の真意は分からなかったが、たぶん邪魔だったんだな  
つと安易に思った。

別に王様に対して怒りが湧いて来なかった。

それはここが、勇者の故郷であるせいもあった。

「糞、王様め！」

「ま、いいけど……」

血の毛の多いドンゴロは、悔しい様子で拳を握りこみ憤りを見せていた。ルージュは勇者が近くにさえいれば、それ以外は別にどうでも良かった。

「でさ、どうする？」

勇者は今の地点でこれからの方向性が見出せなかった。

勇者はこの世界に存在するゼームス大陸に繋がる場所を知っていたが、二年も経っている上に山の中にそれがあるため、記憶が曖昧になっていて、実際見つけられるか怪しかった。

それに、偶然とは言え、自分の故郷がある世界に戻ってこれた事が本当は嬉しかった。

山を歩いてて窪地に嵌ったら、ゼームス大陸に飛ばされていた。あれから二年、もう戻れないと思っていた場所に、こうして帰って

これたのだから。

「勇者様の実家がある世界　　と言つ事はお母様もいるんですか？」

「うん、いるよ」

ルージユはそれを聞いて、

「私この世界で暮らします！」

即答した。

「え……お前いいのか？　ゼームス大陸に残した家族は？　友達は何人？　知り合いは？　それに文化も何もかも違うぞ？　大変なんだぞ？　お金稼げよ？　家どうすんだ？　世間の荒波は厳しいぞ？」

ルージユはあまり深く考えて言っていないだろうと思い、勇者は色んな現実を積み掛けるように突きつけた。

「あうあう……」

ルージユは目が点になって、口を開けたままパクパクさせていた。しかし、それでも勇者はこの世界の出身である事は違いないし、自分は勇者のファンというよりは寧ろ　なわけだと、しばらく葛藤が続いた後、何か決心をして勇者に真剣な表情を向けた。

「それでも……ここで」

ルージユの意志は柔らかいようで硬かった。

勇者はまあ、まだ来たばかりだし、そんなに答え急がなくても良

いかつと頭を掻いてから、僧侶に目を移した。

「僧侶どうする？」

「ふふふ……」

ドンゴロは低く笑いながら、閉じてた目をかっと思開き、勇者を真直ぐ見つめて言った。

「勇者よ、ワシはあんたがいる所ならどこでもいいんじゃない？」

「いいのか？ 今から山中探せば、ゼームス大陸帰れるかもしれないぞ？ お前を心配する家族とか知り合いとかいないのか？」

「それが全くいないんじゃない？」

ドンゴロは結婚もしていないし、両親もとくに亡くなっていた。一人っ子なので兄弟すらいなかった。天涯孤独な身の上で寄る辺のないドンゴロは、勇者達と離れるわけにはいかなかった。

「ドンゴロ……」

「じいさん……」

虚ろな瞳で俯くドンゴロに、哀しい視線が二人から浴びせられる。ドンゴロは俯きながらも、計算高く頭を働かせていた。

こいつらに捨てられたら、ワシの老後は……絶対離れん！  
――蓮托生じゃ！

「まあ、取りあえず意見も纏まった事だし、俺んちでも行くか、金

もないから実家帰らないと何も出来ないしな……」



## 第十四話、それぞれの苦難。

姫のボロアパート……

魔王は大家から得た知識で、ある程度この世界の事を理解出来始めていた。しかし、吸引の魔法は脳の中へ対象者の脳内のイメージを直接映像とその意味を取り入れるだけで、実際それに触れたり、経験をしたりしてみないと実感というものは湧いてこない。

魔王はこの世界の色々な物や人間に触れて、それを体感する必要があった。しかし、それは諸刃の刃である事を姫は知っていた。魔王の気質、人間への蔑視など考慮に入れると、姫の心配は尽きる事がない。なので、前段階として、外の世界に触れる前に色々蒔蓄や姫が考えるルールを述べる必要もあったし、シュミレーションを交えた特訓も必要だった。

「はい次、私の働いているコンビニであなたは御菓子を取りました、その後どうしますか？」

「うん」

魔王は胡坐を書いて姫と向きあって問答を繰り返していた。といっても、一方的な姫からの質問ばかりではあるけれど。

「そのまま帰る……」

「ブーブー、もうそこでアウトよ」

「ええ、難しいな……」

魔王にとってそれは当然の答えだった。なぜ、間違っているか首を傾げ考えるが一向に答えは出てこなかった。

「ちゃんと得た物には対価を払わないと駄目。それはゼームス大陸でも同じ事よ。だけど、あの世界では魔王ちゃんは王様だから、払わなくても良かったけど、この世界ではお金を払わなければ、あなたは只の盗人になってしまうの、分かる？」

「じゃあさ、この世界でも王様になりやいいんじゃないか？」

「それは駄目！ 絶対――駄目！ 私の世界を壊したら……許さない！」

姫は少し腰を浮かせて、凄い形相で魔王を睨みこんだ。魔王は大きな体を縮めて、姫の迫力に圧倒されていた。

しかし、姫は魔王に自分の思惑全てを、押し付けるつもりはなかった。相手は知り合いとは言え、魔王なのだ。押さえ込みすぎたら逆に鬱憤が溜まって派手にやらかす時が来るに違いない。姫は強張らせた顔を徐々に緩めると、穏やかな口調で魔王に語り始めた。

「でもね、魔王ちゃん、世界征服以外ならある程度は私も目を瞑るわよ」

「と言うと？」

魔王は体を前に起こすと姫の説明に耳を欹てる。

「それは私に火の粉がかかって来ない事が条件だけどね、まず私に絶対迷惑を掛けない事、それを守るなら、ある程度の事は好きにしているよ」

更に姫はまたいつものように、人差し指を立てて振りながら、淡々と長々と自論を語る。

「この私のいる x 地区以外なら、気に入らない人がいたら、ぶちのめしてもいいし、その結果死んでも私の知り合いとかじゃなければ、全く気にしない。さっきの盗みの話だって、この地区じゃなければ、別に私は咎めないよ、私の働いているコンビだから駄目だって言ったの。只、当然、盗人になるから、指名手配されたら困るんで、犯罪犯すときは適当な人にメタモしてね、そして、その後その姿で私の家には帰らない事！ 簡単なのは、このボロアパートには基本的に最初のイケメンの姿で出入りして、他では素の姿か、違う人に変身してね」

姫は自己中心的だった。そして悪どく、狡猾で、用意周到だった。罪人になれば、完全犯罪をやったのけるタイプだ。しかし、これでは犯罪を勧めているも同然なので、姫はそれに申し分程度に付け加えた。

「だけど、今言ったような『犯罪』はできるだけしない方が私は良いと思うな、本当に困った時とか、どうしようもない理由でした時は仕方ないけど、私は好きじゃないけど」

こう言っておけば、何か魔王がやってしまっても、自己嫌悪に陥らずに済む。姫はとことんずる賢かった。

魔王は姫の話にふむふむと頷いていたが、内心は定かではない。口端が鋭く割れて何か、裏で考えているようでもあった。

#

その頃、勇者達は

「勇者さま、どこまで歩くの……？」

当てもなく、海岸線沿いの道路を三人はよたよた歩いていた。

この場所が日本である事は勇者は分かっていたが、実際のどの辺りなのかは、さっきの看板の地名を見てもピンと来なかった。ドンゴロも最初は食事にありつけない怒りで、走り回っていたが、空腹の為か、今は無言で杖を支えに何とか歩けてる状態だった。ルージユも似たようなものだった。

「知らね……」

勇者は白い布の服、青っぱい履物で歩いていた。この日本という国で元々住んでいた勇者はゼーム大陸で着ていたような鎧は、この国では目立ちすぎる事は分かっていた。砂浜で、ドラゴンアーマー装備一式を外して、もっていた大きな皮袋に詰め込んでいた。剣は銃刀法違反ですぐ捕まるので、ルージユの魔法で小型化してもらって、胸ポケットにしまっていた。

ただ、ルージユとドンゴロはそのまんまの姿だった。ピンクのローブに大きな宝石が付いた茶褐色の杖、僧侶も似たような格好だ。このまま街中に出れば、必ず目立ってしまう。勇者は悩んでいた……

こいつらの服買ってやらないとな……それに運賃だって。あーあ、実家に戻るのさえ金があるよ……どうしようかな……

そんな勇者達の前から、一台の黒い車がやってくる。ベントだった。運転手一人が乗っていた。後部座席に人影は見当たらない。勇者はそれを見て微笑んだ。そして

「ルージュ！ あの黒い箱車を止める！」

「ん？ はい！ ファイアボール！」

「バ、バカ！」

杖を両手で持ち道路に立ると、呪文を口ずさみ、杖の先から大きな火の球が飛び出て車目がけて飛んでいった。勇者は焦った、いきなり爆破かよ……とルージュの計算外の選択に動揺したがもう遅かった。

炎の球が飛んでくるのを目にして、運転手は急ブレーキを踏んで停止していたが、直撃するかと思われたファイアボールは横にそれて砂浜の方へ飛んでいった。少し遅れて離れた所で爆裂音が勇者達に届く。魔法使いルージュはまだまだ未熟であるために、真直ぐに魔法を飛ばす事が苦手だった。だが、それが幸いして、無傷で車を止めることに成功した。

勇者はふーっと深く息を吐くと、額の汗を手で拭ってベンツにゆっくり近付く。

「なんだ今の？」

ベンツから慌てて出てきた会社員風の男は、砂浜の方を見ていた。砂浜から白い煙が空に一筋昇っていた。

「どうしたんですか？」

勇者は気さくに男に話しかけた。その間にもルージュ達を背中に回した手をヒラヒラさせて呼んでいる。それに気づくと、ルージュとドンゴロは近くに寄ってきた。

「いや、急に大きな火の球がね……」

「はあ、花火かなんかですかね……」

勇者はルージュの肩に手を回し、顔近くに引き寄せせる。思わず顔を赤くして照れるルージュに勇者は男に聞こえない程度の声で囁いた。

『魅了使え』

『分かった……』

「でも、あれは花火っていうには大きかった気するんだよね……」

男が勇者と話しているうちに、ルージュは男の後ろに回り杖で男の頭を小突いた。

すると、男が放心状態で話すのを止めた。その瞬間、勇者はドンゴロに素早く顔を向けた。

「金目のもの奪っちまいな！」

「ん？ 分かった！」

勇者が何をしたいのか最初は分からなくて、ぼーっと見ていたドンゴロだったが、元々悪どい彼はその言葉にすぐに反応すると、男の着ているスーツのポケットを探り、分厚い財布を抜き取る事に成功した。だが、勇者はこの時点でこのまま去るわけには行かなかった。顔を見られていたからだ。

勇者は杖を翳して男に魅了を掛け続けるルージュに、もう一つ命令した。

「勿忘草の粉をかけるんだ」

勿忘草　ゼームス大陸に生えている植物で、これを粉状にして相手にかけると、その粉をかけられたものは、その前に起こった10分前の記憶が全て抜け落ちてしまう。

ルージユは勇者に言われて、右手で杖を持ち魅了を維持しながら、左手で懷から粉の入った袋を取り出すと、指で少し口を開いて器用に小さく摘んで男に振り掛ける。それを見届けた勇者が大声で二人に

「ダアアツシュ！」

と、叫ぶと一目散にその現場を走り去る。とてつもない速さだった。

「待ってゝ勇者様〜！」

「うつ……」

ルージユも少し遅れて、後を追う。僧侶は空腹が祟ってか、もつれる足でふらふらと走って行った。

## 第十五話、魔王の新居。

「じゃあ、明日私、コンビニのバイト朝早いのでそろそろ寝る準備するね」

「そうか、ワシも自宅に帰るかな、そろそろ出来てるはずだし」

「はい、お休みなさい！」

姫は魔王と一通り挨拶を交わして、水道場へ歯を磨きに行った。姫と先ほどまで色々なルールを決めていた。その中の一つに夜寝るときは、別々で寝る事、つまり姫は自室で、魔王は箱の中の世界へ帰って寝ることがあった。魔王は、この条件は呑むしかないし、断れば追い出される。第一そのために、箱の世界を作ったようなものなので、すんなり受け入れた。

とはいえ、魔王も男であり、それなりに姫の薄いネグリジェ姿と一枚だけ敷かれた布団を見ると、後ろ髪惹かれるような思いがしていた。

「えっこらっせつと……」

箱のコウモリマークに足先から入ろうとする魔王。たまにはこういうダイナミックな入り方をしてみようと思う魔王の気まぐれだった。

足を引きずりこむ強力な引力で、ずるずると体が箱の小さな穴に向って渦に吸い込まれるように入っていく。姫が歯ブラシを咥えながら、寢床のある部屋へ戻った時、ムンクの叫びのような顔をした魔王の顔がちらっと目に映っていた。直ぐにその顔は穴の中にすっぽり入ったが、姫は寝る間に嫌なものを見てしまって、その夜寝



苦しい思いをすることになる。

#

「さてと、ワシの家できたかな」

「あー、えーっと、マランガか……名前忘れかけていた……」

魔王は芝生の上で何やら頬を両手で叩いて、気合を入れていた。また今から前と同じような口調でマランガと話さなければいけないのだ。その場で足踏みしながら、体を温めると気合の声とともに空へ飛び立った。その速度は凄まじい、轟音とともに空を駆け抜け、あっという間にログハウスが建つ予定の土地の上空にやってきた。この世界も今は夜、外の世界と太陽と月の周期はほぼ、同じだった。外灯も何も無い場所で、月明かりくらいしか照らすものはなく、その月にも今は雲がかかっていて、魔王はログハウスのある辺りも真っ暗だろうと思っていた。しかし、眼下には薄っすら黄色い光が灯っているのが分かる。

「やつぱりさすが、生産系タイプの魔物だな、仕事が速い！」

魔王は顔をニコニコさせながら、ログハウスに向かって飛んで行き、その手前に足から舞い降りた。

目の前に魔王が頭の中で描いていたイメージと、遜色ない立派なログハウスが建っている。

思わず、指を擦り合わせパチンと鳴らし、感嘆の声を漏らす。大きな材木を加工し、累々と積み重ねて造られたログハウス。入り口

の木の扉の前には、照明灯が二つ備え付けられている。ガラスの器の中に白い光を放つ丸みを帯びた発光物質が入っていた。そして口グハウスには諸所に窓があつて、中から明るい光が漏れていた。

魔王はそのあまりの出来具合にただただ感心していた。だが、この家を作ったのがあのマランガだという事を忘れてはいなかった。魔王は小さな階段を上り扉の前に立つて、少し気を引き締めて、一度ゴホンッと咳込んだ。木の扉を右手の甲を二回あてて軽くノックをする。

「夜分もうしわけありやせん！　魔王今帰りました！」

「お、魔王か、入れや」

ドスのきいた声の中から魔王に届いた。魔王は軽く息を吐くと、扉を開け広げ中へ足を踏み入れた。

魔王は中の内装を見て、目をひんむいた。天井に木と丸い発光物質が組み合わさってできたシャンデリアみたいなのがあり、部屋の真ん中にお洒落な赤褐色の丸テーブル、木製の椅子もある。その椅子にさえ、変わった模様が彫られていて、独特の高級感を醸し出していた。暖炉まであつたのには魔王もただただ舌を巻くばかりで、魔王はへーはーほーとは行を伸ばした感嘆の声が止まらなかった。しかし、部屋の周りばかりに目を捉われてはいけけない　と我に返ると、テーブルの傍らの椅子に腰掛けるマランガとコミュニケーションを取り始める。

「マランガさん、素晴らしいでやん、びっくりしたわー」

「まあ、こんなもん、朝飯前や！」

魔王は腰を屈めて低姿勢でマランガと話す。魔王の威厳もプライ

ドも金繰り捨てた対応がしばらく続く。

「材料足りましたか？」

魔王はゼームス大陸にいた頃は、生産系のタイプは生み出すものの、その後、自分から接する事はそれほど無かった。周りの知能の高い執事系の魔物に、生産タイプとのやり取りを任せていたので、生産系がどういう能力を持つてるかまでは詳しく無かった。とはいえ、性格が荒く頭が悪いという事だけは、部下なり、色々なトラブルを通して身に染みていたが。

なので、魔王がログハウスを最初見て驚いたのは、木材だけしか材料を提供していないのに、ガラスの陶器やシャンデリア、窓、発光物質がある事で、これらの材料の出所が気になっていた。

「おう、木材はおまえの教えてくれた場所で調達はできた、後はな、俺の体液を固めて、ガラスを作ったくらいだな、発光物質は俺のう　こだ。まあそれだけで十分だった」

魔王は生産タイプの奥深さを知って感動していた　が同時に、ガラスや発光物質に使われている物質の詳細を知ってしまったて、多少げんなりした。

ふー……でも……まあ多少癖はあるが、俺の創り出すものは完璧だよな！

魔王は材料はともかく、自分の魔力の便利さに改めて気づかされ、陶醉し、満面の笑顔で悦に入っていた。

そんな魔王を見据えながら、マランガが立ち上がった。大きな体を揺らしながら、重い足音を立てて魔王に歩み寄ってくる。それに気づいた魔王は、緩んだ表情を少し引き締めて、待ち構える。

「でよ、魔王、この家建てただけだよ、初めに言ったよな、只じゃないってな」

「おう、そうでした、何でも言ってくれよ、可能な限り用意するんで」

魔王はそう言いながらも、今、自分がマランガに渡せるものは何にも無かった。そして、生産タイプが欲しがるものも知らなかった。焦りが込み上げてくる。喉を鳴らしながら額から一筋汗を垂らし、マランガから出てくる次の言葉に耳を澄ましていた。

しかし、マランガは重い口を一向に開こうとしない。押し黙ったまま俯いて、言い難そうにしていた。魔王はきょとんとした目でそれを見ていたが、取りあえず、話すきっかけを与えるため、自分から声を掛けてみる。

「どうしたん？ 何でも言ってくれよ、何が欲しい？」

マランガの黒い顔がほんのり赤くなっているようにも見える。下を向いていたマランガは、魔王に聞かれて、ぼつりぼつりと咳き始めた。

「あ、あのよ、お、俺さ、ここな、殺風景やし、それにな、俺な、あのよ、だからな、なんていうんかな、こんな俺だけどさ、仲間欲しいんよ、しかも女とか」

最後の辺りを言い終えた後、足4本を顔にもってきて恥ずかしがるマランガ。

魔王はふーっと息を吐いて微笑んだ。

ちっ……驚かせやがって、引張るからどんな事言われるかと思ったら、女かよ！

「おっ、マランガさんも、やっぱ女ほしいよな、そっかそっか、ちよっと待っててくれよ」

「お……」

マランガは細い目を大きく見開いた。魔王は扉を開け、戸外に躍り出た。

後からマランガがのそのそと、やってきて魔王の後ろに立った。

「なにするん？」

「まあ見といてや」

魔王はマランガに笑顔で振り向いて言うと、マランガは軽く頷いた。

懐から出した黒いクリスタルが二枚、魔王の手の平に乗っている。片方をまた懐に戻すと、手に持っているクリスタルの先を、屈んで地面に突き刺し垂直に立てた。

半身を起こすと、両手を横に大きく広げ、呪文の言葉を紡ぎ始める。

「魔王の名において命じる、暗黒の申し子リーシャよ、その力クリスタルより解き放ち、私の従順な僕として、この地に降臨せよ」

魔王が力をクリスタルに注ぐと、辺りが闇に包まれる。

そして、しばらく後、闇が払われ、ログハウスから漏れる光が人影を照らした。

「魔王様、リーシャ参りました。これから魔王様の手となり足となり尽くしていきます。なんなりとご命令お申しつけください」

目の前には、左膝をつけ頭を低くして、魔王を見据える年若い魔族の女性が向き合っていた。魔族特有の青白い顔に冷やかな青い瞳、銀色の髪がポニーテール風に後ろで束ねられている。魔族には珍しい白っぽいブラウスに膝まであるスカートを身に着けていた。耳元に青碧色の丸い輪のイヤリングがきらりと光る。

「リーシャよ、よく来たな、さてと、お前には色々働いてもらっぞ」

「もちろんです、私は魔王様に仕えるためにやってきたのですから」

リーシャは魔王にそう言って、上品に微笑んだ。整った顔立ちは美しく、魔王はその瞳に見つめられると、一瞬はっとしたが、魔王は美形は好みでは無かった。しかし、その後ろでリーシャを見つめるマランガの様子が尋常では無かった。

頬を緩めて口元から涎が垂れている。4つの足をだらつと垂らして、完全にリーシャの美に酔いしれている様子だ。

魔王は後ろを振り向いて、マランガの様子を確認すると、にやりと笑った。

良かった、気に入ったようだ。まあ、リーシャがこのマランガ相手にするとは思えないが、別に女出したんだし、これでいいよな。

## 第十六話、魔王の思い。

「うゝ、腰いてえ……」

魔王の目の下には隈ができていた。窓の外に寝ぼけ眼を向けると、空が白みはじめている。

今、魔王が横になっているベッドは、マランガが作ったものだ。

木で組み立てて、ベッドの形を成してはいる。しかし、敷布団も掛け布団もその上には無かった。さすがのマランガも、無からベッドの寝具や布団などは作れなかった。

だから、魔王は平坦な硬いベッドの板の上に、体を直接置いていた。筋骨隆々のごつごつした大きな体には、クッションも何も無い平坦なベッドは堪えるようだ。

「あゝ、もう起きるか」

部屋を見渡すと、誰も居なかった。マランガやリーシャはどこに？ そんな疑問が朝から沸々と浮ぶ。仕方ないので、魔王は外へ出て見た。ドアをギューっという音とともに開け広げ、太陽の日差しを体一杯に浴びる。両手を上に思いっきり伸ばし、大きな欠伸を一つした。

魔王は視界の中に昨日まで無かった幹の太い大木があるのに気づいた。根元辺りには土を掘った形跡が残っている。どうやら、突然生えたわけでないようだ。誰かがここに植えたんだろう。そしてそんなことが出来るのは マランガだと魔王は暗に気づいた。

魔王は恐る恐る、木に近付く。何か長方形の切れ目のようなものが、あるのが分かる。更に見ると、木を削って作った丸いノブまでついていた。

魔王はその扉を開けることをしなかった。踵を返すと、自分の家

にまた生欠伸をしながら、よたよたと戻っていった。

「あゝ腹減ったな……」

魔王のもう一つの悩みであり、課題。それは毎日の食料の調達だ。実際に朝起きて、ログハウスの中に自分の食べる物が無ければ、水さえ無いのだ。

魔族とは言え、朝昼晩必ずお腹は空くし、水分だって何日も取らなければ死んでしまう。

ただ、水に関しては、川があるので、その清水を飲めば良かった。

「冷てえ……」

川まで空を飛んでやってくると、さっそく、手で水を掬い取り、顔に浴びせる。

その冷たさに魔王は身震いした。そしてしゃがみ込んで、両手で掬うとごくごく水を飲み干していく。

水を飲み終えて、満足顔を浮かべるが、やはりそれは一時の事で、あつて、

「なんとかしなきゃな……腹へった……」

魔王は腹を押さえながら立ち上がる。これからの食料の調達方法をどうにしないとなつと思いつながらも、目には力が無かった。

これからではなく、今既に死にそうなくらい腹が減っていた。

詰まる所、姫に頼るしか無かった……そして

「リターン！」



と、唱えて、姫の部屋へ移動した。

魔王の足元には無造作に脱ぎ捨てられた、姫のネグリジエが転がっていた。布団は折りたたまれて、隅に置かれている。

「ご飯つくるのうまいね」

「エヘヘ、それほどでもないですよ」

台所の方で何やら会話が聞こえてくる。一人は姫、もう一人は……

「あ、魔王様、おはようございます」

「リーシャ来てたのか、おはよ！」

リーシャだった。台所から顔を少し出して、こちらに笑顔で挨拶をした。少し驚きながらも笑顔で返す魔王。まさか既に姫の部屋に來ているとは夢にも思っていなかった。

「魔王ちゃん、おはよ」

続いて、姫がお盆に皿を3つ載せて、こちらへやってくる。空腹をくすぐるような甘美な匂いが鼻を突く。

「おお、おはよ！」

姫は重たそうに、よろつぎながらやって来る。

それを見た魔王は素早く体を動かし、隅に置かれている折り畳み式テーブルの足を開いて、周りのゴミを足で押しのけて作った場所に、それを置いた。

「魔王ちゃん、気がきくわね」

「さすが、魔王様！」

#

「うめえ〜！」

「それ、リーシャさんが作ったのよ」

「魔王様の口に合うか分かりませんが……」

魔王はとても満足そうな顔でリーシャの作った玉子焼きを頬張る。リーシャは少し照れ臭そうではあるが、魔王があまりに美味しそうに食べるので、自然と笑みが毀れていた。

姫も何故か嬉しそうだ。リーシャとともに楽しそうに会話を弾ませている。

同い年くらいの、しかも魔王の部下という事で、多少気を抜いて話せる同性の知り合いができて、機嫌が良いのかもしれない。ただ、それは魔王の部下というわけだけではない。リーシャが醸し出す独特の落ち着いた雰囲気、姫に安らぎをもたらしていた。和やかな雰囲気が部屋を包んでいる。

「テレビつけるね」

「テレビか」

姫は寝室にあるテレビにリモコンを向けた。

朝のニュース番組が映る。魔王はやはりこれを新鮮に感じていた。吸引でイメージとしてそれは魔王の頭の中にはあるが、実際見るとまた違った驚きがあった。

「箱の中でしゃべっているけど、こいつがこの中でいるわけじゃないんだな」

「そうよ、テレビ局から電波を受信してこのテレビに映すのよ」

「なるほど、なるほど」

リーシャはテレビを見て、目を丸くしていた。まだ吸引を行っていないリーシャにとって、目に映る世界は新鮮なものばかりだ。魔王は姫の説明を聞いて、どんどん知識を蓄えようとしていた。ぼーっとしているように見えて、好奇心旺盛な上に、元々知能は高いので、吸収力と適応力は並では無かった。

『次のニュースです、x3丁目にある佐谷田公園で人が殺害されているのを発見しました。警察の現場検証では、x市に住む高校生16歳と判明。殺人事件として現在捜査中。現場は住宅街から少し離れた人気のない公園で、何か事件に巻き込まれたのではないかと』

「怖いわね」

姫は鏡台の前に座り化粧をしながら言った。

魔王は飯を食って腹いっぱいになっていたので、ゲップをしながら、後ろ手を置いてテレビをぼーっとみていた。その公園の様子にどこことなく見覚えがあるような気はしていたが、直ぐに場面が移り変わり、それを思考から外した。

#

「さてと、仕事行つて来ます」

姫は私服に着替えると、手提げカバンを持ち、魔王たちに言った。

「仕事か……頑張つてな姫……」

「うん、6時には帰ります」

「気をつけてな」

ボタン！ ガチャガチャ。

姫は笑顔で二人に手を振り、扉を閉めて外側から鍵を閉めた。

魔王には一応スペアキーが渡されていた。魔王はそれをいつでも取り出せるよう、耳の穴の中に入れていた。

姫が去った6畳一間の部屋に重々しい沈黙が走る。

「リーシャよ、取りあえずワシから吸引しておけ」

「はい」

吸引省略。

「終わりました」

リーシャは大体のこの世界の成り立ちや、ゼームス大陸の事、経緯、全て理解したようだ。

もともと執事系タイプの魔物であるため、知能が高い。

「大体分かったところでな、俺の話聞いてくれるか？」

「はい、なんなりと」

その場で正座をして頭を低くし、魔王に真剣な目を向けて言った。魔王はふーっと息を吐き出すと、少し元気の無い口調で語り始めた。

「俺はさ、この世界へやってきて、姫の家に厄介になることになった。だけどさ、姫が働きに出てる間心配でならないし、それに寂しいとすら思う。だけど……姫は頑張っているんだし、応援してやらなきゃな」

「魔王様……」

リーシャは生まれて間もない。魔力で先天的に持っている魔王への忠誠心は本物ではあるが、それは作られたものだ。魔王の人となりをよく知っているわけではない。

だが、今、魔王から聞かされた本心を耳にして、その優しさに心打たれていた。

そんなリーシャに更に魔王は思いを打ち明けていく。

「自分がこの世界じゃ情けなく感じるんだ。姫に何もしてやれない自分に腹が立つ事もある。ただ飯食らって、いつまでもこうして姫の家に厄介になる事は、魔王として、男として、我慢ならないものがある」

リーシャは目を瞑りその話に耳を敬てていた。内にある感情を率直に語る魔王に、頷き、真剣に考え、思いを重ねていく。執事系タイプの魔物ならではの心理構造で、その魔王の言葉から、現在悩んでいる事を理解し、その解決方法を導き出し、魔王に進言する。これはこのタイプの特徴でもある。

「そうですか、ですよ。ソフィア姫はこの世界で誰の力も借りずに一年やってきたこと、それ以外の魔王様の記憶から察するに、相等の苦勞をされてきた事は理解しております。私たちも自力で食料を調達したり、この世界のお金を得ることをしないと、姫に迷惑を掛けることになりますね」

「その通り！ さすがはリーシャだ、よく分かっているな、そこでだ、姫が帰るまでに色々考えようじゃないか、マランガ含めて三人で、その事を話し合おう」

「分かりました！ 戻りましょう！」

魔王たちは見つめあい頷くと、すくつと立ち上がって箱の世界へと戻って行った。

## 第十七話、イクゾー編、静けさ。

西の空が橙色の帳を覗かせた頃、イクゾーはあちこちで空き缶を拾い終え、公園に落ちている空き缶拾いにも着手していた。

発見した缶を拾ってはビニール袋に詰めていく。イクゾーは程よく汗を掻きながら、孤独だが充実した作業に没頭していた。

「イクゾーさん」

「ん？ 隆君か、学校終わったのかい？」

イクゾーの傍らにいる高校生は佐川隆。彼はここ半年ほど暇があれば、この公園にやってくる。イクゾーとは年齢も、境遇も全く違うが、いつしかちょっとした会話を交わす仲になっていた。一時期公園のベンチで、俯いて座ってた頃、缶を熱心に拾い続けるイクゾーを見てある種の疑問が浮び、思い切って話しかけてみたのがきっかけだった。

### 4ヶ月程前

『あのー、おっちゃんは乞食だよね』

イクゾーは突然の声に缶拾いを中断すると、顔を声のするほうへ向けた。

制服姿の高校生が目の前に立っていた。イクゾーは戸惑いをみせる。

しかし、それも一時の事で、直ぐに気持ちを整えて穏やかに答えた。

『そうだよ』

佐川はイクゾーが恥ずかしげも無くそう答え、更に微笑みを浮かべて自分を見つめてくるのに愕然とした。

普通なら知らない高校生に、そんな事を突然問われれば、俯いたり、不審な目を向けてきたり、逆に怒りを顕にして罵倒を浴びせてくるもんだと思っていたからだ。

だが、イクゾーはとても穏やかに頬を緩めて笑っている。イメージとの落差に、佐川は氣勢を殺がれ、自分もまた頬を緩めた。元々馬鹿にし、からかって鬱憤を晴らすというのが本来の目的だったはずなのに

『おっちゃん、生きてて楽しいかい？』

『そりゃ、楽しいさ』

『例えば、どんな事が？』

ベンチで二人は腰掛けながら、奇妙な会話を続けていた。

佐川は忌憚ない言葉を、イクゾーに浴びせていた。しかし、その言葉には、もうからかってやろうという気持ちは無くなっていた。純粋な興味から浮ぶ言葉をイクゾーに投げかけていた。

『そうだな……今日君とこうして話せているだろ？ とても楽しいよ。生きていたからこうして出会えたんだ』

『ふん……』

佐川は少し顔を下に向けた。元々、佐川はイクゾーをからかおう



と話しかけただけだった。

だが、イクゾーはそんな自分と話すことを、楽しいとさえ言ってくれている。佐川の心の中に何か後ろめたい気持ちさえ漂い始めていた。イクゾーは佐川が沈黙しはじめると、夕焼け空をほとんど目を閉じたような細い目で見上げた。

そして一言

『楽しい時間を有難う、またいつでも声を掛けてください。僕は夕暮れにはこの公園にいます』

と、佐川に静かに言っていると、優しい微笑みを浮かべお辞儀をし、また缶拾いの作業に戻っていった。

それからというものの、佐川は度々、時間が空くところへくるようになったのだ。

イクゾーと静かな一時を共有する、ただそれだけのために。

「イクゾーさん、俺さ、今日英語で90点とったよ、学校の奴等、すんごい驚いちゃってさ、すげえとか言われちゃって、なんだか俺勘違いしそうだよ、たまたま英語得意なだけなのにさ」

「いや、得意な事があるってことは良いことだ。ワシもすげーって言わせてもらうよ、ハハハ」

「アハハ、何かそれ変、全然似合わないよ!」

イクゾーはそう言われて、頭に手を当て照れ臭い笑いを浮かべる。しばらく二人は談笑を弾ませていた。笑い笑われ、お互いの内を

曝け出して、交情を深めていく。

そんな中、佐川は腕時計にふと目をやると、少し驚きの声をあげて立ち上がった。

「ごめん、時間だ、帰ります〜また〜」

イクゾーに手をふって、公園の出口へ向って歩いて行く。

冷たい空気の中、夕日が佐川の後ろに長く黒い影を落としていた。イクゾーは微笑みながら、彼に手を振るも、どことなく寂しさすら漂うその後姿に、自分を重ねていた。

彼もまた、孤独なのかもしれないな……

そんな佐川との交流が続く中、イクゾーは魔王と出会った。

不思議だが、有意義な一晚を魔王と過ごした。明くる朝、魔王はイクゾーに奇妙な金属の丸い板を渡し、言葉少なに飛び去っていた。

ぶつきらばうだが、自分を一人の人間として、対等に接してくれた魔王。イクゾーにとって魔王の存在は心に深く刻み込まれていた。この世でイクゾーの知るかけがえの無い存在の一人である事は間違いない。

その日、缶をあちこちで早めに集め終えて時間が余っていた。イクゾーは公園のベンチに腰掛け、昼間空から降り注ぐ温かい光を体一杯に受けて、夢現を心地よく彷徨っていた。

いい気持ちだ〜……この青い空の下、今頃魔王さんは何をしているんだろうか？

陽光を受けたぼんやりした頭で、そんな事を考えていると、ふと

魔王に貰った金属の事を思い出し、現世に意識を取り戻した。  
そして、おもむろに内ポケットにしまいこんだそれを取り出し、  
手の平に載せた。

これ、なんなんだろうな？ 変わった模様が掘り込まれてい  
るな。

手の上で転がしながら、イクゾーはぼーっとそれを見つめていた。

「イクゾーさん！」

突然、後ろから耳に届いた声にはっとして、金属を内ポケットに  
素早くしまいこんだ。

声のした方へ振り返ると、佐川が立っていた。

「ああ、びっくりした」

「ごめん」

「ははは、いいよ、ところで今日はどうしたんだい？ 昼間だけど、  
学校は？」

「今日は学校は休み、だけど、この後、野球部で他校と試合がある  
けどね」

それを聞いてイクゾーは納得した。佐川は清潔な青いユニフォー  
ムに白いズボンを身に纏い、白いツバのついたキャップを頭に被っ  
ていた。その両手には大きなバッグと小さな細長い袋が握られてい  
る。

佐川は腕時計を見て、焦りを表情に現す。

「あ、もう時間だ、じゃ行つて来ます〜！」

「はい、いつてらっしゃい」

イクゾーは微笑みを湛えた細い目を向けて、佐川に軽く右手を上げて送り出した。

#

夕闇が迫る頃、イクゾーは自分の青いテントに戻ってきた。

ふーっと息をつくと、近くで買った温かい緑茶の入った缶をゆっくり飲み干していく。

「今日は冷えるな〜……」

夜の帳は完全に辺りを闇で侵食し、元々人気のない公園は寂しさを一層深めていく。

イクゾーはあちこちで集めた缶をある業者の元へ持っていきお金にし、それを元手に近くのコンビニで食べ物調達していた。

ちよつとした惣菜にオニギリ一つといった粗末なものであるが、イクゾーはこれで満足だった。一日汗して得たお金で買ったものだ。その食べ物に感謝の念を抱きながら、口に運んでいく。そんな落ち着いた雰囲気、テントの外から聞こえる騒がしい声が切り裂いた。

「おい！　ちよつとこい！」

公園の中心部から離れたテントの中にいるイクゾーにも、しっか

りその怒声は届いていた。

自分に向けられたものではない。テントから少し顔を出して覗き見る。

すると、数人の影が視界に入った。イクゾーはもっと近くで確かめようと、テントを出て行く決意をした。

## 第十八話、イクゾー編、決死の逃亡！

イクゾーは鬱然と茂る木々や藪の中を伝って、声のする方へ歩いていく。

曇天の空模様で月明かりは期待できず、公園内部にまばらに設置されている外灯だけが、所々照らしていた。

数人の影を見咎めた場所までやってくると、イクゾーは木の幹の影に寄り添い、その様子を覗きみていた。

「お前な、もつと真面目にやれよ！」

「いや、俺ちゃんとやったよ、ただ打てなかった……」

「練習真面目に來ないからだろ！」

ドカ！

「痛いって……」

外灯が白い光を落とす一帯に、青いユニフォームにキャップ、バット、野球でもした帰りといった身なりの少年達が数人集まっていた。イクゾーはその姿に見覚えがあった。そして、数人に囲まれ地に伏している少年は、昼間見送った佐川隆だという事にも気づいた。

彼等は隆君の属する野球部の子達だな……しかし……一体……

暫くイクゾーは様子見をすることにした。

「隆、やる気ないなら、辞めちまえよ！」

一人の少年が、地面に座り込む佐川の尻をバットで叩いた。思わず呻きを上げ、顔をしかめる。

それを見ていたイクゾーも一瞬目を窄める。

「ごめんよ、次からちゃんと練習も出るから」

「お前のごめんは聞き飽きたわ！」

今度は周りを取り囲んで数人で、佐川の腰、足、尻を蹴りこんだり、バットの先で突いたりして痛めつけ始めた。悲痛なうめき声を佐川は上げ続ける。

イクゾーはもう我慢が出来なかった。内に秘める憤怒を抑えきれなくなり、低い藪を飛び越え、彼等の前に躍り出た。

「君達！ 何してるんだ？ 数人で寄ってたかって！」

「なんだ、このおっさん？」

「イ、イクゾーさん……」

佐川はイクゾーを見上げて弱弱しい声で言った。

イクゾーは地面に蹲る佐川に歩み寄ると、

「大丈夫か？」

「う、うん、」

佐川の肩を揺さぶって、安否を気遣う。

イクゾーは佐川の、あちこち擦りきれ赤く張れた肢体を見て顔を

歪めた。

そして、肩から手を離して握り拳を作ると、立ち上がって少年達に向き直り、少し語気を荒げて口を開く。

「理由は知らないが、君達もう気が済んだろう！　これ以上やる必要はないはずだ！」

「うるせーな、関係ないだろ！　それによく見たらなんかボロイ服きてるし、臭いし、乞食のおっさんか？」

「本当だ、乞食が偉そうに俺達にごちゃごちゃうるせーんだよ！　おっさんもやったるか？」

イクゾーと佐川は一人の少年の言葉を皮切りに、周りを囲まれる。イクゾーは弱った佐川の前に立ち塞がり、少年達を睨みつけた。辺りの木々が冷たい風に揺すられざわめく。一触即発の緊迫した雰囲気は辺りを包んでいた。

だが、その重々しい空気が突然、呻き声によって切り裂かれる

イクゾーを囲っていた少年の一人が、急に口から血を吐いてその場に崩れ落ちたのだ。

「え？　おい、どうした……」

狐につままれたような顔で、倒れた少年を一斉に見やる。うつ伏せに倒れた少年の背中が赤く染まっていた。

「血？　え、なんで……おい！　大丈夫か！？」

少年達はそれを目にして、一斉に騒ぎ始めた。突然起こった出来



事に思考がついて行かない。だが、だんだん恐怖の影が顔に刻み込まれる。

「何が起こったんだ!? どうなってんだ!」

「誰がこんな事を!？」

少年達はパニックになり、慌しくわめき始めた。

落ちつかない様子で辺りを見渡す。イクゾーは公園のベンチの後ろに何者かの影を先に目で捉えていた。しばらくして、少年達も気づいたようで、その影を見やって息を呑んだ。

その影はその姿を大きくすると、こちらにゆっくり歩み寄って来る。

獲物を狙う肉食獣のような静かな足音を立てて、外灯下の光の一带にその姿を現した。

少年達はそれを目にした瞬間、否応なしに声を失い体躯を凍てつかせた。

イクゾーも細い目を震わせながら、その姿に半ば強制的に見入ってしまったていた。

「お前たち人間だよな……しかし……どうなってるんだ……」

黒い剛毛に覆われたその者の姿は、この世のどんな生物とも違っていた。

一見犬のように見えるが、艶かしい朱色の目が四つ光っていた。それはよくよく見ると、二つに分かれている。双頭とでもいうべきか。

どこか腑に落ちない様子で、双頭を彼方此方に振り向けていた。イクゾーはその姿を目にした時、一つの言葉が頭を支配していた。『死』……この場に居る少年達も同じ物を思い浮かべているに違い

ない。

そのうち、少年たちの一人が、小さな悲鳴とも呻きとも言えない声をあげ、足をもつらせながら、双頭の犬と逆方向に逃げていく。

「お、おい！ 待てよ！ 孝雄おいてくのかよ？」

背の高い少年が地面で、冷たくなっている孝雄を気遣う素振りを見せた。

だが、逃げていった少年と他の少年達の耳には、それは届いていない。

一人が逃げた事に端を発して、他の少年も一斉に同じ方向へ、悲鳴や嗚咽をあげて走り去っていく。

「だらしね〜な〜……人間ってのはよ……かわいそうになこいつも」

双頭の犬は倒れている少年を見て、流暢に言葉を並べた。後ろ足を上げ胴の辺りを二、三度搔いている。足から伸びる数本の鋭い爪が、光に照らされ黒光りしていた。

そのうち、立ち尽くしていた背の高い少年と、イクゾーたちを見て

「お前たち逃げないなら、殺しちまうけど？」

と、ぶつきらばうにそう言い放った。それを聞いた背の高い少年は、地面に倒れる孝雄を何度か見た。が、当等恐怖に耐え切れなくなっただろう、踵を返すと、先に逃げた少年達と同じ方向へ無言だが、物凄い勢いで走り去っていった。

その場に取り残された佐川とイクゾーは動けなかった。

双頭の犬の燃えるような朱色の瞳に見据えられ、金縛りのように体が麻痺していたからだ。

このままでは二人ともやられる……

イクゾーは佐川に目を向けた。鼻水を滴らせ、恐怖で顔を引きつらせていた。

「じゃ、お前たちはこいつと同じように死んでもらう事にするか」

イクゾーは覚悟を決めたのか、麻痺した体にムチをうち何とか立ち上がる。

そして、佐川の右手を掴みあげると、無理矢理立たせた。

「隆君！ 逃げるぞ！」

佐川は声が出てこない。イクゾーはそんな佐川を思いつきり、引つ張り走ることを強制した。最初、佐川はイクゾーに引きずられるように引張られていた。しかし、佐川もだんだん、今の鬼気迫る状況を把握し始めたのか、我に返るとイクゾーの手を自ら掴み、前へ前へと地を強く蹴り始める。

二人の姿が離れていくのを双頭の犬は、最初はぼーっと眺めていたが、やがて、低く唸りながら後ろ足で地を二三度叩いた後、

「狩りを始めるか……」

と呟くと、両の前足を一度高くもたげた後、とてつもない瞬発力で地面を蹴った。

双頭の犬は地響きを立てながら、風を巻いて公園の内部を走りぬける。

藪を飛び越え、木々の合間を縫って最短距離を移動していく。

「頑張れ、もう直ぐ出口だ」

「うん……」

二人は肩で息をしながら、公園の片方の出口へ手を繋いで走っていた。

しかし その前方には既に先回りをした、双頭の犬が待ち構えていた。

「うわ……イクゾーさん……」

「く……」

双頭の犬の姿が視界に入ると、驚いて二人は立ち止まった。

イクゾーは佐川の肩を後ろに押し込むと、前に立ち双頭の犬を強く睨みつけた。

ここまでか……だが、佐川君だけは絶対逃がすぞ！ ワシの命に代えてでも！

## 第十九話、イクゾー編、終焉。

「隆君、ちょっと後ろに下がっててくれ」

「そんな……」

「いいから！」

強い口調で隆に言った。今まで見せたことがない、険しい顔で魔物を強く睨みつけている。横顔からも十分その気迫は伝わってきた。隆はイクゾーの言うとおり、素直に後ろに下がることにした。

イクゾーは隆が後退したのを一瞥して確認すると、近くにあったゴミ箱を両手で持ち上げて双頭犬に向けた。

「ハハハ、そんなもんで俺の爪を牙をやり過ごせるとでも思っているのか？」

イクゾーは鼻息を漏らし、ゴミ箱を上下に揺らして双頭の犬の気を、絶えず自分に引き付けようとしていた。

「来い！ 馬鹿犬！」

イクゾーは隆とできるだけ双頭犬を離す為に、ゴミ箱や体を大きく震わせ、双頭犬の注意を引き付けながら、突然、公園の内部へ突っ走った。案の定、双頭犬はゴミ箱の動きに目を捉われ、イクゾーの後を凄まじい勢いで追って行った。

獣特有の静かな地を叩く足音が遠のいていく。その場に取り残された隆は、やっと、この時イクゾーが身代わりとなって自分を逃がしてくれた事に気づいた。

「じーさん、年の割りには足が速いじゃねーか」

双頭犬は既にイクゾーに追いつき、並走しながら巧みに言葉を投げかけていた。

イクゾーは黙ったまま疾走していた。時折、何かの出っ張りに足をとられそうになるが、公園は自分の庭のようなもので、ある程度予測がついて寸前で小高くジャンプする。

「しかし、逃げてばかりじゃ話にならないぞ？　そろそろ攻撃させてもらうぞ」

双頭犬は不意に、横合いから鋭い爪をイクゾーに向けて薙ぎ払った。

イクゾーはそれをゴミ箱の底で受け止めるも、とてつもない力が加わりゴミ箱ごと体を宙に浮かされ、背中から砂場の中へ放り投げられた。

砂場がクッションの役目を果たし、それほど強い衝撃を背中に受けなかったが、それでも年老いた体にはきついものがあつた。

首がかくんと上下に揺れたために、一瞬意識が遠のいた。

イクゾーは脳が揺らされ、まだ足元がおぼつかない様子だが何とか立ち上がった。

揺れる視界の中、双頭犬が砂場へ大きな足を踏み込んでくるのが分かる。

息を荒立たせながら、ばやけた意識の中でイクゾーは笑っていた。

ワシはもう駄目だが……隆君を逃がす事には成功したぞ……

もう何も思い残す事は無い……

既に両手にゴミ箱は握られておらず、双頭犬の攻撃を防ぐ手だては無かった。

イクゾーはもう観念していた、ここで例え、この双頭犬に食い殺されようと本望だとさえ思っていた。しかし、諦めかけたイクゾーの脳裏に聞き覚えのある声が響き渡る。

「イクゾーさん！」

「隆君！ 何で来たんだ！？」

イクゾーは目を見開いて大声で叫んだ。

「だって！ イクゾーさんを見捨てる事なんてできないよ！」

「く……」

イクゾーは双頭犬が隆の方に振り向いた事で、的が変わった事を悟る。

大きな黒い足で砂浜を蹴り始めていた。

もう駄目だ……

イクゾーは絶望の淵で諦めかけた時、不意に魔王の言葉が頭をよぎった……

『どうしようもない困難にぶつかった時、そこに書かれた文字の表面を額に当ててみる』

イクゾーはその言葉を思い出すと、藁をも縋る思いで裏ポケットからあの丸い金属の板を取り出し、一か八か額にその表面を強く押し当てた

「少年、お前から先に殺してやるよ」

隆の直ぐ手前に疾風の如く駆け寄った双頭犬が、大口を開け鋭い牙をむき出しにして今にも襲い掛かろうとしていた。

隆はどうすることも出来ず、両手で頭を庇って蹲っていた。

「じゃ死ね……」

双頭犬の片方の頭が牙を向いて、頭上から隆に噛み付こうとした。だが、隆の頭にその牙が届こうとした瞬間　ピタッとその狂犬の頭が宙で動きを止める。

「糞犬、その辺にしとけ……」

双頭犬の片方の頭は突如現れた、赤い大きな手にがっしり掴まれていた。

「なんだてめえは？」

双頭犬のもう片方の頭が、大きな手の持ち主の姿を視界に捉えていた。

赤い肌で覆われた大きな鬼、もしくは魔物といった姿をした者が傍らに、仁王立ちしていた。

顔の部分には、丁度、三角形を描くように金色の眼が三つ発光しているかのように光っていた。長い白髪が頭の真ん中から左右に、雪崩落ち宙に浮いた状態で上に跳ねている。



「お前に答える名はない、今ここでお前は死ぬ……」

赤鬼がそう言うのと、大きな逞しい足で双頭犬の腹部を、下から思いつき蹴り上げる。

ドスン！

サンドバッグを重い一撃が貫いたような、大きな音が辺りに突き抜けた。

双頭犬は両方の頭の口から、胃液と血が交じり合ったようなものを吐き出すと、大きな呻き声を上げた。

その瞬間、力なく四肢を地面にベタッとくっつけ目を閉じ、そのまま動かなくなってしまった。

隆は急に周りの音が聞こえなくなったので、頭を抱える手の隙間から外を恐々覗き見た。

しかし、そこには、双頭犬もイクゾーの姿も既に無かった。

まだ震える足で何とか立ち上がり、ぼーっと辺りを見渡していた。しかし、だんだん押さえ込んでいた恐怖心が込み上げてくると、公園の出口へ向って無心で走り出していた。

#

「こいつは一体何者だ……？　そして俺はどうなったんだ……？」

イクゾーは闇夜の住宅街を屋根伝いに、双頭犬を脇に抱えて軽やかに疾駆していた。

赤鬼となった大きな体は、イクゾーの意志で自由に動かせる。

しかも、元の体より数段力強く、大きな体からは想像もできないほど軽やかに動く。

イクゾーはあの時　半ばやけ気味に金属を額に擦り付けた後、突然、体が大きく膨れ上がり異形の姿に変わっていくのを、その身をもって体験した。

完全にその姿へ変貌した後の気分は、とても爽やかで落ち着いたものだった。

底から無限に湧き立つ力が、全身の鋼のような筋肉に漲るのが実感できた。

そして、気がつけば、この双頭犬の傍に瞬時に移動し、その頭を強く掴んでいた。その時のイクゾーは、普段から考えられないような自信に溢れていた。

イクゾーは屋根伝いに近くの山へ向っていた。この異形の姿を闇で隠しながら夜明けが来る前に、人目につかない場所で落ち着きたかったからだ。

いくら身体が強固なものになっても、その姿は人間とは遠くかけ離れている　とイクゾーは鏡は見えていないが、そう信じていた。なので、この姿を人目に晒すわけにはいかなかった。

一旦、どっかの山奥の洞穴にでも居を構えて、自分の身に起きた出来事や、これからどうするかを真剣に考える必要がある　イクゾーはそう考え、ただひたすら、山を目指していた。

## 第二十話、ラブホテル！？

「む……う……」

漆黒の闇が包む場所で、意識を覚醒させたものがいた。

ここは……？ むう、体が動かねえ……

体を動かそうと揺さぶるも、何かに全体を覆われ全く身動きがでない。

辺りを見渡すと、草が生い茂ってるのが分かる。

そんな時 ある気配に気づく。かなり至近した位置から、静かであるが重々しい息が聞こえてくる。首を捻ってそちらへ眼を向けようとするが、首よりしたは全く動かない上に真後ろにいるらしく、それは叶わなかった。

「目を覚ましたか……？」

首を捻った事で後方の者が気づいたらしい。

「な、何者だ……」

「イクゾー……いや、今は……」

後方でじつと双頭犬の影を見下ろしていた者の正体は、イクゾーだった。

イクゾーは岩から立ち上がると、双頭犬の前にゆっくり姿を現す。その影を眼にした瞬間、双頭犬の四つの耳が体に沿って倒れる。暗闇の中なので、はっきりとその姿を捉えたわけではない。

しかし、イクゾーから発散される只ならぬ圧迫感に、双頭犬は無意識に恐怖していた。

「まあ、名前なんぞいいじゃないか」

「じゃ……質問を変えよう……ここは何処だ……？」

「ここは 人がくる事が無いであろう、山深くにある場所だ……」

イクゾーは山麓から今いる場所を見つけるまで、相等の時間を費やした。

人の目に触れない静かな場所……そのイメージを頭に描きながら、道なき道を掻き分け、その場所を追い求めているうちに、ここへ辿りついた。山深くの秘境、ここが当面のイクゾーの隠れ家であり生活場所だ。イクゾーはここへ来るなり、気絶している双頭犬を、土を掘り返した中に放り込み、頭だけ残し地中深く埋めていた。イクゾーの鋭い爪と恐るべき怪力を以ってすれば、それは造作もない作業だった。

「そうか、お前か……俺を仕留めたのは……」

双頭犬は沈黙の間に、意識を失うまでの記憶の糸を手繰っていた。そして、浮ぶ事象を分析して断片を繋ぎ合せ、今全てを把握した。イクゾーはそれに重々しい口調で、

「そう……だが……謝らんよ。あんたは人一人殺している……」

双頭犬に言った。

イクゾーは元々温和な性格で、暴力など今まで一度も振るった事

は無かった。それ故、双頭犬に初めて振るった暴力と言えるものに、幾ばかりの自己嫌悪や後悔の念は禁じえない。だが、将来ある少年の命を無下に摘み取った、双頭犬に対して強い憤りも感じていた。

「お前魔物の癖して、たかが人間一人の命に……馬鹿じゃねーの？」

双頭犬はイクゾーの言葉を聞いて鼻先で笑うと、蔑みに満ちた言葉を放った。

すると、イクゾーは急に憤怒の極点に達したかのように、体を小刻みに震わせると、

「お前に何が分かる！ お前なんかと一緒にするな！」

声を荒げて、大きな足を振り上げた。

「ちょっと待ってくれ！ 俺が悪かった！ 命だけは……助けてくれ！」

イクゾーの余りの迫力に双頭犬は恐怖したのか、途端に態度を一変させる。掠れた声で必死に命乞いを始めた。イクゾーは荒々しい鼻息を漏らし、我を失って双頭犬を睨み続けていた。しかし、寸での所で自分を取り戻すと、足を降ろし息を整え始める。

「殺しはしない……お前には聞くことがある……」

イクゾーはそう言うのと巨体をどかと落として胡坐を掻いた。

そして、腰に携えていた布袋から、何かを取り出すと、双頭犬の顔近くに放り投げた。

「食べるがいい、話は明日聞かせてもらっ」

イクゾーはそう呟くと、双頭犬に背中を向けて体を横たえた。

#

「ふー疲れたな……」

勇者一向は海岸線をひたすら歩いたのち、少し北側へ向うと畑のあぜ道を歩いていた。

今いる場所はどこでもない田舎だと、大分歩いた後痛感していた。ここへ来るまでに、偶然見つけた田舎のこじんまりとした商店街で、寂れた服屋を見つけた。

そこで二人にこの世界にあった年相応の服を買わせた。

その際、ルージュはブーブー言いながら、『ろくな服がない』と我ままを言っていたが、勇者が『これかわいいよ！』と黄色のワンピースを手に取り、心に思ってもいない事を言うと、表情を一変させて『これ買います！』とおばちゃんに疾風と化して持つていて購入した。

ドンゴロは無言で服を選別していたが、急に目を止めると、祭りに来て行くような白に青い魚の模様が刺繍された浴衣を手にして、『これは素晴らしい……これください……』と犯罪者のような目をおばちゃんに向けて服を差し出した。

そんなこんなで取りあえずの身なりだけでも、普通に？　なると、商店街を抜け出し、今こうして当て所のない旅を続けていた。しかし、薄暮の迫る頃、勇者は焦りを顕にしていた。

「おいおい、何もないぞ……もう直ぐ夜になるっていうのに……」

「野宿は嫌あああ！」

勇者がそう呟くと、ルージュは杖を振り回し絶叫した。

その後ろでぼけーとした顔で、黙って夕日を眺めながら歩くドンゴロ。

暮れなずむ空と畑をバックに、浴衣姿が妙に映えている。

不平不満を言いながらも、勇者一向は足を棒にしてひたすら歩き続けていた。

どんどん空は群青色の度合いを深めていく。もう畑は途切れて、どこかの小さな道路の端を歩いていた。車のライトがたまに擦れ違う。周りにちらほら民家が軒を連ね始め、まばらに人の姿も見え隠れしていた。

そのうち、夜の帳が完全に降りてしまい、星が瞬き始めた頃勇者はある物を目にして、歩を止めた。

あれは……

道路の向かい側に石造りの西洋風の建物が見える。表側はライトアップされていて、諸所にカラフルな電灯が灯っていた。勇者は一瞬でそれが『ラブホテル』だと悟る。

「うわー綺麗な建物ー！」

ルージュもそれに気づくと、目を輝かして闇に映えるラブホテルに見入っていた。

無言でその建物を仰ぎ見るドンゴロ。やはり物珍しげに目を一巡

させた後、

「立派な建物だ……勇者、これ何の建物？」

と、返答に困る質問を真顔で投げかけてきた。

「えっとー宿屋だよ……」

勇者は少し低い声でぼそぼそと呟いた。  
すると

「おおー、勇者様ー今日はここに泊まる」

ルージュは事も無げに勇者に笑顔で言った。  
勇者は思わず顔を赤くして言葉に詰まる。

ルージュ……知らないとは言え……

なぜかルージュを意識してしまう勇者……何気に愛らしいルージュの顔を見つめてしまう。

だが、その勇者の火照った心を冷ますように、

「飯たらふく食うぞー！」

ドンゴロが大きな声で叫ぶと、すたすたとラブホテルの中へ姿を消して行った。

勇者は慌てて後を追った。その際、ルージュを引張る手に、心なしか力が入っていた。



## 第二十話、ラブホテル！？（後書き）

推敲不足のため、少し後から付け足しました……

## 第二十一話、葛藤。

「えーっと」

フロントのちょび髭の男は不審そうな眼で三人を眺めた後、困惑したような顔つきで言いづらそうにしていた。

そりゃあな……俺ともう一人は怪しい顔つきの60代のオヤジ（しかも浴衣姿）、極めつけは真ん中に童顔の乳離れしてなさそうな16かそこらの女の子……

勇者はラブホテルに入ったことが無かった。それでも、ちょび髭のおっさんの困惑する理由は痛いほど分かる。何回かこちらに眼を向けながら、悩みぬいた末にちょび髭のおっさんは重い口を開く。

「三人様はうちはお断りしているんですよ……」

「そうですか……」

勇者はその言葉に、全く動揺を見せず淡々と返した。

二人を宥めながら外へ出ようと、各々の背中に手を回そうとした瞬間

「てめえ、何で駄目なんだよ！ 疲れてるんだよ！ 断るってんなら納得する理由聞かせてもらおうか！」

突然、勇者の手を振り切って、ドンゴロが眉間に皺を寄せて怒鳴った。

これも付き合いの長い勇者からすれば、想定内のドンゴロの反応

だった。

駄目だと分かりながら、勇者はドンゴロを諦め顔で宥めにはいる。

「いやあ、その、あの、うちの規則でして……」

「そんな事知るか！」

ドンゴロは益々顔をたこのように紅潮させて、杖を左手に持ち替えた。

勇者はそれを見て、

まずい、このままでは杖に仕込まれた刀を振り回して、破壊の限りを尽くすに違いない……

ドンゴロは切れると見境が無かった。しかも、今は長旅の疲れと空腹で、ドンゴロの忍耐も限界が差し迫っていた。普段とは違い、物静かにシリアスな顔付きで、拳を握り締めながら歩いていた時から、勇者はそれに感じていた。

更に

「おじさん……！ お願い泊めてください……もうずっと歩き詰めで、疲れているんです、このままじゃ野宿しかないの……！ お願いお願い……！」

ルージユは丸顔の円らな瞳に大粒の涙を溜めながら、ちょび髭のおっさんをじっと下から見据えて哀訴し始めた。

その悲哀に満ちた眼を見せられて、ちょび髭のおっさんは細い眼を震わせていた。

ルージユのブリブリ涙目線は、年増のおっさんの同情を誘うからなあ……

勇者は目を瞑って目尻に皺を寄せ、小刻みに震えるちよび髭のおっさんの出方を、黙って見ていた。

もちろん、力ずくで暴れようとするドンゴロの体を押さえつけ、その口を右手で塞ぎながら……

「ふー……じゃ、じゃあ、今回は特別で……その代わり三人様なので、1.5倍の料金頂きます」

深い息を吐くと、ちよび髭のおっさんは頬を緩めて、三人に宿泊を許可する事を伝えた。

それでも、規則通りに三人以上の場合の特別料金の旨を、しっかりと事務的に付け加える。

勇者もここへきて、ずっと慣れないリーダー役を務めて疲れていただけに、それを聞いて安堵の息を漏らした。

ルージユとドンゴロはそれを聞くと、途端に表情を改めて、二人で手を繋いでその場で踊り出した。勇者は手を額に当てながら、頬を赤らめて恥ずかしそうに俯いていた。

#

「勇者様、この部屋すつごい豪華！」

この部屋は比較的広く、落ち着いた内装で暖色系の灯りが部屋を照らしていた。

それでも、ラブホテルだけあって、所々目を引くものがある。

丸い円上の透明の床の下には、透けて何重ものカラフルな電灯の輪が折り重なっている。

部屋の中心にはなぜか、浴槽がこげ茶色の斜め線が格子状に走ったガラス板に囲まれ、鎮座していた。部屋の隅にスロットマシン、カラオケのような機械まで設置されている。

「まあな……」

大きなダブルベッドにどかと突っ伏すと、掛け布団に顔をつけたままルージユに返事をした。ラブホテルは初めてだし、内装も目を引くものがいくつもあったが、長旅の疲れがそれへの関心を凌駕し、勇者の体をベッドへ一直線に向かわせた。

疲れた、休息をとらせてくれ……が勇者の今の紛れも無い本音だった。

それでも、勇者は力を振り絞って、最後の仕事を遂行しようともむろに立ち上がる。

楕円形の透明ガラスのテーブルに置かれている食事表を、椅子に腰掛けてゆっくり眺める。自分の食べる物が決まると、傍らに二人を呼び寄せ、好きな食べ物をメニューから選ばせた。メニュー表に印刷されているものを、二人は珍しそうに眺める。

ゼームス大陸には写真や精巧な印刷技術は無かったので、勇者は二人が驚嘆の声を発するのも仕方ないと思う。

あーだこーだ、騒がしくするが、何とか二人が選択し終わると、部屋内の内線でフロントに食事のルームサービスを頼んだ。

従業員がしばらくして、部屋をノックして食べ物を運んできて、事務的な言葉を交わした後、部屋を出て行く。

二人ががつつきながら食べ物を食べる横で、勇者が全部食べきれない内に箸を置いた。

次にルージユが『ごちそうさま』食った食った』と下品に腹

を摩りながら、ソファーに深く腰を沈める。ドンゴロも臭いゲップを吐いた後、お茶を啜り始めた。

勇者は二人が落ち着いたのを、見計らって静かな口調で話し始めた。

「みんな疲れただろう、今日はここでゆっくり寝てくれ」

「ふゝ、本当つかれたよお、勇者様……」

「うむ、疲れたな……」

ルージュがゲップともため息ともつかない息を漏らす。

杖は無造作にガラス張りの床に転がっていた。

眉を力なく下げて、目を瞑るルージュ。

その隣で大あくびをして、両手を後ろに逸らし伸びをするドンゴロ。

勇者は二人の様子を優しい眼差しで眺めていた。

ルージュもドンゴロも、慣れない世界での旅に、やっぱり疲れは隠せないみたいだな。

勇者はおもむろに、ソファーに背中をつけて横になると、白い天井を眺めながら物思いに耽っていた。

………そういえば……こいつ等と旅を始めて……もう二年になるのか……

勇者は少し遠い目をして、昔を思い浮かべながら口元を緩め微笑んだ。

ガーガー……

だが、しばらくして、美化された心地よい回想から、騒音のような誰かの鼾で現実に連れ戻される。ドンゴロが大口を開けて、ソファで浴衣をはだけて寝入っていた。

白い下着が覗いていたので、勇者が面倒くさそうに浴衣を引張って直す。

「勇者様、お風呂どこ？」

不意にルージュが尋ねてきた。

勇者は部屋の真ん中にある、ガラス張りの浴室を指差した。

ルージュがお湯の捻り方が分からないかともと思い、一緒にその中へ入って色々説明した。

レンガのような模様の床に、メタリックな赤の浴槽。勇者はその派手な浴槽を見て、さすが……と、ここがラブホテルである事を改めて認識した。

「じゃあ、えーっとお風呂入るけど……壁透けてるんだけど、あの、こっち見ないでね……」

勇者の心臓が急に早鐘を打ち始める。

そう言えば、このガラス張りの壁、外から透けて内部が丸見えだったんだ……ルージュ……まじで入る気が……！？ドンゴロも俺もいるっていうのに……

勇者は顔を真っ赤にすると、変な汗を掻きながら浴室を飛び出した。

真面目で女性との免疫がそれほど無い勇者は、浴室に背を向けると胸をドキドキ言わせながら、目を瞑って耐えていた。

水が流れる音や、しぶく音が背後から聞こえてくる。

今、俺の後ろでは……く……耐えろ！ 見てはならん……！

勇者が性欲と自戒の狭間で悶えながら耐えていると、不意にドンゴロが低い声で唸り目を覚ます。

そして、目を擦りながら水の跳ねる音に反応すると、浴室にその卑しい視線を向けようとした。

だが、その瞬間……

「もう一度寝てろ……！」

勇者渾身の右拳が、ドンゴロのミゾオチに突き刺さる。

ドンゴロは目をひんむくと、声にもならない声で、

「な……な……ぜえええ……え」

と断末魔の声と共に、床に突っ伏して動かなくなった。

「ふー、あ、危なかった……」

勇者が目細めて気絶したドンゴロを見据え、一息つくと額に手の甲を押し当てる。

だが、ドンゴロを倒しに行った事で、微妙に場所が移動している事に気づかなかった。

「あ、あ……あ……」



浴槽の中で裸でタオルで前を隠しながら、顔を赤らめて固まっているルージュと視線が合う。

「い、ごめん……………」

「きゃ……………」

ルージュは甲高い悲鳴を上げると、浴槽に素早く飛び込んで低く屈んで姿を隠した。

勇者は勇者で部屋の片隅のスロット前に駆け寄り、レバーをがちゃがちゃ動かして気持ちを落ち着かせようとしていた。

## 第二十二話、順風満帆。

「マランガさん、今日朝飯何食べたん？」

「今日か？ 今日……樹液を少々、ミミズ3匹だな……」

ログハウスの中にあるテーブルを囲んで話す魔王、リーシャ、マランガの三人。

一目惚れしたリーシャの隣に満足げに座るマランガだったが、食べ物の話になると細い目の下に横皺を刻み、話す口調もどこか元気がなかった。

「これからここで生きて行くために、飯の調達をなんとかせんといけないと思って、こうしてみんなに集まってもろたんやけど……」

「魔王、ほんとやで、マジでなんとかせんとヤバイわ」

「ですよね……」

マランガが魔王の意見に共感を見せる。それを聞いて、大分、魔王は話しやすくなった。

万が一、土食うから飯いらんわとか言われて、マランガの協力が得られなければ食物調達に重大な支障をきたす所だった。それが杞憂に終わり、魔王はほっとしていた。

なんと言っても、この世界にいる魔王の僕？ の中でも唯一の生産タイプの魔物である。

マランガに対する期待度は大きかった。

「ワシな、あのな、畑耕して芋くらいなら作れるぞ。けどな、

植物はなんとかなるけど、肉類とかも食いたいし」

クワガタのような姿をしているが、マランガは雑食だった。

まだお腹が空いているのか、マランガの下腹付近の轟きが一定のリズムを刻む。

魔王も芋や植物よりは、動物性タンパク質が欲しいのが本音だ。

そして、リーシャも……

三人は浮かない顔でテーブルに視線を落としていた。

「やっぱりさ、俺達魔族だし、人間どもから奪うのが一番いいんじゃないか？」

魔王は唐突に、本能からくる率直な意見を述べた。

マランガも同意見らしく、上部の二本の足を組んで重々しく一度頷く。

だが

「それはどうでしょうか……」

リーシャがそれに物申す。

「ん？ 何でも言ってくれ」

魔王がリーシャに優しくそう促すと、リーシャは小さく頷いて独自の見解を話し出した。

「あのーさつき魔王様から吸引した時、引き出した記憶によりまずと、魔王様の……」

リーシャは少し言葉に詰まるが、マランガがいるのを考慮して言

葉を慎重に選ぶ。

「お友達の姫様は、余りこの世をかき回して欲しくないと思っておられます」

「うむ……」

魔王はさすがはリーシャだと感心していた。

実は魔王もさっきああは言ったが、大っぴらにこの世界で暴れたら、絶対姫の機嫌を損ねる事になると薄々感じていた。

それだけは避けたい。姫に嫌われる事だけはしたくなかった。

マランガは姫とはまだ面識が無いので、取りあえず黙って話を聞いている。

「しかし、そうするとだな、肉はどうやって調達しようか？」

「そうですね、お肉……」

「肉いるよな……」

議論の中心は肉調達法一点に絞られていた。

「人間達の調達法を吸引情報から引き出すと、やっぱりお金ですね、これを得る事によって肉類との交換を得る事が早道かと思います」

「金か……」

金の話題になると、魔王とリーシャは口を閉ざして下を向いた。双方とも吸引である程度、人間社会でのお金の調達方法は分かっていた。

しかし 色々ある中から自分たちにあつた方法を選ぶには、至難を極める。

一番楽なのは強盗だよな、次にスリ、恐喝、詐欺、麻薬売買、  
e t c ……

魔王は吸引の情報から探るも、よい方法が浮ばない。  
どれもドス黒い犯罪が絡むものばかりだった。  
とはいえ、そのセコイ犯罪を自分がするのかと思うと嫌気が差してくる。

重々しい空気が漂う中、不意にリーシャが何かを決意したかのように頭を上げた。

「決めました、私、姫様のいるコンビニでアルバイトします！」

「ええ、お前……アルバイトって……」

「私は人間に変身できますし、問題ないです。魔法も使えますので、身分詐称も簡単です。いざとなれば、魅了も使えます。それに」

魔王の耳元に顔を寄せると、リーシャはボソボソ呟く。

『それに……魔王様……姫様のコンビニでの様子が気になりませんか……？ 姫様は若いですし、性格は多少変わっていますが……素直で可愛いですし、変な虫がつくことだってありますよ。だから、私があそこで働く事で常に監視をすることもできますし、邪魔者の排除だってできます。そして、お金も微量ながら入ります、一石二鳥だと思われます』

魔王は甘い吐息を受けて、耳がこそばゆかった。

だが、リーシャの話は魅力的で、聞いているうちに自然と笑みが零れ落ち、途中から快活に頷きながら聞き入っていた。

「それはいい！ リーシャ頼むぞ！ ワシはワシで何か金の調達方法を考えるから！」

魔王は満面の笑顔で浮かれていた。

リーシャの言うとおり、姫に変な虫がつかないか、もしくは、ついていないか心配だったのは事実だった。なので、リーシャが姫と同じ場所で働けば、自然な方法で監視する事ができ、変な虫「男」が近付けば排除してもらえる。更にお金も入ってくる。

これ以上ない案に、魔王は小躍りしたいくらい喜んでいた。

「マランガさんには芋作りお任せします〜お願いします！」

リーシャはマランガに最高の笑顔を振り向け、丁寧にお辞儀をして頼み込む。

宝石のように煌く青い瞳は優しさを湛え、マランガにそっと向けられていた。

マランガはその瞳に見据えらると、6本の足を力なく垂れ下げ、恍惚とした表情で体が少し左右に揺れていた。

だが、はっと我に返ると、急にキビキビした動きで、

「ま、任せてくれよ！ 芋なんてちっちゃい事は言わねえ。この世界のあらゆるものを育てて見せるよ！ 期待してくれよ、リーシャさん！」

見違えるような滑舌、詰まる事のないきびきびした話し方。まるで人……否、魔物が変わったように、流暢にリーシャに力強く答えた。

目を見開き太い眉毛の端が、大きく持ち上がっていた。

#

勇者はホテルを出るとき、フロントの支配人にある場所を尋ねた。すると、支配人は親切にも地図をわざわざ持ってきて、その場所までの最短ルートを勇者に丁寧に教えてくれた。

そのおかげで、勇者一向は順調に目的地へと向かっていた。

「電車ってすごいね〜！」

「うむ……」

電車を降りると、ルージユが勇者に興奮気味に言った。

勇者はそれを聞いているようで、聞いていなかった。

ある問題を抱えていて、頭がその事で一杯だったからだ。

「しかし、勇者よ、この辺りは今までと違って立派な家が多いよな〜」

ドンゴロが周りに軒を連ねる大きな家々を、きよろきよろ見ながら言った。

「うむ……」

全く聞いていない勇者。

「勇者様〜犬のうんこが……」

「うむ……」

グシャ！

「うげ……」

ルージュはあからさまに嫌な顔をした。

「勇者！ 前方に石の壁が……」

「うむ……」

ドカ！ ガラガラ～！

勇者はや　ザが乗り込むベンツの如く、避ける事をせず突き進む。その様子を青褪めながら後方で二人は眺めていたが、さすがに人目が集まりだすと、

「ファイアボール！」

ルージュが勇者目がけてファイアボールを放ち  
余計に目立っていた。

ファイアボールは勇者の背中に着弾したが、ほんの少し衣服を燃やすと掻き消える。

何事もなかったようにどンドン歩いていく勇者。しかし、少し遅れて背中 of 違和感を感じたのか、

「あれ、ここどこだ～？」



勇者は辺りを見渡すと、そこが道路の交差点である事に気づく。  
車のクラクションと怒号が飛び交う中、頭を下げながらルージュ  
達がいる歩道に戻る。  
しかし

「君、今の何〜?」

「ね〜君すごいね〜、炎だしてたし、手品かなにか?」

カシャカシャ……カシャカシャ……

ルージュ達の周りには人ばかりがいき、携帯のカメラで取られま  
くつていた。

げげ!? 目立ってる! まずいな……

「あの、え〜と……」

ルージュが野次馬に囲まれて困っていると、突然、ドンゴロが切  
れ始めた。

「コラ〜! 道を開けるよ! さもないと……!」

勇者はドンゴロが刀を抜こうしているのに気づいた。

ヤバイ! やむおえん!

「アースクエイク!」

勇者は咄嗟に地に片手を押し当て呪文を唱えた。  
すると、辺りの地表が地響きを立て断続的に揺れ始める。  
突然の地震にたかっていた野次馬は驚くと、慌ててその場にしゃ  
がみこんだ。

「ルージユ、ドンゴロ、今だ！」

突発的地震で周りが慌てふためく中、案外平気な顔をして佇んで  
いる二人に、勇者は大声で叫んだ。

勇者に呼びかけられると、即座に反応して駆け寄る二人。

「よっしゃ、このまま俺んちまで行くぞ！」

「ええ！？」

勇者はもう覚悟を決めていた。  
ずっと悩んでいたが、この際、自分の家に行った方が色々楽だと  
思ったからだ。

勇者一向は走りに走った。十字路の坂を上り、スーパーの手前を  
横切って大きな家が建ち並ぶ住宅街の一角で足を止めた。

「ここが俺んちだ！」

## 第二十二話、順風満帆。(後書き)

後から推敲多くなっています、すみません。

## 第二十三話、涙の再会。

「ここが勇者の家とな？　こらまたデカイ家だなあ」

「わあ、何か変わった建物だけど、向こうに大きな水溜りがある」

「池だ……」

勇者が門を開けると、スタスタと中へ入っていく。  
白い飛び石が奥のお洒落なデザインの建物の玄関へと繋がっていた。

左側には大きめの池があり、石燈籠やら、大きな岩も置かれていた。

右側は一年草や青々とした木々が植えられている。

木の枠にガラスが埋め込まれた扉の前に来ると勇者は足を止めた。

「ふー二年ぶりの我が家だな……」

あちこち珍しそうにルージュとドンゴロは眺めていた。

勇者は落ち着かない二人とは対照的に、緊張した面持で玄関扉に備え付けられている

呼び鈴らしきブザーを鳴らした。  
しばらくして

「はい、どちらさまですか？」

「……………」

勇者は少し間を置いた後、

「光だよ……」

「え？ ええ！？ ちょ、ちょっと待ってね！」

勇者が呟いた名をきくと、ブザーの向こうの女性の声が一変した。明らかに動揺した声を漏らすと、ブツツと音声が突然途絶える。勇者は眼を細めて俯いたまま、黙りこくっていた。

「勇者様、どうしたの？」

「どうした勇者、元気ないのー」

「お前等、もう直ぐ俺の母親が出てくるから……」

「ええ！？」

「ん？ ふむ、分かった……」

ドンゴロは年の功か、全く動揺を見せず、黙って浴衣の乱れを直して、きりつとした目つきで背筋をピンと伸ばして佇む。

ルージュは黄色いワンピースを整え、少しはねた髪を懷から出した櫛で慌しく梳きはじめた。

あらかた髪や服を整えはしたものの、気持ちの方の準備がまだできていない。

継るような目つきを勇者に向けて、

「ゆ、勇者様！ な、なんて挨拶すればいい！？ わ、私の格好

変じゃない？ 可笑しくない？」

「何も気にする事ない……いつもの様に、普通にしていればいいよ」

「わ、分かりました……」

突然の勇者の母との対面を告げられ、狼狽してあたふたしていたルージュに、勇者が凜とした瞳で見据え、口元を緩めて宥めるように言った。

自分に向けられた包容力のある勇者の言葉に、ルージュは頬を赤らめてこくと一度頷いた。

ルージュは勇者を信じきっていた。二年の間に培われたパーティの絆によるものか、それとも……

ガチャガチャ、ガタン！

不意に扉の鍵が開けられ、内側に扉が静かに吸い込まれる。

扉の向こうからそーっと顔を出す、中高年くらいの細面の女性。

白髪交じりの黒髪が後ろで上品に一つに束ねられ、右肩から流れている。

勇者の姿を黙って食い入るように眺めた後、何かを確信したのか、更に扉を大きく開け広げて、

「光……！」

と、大きな声をあげたかと思うと、勇者の背中に手を回し抱きついてきた。

勇者の胸に顔を押しつけると、目尻の端から零れる涙が頬を伝う。ルージュとドンゴロはその様子を、少し後ろから黙ってみていた。とても自分たちが割って入れるような雰囲気ではなかった。

「二年もどこ行ってたの〜！ 母さん心配したのよ！ お父さんだって…… 静子だって、みんなみんな心配してたのよ！」

勇者は強く肩を抱かれながら、虚ろな眼差しでその感情の籠った言葉を受け止めていた。

言葉を発せずに立ち尽くす勇者に抱きついたまま、泣き咽ぶ母親。

「……………」

勇者はその華奢な母親の肩にそっと手を置いた後、

「母さんごめんよ…… 急に出て行って……」

母親はその言葉を聞くと、ポケットからだした清潔なハンカチで涙を拭った。

そして、勇者に涙で充血した眼を向けると、咽びを押し殺して、

「ま…… こうして、戻ってきたんだし…… 取りあえず、中で……」

と低い声で搾り出すように言った。そして、後方で少し貰い泣きをしている二人に眼を向けた。

「お友達？」

「うん、仲間だよ……」

「そう……」

取りあえず勇者から手を離れた母親は、涙を綺麗に拭って一呼吸

置いた後、罰が悪そうに二人に呟く。

「す、すみません、恥ずかしいとこ見せてしまいました。天草光の母親の節子と言います」

落ち着いた水色のスカートの辺りで手を揃え、二人に上品にお辞儀をする節子。

その気品のある勇者の母の挨拶を目にして、ルージュは慌てて足を揃えて。

「ああ、えーっと、魔法使いのルージュです、おばさんはじめまして……」

と、慣れない初対面の挨拶を、戸惑いながらも返した。  
そのルージュの自己紹介を聞いて、勇者の眼の辺りが少しひきつった。

魔法使いって……く……挨拶の言葉の練習くらいさせておけば良かった……

そう苦々しく思いながら、母親の顔を覗いて反応を見る。  
母親はルージュににこりと微笑んだ。

「ルージュさんですね。息子がいつもお世話になっています」

「いえいえ、お世話になりっぱなしです……」

ルージュは下を向いて、素直な気持ちをばそぼそ呟いた。  
勇者には世話になりっぱなしだと、常日頃から自覚はしていた。  
正直者で例え上辺の挨拶でも、嘘を言えないある意味素直であり



不器用な女であった。

「お母さん！ 私はドンゴロと申します。お宅の息子さんにはとても良い思いをさせてもらっています。この先もずっと……」

ドンゴロが更に能弁に語ろうとした時、勇者はそれに割り込んだ。

「じ、自己紹介も終わったし、さ、さ、取りあえず中に入ろう！」

勇者は母親とルージュの背中を押すと、ドンゴロを置いて中へと入っていった。

話す途中で遮られ、口を開けたままその場に取り残されたドンゴロ。

誰もいなくなった玄関に佇む姿は、どこか寂しげだった。

しかし、こんな事でびくともするような男ではなく、

「よゝし！ 何か食うぞー！」

と、飯屋にでも入るかのごとく氣勢をあげると、勢い勇んで後から中へと入っていった。

## 第二十四話、突き通せば嘘も真！？

大きな部屋に通された三人、黒い革張りの横長のソファが向き合っている。

その真ん中に高級そうなアンティーク調のテーブルが鎮座していた。

母親が飲み物を持ってくると三人に伝え、部屋を後にした。

その間、ドンゴロは落ち着いた素振りです、部屋にゆっくり視線を一巡させていた。

金目のものを物色するような妖しい目つきだった。

ルージュは普段なら、どこにいても素の姿のまま振舞う天然少女であつたが、この時ばかりは違った。黒いソファに浅く腰掛け、緊張した面持で、きつちり揃えた肢に丸めた両拳を置いていた。それは今いる場所が、勇者の実家である上に、勇者の母親が直ぐ傍にいるためだ。

「ルージュさん、砂糖はいくつ？」

「15歳です……」

「あら、若いね、紅茶に入れる砂糖はいくつにしますか？」

「あ、すみません！ 砂糖少々で」

「じゃ二つ入れておきますね」

ルージュが極度の緊張のためか、ぼけた返事を返すと、節子は少し微笑んで言葉を変えて聞き返した。

それを聞いてやっと間違いに気づいたルージユが、照れ臭い笑いを浮かべて少しずれた言葉を返すが、それに対しても、節子は微笑みを絶やさず、丁寧に気を利かした言葉を選んだ。

勇者はそんな母親の優しい気遣いに、感謝しながらも、どこか冴えない表情を浮かべていた。

二年前　何も言わずに突然家を飛び出した勇者。その間、この気立てのよい母親にどれだけ哀しい思いをさせたかと思うと、胸がしめつけられるような罪悪感が込み上げてくる。

紅茶を一口含むと飲み干し、静かに元あった皿に戻すルージユ。珍しく腕を組んで眼を瞑ったまま、大人しくしているドンゴロ。節子もルージユとの言葉を最後に、無言のままテーブルのあたりに視線を置いている。

三人が同じ部屋にいて、これだけ静かな時間を過ごすことも珍しい。

勇者は否応なしに額が汗ばみ、この重々しい雰囲気にもまれていた。

「光……」

そんな時、不意に母節子が重い口を開いた。

勇者は唾を嚥下して、表情を堅くした。

「どうして、急に出て行った上に、2年もの間何の連絡もよこさなかったの……？」

勇者はほらきた……と心で呟く。

聞かれて当たり前前の質問だった。

これに対する答えを勇者は、来る途中ずっと煩悶として考えていた。

しかし、中々良い答えが思い浮かばない。

勇者がこの家を出た本当の理由　それは、この大きな邸宅からも分かるように、親が富豪である事が関係していた。

勇者の父　天草徹は、いくつも子会社を持つ天草グループの創始者である。

現在、携帯やコンピューター関連、それに伴う広告事業を全国的に展開していた。

若くして小さな会社を発起し、順調に大きな会社へと育て、今や巨万の富をきづいた父。

そんな父と節子の間に生まれた光＝勇者。

勇者が小学校に上がる頃には既に今いる大邸宅に移り、勇者はなに不自由もない生活をこの家で送っていた。

しかし、某有名大学に合格し、安穩とした学生生活を送る勇者に、ある思いが心の内に芽生え始めていた。

俺は……このまま親の期待を受けて、親の用意したレールに乗って会社の跡取りとして一生何不自由なく暮らしていくんだろうか？

このままここにいたら、俺は一生親から本当の意味での自立ができないんじゃない？

と、富豪の息子にありがちな独立思考を発作のごとく抱き、そして、ある夏の満月の夜　衝動的に家を飛び出した。

勇者は家を飛び出す前にあらかじめ、あるアルバイトに応募していた。

それは夏の季節という事もあり、夏休みの稼ぎ時を前に応募を出していた、ペンションの住み込みのバイトだった。

山深くにある人里離れたペンションだという事で、少し家を離れて自然に触れながら色々な人で考えるには、丁度良いバイトだと勇者は思った。

だが　それが失敗だった。

たまたま、訪れたペンションのある山あいで、岩に足をひっかけ

斜面を転がり落ちた。それだけならよくある話だ。ただその落ちた場所が悪かった。

ゼームス大陸への転送ゲートがある穴ぼこが口を開いていたのだ。運悪くゴルフボールのように、穴の中に体を吸い込まれた勇者。

その後、ゼームス大陸に飛ばされた勇者は、やってきたは良かったが、肝心の元の世界に帰るゲートも見つける事ができずに、二年もの間家を空けることになった。

勇者からすれば思ってもいない、誤算の出来事ではあったが、一応辻褄の合う話ではある。

ただ、それをまともに母親に話したところで、到底理解してもらえる話じゃない事は馬鹿でも分かる。

「……………」

答えに苦しむ勇者。俯いたまま落ち着き無く足を揺らす。

その隣で心配そうに勇者を見つめるルージユ。

ドンゴロは腕を組んで、宙を見たまま微動だにしない。

そんな勇者の表情を見て取り、母節子は質問を変えてみることにした。

「今までどこにいたの…………？」

この質問にも言葉が出てこない勇者。

ずっと黙っていると、ドンゴロの眼が怪しく光る。

「奥さん…………ゼームス大陸をご存知かな？」

「はあ…………いえ…………知りません」

母節子はきよとした顔で言った。

どこかの異国の地にそんな場所があるのかと暗に思う。

「実はですね……」

勇者はこれ以上ドンゴロに語らすわけにもいかず、慌てて会話に割り込む。

「ああ、母さん違うんだ、実はさ俺……外国で働いてたんだよ」

「ええ！？ ど、どこで？」

「えーっと、アイルランドの端っこの人里離れた田舎の村なんだけどね」

「何で……そんなところに？」

勇者は咄嗟に出鱈目を滔滔と口走った。

一旦嘘を語り始めると、勇者は平然と続ける事ができる。

普段無口ではあるが、その辺りは父親譲りの世渡りの上手さであるだろうか。

母親がそれを聞いて驚いて腰を浮かした。

ルージユは黙ったままぽかんと聞いている。

ドンゴロは会話が胸突き八丁に差し掛かっている事を、察知して黙って聞いていた。

「ふ……実はさ、俺絵描きになりたいんだ……だから本場で修業をしようと思ってる……」

勇者は眼を伏せ気味に、手の平を組み合わせ静かに語り始めた。

教師の優しい言葉に促され夢を語りだす学生のように……

勇者は絵描きの本場がアイルランドかどうかは知らないが、もう成行きで話を適当に進める。

「絵描き……！？」

「そうなんだ……俺は大学へ入った。だけど……そのまま卒業すれば親父の会社を継ぐことになるだろ……？　だ、だけど……どうしても絵描きになる夢も捨てきれかったんだ！　それで思い切って……あっちへ渡ってみたんだ！」

勇者は目を瞑って目尻に多く皺を寄せて、強い口調で嘘をつらつらと語った。

迫真の演技だった。

ドンゴロがこめかみに汗を垂らし、息をぐくりと飲んだ。  
ルージュはそうだったのか……と勇者の言葉に同調して、眼を潤ませて何故か納得していた。

「そうだったの……」

「うん……」

「勇者様……苦労したのね……」

ルージュは目尻に涙をため、宥めるように低い声で呟いた。  
そこへ

「ただいま……ええ！？　お兄ちゃん帰ってきたの？」

不意に部屋に入ってきた濃紺のセーラー服を、身に纏った年若い

女の子。

絹のような艶のある黒髪を肩まで伸ばし、細面で鼻筋が通った端正な顔立ちをしている。

勇者の顔を眼にすると、驚嘆の声を発してカバンを地面に落とした。

「ただいま……静子……」

その妹静子の反応を見て、罰が悪そうに声量を抑えて返す勇者。

静子は勇者の顔を口を開けたまま、まじまじと眺めていた。

だが、他にも客がいる事を知ると、口をゆっくり閉じて場を取り繕う愛想笑いを浮かべた。そして、慌てた様子でお辞儀を何度か四方に散らすと、部屋をそそくさと出て行った。



**第二十四話、突き通せば嘘も真！？（後書き）**

会話の一部がおかしいので少し変更しました……

## 第二十五話、勇者の父。

勇者達は今節子、静子と夕食を一緒に食べている最中だ。  
今に至るまで家族と勇者一向は、散々楽しく談笑して打ち溶け合っていた。

ピンポーン！

「たぶん、パパだわ」

言いながら、箸をゆっくり皿に置いた節子が立ち上がった。

「みなさん、少し空けますね」

そう言っ節子は食卓を囲む勇者達に軽く会釈をして、台所の扉を開け静かに出て行った。

「静ちゃん、パ、パパってあなたの……？」  
「うん」

ルージュは緊張した面持で静子に聞いた。静子に笑顔で頷かれ、その顔には焦りが滲む。

どう挨拶しよう……？ 勇者様のパパ……未来の私の……変な女だと思われたくない。  
最初は……えーっと、おっさん、こんちわ……違う……はじめますた……何か変だわ……な、なにか変……どないしょお！

「ルージュ、あんまり緊張しないでいいよ……」

パニくって頭を抱えるルージユをすました顔で宥める勇者。  
勇者は案外落ち着いていた。自分の前のビフテキの肉をフォークで突き刺し、ひょいっと口に運んでいく。母との再会の時より数段余裕が感じられる。

「そつだよ、ルーちゃん！ 気楽にしてね！」

もう完全に勇者達と慣れ親しんだ様子で明るく話す静子。最初は堅い挨拶をした後、恥ずかしそうにしていたが、今はその痕跡は微塵も残っていない。同い年で少し天然の入ったルージユと馬があったのか、『ルーちゃん』、『静ちゃん』と呼び合うほどになっていた。

玄関先から男性の声は聞こえてこない。それでも節子の甲高いよく透る声だけは、内容までは分からないが、台所にまで届いていた。だが、しばらくして、男性の驚きと喜びが入り混じった声も響く。少しして玄関戸が閉まる音が聞こえ、節子の声が途絶えた。玄関先が静寂包まれた後、廊下を擦るスリッパの音が近付いてくる。

かなり速いテンポで廊下を渡ってくる。

スススス、ガタン！

ドアが大きく開け広げられる。

テーブルで食事する勇者達が一斉にそちらを見やる。

そこには眼鏡をかけ黒っぽいスーツを着た男が立っていた。

「パパ、お帰り〜！」

静子が入ってきた男に、笑顔で声をかける。

やはり、玄関先の節子が迎えた相手は勇者の父、天草徹であった。

「お、静子ただいまああ……ああああああ……！？」

天草徹は静子に返すが、テーブルの傍に勇者の顔を見つけると、口をぱくぱくさせ、時間が止まったように勇者に視線を置きっ放しにした。

「光っちゃん……！」

そして、物凄い勢いで膝で床を滑りながら、勇者の体にしがみ付いた。

徹の眼鏡の奥の瞳は、既に赤みを帯びて充血していた。

その激しいリアクションにルージュは目を白黒させている。

何が起こったの　　という困惑がありありと浮んでいた。

「どこ行つてたんだよ……パパ心配で心配で……！」

徹は勇者に顔を擦り付けて泣きじゃくっている。

勇者はそんな徹をよそに、黙って口の中の肉を咀嚼していた。ゆっくり時間をかけて嚥下した後、不意に勇者が口を開いた。

「アイルランド行つてたんだよ……」

「そうかそうか……」

アイルランドと聞いても、徹は全く表情を変えずに感慨に耽っている。

ルージュは勇者の父を目の前にして、挨拶を交わしたかった。しかし、勇者の二年ぶりの帰宅に、心から喜び涙して抱きつく父

親。

とても他人が割って入れる雰囲気ではない。箸を宙に浮かせたまま、ルージューは勇者のしれっとした顔を眺めているほかなかった。その間、ドンゴロがフォークを豪快に操り、次から次へとテーブルに置かれている豪華の食事を平らげていく。

尚も父と息子の会話は続いていた。もう徹は涙が乾ききって、笑顔を浮かべて勇者に優しい口調で語りかけていた。

「アイルランドで何してたんだい？」

「画家の修業してたんだよ」

「へーそっか、光っちゃんは今昔から好奇心旺盛だったからなハハハ！」

息子の話す内容を全く否定せず、優しい笑顔を浮かべ明るく受け答えする徹。

ほのぼのとした雰囲気は食卓の一角を包む。だが、その一方的に和やかさを演出する父親の話し振りに、他人が入る余地は生まれてこない。息子に対する異常なまでの執着心が、他人を寄せ付けない空気を作り上げていた。それでも家族の一員である静子は、穏やかに微笑みを浮かべているが

だが。勇者が箸を置いたかと思うと、突然、咳払いをした。少し間を置いた後、抑揚のない顔で徹に顔を向けた。

「あのさ、俺頼みあるんだけど？」

「うんうん、何でも言っただらいい？」

「三人で住めるマンション用意してくれない？」

勇者は淡々と相変わらぬペースで徹に頼みごとをした。さすが

に内容が内容だけに、勇者は父の顔を観察するように目を凝らす。だが、初めてここで徹の表情が険しくなった。さっきまでの息子の話すべてを肯定していた穏やかな表情が消えていた。

ルージユはその変化を敏感に感じ取ったのか、喉をぐくりと鳴らした。

静子も少し興味あるようで、箸をとめて耳を欹てている。

「マンション欲しいのかい……？」

「うん……」

「一緒に住まないの？」

「うん、俺しばらく仲間と三人で画家の修業に打ち込みたいんだ」

それを聞いた徹の様子が一変した。勇者の肩に置いていた両手を離してゆっくり立ち上がる。眼鏡を外すと懷から出した布で、レンズの曇りを拭き取り始めた。

40代と思われる徹の渋みのある顔には、会社を一代で大きくした男の威厳のようなものがどこかに漂っている。

「そうか……もう子供じゃないんだな……」

さっきまではまるで違う、落ち着いた素振りで徹は呟いた。

額には三本の深い横皺が刻まれる。

重ねてきた年齢と積み上げてきた何かを凝縮したような深い皺だった。

ドンゴロを除いた三人が一樣に、息を殺して徹の動向を見つめていた。

そのうち、目を伏せ気味に嘆息を漏らすと、徹は重く閉ざされた太い唇を開けて、言葉を発した。

「いいだろう、マンション直ぐ用意しよう……」  
「あ、ありがと、父さん……」

勇者はあまりみた事のない、父の重々しい様子に戸惑っていた。さっきまでの息子にベタベタしていた姿が、勇者が知っている本来の父徹の姿である。

子供を一途に愛し、欲しい物はなんでも買って与える。息子の話す事を常に肯定し、過保護なまでに勇者に甘く接してきた。その際、まるで犬のような懐き方をしてくる。

勇者が家を出て行った本当の理由は、この父の異様なまでの過保護さにあった。

だが、今の徹の様子は勇者が知る、父親像とは全く別物だ。会話の主導権さえも握り、父親の威厳さえ漂わしている。

徹は眼鏡をゆっくりかけた。その眼鏡の奥の瞳はどこか寂しげにさえ映る。

その父の哀愁さえ匂わす重々しい沈黙に、勇者はいた堪れなくなつて言葉を切り出した。

「し、心配するなよ、父さん、俺達うまくやるって!」

「そうか……?」

「うん、頑張るよ、それにいつでも、遊びに来てくれてかまわないから……」

「……!??」

寂寥感たっぷりの父の姿をみて、勇者が愛想良く言葉を弾ませる。その勇者の言葉を静かに、上目遣いで聞いていた父徹だったが、突然、雲が晴れたような満面の笑顔を浮かべたかと思うと、

「そうかー! マンション行っていいんだなー!」

「え！？ あ、うん……」

「父さんそれだけが心配だったんだよ！ 来たら駄目とか言われたらどうしようかって、さすが光っちゃんだーハハハ！」

と、高らかに笑って態度を豹変させると、また初めのように息子にべたべた抱きつくのであった。

そして、翌日

「ここだよ」

勇者達は父にベンツに乗せてもらい、天草家からそれほど離れていない場所にあるマンションにやってきた。

高級そうな焦げ茶色のタイルが壁一面を覆うマンション。

光沢のあるタイルの表面は白く光っていた。



## 第二十五話、勇者の父。（後書き）

明けましておめでとございます、ぼっぼっ書いていこうと思います。  
す。

## 第二十六話、それぞれの生活。

「いらっしゃいませー、何名様ですか？」

「三人です」

「でわ、こちらの席空いていますので、ご案内します」

姫は店の奥の席へと客を案内していく。

客が席につくと、にっこり微笑んで、

「ご注文きまりましたら、お声お掛けください」

といって、丁寧な会釈をすると、厨房の方へ引っ込んでいった。

「リーシャさん、今日空いてるね」

「はい、平日ですからね」

リーシャと姫は、とある繁華街のレストランでアルバイトをしていた。

こうなった経緯は、簡単に言えば、姫が薄給のコンビニを辞めて、時給が少しだけ高く、時間の融通が利きそうなレストランのウェイトレスとして、働く事にしたからである。コンビニの時給では、貯金の目減りが激しく、一向に生活は楽にならない。一年近く勤めたコンビニに愛着はあったものの、背に腹は変えられず、仕方なく決意した。

そして、リーシャも小金を稼ぐ必要性と、姫の身の回りの監視も兼ねて姫と同じ職場でアルバイトをすることにした。もちろん、魔王と話し合ってそうしたわけだが。

一応姫はコンビニでアルバイトの接客をしていたとは言え、ウエ

イトレスに関しては未経験だ。そして、リーシャに関してはこの世界で仕事をこなす自体初めてである。ここで働き始めてまだ二日目。二人ともまだまだ、仕事に慣れるまでには至っていない。

「卑弥呼さん、リーシャさん、美人ね」

同じ同僚の桐生孝美が微笑みながら言った。彼女は大学に通いながら、ここでアルバイトをしている学生だ。比較的穏やかな顔立ちで、美人というわけではないが、明るい笑顔が似合う感じが良さそうな女性だった。

「え、そんな事は……アハハ……」  
「有難うございます」

姫は美人と言われて、照れ笑いを浮かべる。

リーシャは、素直に感謝の言葉を笑顔で孝美に返した。

「何か分からない事あれば、何でも聞いてくださいね」  
「はい、ぜひ！」

和やかで温かい雰囲気厨房を包む。人間関係の構築において、まずまずの出だしだった。

二人は今日は夕方まで、このレストランのシフトに組み込まれている。

姫は手先は器用な方なので、お盆に手際よく食器を載せて厨房に運ぶ。

後、数日すれば、完全に仕事をこなす事ができそうだった。しかし、リーシャは姫と違って、慣れるまで苦戦の毎日を送りそうだ。リーシャは理知的で頭腦的労働に関しては、頭の回転が速く

即座に対応できたが、殊、肉体的なものに関してとはというと、少し難があり　不器用なところがあった。

リーシャは客の注文を受けて、厨房から受け取ったコーヒーを運ぶ。だが、その足取りはおぼつかず、周りから見ても危なっかしい。コーヒーの表面は不安定に揺れて、時折、決壊して外に流れ落ちる。客の場所まで着いた頃には　受ける皿は茶色に染まっていた。客にクレームを浴びて、慌てて取替えに返った。

リーシャがレストランで四苦八苦しる頃、  
魔王はというと

箱の中の世界にあるログハウスの中で、柱と柱を繋ぐハンモックに揺られて寝ていた。

リーシャは仕事に出ているし、マランガは畑をせっせと耕しに行っている。

話す相手が誰もいなかった。最初は魔王であるとは言え、部下が働きに出て、姫も新たなバイトを見つけたという事で、よし、自分も！　と、意気込んで見たものの、早々何かを思いつくわけもなく、ハンモックに背を預けて、考えているうちに眠ってしまったようだ。

そして　勇者一向は、

父天草徹はマンションに勇者達を連れてきた。

その際、母親節子も一緒に来ていた。

節子は勇者を前にして、励ましの言葉を投げかけるものの、それ以外は何も言わなかった。　少しびくびくしながら、母の反対の言葉を聞くことになるだろうと、身構えていた勇者は拍子ぬけしてい

た。なぜ、こんな急展開になっているのに、何も言及しないのだろう　と勇者は首を傾げたが、その裏には徹の黒子的支援があったからに他ならなかった。

あの後、回覧板を回しに行った後、帰って来た節子は、徹に別室に呼ばれた。

もちろん、自分の息子、光の話を節子に話すためである。

部屋で徹に、それまでの息子とのやり取りの詳細を聞かされ、節子は当然のごとく、猛反対をした。

せっかく帰って来た息子と、また離れ離れに暮らすことに強い反対の意志を示した。

しかし、徹は節子を宥めるべく、言葉巧みに持論を展開した。

徹の子供を育てる方針は、放任主義、つまり、自由奔放に子供に生き方を決めさせ、自分で責任を負い、自分で全てを決断させるといったものだった。

その持論をこれまでの自分の経験や、培った理論でたくみに節子に聞かせた。

節子の徹への信頼は、エベレストの頂上よりも高いものだった。多少子供に過保護な所があるのは節子も知っていたが、一代で会社をここまで大きくした最愛の夫でもある。

その夫に力説されては、しぶしぶと言えど、納得する他なかった。とはいえ、徹に深い考えがあるかは謎である。

ただ、息子に甘いだけなのか、それとも……全ては闇の中だった。

「じゃ、頑張るのよ……」

節子は少し後ろ髪引かれる思いを胸に、息子に励ましの言葉を送る。

「おっ！」「

「じゃ、ドンゴロ先生、息子の事よろしく願います」

ドンゴロに深々と頭を下げる節子。勇者はドンゴロを自分のアイランドでの画家の師匠であると節子に紹介していた。もちろん、ドンゴロとは話は済ませてある。設定としては、勇者がどうしても日本に来てくれと頼み込んだ形にしていた。

「はい、息子さんは私に任せてください！ 必ずや私が立派な画家にして見せます」

眼光鋭く腕を組んで言いながら、勇者の頭を右手で掻き毟る。

勇者はその調子こいたドンゴロの行為に、眉を潜めながらも作り笑いを必死に浮かべていた。後で、壮絶な罵倒と折檻がドンゴロに浴びせられるのは言うまでもない。

「ルージュさん、早くお母さん見つかるといいわね……」

「はい……」

勇者はルージュを同じドンゴロの弟子だと紹介した上、更にバックスストーリーまで付け加えていた。

内容はというと、アイランド人のルージュの父親は3年前に他界し、その後、日本人であるルージュの母はある日、何も告げずに日本に帰ると置手紙を残し、ルージュを捨てて行方を眩ましたというものである。

そこまでルージュに深い話を作る必要があったかは謎だが、それは勇者なりの考えがあつてのことだった。

ただでマンシヨンに同居させてやるには、それ相応の理由が必要だと思つたからだ。弟子という設定だけでは、ずうずうしい女の子と節子に思われることを危惧してのことだった。こういう母を訪ねて三千のような悲しい境遇なら、悲話好きの節子の同情を誘う事

が出来る、考えての勇者の知恵だった。

「おっと……そろそろ会社に戻らないと……」

父徹は腕に巻いたローレックスの腕時計を見ると小さく呟く。

「じゃ、光ちゃん、頑張つてな!」

「光、また来るわね、みなさん、失礼致します」

父徹は息子に手を振って励ましの言葉を掛ける。

母は勇者に再会を告げると、勇者達に会釈して徹と一緒に帰っていった。

## 第二十七話、魔王の出会い！？

「ふぁーあ……」

魔王は目を覚ました。頭上に両手を放り出して大あくびを一つした。

眼を擦りながら、まだ濁った視界の中ログハウスの中に視線を流す。

しかし、誰も部屋にはいる気配はなかった。

「あ、そうか……」

魔王は平手を軽く拳でポンと打つ。

リーシャが今日から姫と同じアルバイト先へ出かけたこと、朝見送った事を思い出したようだ。ハンモックから降りてゆっくり両足を床につけ立ち上がる。柱にかけていた黒ローブを頭から被ると、部屋の窓に近寄り外をみた。

太陽の陽射しが照り付け、眩しそうに魔王は目を細める。

「取りあえず……」

魔王は部屋に誰もいないので、戸外へ出ることにした。

外へ出ると浩浩と照り輝く空を仰ぎ見る。

そして、視線を落として辺りをぼんやり眺めていたが、しばらくすると、魔王は地から足を宙に浮かせた。そのままふわっと舞い上がると、高度と速度を高めながら、どこかへ向かって空を駆け抜けていった。

しばらく飛んだ後、魔王が降り立ったのはこの箱世界にある川沿



いの砂地だった。

この世界で唯一水がある場所だ。魔王はここを水洗所として毎日使う事になっていた。

水辺に近寄り、ありったけの水を掬わんと、大きな手を重ね合わせて水に浸し、その手皿の中に水をためた。

「うめ……！」

上流から流れ来る澄んだ水を一気に飲み干すと感嘆の声をあげた。喉が潤うと、今度は顔に冷たい水を何度か浴びせかけ始める。そうしていると、ぼんやりした意識が冴え冴えと晴れ渡ってくる。

魔王は気が済んだのか立ち上がると、仁王立ちして天を仰ぎ見た。見ると、雲ひとつない青空に浮ぶ太陽が中空にかかっていた。

「さてと……」

魔王が腹を摩ると、腹の中から低い音が響いてくる。

今日は朝、姫の部屋へ朝食に出かけた。いや、今日『も』と行った方が正しい。

今、魔王は自分たちの食事を得る方法が何もなかった。

マランガは樹液を吸ったりミミズを食べたりするが、魔王とリーシャは比較的人間に近い食生活を好む。樹液は体の構造上吸う事はできない。ミミズみたいなゲテモノを口に運ぶなど元から頭に浮んでこない。故に、今のところ、姫の世話になるしかなかった。マランガが現在畑で芋を栽培中だったが、幾ら魔法の箱世界だとは言え、育ちきるには3日が必要だった。

魔王は仕方が無いので、一息つくと、現在の空腹を埋め合わせるために、外へ出ることを決意した。

「リターン！」

呪文を唱えると、瞬時に箱世界から姫の部屋へ移動した。

部屋の中はしんとしていて、薄暗い。カーテンが窓から差す明かりを塞いでいた。

カーテンがきっちり閉められていた。この几帳面さは姫にはないもののだ。多分リーシャが締めたのだろうと魔王は暗に思った。

だが、魔王はそれが気に入らない様子で、カーテンを大きく開け広げて陽射しを中に入れる。魔王は魔族ではあったが、明るい日の指す場所が好みだった。

実際、ゼームス大陸の魔王城の自室や謁見の場は、魔王の意向で陽光を取り込む窓が多く設置されていて、全体的に明るい光で満たされていた。

「きたね……」

明かりが入り部屋の様子が浮彫りになると、魔王が小声で呟いた。脱ぎ捨てられた姫の寝着がビニール袋の上に覆いかぶさっている。畳6畳の部屋に所狭しとゴミやら衣類が散乱していた。

相変わらず汚いなあ、昨日リーシャが夜掃除したのになあ……  
…一晩でこれか。朝はリーシャも忙しそうだったし片付ける暇なかったんだろっ……

魔王は溜息をつくとき、掃除をしたい衝動に駆り立てられる。姫の衣服を一所に集め始める。が、途中で腹に力が入らずにその場に膝をついた。

「駄目だ……先飯にしないと、なんもやるきせん……」

魔王は掃除を途中で放棄すると、窓に近付き開け広げて棧に片足を上げた。

行くあてはないが、外に出ればなんかあるだろ……いざとなれば……

虚ろな瞳のなかに危なっかしい光が揺らいでいる。

柱に手を掛けると食欲の赴くまま、窓から外空へふらふらと舞い上がっていった。

魔王は人気のない街の路地裏に舞い降りた。

「メタモ！」

そして、姫との約束どおり、最初、眼の中に焼き付けた人間の男の姿へと魔法を使って変身した。お洒落な黒っぽいズボンに、落ちて着いた黒の高そうなシャツを身に着け、鼻がずっと高い端正な顔立ち、黒髪を短めに纏めた清潔感漂わす二枚目な年若い男性

魔王はこの姿に満足してはいなかったが、人間にしては許容の範囲内だと思っていた。

それでも、魔王の肉体と比べると、圧倒的に胸板は薄いし筋肉のつき方も甘い。だが、それは見かけだけの話で、実際の魔王の力や肉体の機能はそのままなので良しとしていた。

薄暗い細い路地から、肩を窄めて力ない足取りで、大通りへと歩を進める。

ここは空から眺めていて、人が多そうだと判断した繁華街の一角だった。

吸引で得た知識から、こういう場所には食べ物が多いことを魔王

は知っていた。

「さて、どうするかな……」

だが、魔王は浮かない顔で腹を摩りながら辺りを見回していた。  
ラーメンと書かれた暖簾、透明のガラス窓の向こうに食べ物  
のレプリカが陳列された場所が

視界に飛び込んでくる。涎が出そうな食欲を誘う匂いも鼻先を突いてくるが、魔王はそこへ近付こうとはしなかった。吸引の情報にかかわらず、人間世界ではお金というものが必ず必要だという事を、魔王はゼームス大陸にいる頃から知っていた。ゼームス大陸では魔王という絶対の地位であるがゆえに、それを氣にかけることなく過ごせてはいたが。

この世界においては、文無しの一匹の人間にしか過ぎない事を魔王は分かっていた。

はあ、腹へったなあ……いい匂いはするんだが、金はないしなあ……

何で俺がこんな思いせないかんのだろうな……

俺は魔王だと言っのに……

魔王は鬱々として、俯き気味に歩いていた。

だが、そんな時……

「卓ちゃん!」

「あ……? 誰だ?」

「なに寝ぼけてんのよ!」

突然、眼の前に躍り出てきた人間の女に声を掛けられた魔王。

呆然としていると、馴れ馴れしく人間の女が腕に手を絡めてくる。

な、なんだこの人間の女は……やけに馴れ馴れしい奴だ。この男と知り合いか？

眼のぱっちりした整った顔立ち、肩までの茶色がかった艶のある黒髪。

見かけだけ言えば、リーシャに肉薄する美人であった。

円らかな睫の長い澄んだ黒い瞳を魔王に向けて、人懐っこく左腕にしがみ付いてくる。

「今日大学どうしたの？」

「はあ？」

「ああ、またサボったんでしょ！」

魔王は面倒くさいなっと思いつつ、女を眺めながら何やら考えていた。

この馴れ馴れしさ……吸引の情報に寄るとどうやらこいつは恋人と言う奴だな……

じーっと、魔王は女を上から見下ろしながら考える。

そうだ……ここは腹も減ってる事だし、こいつになんか飯を調達させよう……

魔王は薄ら笑いを浮かべると、女に横柄に話しかけた。

「えーっと、お前金あるか？」

「あるよ、バイト代はいったばかりなんだ」

「そうか、ワシ、金今持つてなくつてな、腹空いてるんだ」

「ワシ？ アハハハ！ イメチェン！？ そつかーじゃあ、今日は彩が驕つてあげるよ！ いつも驕つてもらつてばかりだしね！」

ラッキー！ 上手いきそうだ、ふむ、彩だな。名は覚えておいてやろう。

屈託ない笑みを浮べ、腕を抱え込むようにして魔王を引張る彩。それに満面の笑顔で応えつつ、魔王は引張られるがまま二人繁華街の人ごみに消えていった。

第二十七話、魔王の出会い！？（後書き）

ぽつりぽつり……暇な時にかければと思います。

## 第二十八話、魔王の苦悩。

姫達が働く場所は繁華街の地下にあるレストラン街にある。

この辺りは会社も多いので、昼食時間を迎えたサラリーマンや、子供づれの主婦、学生、e t c . . . がひっきりなしに、姫達が働くレストランに押し寄せてくる。

「3番テーブル、卑弥呼さんお願い」

「はい〜！」

「リーシャさん！ あそこ片付けて！」

「は、はい！」

尽きることのない客の入り、その客への注文取り、食事を終え、客が離れたテーブルに置かれた食器の後始末、移動中でも容赦なく追加注文など呼び止められる。

まさに昼食タイムのホールは目が回るような忙しさだ。

リーシャも姫もただただ、この昼食タイムの苛烈な忙しさについて行くのに必死で、もはや周りにはほぼ見えていなかった。黙々と食器を片付け、嵐のような接客を作業のようにこなしていた。

「2名様ですね、5番テーブルへ」

二人組みの客がテーブルへと案内された。

「ご注文お決まりになられましたら、お呼びください」

ウェイトレスはそう言い残すと、笑顔で会釈をしてテーブルから離れていった。



「卓へ何する？」

「あん？」

「はい、ほら、メニュー表！」

「ふむ……」

魔王は彩に連れられレストランにやって来た。

店内は人間たちで溢れ、談笑するOLやサラリーマン、主婦、その子供の甲高い声、とにかく周りの喧騒が気になって魔王は落ち着かなかった。この雰囲気慣れていないのだ。

それでもメニュー表を差し出されると、空腹が手伝ってか、視線は食べ物写真に吸い込まれるように釘付けになった。

「上手そうだな……何にしようかな」

「ふふふ、今日は珍しく食欲ありそうじゃん」

「これもつまそうだな、いやこれも……さてよ、これもなかなか……」

魔王は彩の言葉は耳に届いていない。メニュー表を両手で開けもち、宙に浮かせてがつくように見ている魔王を、彩はきょとんとした目で眺めていた。

普段はもう少し落ち着いていて、食べるものを早めに選択し終える彼氏卓（現在魔王）。その彩の知っている卓とは今日は別人のようだ。彩は彼氏である卓を眺めながら、ちゃんと食べ物食べてないんだろうか……？ あ、もしかして、何か嫌な事あってやけ気味とか？ と今日の変貌の理由に推測を色々心の内に立てていた。

「よし、このサーロインステーキセットにするぞ！」

魔王は顔をあげると、口端から涎を光らせながら、満面の笑顔を彩に向けた。

ぼつと卓の顔を眺めて物思いに耽っているところに、突然声を掛けられ彩ははっとして卓に視線を合わす。

「あ、決まった!？」

「うむ、これにした！」

「おいしそうね！」

「あーじゃあ私も決めないとねえ……何にしようかな……じゃ私はナポリタンにしよう」と

彩は極力笑顔を作り明るく卓に接する。そして、思い出したように、メニュー表に目を凝らし直ぐに選択を終えた。魔王は彩の様子に特に気を払うでもなく、左肘をテーブルにつき、左手のひらを頬につけて、左にある窓から通路を行き交う人々をニコニコしながら眺めていた。

「あのー注文したいんですがー」

「あ、はい！」

通り際のウェイトレスを捕まえると、彩は言った。

「ナポリタンとこのセットで……」

「えーっとライスとパンありますが、どちらになさいますか？」

そうウェイトレスに聞かれて、彩は窓を眺めっぱなしで気づかない、魔王の肩を揺らして声をかけた。

「卓！ ライスとパンどっちにする!？」

「ん？」

魔王は聞きなれない言葉の混ざる質問を、投げかけられ戸惑う。

しかし、すぐに冷静に吸引の情報から探る。

そして、一瞬のうちにそれが何であるか悟ると、

「じゃあ、ライスで、後、ホットコーヒーもね！ 砂糖もつけてくれ」

と、質問された情報に付随した全ての答えを返した。どっちみち、後で聞かれる事を吸引の情報から知ったからだ。その際、ウェイトレスに顔を向けてにつこり微笑んだ。

だが、顔を向けた相手を見て、魔王の顔が一瞬にして凍りつく。そして、反射的に顔を伏せて、頭を両腕で隠すように抱え込んだ。

「は、はい、でわ、復唱します……ナポリタンひとつ……セット……」

魔王の顔を見たウェイトレスは、声を上ずらせて復唱し始める。しばらくして、復唱し終えると、会釈をして小走りにその場から引き上げていった。

彩はウェイトレスの様子を見て、まだ慣れていないのだろうと勘ぐりながら、テーブルに顔を付け塞ぎこむ魔王に心配そうに囁いた。

「どうしたの……？ お腹でも痛いのか？」

「い、いや……そうではないのだが……」

「ん、今日卓ちゃん何か変だよ？」

ん？ まずい……何か不審がつてるぞ……

正体がばれては飯にありつけなくなる 魔王はそう思うが先か、咄嗟に顔をあげて、背筋をぴんと伸ばして起き上がった。不安げにみつめる彩に引きつりながらも、愛想笑いをその顔に浮かべる。そ

の顔をじゅつと彩は穴が開くほど覗き込むが、ニコニコと魔王が笑顔を絶やさないと、安堵の息を一つついて微笑んだ。

「良かった……元氣そうだね、顔色も悪くないし」

「うむ……」

「何か悩み事あったら、言つてよね……彼女なんだし……」

彩は目を伏せ気味に、長い睫の間から瞳を震わせて魔王に言った。魔王はその言葉の意味も瞳の訴えるものも、何となく分かっていた。

人間と魔物、種族は違えど、心の構造はさほど変わらない事を魔王は分かっていた。

それでも魔族の長である。数多の魔族と人間の女性は見てきている。そして、現在姫も愛している身。暴慢に見えて、意外と繊細な心の持ち主である魔王。女性に対し疎いということとはなかった。

「心配するな、さっきまで頭痛がしていただけだ、でももう大丈夫、治ったようだ……」

魔王はこめかみを指で押さえ、そう優しく彩に言つて聞かせる。元々二枚目な顔に更に、優しくまで滲ませて彩を見つめる。彩はその瞳に見据えられると、ぱっと花が開いたような笑顔を浮かべた。それを見て魔王はほっとして窓を見やる。

その間、機嫌を直した彩が一人で永延と話しているのに相槌を打ちながら、もっと鬼気迫る難題に頭を悩ましていた。

ふー……びびったな……まさかここが、姫とリーシャが働いてる場所だとはな……しかし、頭を抱えたのはまずかったな……咄嗟に後ろめたくなったとは言え……

魔王はホールを見渡すと、忙しそうに料理を運ぶリーシャをみつける。そして、厨房に引っ込んでいく姫の後姿も視界に捉えると、深い息を漏らした。

「ん？ どうしたの？」

「いや、飯まだかなと思ってな……」

溜息を漏らした魔王に、また彩が気遣いを見せるが、魔王は適当にごまかす。

それを聞いた彩はまた、明るく様々な話を展開し始める。

また、魔王はその間、相槌をうちながら複雑な思いに身を焦がしていた。

まあ、あの一瞬で、本人が俺かなど分かるまい……それに分かった所で、この姿だ。

変身した人間に彼女がいても、何ら不思議はないし……逆にちゃんと相手してるんだから、褒めてもらわんと困る。この魔王が人間といざこざを起こさず、合わせてるんだからな……

魔王は強気に心で今の状態を正当化するものの、どうしても胸の中にわだかまる、もやもやとしたものが晴れてくる事はなかった。

## 第二十九話、魔王の決断。

魔王と彩は食事を終えると、レストランを後にした。

彩は空腹を埋めた満足感に、終始明るい笑顔を浮べ、レストランで食べた料理の感想や大学であった事柄を淡々と魔王に話して聞かせる。それに魔王は相変わらず、セメントで固めたような変わらない笑みを浮かべて相槌を打つも、頭の中は姫の事で一杯だった。

その後、結局、姫と接する機会がなかったな……

アーケードが長く伸びる繁華街の通りを、彩と魔王はゆっくりと歩いていく。

はたから見れば、仲良さそうに腕を組み、二人だけの世界に浸って歩く恋人そのものだ。

だが、実際は、話しているのはほぼ彩であり、魔王は相槌と気のない生返事のみである。

「それでね、大学の先生がね、黒板に書くんだけどさ」

「うむ……」

「字が達筆すぎて、何書いてるのか読めないんだよ！」

「ほーほー……」

「……………」

ずっとマイペースで話してた彩だが、さすがに気のない返事の連続に嫌気が差してか、不満を顔に滲ませ始める。魔王の横顔を不機嫌そうに眼を細め見つめると、急に押し黙ってその場で足を止めた。魔王はそれに気づかず尚も、無造作に歩を進める。だが、左腕はしっかり彩の右手が巻きついていてため、彩の急停止に腕を引張られ、

初めてその時、彩に意識が向いた。

「ん？ どうしたんだ？」

平然とした顔で魔王が尋ねる。彩はその魔王の無神経にも映る態度が気に入らなかった。累々と積み重なった小さな不満は、大きな憤りの波へと変わり、彩は当等、魔王に燻っていた不満をぶちまけてしまう。

「それは……こっちの台詞よ！ 卓、何でそんなに素っ気無いの！？」

その勢いのある甲高い悲痛な声に、魔王は思わず両肩をびくつかせた。

眼を白黒させながら言葉を失い、ただただ、彩の異変に驚くばかりだ。

「なんなの……あまりになんか……ほつたらかしすぎだよ！」

魔王はその鬱積した気持ちを零す彩を、観察するかのように見詰める。彩は顔を逸らして薄っすら目尻に涙を溜めていた。その彩の様子を見ているうちに、魔王はその不満が今日の自分の態度だけに向けられたものでない事に、薄々気づきはじめていた。

飯食ってる時と言い、今といい……恐らく……

長い睫の下から魔王を不満そうに見つめる彩。しかし、魔王はそれに動じず、彩に柔らかく二重の眼を向けて、彩の右手をそつと握った。

「すまん……ちょっと悩み事があつてな……その事で今頭が一杯なんだ」

「やっぱり……」

彩はそれに気づいてたとばかりに、眼を伏せて溜息交じりに言った。

だが、すぐに眼を見開いて魔王に顔を接近させると、

「……何でも私に話して……お願い……卓とはどんな悩みも共有したいと思ってる、だから……」

そう言い放った彩の瞳の奥は、なぜか不安で揺れているように見える。

その哀願的な言葉と不安で揺れる瞳に、さつき抱いた疑問が魔王の中で確信へと変わっていく。

これは……俺が変身している卓って奴が普段から……ふむ……しかし、俺の知った事ではないな……だが……

魔王は実のところは、体良くこの場を切り抜けて、彩から立ち去りたかった。彩と離れたら金輪際この姿に変身するつもりも無かった。だから、その気になれば、突然猛ダッシュをして、人混みに紛れ彩と強制的に別れる事もできる。魅了を彩にかければ、彩が思考を閉ざしている間に静かに立ち去る事もできよう。それで彩との奇妙な縁を断ち切る事は可能だった。

だが、そうした別れ方をすれば、彩と卓の今後に大きな溝を作る事になる事は必至だ。それくらいの事は魔王にも予想がつく。一飯の恩を仇で返すことを魔王は避けたかった。

そこで急遽、魔王はこの場を穏かに切り抜ける、良い案が無いか考え始める。



その間、ずっと黙っていても、彩の不信は募るばかりだ。魔王は早急に何か彩に伝えなければいけなかった。

……むう、こりゃどうしようもないな……えーい、仕方ない！

「彩！ こい！」

彩に強い口調で叫び、その手を引っ張ると、魔王は突然、人混みを掻き分けてここへ走りだした。

「ちよ、ちよつと、どこ行くのよ……」

その魔王の行為に気後れしながらも、たどたどしい足取りで付いて走る彩。

繁華街の出口を潜り抜け、魔王は彩と伴にひたすら走った。彩がそのうち疲れてきて、立ち止まろうとすると 彩の背中に手を回し、その体を軽々と両手で抱え上げた。

「ちよ、ちよつと〜！」

「……………」

彩が人前で抱え上げられる恥ずかしさに声をあげるが、それを意に介せず、魔王は彩を抱えて歩道を走り抜ける。そうしているうちに、人気のない路地を視界にいれると、魔王はそこへ滑り込んだ。

「い、一体、な、なん……」

彩が魔王が立ち止まると、声をかけようとする。しかし、それを最後まで言い終えるまでに、魔王は無言で人攫いのごとく彩を抱え

たまま、不意に空へ舞い上がった。

「きゃああああ……」

突然の思いもしない出来事に、彩は甲高い悲鳴をあげて両眼を強く閉じた。その際、無意識に魔王の首に両手を強く巻きつけていた。

「着いたぞ……」

彩は眼を閉じてる間、感じた事のない浮遊感に足をバタつかせて、魔王の首に必至にしがみ付いていた。そして今、その浮遊感が途絶え、魔王の声を耳にするが、まだ悲鳴をあげ続けて、足をばたばたさせている。

「こりゃだめだな……」

仕方ないので魔王は地面に彩をそつと置くと、しばらく地面ではたばたしている彩を静かに見下ろしていた。

少しして、彩はお尻に当たる堅い地の感触に気づくと、足をばたつかせるのを止めた。

「……………」

そして、平坦な地が続いている事を確認するかのように、手でその周りを隈なく触り始める。彩は低く唸ると、恐る恐る眼を開いていく。彩は眼を開ききると、最初に黒いズボンが視界に入る。その

まま視線を上に見せると、呆れた顔で卓が立ったまま自分を見下ろしている。

「え……卓……あれ、ここ、どこ？」

冷静さを取り戻しつつある彩が、辺りを見渡して卓に尋ねる。だが、まだ思考は混乱気味にたゆとい、場所を把握するには至らなかった。

「ここはどっかのビルの屋上だ……」

「ビルの屋上？ どうやって……ああ、空……飛ぶ……あれ……？」

彩は尚も頭の中は混沌として定まらない。きよろきよろ視線の先を変えては、魔王にそれを戻していた。それを三度ほど繰り返した後、魔王の顔に視線を置きざりにして口を開いた。

「す、卓？ 一体何がどうなったの？」

「……知りたいか……？」

彩の問いに魔王は神妙な面持で、確認をとるかのように尋ねた。彩は魔王をきょとんと見つめながら、無言で首を縦に三度振った。彩の首肯を確認した魔王は、一つ大きな息を吐くと、

「まず、最初に言うておく……俺はお前の彼氏、卓ではない」

「ええ……！？」

彩を震撼させる事実を、釘を刺すように最初に口にした。

それを打ち明けられた彩は、眼を大きく見開いて、しわがれた声で驚きを顕にした。



### 第三十話、魔王の品格

魔王が吐露した事実、困惑気味に瞳を震わせる彩。後ろ手をコンクリートの地面について、卓の姿をした魔王を見上げる。自分の前に佇む卓は、姿かたちは彼氏である卓そのものである。だが、確かにさっき彩を抱えて卓は空を飛んだ。今こうして、高いビルの屋上にいる事が、それを如実に物語っている。卓が、人間が空を飛ぶ事などできるわけがないのだ。それに加えて、さっきの魔王の発言である。よくよく考えてみると、今日の卓の雰囲気と口調が、彩はいつもと何か違うような気がしていた。彩は前に立つ卓を眺めながら、今日の卓の今までの印象を顧みる。そうして、今日の卓の様子を細部に渡って分析していると、魔王の発言の信憑性が、自然と心の内で色濃くなっているのを感じていた。

「今から変身を解いて本来の姿を見せるが、俺の姿を見ても慌てるなよ……」

今いる場所は欄干もないビルの屋上だった。魔王は自分の姿を初めて見た人間が、どういう反応を起こすか嫌というほど分かっていた。大抵の人間は、その禍々しい姿を見ると、衝撃を受けてパニックを起こす。イクゾーのようなタイプは例外中の例外だ。いきなり本来の姿を彩に披露して、彩がパニックに陥り、屋上から落下して死なれては後味が悪い。なので、彩の様子を観察しながら、慎重に言葉を連ねて変身を解くタイミングを探る必要があった。

「で、俺の姿なんだがな、ほぼ漆黒のローブに包まれてるから、お前たちに怪しくみえるだろうが、そんなに驚くほどでもないと思う

……」

「はい……」

彩からそれほど緊迫した雰囲気は感じられない。既に女座りで魔王の話に静かに耳を傾けていた。魔王はこれなら大丈夫だろうと判断した。

「じゃ、解くからな〜！」  
「はい……」

魔王がそう言った瞬間、体全体が燦然と輝き、本来の姿へと変わっていく。しばらくすると、眩い白光が次第に薄れて完全に消え去り、彩の前に魔王本来の姿を現した。

「どうだ……？」  
「えーっと……」

一瞬で卓の姿が様変わりし、黒尽くめのローブで覆われた怪しい男が眼の前に立っている。

だが、ほぼその体は漆黒のほつかむりのローブに覆われ、ただ、怪しいとしか彩には感想が浮かんでこない。だが、それでも普通の人間ならこの姿を眼にすれば、魔王の体から発する瘴気や威圧、不気味さに慄き、平然とはしていられない。それに比べると彩は異様なほど落ち着いていた。

「あの〜……」  
「どうした……？」  
「ローブ脱いでもらえませんか？」  
「なに……！？」  
「もっと姿を良く見たいので……」

魔王のローブに覆われた姿に怯えるどころか、彩はその下に隠さ

れた魔王の姿をよく見たいと要求してきた。魔王はそんなことを一度も初対面の人間に言われた事がない。漆黒のローブに覆われた姿のままで、相対する大抵の普通の人間はその圧倒的な威圧感に、気圧され言葉すくなに俯くか、黙ってしまふ。まして、更に踏み込んで魔王に対して要求など普通はないことだ。

「お前本気で言ってるの？」

「はい！」

彩は好奇心に満ちた眼で首肯した。その迷いのない返事に、何だか魔王の方がローブを脱ぎ捨て、肉体を彩の目に晒すことが恥ずかしくさえ思えてくる。

何か調子狂うな……

魔王はそう思いながらも、自分の肉体美に自信はある。見たいと言われて拒む道理はなかった。

「じゃ脱ぐからな……」

そうはいつでも、好奇心の眼差しを一身に浴びて、脱ぐのはなにか裸を晒すような、得もいわれぬ恥ずかしさが付きまとう。それでも話の成行き上仕方なく、頭のほっかむりを上に引き上げて、勢いよくすっぽりとローブを引き抜いた。

ローブが覆っていた魔王の肉体の一部が白日の下に晒される。瞬間、彩は眼を見開き、口を驚いたようにO字型にしてその姿に見入っていく。

灰色の武道着から伸びる漆黒の逞しい太い両腕……大きな横幅のある口、その口の隙間から覗く、鋭い尖った牙が幾重にも連なり、日の光を浴びて煌く。頭部の黒い地肌から逞しく後ろに反りかえる

ようにして生える二本の角、それら全てが独特の存在感を放ちながら、彩の目に飛び込んできた。

魔王は腕を組んで、足を開き気味にふんぞり返っている。どうだと半分開き直って、彩にその姿を見せ付けていた。彩は女座りしていた足を崩し、地を這いながら角度を逐一変え、その姿に限なく視線を注いでいた。

そして

「うわゝ、すごい格好良い！ この姿本物ですよね!？」

「失礼な事いうな……なんならあちこち触っても構わんぞ！」

「ええ、じゃ、じゃあ……お言葉に甘えて……」

彩は立ち上がると、魔王の肉体を銅像にでも触れるかのように、撫でたり指先で突付いてみたりしていた。跳ね返ってくる筋肉の弾力が彩の指先に伝わっていた。何やら首を縦に何度か振りながら、驚嘆の声を交えて見入っている。彩の触診のような観察が、しばらく続いていた。

「特殊メイクとかでもなさそうだし、チャックも見当たらないし、それに筋肉から伝わる温かみ……本物としか考えられない……それにしても……すごい筋骨隆々ですよね……」

「当たり前だ！ 俺はこう見えても、ゼームス大陸に君臨する魔族の長、魔王様だぞ！」

魔王は物珍しそうに観察しながら、どこか煮え切らない発言を呟く彩に、業を煮やしてか、自分の素性を威圧の籠った口調で吐き出した。

「ま、魔族！ 魔王!？」



「そうだ、俺はゼームス大陸を圧倒的な力で手中に収め、支配し人間達、魔族の頂点にたつ魔王様だ、本来なら、お前のような小娘が馴れ馴れしく語れる相手ではないんだぞ？」

それに呆然としながらも、気になった言葉を掻い摘み聞き返す彩。魔王はそれに重ねるように、厳かな威圧を含んだ言葉を彩に投げかけ、自分がいかに威光ある地位に就いているかを強調した。彩にその凄まじさを植えつけるために、説明は若干長めになっていた。だが、彩はそれを聞いて、益々好奇心に眼を輝かせ、胸元に置く両拳に微かに力が入り震えていた。

「すごいじゃないですか……わあ……何か私、嬉しいなあ……！」

魔王は彩の反応に若干、照れ臭そうにしていた。そして、やり難そうでもあった。ちよつと変わった人間の女だな……と内で呟く。その姿が不思議と姫と重なるような錯覚さえ覚えていた。

彩は確かに変わってはいた。だが、それは彩の嗜好が多分に影響しているせいもある。彩はふだんから、オカルト話や、ファンタジー、中世の魔女裁判など、そういった架空の存在や非日常的なものを専門に書いた小説や伝記、民俗学などを読むのが大好きな女性だった。そして、そこに出てくる架空の存在に平生から、憧れを抱き、実際に存在していたらなと仄かに夢見て、想像の世界でその存在を思い描くほど傾倒していた。

そんな彩の前に、架空の世界からひょっこり抜け出たような姿で現れた魔王。彩が強い興味を抱き、好奇心に打ち震え、嬉々とした色をその顔に湛えるのも必然なのかもしれない。

「さてと……俺が正体を晒したことで、お前の彼氏への誤解も多少は解けただろう」

魔王は彩のしきりに続く驚喜の声を振り払うかのように、会話の舵をとり話題転換を図る。

「……えっと、まあ……でも、彼……いつも、自分の内に悩みし  
よいこんで……彼女の私にすら……悩みを打ち明けてくれないんで  
す……」

彼氏的话题を振り向けらると、架空の世界から一気に彩の心は現実に戻される。

足早に流れてくる雲に太陽が不意に隠されたように、彩の顔にも一転して影が差し、さっきまでの陽気な雰囲気が消え去っていた。

「そんな事は俺のしつたこっちゃないな……」

魔王にそう言われ、彩は益々悄然として頭を力なくうな垂れた。自分の与えた誤解だけは払拭されたので、魔王はもうそれほど彩に氣遣う事をしない。

しばらく、諦念を顔に浮かべて、力なく背を丸める彩の姿を眺めていた。だが、すぐにある事に思い出だして、魔王は口を開いた。

「そつだ、飯を驕ってもらったからな、何か礼をしないと！」

手の平をポンと拳で打つと、魔王は彩に一飯の礼をする事を告げた。

彩は尚も、卓の事で頭が一杯なのか、溜息を何度も漏らしながら魔王を見やった。一度彼氏の事を頭に入れると、彩は早々頭を切り替える事ができなくなるようだった。

「えーっと……礼なんて……」

彩は遠慮気味に魔王に訥々と返す。その目は虚ろで生気が体から、抜け落ちたようにさえ映る。魔王はその様子を見るや、よっぽど彼氏の事が気にかかるんだろうな　とは、思うが、こればかりは本人達がどうにかする問題だし、魔王も姫の事で悩む身、人の恋愛沙汰にかまけてる余裕は微塵もなかった。だが、一飯の礼は必ずしないと気が済まない。正体を晒し、多少なりとも彩に好感を持つ現状においては尚更だ。今まで魔王が世話になり、お互いを認め睦んだ人間、魔族には必ず何かを返してきた。イクゾーにも一飯一宿の礼として、あの魔道アイテムである、『転生バッジ』を分け与えたのだ。彩にだけ何も与えないわけにはいかない。魔王の律儀な性格がそれを許さないのだ。

魔王は漆黒のローブに手を突っ込み、何かないか探り始める。しかし、何も持つてはいなかった。

困ったな……

魔王は腕を組んで空を仰ぎ見た。青空に一筋の飛行機雲が白い線を横長に引いていた。しばらくして、コンクリートの地面を黒い木靴で打ち鳴らし始める。ぼんやりその音を彩が耳で拾っていると、

「あのー、一つだけいいですか？」

何か思いついたのか、表情に少し明るみを加え、薄っすら微笑みを浮かべて尋ねる。

「うむ、何でも言ってみてくれ……」

「じゃあ、えーっと……」

彩は持っていたカバンから紙片とボールペンを取り出した。そして、何かさらさらと紙片の上に書き連ねた後、それを魔王に手渡し

た。魔王がその紙片を見ると、何かの数字が羅列されていた。

「それ私の携帯の番号です、よかつたら時々お話したいです……」

彩は頬を桃色に染めて、魔王に照れ臭そうに言った。魔王は吸引の情報から携帯の情報を即座に認識した。それが何であるか分かった、魔王は少し困ったように顔を歪める。

「そんな事でいいのか……？」

「はい！」

魔王はそう言いながらも、内心、その要望に当惑していた。彩は輝くような笑顔を魔王に向け、期待で胸を膨らませている。その視線を浴びながら、腕を組んで取り済ました顔で、思案気に佇む。魔王は実のところ悩んでいた。姫以外の人間の女性と交友を持つ事に、内心後ろめたいものがあるのは事実だ。だが、直接会うわけではない。それが魔王の中にある姫への背信行為に対する嫌悪感を幾分薄めてはいた。ただ、そうは言っても、魔王は携帯など持つてはいない。彩の携帯の番号を知ったところで、自由に気兼ねなく電話を掛けられるわけではない。掛けるとすれば、姫の部屋にある電話か、外に設置された電話機や電話ボックスから掛ける他なかった。そして、それは魔王にとって面倒な事でもあるし、あまり都合の良いものではない。

魔王は承諾する前に、彩にその要望の真意を聞いてみたくなり彩を見やった。

「何で俺と話したいんだ？」

それに彩は朗らかな笑みを湛え即座に答える。

「だって、魔族の知り合いなんてすごいじゃないですか！ しかも魔王さんですよ！ 物語や架空の存在だと思ってた人と、このまま別れるなんてもったいないって思ったんです！」

両拳を胸元で握りこみ、好奇心に震える瞳で熱く語る彩。その瞳から溢れんばかりの熱意のようなものは、魔王の心に十分伝わってくる。

「分かった……」

と、仕方なく、不承不承ながら細く呟くと、携帯の番号が記された紙片を懐にしまいこんだ。

まあ、いいか……直接あうわけでもないし、少し話すくらいなら……

魔王はそう心の中で言い訳するように自身に聞かせる。そして、ある程度踏ん切りがついたのか顔をもたげると、最後にもう一度彩の彼氏の姿に変わった。その姿で彩に近付くと、彩の体をいきなり両手で抱えこむ。小さく悲鳴を上げる彩だが、全く抵抗はしなかった。抱え上げる意味に薄々勘付いていたからだ。次の瞬間、魔王は屋上の端から、彩を抱えたまま、ビルの前にある道路へ飛び降りた。

「わあ……すごい」

彩は上がってきた時と違い、落下中に周りの景色を目に入れる事ができるほど、落ち着いていた。ふわっとビルの前の道に舞い降りる二人。壊れ物を扱うように、魔王は優しく彩を地面に立たせた。

「じゃあな……」

「はい、魔王さん、きつと電話くださいね……」  
「うむ……」

魔王はまた生返事をしてしまった。しかし、それに彩は満面の笑顔で応える。魔王は口元に薄っすら微笑みを含むと、空に舞い上がり、澄み渡った青空にその体を溶け込ませていった。

### 第三十一話、魔王のプライド。

魔王は姫の部屋の合鍵を使い開けると、部屋の入り口を頭を低くして潜る。

部屋はしんと静まり返っていた。まだ、姫もリーシャも仕事なので、それは当然と言えば当然の静寂だった。魔王はこの部屋に至るまで、ずっと彩の彼氏卓の格好のままだった。彩に正体を打ち明けた事により、特に変身対象を変更する理由もないため……は建前で……実際は昼間の事があり、変身対象を変える事に慎重になっていた。

「さてと……」

胸元で手を交差させ、変身を解いた魔王。姫の部屋の中であれば、素の姿でいても一向に構わない。右肩に手をあて、首を左右に曲げて骨が擦れあう音を部屋に響かせた。

「やれやれ……」

魔王は体全体を覆う黒いほっかむりのローブを脱ぎ捨て、無造作に部屋の隅へとそれを投げ捨てた。漆黒のローブは宙にふわりと舞いながら、ビニール袋の塊の上に蓋をするように覆いかぶさる。大きな体を前に屈め、部屋中に広がるゴミや衣類を手で払って空間をつくる。魔王はその空いた空間に仰向けに寝転がって、組んだ手を枕代わりにしその上に頭を置いた。白い天井を薄目で眺めながら、深い息を吐き、しばし静寂に身を置いていた。

魔王ははっとして目を覚ます。いつの間にか寝入ってしまった。部屋の中は薄暗く、窓に映る空は群青色に染まっていた。起き抜けのためか、目が覚めた理由は最初のうちは分からなかった。だが、玄関の扉から金属が擦れる音が聞こえてくる。

「ただいま……」

「……………」

姫とリーシャが仕事を終えて、帰ってきたようだ。扉を開け広げると同時に、部屋に響き渡る姫の声。朝と違ってその声色は明らかに低く、か細く聞こえる。

まだ起きたばかりで、鉛のように重い体に鞭打ち、魔王はゆっくり起き上がった。そして、部屋の電灯に繋がる紐の先を引っ張り、薄暗い部屋を電灯の白光で満たした。

「よっ！ お疲れさん！」

魔王は胡坐を掻いた状態で、疲れた顔で畳に膝を折る二人に労いの言葉を掛ける。

「っ…… かったです……」

「大変だったね……」

リーシャは足を崩し、おかまいなしに畳の上に座り込んだ。もはや周りのゴミすら、その目には映っていない。無意識に手でゴミや衣類を払いのけ、空間を作りそこに尻を置いただけだ。姫は疲れてはいたが、リーシャほどではなかった。レストランで働く前はコンビニで朝から夜まで接客をこなしていた。レストランのそれとは比



べ物にならないほど楽なものであったが、それでも一日働き続けるスタミナを姫はその小柄な体に持ち合わせている。仕事を終えて疲れてはいるが、まだ余力は残っているようで、一息ついた後、台所の方へすたすたと歩いていった。だが、リーシャは座り込んでからは、立ち上がる気力すら残されていなかった。リーシャは生まれて間もない執事タイプの魔族である。魔王の悩みに良策を進言したり、机に向き合う知的労働には向いていたが、長時間忙しく動き回り、立ちっぱなしの肉体労働には向いていない。なれない仕事を終えたばかりのリーシャは疲れきっていた。端正な顔立ちは疲労の色を浮べ、突つ伏すように体を畳の上に横たえていく。

「リーシャ、ご苦労だったな……すまぬ……」

魔王はリーシャの様子を眺めているうちに、何か後ろめたささえ感じ始めていた。

「何を仰いますか……魔王様はなにも氣にとめる必要は……ありません……」

魔王の言葉を受けて顔をあげると、リーシャは疲労感に顔を歪めながらも微笑みを魔王に向けた。その健気にさえ映る姿を見て、魔王は何かしてやりたくなり立ち上がる。そして、部屋の端にある座布団を見つけると、折りたたんでリーシャの頭の近くに置いてやった。

「有難うございます……」

その優しい気遣いに、心を打たれたのかリーシャの目は薄っすら潤んでいた。

頭をその上にゆっくり置くと、頬を赤くして満足げな顔で仰向け

に体を横たえる。

そんな中、姫は帰ってきたばかりだというのに、きびきびと動いていた。既に台所に立ち、朝食の際に洗い場に溜められた食器を洗い始めている。水が流れる音や食器が擦れる音が絶え間なく魔王の耳に届く。その後ろ姿を魔王は不安げに眺めていた。

姫はあの時の俺に気づいたんだろうか……それに……

複雑な思いに身を焦がしながら、目を閉じて横になっているリーシャの顔に視線を落とす。

例え、気づいたとしても、いや……俺が素の姿で他の女と睦みあっている、その現場を姫が発見したとしても、嫉妬くらいはしてくれるんだろうか……？

魔王が身悶えるほど気になる事は、姫が実のところ、現在、自分に対してどういう思いを抱いているのか、そのことだけだった。ゼームス大陸にいる頃は、姫に魔王城に何度も足を運んでもらった。やって来た姫と様々な会話を交わし、それなりに交情を深めたつもりでいた。だが、それはもう一年も前の話である。告白の文が姫に届かなかった事が悔まれるが、それも全ては結果論であり、過ぎ去った話だ。

現在、ひよんなことから、ボロアパートの姫の一室にやつかいになっている。この世界にやってきてから、魔王は常に考える事が一つある。一年の月日は姫にどれだけの変化をもたらしたのか

魔王はその事を考え出すと、苦渋に身悶える事しかできない。

一年の空白はあまりに長かった……それにより俺は自信を失い、臆病になってしまった……

一年の埋める事のできない空白の月日は、魔王の心を萎縮させるに十分なものだった。魔王は姫が過ごしてきた一年間を全く知らないと言っても過言でない。多少の事は姫の口から聞いたが、実際、一年の月日を同じ世界で伴にしたわけではない。一年の間に姫が男を作っても可笑しくはない。今のところその気配は無い様に思えるが、姫が魔王達に隠れてひっそり誰かと愛を育んでいる事も考えうる。その可能性は限りなく薄いがりではない。そして、付き合っていないとしても、今、意中に密かに思っている人間の男性がいることも否定はできない。そういった様々な不確定要素が、魔王を不安にさせ、一年と言う月日が、魔王を臆病に仕立て上げ、それを確認しようと姫に尋ねる事さえできないでいた。

姫が俺の事どう思ってるだの考える自体……既におこがましいのかもしれない……

魔王は姫の後姿に視線を戻した。哀愁で揺れる瞳でその姿を後ろから眺めていると、以前ゼームス大陸で散々眼にしていた姫と別人のようにさえ感じられた。

「ひ、姫……」

魔王は思わず、虚空に手を浮かして、声をかけるわけでもなく姫と囁く。

蚊の鳴くような声であった。洗い場に身を置いて食器を洗う、姫に届くような声ではなかった。

しかし　姫はそれに呼応するかのように、不意に後ろを振り向く。魔王の虚ろな視線と姫の大きな金色の瞳が直線を為して触れ合う。魔王はその瞬間、ひやりと胸周りから頭の先まで冷気が循環するのを知覚した。

「何か用？」

え……！？ あれ聞こえたのか……？

姫は地獄耳だった。

魔王はその鋭敏な姫の聴覚に驚いたが、聞こえてしまっただけは何も言わないわけにはいかない。

「うんちよつとな……」

姫は知ってて黙っているのか、まるで気づいていないのかは分からないが、まだレストランでの出来事を一言も口にしてこない。前者なら姫は魔王が例え、他の人間の女と一緒にいても全く気にも留めないという推測1が成り立つ。魔王にとってこれは最悪のケースだ。だが、魔王の希望的観測だが、姫も魔王の事を普段から意識していて、その話を切り出しにくいという推測2の可能性もない訳ではない。

それでも……自分からその話を切り出し、万が一にも、『ああ、魔王ちゃんいたね、女の子とデートしてたの？ 良かったね』などと、笑顔で飄々と言われてしまえば、魔王の繊細できめ細かい心はズタズタに切り裂かれてしまう。魔王はそれに心底恐怖していた。そのかつて味わった事のないような恐怖に、打ち負け、姫の背中に張り付いているガムテープの話題に急遽、摩り替えそうにもなる。しかし、魔王はそれを言いかけて思いとどまる。

今……聞けなければ、俺は臆病者の烙印を一生背負うことになる……それだけはならん……俺は魔王だ……幾千幾万の民の頂点に立つ魔王様だ……こんな事で臆病風に吹かれるなんぞあってはならんのだ……よ……し！

魔王は強烈なプライドを無理矢理引き出し、それにより恐怖を押し切る形で腹を決めた。だが、飽くまで力まず、平然を装いそれとなく姫に尋ねる。

「あのな、今日姫達が働くレストランに俺いたんだけど、気がついたか？」

「え……！？ いたっけ？」

なんだ……気づいていなかったか……

姫の答えに魔王は安堵の息を深く漏らす。瞬時に、危惧していた事が杞憂に消え、張り詰めていた体中の筋肉から力が抜けていくのを感じていた。だが

「……お金もないのに、ま、まさか……魔王ちゃん！ あなた！」

姫の顔が豹変していく。タオルで手を拭いながら、興奮気味に顔を赤らめ、魔王に詰め寄ってくる。魔王は姫の言葉を聞いて、誤解している内容が手に取るように分かった。その誤解を一刻も解く必要がある。姫は一旦切れると、瞬間湯沸かし器の如く激昂し手がつけられなくなるのだ。素早く手を突き出し慌てて、口早に弁解を申し立てた

「おいおいおい！ 勘違いするなよ！ 俺は無銭飲食とかしてないし、見知らぬ人間に魅了を悪用したりもしてないぞ！ えーっと……そうそう、蠅に変身してだな、姫達の様子を眺めてただけだ！」

姫の憤りに満ちた眼に気圧され、後方に体を逸らして、咄嗟に思いついた嘘を宥めるように姫に聞かせた。憤りをこめた威圧的な瞳で、魔王を上から押さえつけるに見下ろす姫。姫が魔王が咄嗟につ

いた嘘を信じるか否かは、五分五分だった。

しばらく、姫に睨みつけられ、口を開けたまま冷や汗を顔に滲ませる。

だが、しばらくして 急に姫の眉根の皺が消えて、表情に穏かな笑顔が浮かび上がる。

「ふふふ、そうなんだ！ てつきり魅了で誰か騙くらかして、見知らぬ人に迷惑掛けたのかと思った！」

「ハハハ……このま、魔王様がそんなセコイ真似するわけないだろ……！？」

魔王は冷や汗をこめかみ辺りに垂らして、動揺を見抜かれないように眼と口調に力を込めた。それを聞いた姫が、更に安堵の息を漏らすと、洗い場の方へいそいそ戻っていった。

危なかった……しかし、切り抜けたぞ……

切迫した危機を上手く乗り越え、額の汗を手で拭った。そのまま、深い息を漏らして、背中を地面につけ天井を眺める。

しばらく、ぼんやり天井に視線を置いたまま、再び訪れた安寧の時に身を浸っていた。

……はあ、一時は焦ったけど、良かった良かった……

姫の誤解を解いた事により、またさつき杞憂に終わった出来事に意識を戻し、その余韻を内に満たす。それが外に漏れる形で口元に微笑みも自然と浮ぶ。だが、それも一時の事で、また口を堅く結んで天井を眺めながら物思いに耽っていた。

まあ……過去は過去。今は同じ世界で同じ屋根の下に一緒に暮らしているんだ……

横になりながら、右拳を高々と宙に掲げる。

ふ……一年間などすぐに埋めてやるぞ……それに……俺は魔王……一度目をつけたものを早々手放しはしない……姫は誰にもくれてやらん！ 誰にもだ！ ハハハハ！

魔王は拳を宙で震わせながら、自分がどういう存在であるか改めて思い出し、心の中でしばらく哄笑していた。

「えーっと、マ、マランガさん、芋とれました……？」

「おらよ、こんなに取れたぞ、魔王運べや、疲れた……」

「もちろん……」

第三十一話、魔王のプライド。(後書き)

痛いミスを推敲しましたが、見なかった事にしてください……



### 第三十二話、青空と勇者、プロローグ。

勇者は両親に画家修業をしていると大嘘をつき、外国から連れてきた日本語ペラペラのアイルランドの師匠と弟子、そして自分を合わせた三人が住めるマンションを徹に要求した。徹はそれに快く応じこのマンションを勇者達に貸し与えた。光熱費、水道費、その他諸々かかる費用は全て徹が肩代わりし、その上、生活費月々50万円が勇者の銀行に振り込まれる事になっていた。

勇者は無理な嘘をついて、ここまで父親の厚意を受ける事は実のところ本意ではない。元々父親の過保護さに嫌気がさして家を飛び出したのだ。二年家を空けておいて、ひょっこり帰ってきたあげく、三人もの人間が住む住居、生活費を要求するなど、恥の上塗りも良いとこだった。だが、その恥辱を甘んじて受け入れてでも、安定した生活を確保する必要があった。

勇者はゼームス大陸である出来事をきっかけに、魔王をも遙かに凌ぐ力を手に入れた。そして、一人旅をして村々を伝って放浪生活をしていた時もある。そんな経緯を経て、ほぼ別人のようになってこの世界に帰ってきた勇者。自分一人だけなら、野宿をしようが、なんとでも生きていける自信はあった。だが、問題はルージューとドングロである。知己も寄る辺も礎もこの世界に全くない二人。文化も社会もまるで異質なこの世界で、二人が生きていく事が過酷なのは火を見るより明らかだった。ゼームス大陸で勇者とパーティを組んだ際も、ほぼ勇者の力と知恵に頼って苦難の旅を乗り越えてきた。だが、それはゼームス大陸だからの話で、この世界であちらと同じように、三人パーティで放浪するなど不可能に近い。世界観も常識も全てが異なる国にいるのだ。そういった事を踏まえると、元々この場所に住んでいて、家が裕福な勇者が取り合えずの生活を確保す

る必要が早急にあったのだ。ただ、それも勇者の特殊な親子関係がなければ実現するものではなかったが……

仕方がないにせよ、父徹の過保護なまでの豪奢な計らいを受けてしまつては、嘘が嘘とばれないように、その痕跡を部屋に残しておく必要がある。そんな後ろめたい理由から、勇者は写生をしようと三人に持ちかけた。

勇者達は大きめのキッチンの窓際で、三人並んで座っている。

木張りの床に座布団を敷いて塩梅をよくし、足を折りたたんでそこに尻を沈めていた。

折りたたんだ足の傾斜にスケッチブックを立てかけ、左手には白いパレットを持ち、右手には筆が握られている。画材一式は徹が気を利かして倉庫に用意していたものだ。他にイーゼルやら、油絵の具、その他、絵に関係するものが倉庫には所狭しと積まれてあった。

三人は窓を開け広げ、昼下がりの白い雲が点在する青空を、水彩絵の具でスケッチブックに描いていた。

題材の『空』、それを選んだ理由に深い意味はなかった。

外へ写生へ行くのが億劫なので、部屋で何かを書こうという勇者の鶴の一声で決まった。最初は、リンゴ、食べ物、部屋の内装など、対象選びに意見は分かれた。だが、勇者は窓に映る青空を選んだ。そして、勇者がそれだと決めた地点で反論を述べるものはいない

「しかし、勇者よ、このマンションとやらは広いなあ……」

「あたりまえだよ……5LDKの高級マンションだぞ……普通住めないぞ」

勇者達の居住空間は閑静な住宅街にある、高級マンションの3階にある。

その2階建ての空間は三人が住むには贅沢すぎる内容だった。

玄関を入つてすぐに、広いフロアリングの廊下が横たわる。温かみのある明るい木張りの廊下の前方には乳白色の壁が続き、それぞれの部屋に繋がる扉が壁に備え付けられている。玄関の正面には木の格子枠の硝子扉がある。そこを開けると、18帖ものキッチンが姿を現す。その中にあるシステムキッチンは真新しく、廊下と同じ色のフロアリングの上にアンティーク調のテーブルと高級そうな木材を使用した椅子が置かれている。そのキッチンには引き戸式の大きな窓があり、外の広いバルコニーへと出ることができる。一階には他にも8畳ほどの洋室、和室がある。そして、廊下の階段を上がつて2階には、10畳の洋室2つ、8畳の洋室一つと、とにかく広い造りになっていた。

「はぁ……だるかった……」

勇者は元々絵心がない上に、絵を描く理由が陳腐なためか、書き終えた絵もお粗末なものだった。最初に青と白を混ぜ合わせて作った水色を白紙全面に塗りたくり、雲と太陽を白と橙色の絵の具で空に描いただけだ。

「絵を書くなんていつ以来だろ、楽しいな」

ルージュだけは、住んでいた村で絵を描く事を趣味にしていたらしく、その話を持ちかけられると、満面の笑顔でやる気を垣間見させ、黙々と窓に映る青空を描いていた。

「中々難しいの……」

「頑張れじいさん……」

ドンゴロにだけ、勇者は絵の書き方に注文をつけた。一応、勇者

のアイルランドで世話になった師匠という設定だ。それ故、生半かな絵を書かれては、嘘がばれてしまう。だが、ドンゴロは勇者と同じく絵心というものを持ち合わせてはいない。そこで勇者は、ドンゴロに手を使えと命令をした。様々な絵の具を手の上に落として、その上でグチャグチャに混ぜ合わせ、好きなように『手』を使っ書けとだけ伝えた。

「うゝむ……」

最初はドンゴロも戸惑いを見せたが、元々の気性の荒さゆえか、書き始めると大胆、且、豪快に手を動かし続け、ほんの数分で『何か』を描ききる。

「こんなもんでどうかの……？」

勇者に自信なさげにドンゴロは呟いた。

「どれどれ……お、おおお!？」

「え……?」

だが、ドンゴロが描いた不可解な曲線の集合体は、不思議と芸術的な『らしさ』を醸し出しているように勇者には見えた。ドンゴロはその勇者の大袈裟にさえ映る反応にきよんとしている。

「おお、ドンゴロ、ナイスだ……いいよいいよ」

「ハハハ、そうかそうか、それは何よりじゃ」

勇者はその訳の分からない絵を見て、ドンゴロを褒め称えた。勇者はその絵の不可解さ、曖昧さに満足していた。その絵を眺めながら、笑顔を浮かべ何度も首肯した。絵なんてものは、他人が見て一

目で何書いてるか分からないくらいが丁度いいし、上手いか下手か見訳が付きにくい　と勇者は軽く考えていた。ある意味、芸術自体、軽んじていた。

「書き終えた〜ねね、勇者様みて〜！」

ルージュは顔に自信をありありと覗かせ勇者に絵を見せる。色彩豊かに優しいタッチで描かれたルージュの絵は、インパクトはないものの、不思議な魅力に溢れていた。その絵の両端を軽くつまみ、目を凝らしたまま、感慨に耽った様子で佇む勇者。

「……うん……いい……」  
「有難う〜〜〜」

少し呆けた様子で感想を述べる。勇者に褒められルージュは満足げに、感謝の言葉を返した。そして、褒められたことに気を良くしたのか、スケッチブックを捲り、新しい絵を腰を据えて書き始める。その隣に腰をゆっくり下ろし、勇者はさっきのルージュの絵に視線を置いたまま、見入っている。勇者はその絵に描かれた青空を眺めていると、何故か、ゼームス大陸を訪れたあの日を郷愁深く思い出してしまい、その頃の回想に自然と意識が吸い込まれていく。

確か、あの時も……この絵のような、優しい光に満ちた青空だったよな……

### 第三十二話、青空と勇者、プロローグ。（後書き）

勇者の回想が次から入っていきます。過去入ります。

### 第三十三話、青空と勇者、回想その1

「有難う……」

「氣いつけてな」

青年は目指すペンションへの道を教えてもらった現地人らしき、高齡の男性にお礼を言つと、山の奥へと通じる小徑に足を踏み入れていく。夏らしい短く切り揃えられた黒髪と額に浮く汗に、木漏れ日が滑り白く煌く。

ふー雑誌に載つてた住所の『……群』とか、電話で駅から山の麓まで走るバスが日に一本とか聞いた時から、予想はしていたが

……

薄茶色の綿パンから白いハンカチを取り出すと、こめかみに滴る汗を拭つた。

青年の名は天草光。とある大学の2回生である。夏休みの2ヶ月もの長期休暇を生かして、雑誌で見つけた期間限定のペンション住み込みのバイト先へと向かっている。が、一応の光の建前である。だが、実際は、複雑な家庭環境に嫌気がさし、本日、家族に行き先をも告げずに、山奥のペンションに安らぎを求めに一人やってきた家出青年とも言つべきかもしれない。

ある程度光は、覚悟はしていたつもりだったが、やはり向かう場所とはとんでもない秘境のようだった。もうかれこれ小徑に入り込んで2時間は経つ。最初は木の丸太のようなものが、連なる階段として役割を果たしていたが、それも山深く進むに連れて途切れてしまった。傾斜を伴う土と砂利の道に入ってから、足に加わる負

担は急激に増していった。どこから伸びているのかも分からない木の根や、大小様々な石が地面に突起し、足の躓きを誘ってくる。それに加え、海面のようにうねる、起伏の激しい地面は足腰に容赦なく衝撃を伝えてくる。銘々の影響は小さくとも、時間を重ねることに、それらは確実に光の体を蝕み、消耗させていった。長時間の険しい山道の移動で、汗を掻き、光の白いシャツは水分を含んで、べったりと上半身に張り付いていた。肩で息をしながら、山道を鉛のように重くなった足を引きずり、唯一つの思いを胸に険しい山道を登っていく。

まだか……ペンションは……

細い小径を挟むかのように、鬱蒼と茂る青々とした木々や土の斜面が両側に続く。積み重なった疲労が前に踏み出す光の足の軌道を不安定にし始めていた。左右に微妙にずれながら、覚束ない足取りで前へと足を差し入れていく。そうしているうちに、右の斜面が光に迫るように湾曲し、ただでさえ細い道を削り、前進を危ういものへと変えていった。

怖いな……ここ……左側は柵もないし

少し足を踏み外そうものなら、左側の急斜面に滑り落ちてしまう。そんな難所にかかり、光は恐怖しながらも、慎重に足を運んでいく。正体不明の虫が顔近くをよぎるが、もうそれを気にとめる余裕もなくなっていた。足元を慎重に見据え、注意して歩いていく。その難所の向こう側はまた斜面が右側に傾け、広くなっているようだった。それを眺めて、光は安堵したせいか、一瞬の緊張の空白を作ってしまった。木漏れ日が途切れた影に、大きな石がある事を見過してしまったのである。



「うわ、しまった……」

そう叫んだ時には、大きな石に毛躰いて体のバランスは失われていた。時の流れが和らいだかのように、その瞬間が異様に圧縮され、恐ろしくスローテンポで視界に流れる。左方の急斜面の底に見える緑の闇が鮮明に映りこんでくる。長短様々な木々が連なるようにして生えている。その木々の根元に下生える草花の存在も、その刹那に余す事なく捉えていた。そのうち時間がまた正常に動き出し、視界が大きく揺れ動く中、光は咄嗟に斜面に右足を踏み出した。片足でバランスをなんとか保ちながら斜面を滑走していく。だが、大きな石にまた足を引っ掛けると、体を前に大きく投げ出されてしまう。光は咄嗟に頭を庇い、体を内側に折りたたんで、柔道の受身のように宙で前転した。一回転したは良かったが、背中を土の地面に激しく打ちつけ、肺に溜まる息を唾液と伴に根こそぎ吐き出した。頭を抱えて転がり落ちていくが、傾斜が急なため、尚も落下の勢いは治まらない。体中を木々や突起した岩に打ちつけながら、斜面を下っていく。痛覚はあるはずだが、その天変地異のような刹那の間に知覚が追いつかず、ただ為すがままに落ちていく。次第に意識を保てなくなり、今にも途切れて暗転するかという瞬間　光は確にある種の異質な浮遊を、沈みゆく意識の底で感じていた　が、次の瞬間には全ては闇に塞がれ、一瞬浮んだ思いを置き去りにして、意識はどこか遠くへ運ばれていった。

俺……死ぬんだな……

「異界から来た青年は傷負い、生死の境で老婆によって救われるであろう……」

「……ん……うっ……」

光は薄っすら瞼に明るみを感じ、耳元で聞こえた何者かの声により、闇の中から意識を取り戻しつつあった。光は瞼をゆっくり開けていく。白く濁った視界の真ん中に木の梁のようなものが映る。それをぼんやり眺めながら、曖昧な意識の中、細い声で呟いた。

「……こ、ここは……」

「異界から来た青年、安寧の地で意識を取り戻す……」

また、耳元でさっきのしゃがれた声が聞こえてくる。たゆとう思考の中、手の平で尻に密着する場所を触ってみる。柔らかい清潔なシーツの手触りが光の手に伝わってきた。光は体の手の関節を曲げしてみる。その瞬間、シビアな痛覚が電流のように体の中を駆け巡った。思わず、目をぎゅっと閉じて目尻に皺を寄せ、苦痛に顔を歪める。

「治癒施されしも、まだ数日はその効果は浸透せず……自然の摂理に身を委ねよ」

「……あ……俺斜面から……」

光はしばらくして、自分が斜面から落ちたことを思い出した。そして、今、清潔なシーツの上に寝かされている。光ははつきりしない意識を現状把握や、イメージする事で徐々に回復させようと努める。そうやって、これまでの記憶の断片を繋いでいくうちに、自分は斜面から転げ落ちた後、誰かに救助されてベッドに横になっていると推測を立てた。それを端緒に、意識だけは鮮明になりつつあった。

時間の経過と伴に頭がしつかりしてくると、様々な思考が頭に浮かび上がってくる。まず最初に、浮んだのは命の恩人へのコミュニケーション。つまり、自分の命を救ってくれた恩人に、感謝の言葉を述べないといけない　という強い意志である。さつきから意識の混濁からか、中々把握できない言葉を傍で囁く、老婆の声を虚ろな聴覚で拾っていた。そして今も、しきりにそれは聞こえていた。光は牙え始めた頭の思考だけを頼りに、声が聞こえる右方へ頭を傾けようとした。だが、首が回らない。それどころか、無理に首筋を回そうとしたせいか、肩から胸の筋肉、腹筋、足先に至るまで、痺れを伴った強烈な痛みが迸り、それに悶えながら、少し右に傾きかけた上半身をまた、元の場所に無造作に放擲した。

これは、全身打撲か……骨折も何箇所かありそうだ……動けそうにない……

「焦りは禁物……数刻のち、全ては明かされるだろう……」  
「どなたか分かりませんが、助けてくれて有難う、少し傷が癒えるまで横になってることにします」

光は仰向けになったまま、老婆の影を視界の端で確かめつつ礼儀たたく言葉の口にした。

だが、ぶつぶつ呟いているが、はっきりした言葉になって返っては来なかった。

薄っすら目の端に映るその影は黒っぽい姿をしている。直視したわけではないので、色彩だけしか確認できた事は浮ばない。ただ、さつきから、老婆らしき者は何かの預言のような抑揚のない口調で、光に謎めいた言葉を囁いてくる。不可解きわまりない存在であった。だが、その内容を掻い摘むと、至って好意的なもので、害意は微塵も感じられない。その後も、しきりに何やら囁いている様子だった。

光は慣れてきたのか、それがだんだん子守唄のように聞こえ始め、木の香りが漂う部屋で目を閉じているうちに、いつの間にか心地よい眠りにまた落ちていった。

### 第三十三話、青空と勇者、回想その1（後書き）

回想入れるのはあまり良い方法ではないらしいのですが、ゼームス大陸と勇者側が謎めきすぎなので、しかたなくちよつとした説明を付け加えるためにいますゝゝ

### 第三十四話、青空と勇者、回想その2。

『天草光よ……』

『ん……？ 誰だ……？』

光は暗闇の底で一人佇み、どこから聞こえてくる正体不明の声に耳を澄ます。

『お前を助け、ベッドに運び治療を施した老婆じゃ……』

『ああ、あの意味不明な……いや……助かったよ婆さん、有難うな……』

つい本音が漏れそうになり、光は途中で言葉を切り替える。

『ふー意味不明な婆と思われても仕方ないの……現実ではぼけてしまっておるからな』

『ん……？ 現実？』

『そうじゃ、今わしはお前の夢の世界に邪魔して魂で直接訴えかけとる……現実の体は当に頭がばやけて会話にならんな……』

光はまどろみの中で意識が鮮明であるかのように感じていた。しかし、実際は夢の中に漂う思念のようなもので、その老婆の話す内容を理解しているわけではない。ただ、漠然と言葉の意味を感じる事はできる そんな状態だった。

『そうか、あの預言で会話するあんたは、ボケてたんだね』

『そのとお……り……』

曖昧な思念での会話のせいか、光の言葉に相手を気遣う理性はあ

まり働かない。

光に直接的な言葉を投げかけられ、老婆は少し声色を下げ、肯定しながらも認めるのが辛そうに言葉を濁した。

『ふん、そんなことはいいんじゃない……ちょっとお前に話しておきたいことがある……』  
『どうぞどうぞー！』

光は闇の中に漂う思念の体を、宙に横たえ、右腕を折り曲げ手のひらを頬に当てている。

取り澄ました顔で手を闇に何度か振って、老婆に続きを促した。とても人の話を聞くような態度ではない。現実の世界とは違う言動を、夢や曖昧な意識下では取る事がしばしばある。今の光はそうだった状態であり、幾分本性のようなものが見え隠れしていた。

『……………』

少しの沈黙の間を置いて、暗闇から老婆の溜息が漏れる。

『まあいい……取りあえず、最初に言っておく事がある。お前は元いた場所へ帰ることはできない……そう、数年は戻れないじゃろう……』

『へ？ どういうこと？』

『既にお前は元いた世界とは別の世界に存在する。その異界にあるゼームス大陸の地にお前は元いた世界にあるゲートを潜って踏み入ってしまったからじゃ……そしてこの大陸からお前の住んでいた世界へ帰るゲートは存在しない……』

老婆はその後、沈黙を長引かせた。光の反応を観察するかのよう

『なるほど、そうなのか？困ったな。ハハハ！』  
『……………』

夢の中での思念は妙に思考が軽い。深く物事を考える事が出来ない状態だ。

話の輪郭だけは辛うじて捉えてはいるが、切迫する危機感に苛まれるには至らない。

『まあ、ええわい、で、話は変わるが…………お前は这个世界にやってきたとき満身創痍だった…………』

『うん、確かに…………』

突然、老婆の言葉に光は敏感に反応した。臆気な思念とはいえ、痛覚に関しては深く刻まれてるようで、光は苦りきった顔で静かに頷いた。

『そんなお前をワシは無償で助け治療したのじゃ、ありがたいじゃろ！？　だが、なぜお前みたいな見ず知らずの人間にそこまで親切にしたと思う？』

会話に光の思念がシンクロし始め、婆の口調が活気を取り戻し滑らかに言葉が走り始める。光はその勢いを増した婆の口調に突き動かされ、曖昧ではあるが、ぼんやりした思考で答えを探ってみる。指先で額を擦りながら、低い声で唸っている内に何か思い浮かんだのか、額を平手でペシッと乾いた音を立てて叩いた。

『治療代の代わりとして…………しばらく、自分の介護をさせようと思っただとか…………？』

『それもいい…………ち、ちがう…………！』



光の単純な思考から浮き出た言葉に、一瞬それも良い考えだと思つた老婆だったが、初心のもっと大きな理由に再度思考が傾き、慌てて大きな声で訂正した。

『理由はたった一つ……お前にはやつてもらふ事があるから……だから助けたのじゃ……』

『え、はあ、そうですか……』

老婆は神妙な口調で、意味深そうな言葉を放った。しかし 光のまどろみの中での集中力は既に事切れていた。所詮、夢幻に彷徨う思念では、長い話は受け止めようがなかった。既に興味は殺がれており、流れ来る声と逆に寝返りを打ち、老婆に気のない返事をした。だが、まだ老婆の話は終わっていないらしく、闇から滔滔と言葉が流れ来る。

『まあ、夢の中で理解しろとは言わん。ただ……頭の片隅にでも残つておればよい……、何れ再びお前は……この森へ片割れと共にやつてくる事になるだろう……その時まで、うんと腕を磨いて……おけ……あ……を……れる……お前と……』

「あ、なんだつて……！？」

光は突然、雑音と共に遠のく老婆の声に心が動き、面倒くさそうに耳を傾けた。

「いや、だから、こんなところで寝てると魔物に食われるぞ、兄ちゃん！」

「え……」

突然、上から降ってきた低い男の声に、光は驚愕で眼を丸くし体を一瞬びくつかせた。見ると、細面の無精ひげを生やした男が上から覗き込んでいる。光は呆然とその男の顔を見つめると、

「あれ、ここどこ……？」

と、小さく呟き、半身を起こして辺りをきよるきよる見渡した。足の踝くらいの高さの雑草や、膝丈ほどの黄色い花が周りに生い茂っている。見上げれば、薄い桃色がかった青空が、柔らかい陽射しを光に注いでいた。

あれ、俺さっきまで……老婆は！？

「ここは創世の森近くだ……」

「森……？」

光が不思議そうに呟くと、細面の男は光の後ろを指差した。光は男の指先の差す場所へ座ったまま向き直る。直ぐ後ろには地上を覆わんばかりの背の高い数多の木々が、寄り添うように密集していた。その雄大な樹相を下から見上げて、再度呆氣にとられていた。

### 第三十五話、青空と勇者、回想その3（前書き）

ご無沙汰してます。なんとか一話更新しました……工房で完成したら、また。

### 第三十五話、青空と勇者、回想その3

光は何度か森の中へ踏み込もうとした。

だが、尖った木々の枝や、太い幹、棘のある蔓のようなものが行く手を阻む。阻むというより、複雑に絡み合って外界との接触を頑なに拒んでいるようでもあった。

「やめときなされ、怪我するぞい」

「そうするよ……」

無理に分け入っても、男の言うとおり傷だらけになるのは目に見えていた。

そこまでして婆さんに会う必要も無いかと思い、森に分け入るのを諦めた。

森の前に広がる、草花の自然の寝床に大の字になって、しばらく空を静かに眺めていた。

「じゃあ、おら行くでの……」

男は光の無茶な行動が一段落したのを見咎めると、背を向けてどこかへ向かって歩き始めた。その姿を何気なしに横目の視界にいれたい。だが、今置かれている状況が今ひとつ飲み込めない。確かなのは、甘い香りを漂わす草花のベッドが心地よいということ、そして、このまま寝てしまいたいという欲求だけだった。

視界に映る男の背中がみるみる小さくなっていく。

光は無意識な焦燥を感じていた。

待てよ、夢の婆さんの話……………

光は立ち上がって辺りに目を向けた。周りの風景の細部にゆっくり視線を流していく。

ただっ広い草地、その先には何も映り込んで来ない。ただ青空と草地をわけると地平線があるのみだ。足元に生える見たことがあるようにでないような黄色い花。そして、極めつけは……………光は森に再度向き直る。呆然と雄大な森の姿を眺めていた。だが、さっきまでの光の様子とは違っていた。ただ、見つめているだけではない、頭の中で何かが組み立てられ始めていた。

その間にも、男の姿は黒い点になり、地平線に今にも溶けようとしていた。

うわ、ちょ！ やば！

やっと光は恐怖した。

自らが置かれている状況に最大級の危機感を覚えたのだ。

あのおっさん見失ったら完全に迷子だ！

光は猛然とダッシュした。

それこそ、得体のしれない化け物にでも追われるような、冷たい感覚を背に感じながら。

「ほお、全ての記憶がないのかあんた」

「そうなんですよ……………頭打ったらしくって」

男に追いついた光は、おろおろした様子で男に今までの経緯を語った。

「そしたらおめく、自分が何者かとか、この世界の成り立ちや一般常識すら飛んじまったって事か？」

「……………」

光は額に手を当てて虚ろな眼差しで、押し黙る。相手に重度の記憶障害だと思わせる苦肉の策だ。だが、その迫真の演技に騙された男の表情に、同情の色が浮ぶ。心なしかごつごつした頬が緩んで見える。

「そついうこつたら、おめく、オラの村くるか？」

「え…………？」

期待通りの言葉が男から返って来ると、暗然とした表情を保ちつつ、男の顔に眼をやる。口周りの無精ひげに、無骨な笑みを湛えて光を見下ろしていた。

「おめくはついてるよ、ほんと」

「そうですか？」

「うんだ、あの辺はおらもめつたにいかねーんだ、たまゝたま、あの森の近くの木々に群生する茸を取りに来ただけだからな。そんな状態ですつとあの辺うろつろしてたら、あんた魔物に食われてただよ」

男は多少得意そうに語っていた。その隣で、後頭部を手で掻きつつ、俯いたまま歩く光。しかし、ぼくとした外見に似合わず、内では様々な念が渦巻き、男をあらゆる方向から観察していた。

このおっさんは…… たぶん…… 大丈夫そうだ。少なくとも、親切を装って近づく人攫いでも、人売りの類でもないはずだ…… まだ分からないけど……

光は慎重に男の性情を見極めていた。自分から後を追って話を親身に聞いてもらい、こうして村に連れていつてもらっているのに、まだ半信半疑の状態だ。

今までもそう簡単に他人を信じる事をしてこなかった。学校生活でも、ある一定期間気になった相手を観察し、信頼の足ると判断したもののだけにしか心を開かなかった。そのためか、友達の数はどちらかと言えば少ない方だ。

こうした極度なまでの他人への懷疑　それは過去に、父徹に植えつけられたものだった。

子供の頃、光は事あるごとに、徹にこう語りかけられていた

『光ちゃん、決して無闇に他人を信じちゃだめだよ』

『なんで？』

『他人はね、常に相手を落としきれようと考えている生き物だから、信じるのはお父さんと家族だけでいいんだよ』

『じゃあ、他人を信じなければいいんだ？』

父の言葉に割り切った自分なりの極論を返す光。

これには苦笑いを浮かべる徹だったが。

『いや、全く信じないのもそれはそれで大変だけど、父さんが言い

たいのは、他人を頼るなら、とことん疑ってから、それこそ犯罪者のなかから、使えそうな人間を選ぶくらい慎重にやりなさいって事だね、分かる？」

「分からない……」

説明が長すぎて、途中で考えるのを放棄した幼い光。

「ハハハ、光ちゃんはまだ子供だから、大人になればいつか分かるよ」

この時は幼さゆえに、理解に至らなかったが  
現在は、徹の執着にも似た努力が実ったのか、光の身にしっかりと父の教えは刻み込まれていた。



### 第三十六話、青空と勇者 回想その4

「俺、天草光って言います」

「わしはドンゴロだ」

自己紹介を済ませる光。名前を知るとは相手を知る第一歩だと考える。懐疑を内に宿しながらも、常に自らは自然に振舞うのが光の信条だ。

取りあえず、老婆の話を鵜呑みにしたわけじゃないが……ここが異界である可能性は捨てきれない……追いつけて良かった……

実際のところ、光は老婆の存在すら疑っていた。ベッドの上で臆な意識の中、相手と会話が成り立ったわけでもない。ただ、一方的にぼそぼそと流れ来る預言のような声を耳にただただ。聞き取りにくい低い声を、勝つてに老婆だと思いこんだだけかもしれない。その姿を目にしっかりと収めたわけではないのだ。だが、微かに体に残るベッドのシーツの感触は本物であると確信していた。実際に誰かに 老婆と思われる存在に、介抱されてたのは事実だ認めていた。そして しばらくして、眠りに落ちた後、見た夢……

森の前で目覚めた地点では、介護を受けた相手を老婆と認識し、夢の中の老婆と同一人物だと思い込んでいた。それは、夢の中で聞こえる老婆の話を鵜呑みにしていたからだ。

しかし、よくよく考えると、所詮は夢の話である。都合よく自らが無意識のうちに、散在する記憶や思考、推測を繋ぎ合せ、老婆の夢としてみた可能性もないわけではなかった。

だが、そんな懐疑心とは裏腹に、今も夢の中で会話した現実味のある老婆の声は光の耳にしっかりと残されていた。とても夢とは思え

ない程、脳裏にこびり付く会話の断片の数々。その中で明らかにされた驚愕の事実。光は夢で片付けるには無理があるほど鮮明に覚えていた。

ただ、夢の話だけを考えるなら、男を追いはしなかった。他にもここが異界である可能性を光に思わせるものがあつた。

森の前で男に声をかけられ目覚めた時、光の周囲にはあまり目にしたことのない風景が広がっていた。それはちょうど、日本の自宅のテレビでたまに映しだされていた、外国の自然の様子を、そのまま切り抜いたような風景であつた。とても日本のものとは思えない自然が、光を取り囲んでいた。ペンションがある場所は確かに人里離れた山奥であつたが、飽くまで日本であつたはずだった。

その事を思い合わせると、光の中で夢での会話の内容が奇妙な一致をなして繋がってくる。もし、夢の中の者が語つたとおり、ここが日本でも外国でもなく、地球でもない異界であるとしたら……？  
そう考えるとある程度辻褄が合う。ただ、それは光が考える全てを肯定した場合だ。ただ、ここまで一つの可能性が見えてくると、夢の話を否定するにも勇気が必要になる。万が一にも、今いる場所が日本ではなく、別の場所、老婆らしき声が夢で語つたとおり、異界であるとすれば、色々面倒な事が出てくることは疑いようがなかった。

「しかし、記憶喪失とはな……何も本当に覚えてないのか？」  
「はい……」

そういつたこともあつて、万が一異世界、つまり全く未知の世界に足を踏み入れたとすれば、便宜上、記憶喪失であることにしておいたほうが良いと考えたのである。ただ、そうする必要が起きたのにも訳があつた。異界で出あつた現地人と思われる存在と何故か、

言葉が通じるためだ。日本語が通じるのだ。ここが異界であるかどうか、確信がもてない理由もそこにあった。

緑の草原を越えると、薄闇の先から水の流れる音が二人の耳に届く。

「ミール川が見えてきた、もうすぐじゃ」

日が地平線に今にも消えていこうとしていた。辺りに夜の気配が勢いを増し始める。ドンゴロの言葉に、光は前を見据えると、青白い眼界に、闇に染められ黒ずんだ川が横たわっていた。

「助かったあ……」

思わず溜め込んだ思いを声に出す。光はここに至るまで、鬱蒼と繁る草花を掻き分け歩き続けてきた。既に疲労はピークに達し、無心で歩を進めてきた両足は鈍りのように重かった。しかし、目的地が近いことを聞かされ、俄然、体に漲る力が強さを取り戻す。

「ここを川沿いに北へちよつといくと、橋がある、そこを渡ればすぐじゃ、頑張れ！」

ドンゴロはそう、光を見ずに励ましの言葉をかける。そして、川沿いを北に舵をとると、竹箆を担いだ背を微かに前に倒して、また黙々と歩き始めた。

ひとしきり、二人が川沿いの夜道を歩き続けると、太めの木々を組んだ橋が姿を現した。

「この橋渡ればもう村は目と鼻の先じゃ」

二人は木の橋をしつかりした足取りで踏みしめる。光は木の橋を渡りながら、川のせせらぎに耳を澄ましていた。

「じくり……」

水の流れる音に思わず喉を鳴らす。光は今、両手に何も持っていなかった。手ぶらだった。ペンションの山道を歩いている際は、家からペンション滞在用に色々詰め込んだリュックサックを背負っていた。しかし、森の前で目を覚ましたときには消えていた。それに気づいた時、すぐに周りを探したが、見つけることは叶わなかった。山道から転げ落ちた際になくしたか、或いは……。飲み水や菓子類の入ったリュックを失ったために、光は長い距離を飲まず食わずで歩き続けていた。

喉からからだ……水くれゝ水……村……水……

頭の中は水に関係するものに占拠されていた。村にあるだろう飲み物に思いを馳せる。といっても、光は妄想を膨らました誇大なものを頭に浮かべたりはしない。ドンゴロの貧しさを匂わす擦り切れた服装を見ると、大した村じゃないだろうと予測はしていた。

せいぜい冷たい井戸水が、お茶が出る程度だろう　と考えていた。ただ、水に意識は傾きつつも、頭の端で言い知れぬ不安も感じていた。かなりの確率で今いる場所は異界であると確信し始めていたからだ。特に目新しいものを目にしたわけではない。ただ、光の第六感のようなものが、意識の深淵からそう訴えかけてきていた。

大きな満月の下、青白い光が辺りを照らす、電灯らしきものが一つもない。橋を越えた先には、月影を受けて微かに葉先が白く光る、膝丈ほどある草が繁っていた。

「ほら見えてきたぞ」

光は指差す方へ視線を走らせる。青白い闇の中に、紅い光がポツリポツリ見える。その近くには建物らしき黒い影がいくつか連なっていた。だが、距離が縮まり近付くにつれて、期待で膨らむ光の瞳の輝きは失われていく。

おい……これって……

「着いたぞ……あ……ちょ、ちょっと、この木の陰で休んでてくれるか？ 村のものに話してくるから」

「はい……」

光が頷くと、意気揚々とドンゴロは建物群の方へ歩いていく。木の陰から光は用心深く村の様子を眺め見ていた。呆然と建物の細部に目を凝らす。そして、しばらくすると、落胆の色を表情に刻み俯いた。

「あばら家の集合体じゃないか……」

ぽつりと低い声で呟く光。

ドンゴロが村に入ると、のそのそと建物から怪しげな男たちが3人出てきた。

「おう、ドンゴロ！　なんか取れたか？」

太っちょの男がドンゴロにぶつきらばうに声をかけた。

「いや、全然じゃ……」

「な、なに！？　手ぶらで帰ってきたってのか！」

ドンゴロがそう小さく呟くと、太っちょの男は怒号を飛ばして詰め寄る。

「お頭、ちょ、ちょっと待ってくれ……これには訳があるんじゃない！」

巨大の二本の手で襟首を締め上げられ、ドンゴロは焦った様子でお頭に言った。宙に高々と持ち上げられ、足を地面より少し浮いた辺りでバタバタさせている。

「ち！　つまんねー言い訳したら、平原の魔物のエサにしちまうからな！」

お頭はそう言って、一旦ドンゴロを地面に降ろした。尻から無造作に降ろされ、尾骨を打ったらしく苦痛で顔を歪めている。

「で？」

お頭は苛立った様子で、間髪入れずに巨体を沈め、片耳をドンゴロ口に突き出す。

「は……えつと……話すと長いんじゃが聞いてくれ！」  
「うむ……」

………

その頃

光は村の外に生える一本の木の下で、ドンゴロを待ちながら何やら考え事をしていた。

なんかおかしいな……

足元の小石を拾って、少し離れた草花の茂みに投げいれる。それを光はずっと繰り返し返していた。何か深く物事を考える時に、つい近くのを拾いあげ、投げるのは昔からの悪癖だ。家で勉強している際も、消しゴムをちぎっては、勉強机の奥によく投げ込んでいた。

貧相な村だということは……外だけ見ても分かる……

小石を投げながら、少し離れた位置に寄り添うように建つ、あばら屋のような家々に冷めた視線を這わせる。その家々を細部にわたって目でなぞる様に観察していた。

……板を重ね合わせただけの、簡易な造り……とても長期間暮らすために作られたものとは思えない……

妙な違和感に包まれつつも、頭の闇の部分明らかにすべく、高速で積み重なった情報を処理していく。そのうち、村の上にかかる

満月に、灰色の雲がかかろうとした時、俯き加減に垂れていた光の頭が、不意に弾かれたように天を指して持ち上がった。

ま、まさか……だが、もし……この通りなら……

光が焦燥に駆られ、立ち上がろうとした、その時

「よ！ 待たせたな……」



### 第三十七話、青空と勇者 回想その5

ドンゴロに手を引張られ連れてこられた一軒の家　というよりはあばら屋。

内部には松明が壁板に一つ掛かっていて、その明かりが中にいる者を薄っすら照らしている。

「まあ、座ってくれ……」

そこにいた一人の大男が支柱の向かい側から言った。

顎下に茫々と黒い髭をたくわえた眼光鋭い大男。

頭にバイキングのような金属の兜を被り、鈍色の毛が生え揃う獣の皮のようなものを上半身に巻きつけている。その隙間から覗く腹筋は見事に割れていた。

……な、なんだ……この感覚は……？

その大男と目が合った瞬間だった。

光は体中の筋肉が硬直し、全身が栗立つのを感じた。

「俺はミリガンだ……この行商一座の頭をしている……」

顎下の黒い髭を大きな手で摩りながら言った。

金属のヘルメットの下にある禍々しい双眸は、光の顔をがっちり捉え離さなかった。

体の自由を奪われたかのように、身動き一つできない光。

「……………」

光の思考は硬直していた。

初めて感じた得体のしれない威圧に、沈黙を余儀なくされる。

あばら屋内に凍てついた静寂が流れようとした時、光の隣に座るドンゴロが不意に光に囁く。

「おい……どうした……？」

「え……あ……」

その声に呪縛が解かれたかのように体を軽く弾ませ、ようやく

我に返る。

「そうだ……何か……言わないと……」

光は上から圧し掛かる力に抗うかのようになり、ミリガンの顔付近に視線をあげていく。

そして、何とか黒い顎鬚の先あたりでそれを置き止めた。

気持ちを整え、深い澱んだ息を吐き出す。と同時に、

「……天……草……光と言います……」

覚束ない口調で言葉を搾り出した。

「ん……？」

しかし、名を受けたミリガンは不意に眉を潜めた。

縦皺が眉間に数本刻まれた顔は、迫力ある顔を更に際立たせる。

「ど、どうしましたか……？」

ドンゴロはミリガンの変化に気づいて慌てて言った。

「確か……」

ミリガンは首を傾げると、ドンゴロを睨んで指を打ち鳴らす。

それに素早く反応したドンゴロは、青褪めた表情で傍に駆け寄った。

光の目の前で二人はぼそぼそ話し始める。

「ん……どうしたんだ……」

光は息を呑んでその様子を見守っていた。

「なんか……ミス……したかな……」

不安に苛まれながらも、ただただ状況の変化を待つしかなかった。

こめかみに冷たい汗が滴る。

光は居た堪れなくなったのか、床板に視線を落した。

そして、落ち着かない様子で、床のひび割れた場所を指先で擦り始めた。

しばらくして、不意に耳もとで気配を感じる。

「あ……あのよ……光……」

「び、びっくりした……な、何ですか……」

弾けたように体を横に逸らし、床に左手をつく光。  
気がつくと、ドンゴロがすぐ傍にいて耳打ちをしてきていた。  
低い声でドンゴロは続けた。

「お前、記憶喪失なんだよな……確か……」

「そうですけど……」

「それなら、何で名前だけ覚えてるんだ……？」  
それを聞いた光は呆然とした様子で言葉を失う。

……しまった……

光は背中に冷たい水滴がおちたような感覚を覚えた。  
それと同時に、屋内に広がる空気が変わった原因を瞬時に把握する。

「あの、えっと……」

頬を掻きながら、語尾を引き伸ばし考える時間を作る。

……ヤバイ……

相手がただの行商人ならここまでうるたえはしない。

しかし、光がここに連れてこられる前に浮んだ推測は確信に変わっていた

……あんな目を……行商人ごときが……できるわけがない

……  
光がそう確信めいたものを抱くのは、昔の経験からくるものだった。

学生の頃、父徹が家にヤクザの親分を招待し、接待したことがあった。

大きな会社を経営すると、そういった類の人間と関係を持つことがある。

光は同席させられていた。『社会の闇の部分をつ子供頃から目にしておく』 徹の教育の一貫であった。

その時、対面したヤクザの親分の目から受けた威圧 それに  
近いものを光はミリガンにも感じていた。

……こいつら絶対真つ当な人間じゃない……たぶん、犯罪

者かなにかの類の者達……………

焦りを隠しきれない。その焦燥はさっきのミリガンの反応に根ざすものだ。

光が記憶喪失であるかないかに固執しているをさっきのミリガンの様子から悟った。

その理由は分らないが、ミリガンにとって、自分が記憶喪失か否かは重要事項なのだと光は思う。

記憶喪失でないと疑われれば、態度を豹変させる可能性がある。真実をしゃべらせるために口を割らそうと拷問されるかもしれない。

「どうした…………？」

光の返答が鈍っていると、ドンゴロが怪しんだ目つきで顔を覗き込んでくる。

「言葉に言い表しにくいんですが…………その…………」

言葉を濁しながら時間稼ぎをする。

…………拷問は嫌だ…………それだけは…………『絶対イヤダ!』

背水の立場に身を置いて、初めて光の生き残るための本能が重い腰をあげる。

お、落ち着け、俺!…………俺は賢い…………出来る奴だ…………

何でもできる…………できる!

呪文のように内で啓発の言葉を繰り返し、自らを落ち着かせる。固まった笑みをドンゴロに向けている間に、頭の中で滔滔と浮かび上がるピースを急いで掻き集めていく。

それが一定の輪郭を伴って形となった直後、光は深く息を吸い込んだ。

…………よし…………一か八か…………!

「なぜか…………名前だけは覚えています…………」

決死の重いで言葉を吐き出した。

「ふむ…………」

ドンゴロが首を傾げ、納得していない表情を浮かべる。

光は薄笑いを浮かべて俯いていた。記憶障害の人間が名前だけは覚えていた。テレビドラマや映画でよく見る一こまだ。

それを光はぎりぎりで思い出した。しかし、実際そういうことがあるかまでは詳しく知らなかった。確信がもてないものを吐露して、内心受け入れられるか不安はあった。

「そうか……そういうことはまあある……さてと……」  
だが、ミリガンはあっさりと納得した。  
そういう人間と会った事があるのか、本人が経験したのか理由は分からないが、取りあえず、ほっと胸を撫で下ろす光。正座をしていた足を崩して女座りになる。

あばら屋の入り口から外の様子が窺える。

光がそちらを見やると、漆黒の闇のなかにぼつりぼつり松明の明かりが浮んでいた。

おもむろに視線を足元に下げる。

暗い床板には光が村に来るまで切望し続けたものが並べられている。

皿に載った何かの川魚や獣の肉。

紫色をした歪な大根のような植物。

白い陶器の入れ物には黒っぽい液体。

それぞれが独特の匂いと存在感を放っている。

全てドンゴロが用意したものだ。

「さあ、遠慮なく食べてくれ！」

「はい、頂きます……」

光はミリガンとドンゴロに饗応を受けていた。  
用意された木製の尖った棒を肉に突き刺して口に運ぶ。

見かけはグロテスクだが、味はまずまずだった。

その勢いで、他のものにも手を出す、川魚の身の臭みには顔が歪みそうになるが、なんとか堪える。

それでも総じて見かけほど味は酷くなく、光は安堵していた。

「ハハハ…… ドンゴロはドジだからだな！」

「それはないですよ…… お頭……」

「すまんすまん！ ハハハ！」

意外にも鷹揚で明るいテンポで話すミリガン。

その話し振りに凍てついた光の心は、徐々に温められ安心感が広がっていく。

「この間は一つ向こうの村で、金の女神像を10000ジルで売りさばいたよな」

「あれは美味しかったですよ、頭！」

「へ…… 10000ジル、すごいな」

貨幣価値は分からなかった。しかし、取りあえず、相槌を打ち相手を持ち上げる。

「何言ってるんだ光。10000ジルなんてあつという間よ、お前なら少し勉強すれば目利きが効くようになるだろう、そしたら、すぐに大金稼げるぞ、ガハハハ」

「そんなうまくいかなあ？ ハハ」

後ろ頭を左手で摩りながら、苦笑いを浮かべる。

完全に打ち解けて見える三人。

しかし、光は饗応を楽しむ振りをしながらも、冷静に二人を観察をし、そして周囲の様子を気にかけていた。 …… おかし

い……他にも人がいる気配があるのに……なぜ二人だけ……？

人の気配は外に複数あるのに、饗応に参加するのはミリガンとドンゴロだけだった。

だが、その疑問はすぐには浮かばず、頭の隅に残したまま保留する。

光は二人と適当に話をあわせながら、出された飲食物を平らげ

ていく。

その最中に、また別の疑問が頭をよぎる。

……………ミリガンたちが俺をもてなす理由はなんだ……………？

饗応を受けてからずっと燻っていた疑問だ。

光がその意味を頭の中で掘り下げようとした時　不意に誰かが饗応の席に割り込んできた。

「お頭！　ちよつと話が……………！」

### 第三十八話、青空と勇者 回想その6

突然入ってきた男は、黒い装束で足先から頭まで身を包んでいた。入ってきてすぐに、ミリガンの前で腰を沈め、耳打ちをしぼそぼそ話し始める。

光はまたか……と、小休止とばかりに、胡坐をかいて外の景色を眺める。

相変わらず、闇が覆うばかりだったが、ここへ来た当初、ポツポツ見えた松明の明かりは見えなかった。

月明かりも雲に隠れているのか、光源が一切なくなり、外には真の闇が広がっている。

「光……ちよつとコイツと話があるんで、外で話してくる」

「はい」

「ドンゴロ、ゆっくり相手してやってくれ」

「任せてください」

光は右手を軽く振りながら、薄笑みを浮かべて大きな背中を見送る。

闇に溶け込むように消えていく二人。

あばら屋内がしんと静まり返る。

「どうしたんでしょうか？」

一緒に残ったドンゴロに光は尋ねた。

「さあな……」

ドンゴロは木の棒に突き刺した獣肉を、丈夫そうな歯で豪快に食いちぎる。

特にミリガンが出て行った事を気にしている様子もなく、ただただ飯を食うのみである。

しかし、光は腹の底に言いようもない不安を感じていた。



なぜ……ここで話さないんだ……完全に俺に知られるのを拒んでいる……

ドンゴロにせよ、さっきの男にせよ、皆光の前ではぼそぼそと話す。

それが光を一層不安にさせた。

虚ろな眼差しを床に落とし溜息をつく。

消沈した様子で光が肩を落としていると、

「心配するな……何れ分かる……」

と、ドンゴロが見透かすように言った。

光は虚をつかれ、ふいと顔を上げてドンゴロを見る。

しかし、その視線を交わすかのように、手にしていた皿と木の棒を無造作に床に置いて、ドンゴロは背を向けて横になった。不可解な今の発言に光の心は頼りなく揺れ動く。

「ふー、戻ったぞ」

「おかえりなさいまし」

ミリガンが帰ってきた。しかし、さっきの黒装束の男はいない。

ドンゴロは横になっていた体を素早く起こし立ち上がると傍によつて出迎える。

「どうでしたか……？」

「……」

ドンゴロの問いに静かに首を縦に振るミリガン。

そのまま大きな巨体を光の差し向かいに沈める。

光の不安は高まっていた。

……俺に関する何かを……

光は十中八九、自分に関する話をミリガンはさっきの男としていたのだと考えていた。

外へ出て行く前に黒装束の男とぼそぼそ話してた時に、時々ミリガンが光をちらりと見る眼がそれを雄弁に語っていたからだ。

「光、少し話があるんだが、いいか？」

「はい……」

そらきた……と心の中で吠える。

だが、光は腹を括っていた。

ミリガンの話に静かに耳を傾ける。

「さっきな、ここに訪問者がやってきたんだが……」

こんな時間に……？ と光は訝る。

「その者がこの辺りで行方不明になった青年を探している……とジャニスがさっき知らせにきた。わしはその話を聞いてピンときてな、その者の元へさっき行ってきたんだ」

ジャニス……黒装束の男の名前か……

光は話を聞きながら、落ち着いた様子で分析していく。

「訪問者に会ってみると、そいつは懷から吸引紙を取り出して俺に見せてきた……」

「えつと、あの、吸引紙ってなんですか？」

咄嗟に光は聞いていた。

聞きなれない言葉に好奇心が先に立ったのだ。

「これも分からないか……うむ、吸引紙とは……この大陸に伝わる高等魔法『吸引』で得たイメージの一部を刷りこむ紙のことだ……」

「はあ……なるほど」

その説明を聞いても、光はあまり理解できなかった。

だが、これ以上聞くと話の腰を折りそうな気がして適当に納得したように返す。

「話を戻すが……その吸引紙には身なりの良さそうな青年が映っていた。その者が言うには、自分の主人のこの辺りで行方不明になったご子息だと言うのだ」

少し熱を帯びた口調で尚もミリガンは続けた。

「ワシの予想は当たっていた……そこに映っていた青年の姿はまさしく光、お前だったんだ、つまり、その者はお前を探していたわけだ……」

「……………」

光はミリガンを見上げて唇を薄く開けた。

その光の表情を観察するかのように眺め、一瞬間を空けた後、ミリガンはぼつぼつと話していく。

「わしはすぐにはお前の話を打ち明けなかった。この辺は物騒だ。しかも深夜の来客。吸引紙にお前が写っていたとは言え、俄かにその者の話を信用するわけにはいかない。素性も分からないものを信用するほどワシはお人よしではないのでな……ワシはしばしの間、相手の情報収集をしようと話を巧く導き出すのに専念した……」

そこまで話すと、ドンゴロが差し上げる白瓶を手に取り口に持っていた。

喉を鳴らす湿った音が光の耳に届く。

光は黙ったまま、床に視線を転じ、話が再開するのを待っていた。そのうち、ミリガンがふーっと大きな息をつき、白瓶をドンゴロに渡した。

「それでな、うい……ワシは巧く相手の話を色々導き出した……話によると、お前の父親は1000カイルはなれた場所に屋敷をもつ地主でな、たまたま、この辺りで息子と一緒に馬車でやってきたらしいんだが、すこし目を離してる隙に、息子の姿をこの辺りで見失ったらしい……」

赤ら顔でミリガンは一気に話した。

どことなく話す口調も幾分軽い。

白瓶にはアルコール分が入っていたようで、ミリガンは軽く酔っていた。

光はまだ黙って静かに聞いていた。

「ワシはその者が嘘をついているようには見えないし、信じることにした……そしてお前のことを打ち明けた。そしたら、そいつは感激した様子で、お前に会いたいといってきた。だがな、夜も遅いし、今すぐこんな状態のお前にその者をあわすのも何かと不都合が多いと考え断った。記憶喪失のお前を困惑させないための配慮だ。相手はそれでも、食い下がって理由を聞いてきたが、俺は突っぱねた。」

いちいち説明するのが面倒だったのな……相手は諦めたのか、質問を取り下げ、変わりに屋敷の場所がのった地図を懐から取り出しワシに示した。見たところ、場所は案外ここから近かった。俺はそこで男に『安心してくれ、明日にもワシの家来を同行させておたくのご子息を連れて行く、だから今日のところは帰って欲しい』と言った。その者は納得はしていなかったが、俺の意志が固いことを悟ったのか、しぶしぶ夜道を帰っていった……」

「なるほど」

ミリガンが長い話を終えゲップを一つ放つ。

それにドンゴロは腕を組んで分かった風に首を縦に振った。

光は尚も黙ったまま、床に視線を置いていた。

ミリガンの今の話し振りは、饗応の席の時より酷くきこちなかった。

まるで誰かが書いた話を内容をしらずに、ただ読み上げているようでもあった。

それもそのはず、ミリガンは手下が作った嘘話をそのまま語ったにすぎない。

よくもまあ……これだけでうちあげたな……

そんな事は光は百も承知していた。

矛盾点の多く、雑で長つたらしいミリガンの嘘話を、途中から呆れて聞いてすらいなかった。

話の最初の流れで光は、ミリガンの嘘話の意図するところを理解できていた。

やっぱり俺が思ったとおり……こいつら流れ者の人売り……そして俺は……

俺は人売りの糧として誰かに売られてゆくのだと光は悟った。

### 第三十九話、青空と勇者 回想その7

ミリガンはあの話の後、『すぐに答えは出さなくてもよい、俺は酒を飲んでから、その間ゆっくり考えて決断してほしい』と言ってから、ドンゴロに白瓶を差しだされるがままに口へ運んでいた。光はあばら屋の隅の壁に背をあずけ、肩膝を抱きこむようにして座っていた。

そして、これまでの経緯において、ミリガンの言動で不可解に思うものについて考えていた。

記憶がなければ……あの長い矛盾の多い話をすんなり受け止めるだろうってことか……

ミリガンが記憶の有無にこだわってた理由はなんとなく理解できた。

しかし、それ以外にも光は解せないことがあった。

程よく尖った顎を親指と人差し指で抱えるように挟んで思索に耽る。

なんであれほど……饗応までして……

血も涙もない人売りが、なぜ、あれほどまでに光を手厚くもてなしたのか。

記憶障害を持つとはいえ、ミリガン一味からすれば、光はただの商売品であり、捕虜であり、奴隷も同然だ。

光は納得いかない様子で首を傾げ、

俺が……人売りなら……

と、仮定を心中に打ちたて、シュミレートしてみる。

ぼんやりした少年が道の向こうから歩いてくる。相手に警戒されないよう自然な歩調で距離を縮めていく。右利きの光は道の左側を歩き、少年は右側を歩く。そして、擦れ違う瞬間 右腕

を折りたたみ拳を握り締め、相手の鳩尾へ重い一発……。一撃の元に気を失い、糸がきれたようにその場に崩れ落ちる少年の腕の下に肩を素早くいれる。そして、周囲に目撃者がいないか、目を走らせ誰もいない事を確認した後は、一目散に馬車に駆け寄って少年を荷台の上に無造作に放り投げた。周りに注意しながら幌布を降ろして外界からそれを遮る。気絶している少年の脇を通り、座席に飛び乗って手綱を握り馬車を静かに走らせる……

アジトに着くと、少年を中に運び込み、太い杭に縄で縛りつけ、盥に溜めた水をぶっかけた。

『ぶは……なんだ？』

『よう、気づいた？』

光はあっけらかんとした口調で少年に言った。

『あれ、俺、なんで……あれ……ここは……』

『ここは……組織が管理する……』

言いかけて、光は口を噤んだ。場所を特定されるのを嫌った。

『あなた誰ですか！？ それになんで！？』

少年は狼狽した様子で矢継ぎ早に言葉を放つ。

『黙れ………』

光は少年に一喝する。

威圧の籠った言葉に、少年はたじろぎ黙る。

光は少年を押さえつけるように見据えると、懐から出したタバコを咥え、ライターの火をその先につける。

煙を目を細めて吸い込んだ後、右人差し指と中指の間にタバコを挟み口から離すと同時に息を吐き出す。

おもむろに重い口を開く。

『お前はしゃべるな……俺が一方的に話す……少しでも面倒だと思ったら殺す……』

静かな口調の中に、黒く禍々しい本性を垣間見せる。

言ってることは全て本気であると暗黙のうちに少年に悟らせるためだ。

後ろ手を杭に縛られ動けない少年。瞳には不安と怯えの色が混在していた。

今の光の言葉がトラウマのように少年の心を縛り付ける。

光は無言のまま、狭い倉庫内を行ったりきたりしていた。

そんな時、倉庫の扉向こうからトラックのエンジン音がひとしきり続いた。

光は啞えていたタバコをコンクリートの地面に吐き捨て、黒い靴で踏みにじった。

『さあ、行こうか……』

『ど、どこへですか……？』

少年は顔を恐怖で引きつらせ、裏返った声で光に尋ねた。

それが例え無駄だと分かっているとしても、聞かすにはいれなかった。

『海を越えた異国の地だ……』

そう言ったとき光は二度と口を開けなかった。

少年は諦念のようなものを顔に浮べ、ただ、力なくうな垂れる他なかった

これが光の考える真つ当な人売りの姿だ。

光は意識を現実に戻すと、ミリガンの行動の不可解さを再確認する。

やっぱり、どう考えてもやり方が……回りくどい……

……うん、いや……まてよ……

そう考える一方で、別の思いが突然芽生える。

売られる人間とは商品であり、その保存状態の良し悪しは重要だと光は思う。

顧客の希望や目的に合ったものを相手に届けるのが売り手の基本。扱いを決めるのも、全ては顧客の目的によって決まる。

もしかしたら……ミリガンの話は半分は本当なのかも……

光の妄想がまた始った

金持ちで大きな屋敷を持つ地主の夫婦……

しかし、二人の間には子供がいなかった……

男の子が欲しい…… 跡継ぎが欲しい…… 男の子を養子として迎えたい……

しかし、普通のルートでは中々見つけることが難しかった……

夫婦は悩んだ末……

闇市場で条件にあった男の子を捜すことにした……

そのうち、一つの業者、ミリガンから夜間に連絡を受ける……

何らかの通信方法を使って光の情報を受け取った夫婦……

都合のいいことに、その青年は記憶障害があり何も覚えていないという……

夫婦は考えた末、光と取りあえず会ってみたいとミリガンに伝えた……

…… 短時間の間に何らかの方法でやり取りを行い、こういう

契約が成立した…… それなら人質は丁重に扱わないといけない……

これなら、納得がいく…… あ、でも待てよ、更にこんな場合も……

光の妄想は尚も留まる所を知らない。

様々なシチュエーションを思い描き、あーでもない、こーでもない  
と考える光。

多岐にわたる妄想を長時間描き続けた結果、光は憔悴し疲れきつ  
ていた。

ああ…… もういい…… 考えるのはやめだ…… なるように  
なるさ……

半ば自棄になって、全ての思考を閉じようとした時、ふと何かを  
思い出す。



……そうだ……俺は……

ここの世界の住人ではなかった　とても重要なことだったが、まだあまり意識に明確に浸透していなかったために、いままでもあまり思い出すことさえしなかった事実。

そうだった……俺は……どっちみち、一人では生きていけない……ここは……右も左も分からない土地なんだ……

光は今一人でどこかへ逃げたところで、生きて行く自信が全くなかった。

今いる世界の文化も常識も全く知らない上、頼りにする者もないからだ。

それにドンゴロから、この辺りには魔物と呼ばれる得体のしれない化け物が存在し、人間を襲って食べるという話も聞かされていた。そして何より　　ミリガン達から逃げ果せる自信がなかった。

ふ……ふふふ……

光は憑き物が落ちたかのように、強張った顔の筋肉を弛緩させ自嘲気味に口元を綻ばせる。

そして、意を決したように立ち上がり、ミリガン達の元へ向かって歩きはじめた。

「ん……どうした？　光……」

顔を紅く染めたミリガンが、だらしない居住まいで尋ねた。

白瓶の底を高くあげて、光に向けている。

その隣で酔いつぶれて眠るドンゴロ。

「あの……俺……さっきの話し……」

深夜遅く光はあばら屋の中で体を横たえていた。

藁を敷いただけの寝床に、獣臭い匂いが染み込む動物の皮でできた毛布。

家屋の壁板は所々隙間があり、冷たい夜気が時々頬をなでる。隣にはドンゴロが寝ていた。

光は寒さのせいもあったが、色々あつて神経が高ぶったままで眠りに入ることができなつた。

どこ……連れてかれるんだろうな……

少し前にミリガンに明日、相手先に出向くことを伝えた。

それを聞いたミリガンは酔つてはいたが、『そうかそうか！ なら決まりだな！ 良かった！』と滑舌よく返して、嬉しそうに光の肩を大きな手の平で何度か揺すつた。そして、酔つた頭で何かを考えているように宙を見据え微笑んだ後、『じゃあ、俺は自分の寢床へ帰るから、今日は一晚ここでドンゴロと寝てくれ』と言つてむくりと立ち上がり、ここを後にした。

「うゝん……もう飲めませんよ……頭……」

ドンゴロは幸せそうな顔で口元から涎を垂れ寝入つていた。頭まで被る毛布の一部を少し浮かせて作つた隙間から、その横顔を訝しげに盗み見る。

あんたも……結構曲者だよな……

と、光は心で呟く。

ドンゴロが呟いたさっきの言葉が妙に気にかかつていた。  
『いずれ分かる……』

光の悩みを見透かすように放つたドンゴロの言葉。

こうなることだけを、暗示したものだったのか、それとも……

光はまた疑心暗鬼に陥り深く考えようとしたが、

まあ……さっき結論は出てるし……それに……もう……だめだ……さすがに疲れた……

積もり積もつた疲労が急に瞼に押し掛かり始める。

まどろみの中へ誘われる途中で、面倒な思考は強制的に閉じられていった。

明日……か……ん……がえ……よ……う

思考が途切れて、静かな寢息を立てて眠る。

#### 第四十話、青空と勇者 回想その8

あくる日の朝

「光、起きなさい！」

光は自分を呼ぶ声に目を覚ました。

朧な視界に最初に映りこんだのは 光の母節子の顔……

一瞬、母さんか……と話しかけようとして口を嚙む。

ん？ 髪が……

夢現の中、ハゲ頭の母を目にして困惑する光。だが、次の瞬間、母の輪郭は忽然ときえ、ドンゴロの厳つい顔が取って代わる。

「オラ、起きろ！」

耳元で怒鳴られ、飛び上がるようにして半身を起こした。

しばらく周りをきよるきよる見回し、最後にドンゴロの顔を見上げる。

「お、おはようございます」

「ふん……」

光が目を覚ましたのを確認すると、鼻を鳴らしてドンゴロは立ち上がる。

そして、光に背を向けると、あばら屋内の奥へ消えていった。

光は最初ぼんやりして宙を眺めていたが、屋内に漂う香ばしい匂いに気づく。

いい匂いだ……そうか……ここは……

嗅覚で受けた心地よい刺激が、光の頭脳を揺さぶり、ぼやけた記憶が鮮明になっていく。

この良い匂いは……たぶん、ドンゴロさんが朝食を作ってるんだな……

なぜか、さんづけの光。

両手を宙に放り出し伸びをしながら大きな欠伸をした。

掛け布団代わりの獣の皮を横に払い、目を擦りながら立ち上がる。そして、あばら屋内を一通り眺めた。

奥の土間らしき場所で、立ち働くドンゴロの姿が目映る。

壁板の彼方此方にある隙間から差し込んだ日の光が、薄暗い室内の床に落ちて散乱していた。

その中でも一際眩しい入り口を目に入れると、光は入り口へ向かって歩きそのまま外に出た。

桃色がかった青空が目飛び込んでくる。

ま、眩しい……今日はいいい天気だ……

光は顔に右手を翳しながら、目を細めて外の様子を眺め見る。

あれ……？

それほど遠くない場所に、何軒か木造の建物が見える　　が、不思議なことに、朝だというのに外に人の姿が見当たらない。早朝の時間帯に、生活の営みのために外に出てくる人間を一人も見つけることができなかった。

どうなってるんだ……？

光は不審に思い、小走りに辺りを巡り、一軒一軒外から中を覗いていく。

だが、薄暗い屋内に目を凝らしても、人の姿は確認できなかった。耳を澄まして音を探るが、生活音どころか、足音すら聞こえてこない。

ミリガンは……黒装束の男ジャニスは……そして他の奴等は……

光はこの異様な村の様子を目にして、不可解に思い首を傾げる。

そして、訝しげに思いながら、元のあばら屋に戻ろうとすると、

「こら、もう飯できたぞ！　外の水桶で顔洗ったら中に来い！」

「は、はい！」

ドンゴロが突然、中から顔を出し声を張り上げた。

思わず肩を竦めて、ドンゴロが指差した方へ走る。

あばら屋の裏手には水の溜まった桶が二つ置いてあった。

光はその一つの前に蹲り、冷たい水を顔に二三度浴びせかけた。

「つめて……」

その余りの水の冷たさについ声が漏れる。

新鮮な刺激を受け目は澄んだ輝きを取り戻し、光の思考も少しずつ研ぎ澄まされていく。

何で、ドンゴロ以外人いないんだ……？

とはいえ、まだ起きたばかりで、その思考の動きは緩慢なようで

まあいいか……それより飯だ、とにかく飯！

一旦考える事を取りやめ立ち上がると、香ばしい匂いに吸い寄せられるように元いたあばら屋へ戻っていく。

「ドンゴロさん、料理うまいね」

「まあな！　だてにミリガン様や他の物達の食事毎日つくってねーよ！」

食べ物をお口にかきこみながら、ドンゴロは威勢よく言い放つ。

飯炊き係か……

冷たい憐れむような目でドンゴロを一瞥した。

あ、そうだ……

光はミリガンと聞いて、ふとさっきの事を思い起こした。

「そういや、村にミリガンさんや、他の人たちいないようなんだけど……」

聞いていいものか迷いはしたが、あからさまに人気がないのは真実。

それとなく聞いてみる。

「ああ、ミリガン様と……他の者は……朝早く行商にでたぞ……」

「そうですか……」

ドンゴロの声のトーンが明らかに落ちる。

口調はさっきまでの滑らかさを失い、目は心なしか泳いで見える。

わけありか……

「ま、まあ、と、とにかく、今日は……俺がお前を、きっちりお父上の屋敷へ連れて行くので安心しな！」

ドンゴロは話を逸らすかのように言っ、光の右肩を一度ぼんと打つ。

食事終え身支度を整えた二人は、村の外にある木の前で立っていた。

ドンゴロは紐で縛った大きな布袋を肩に担いでいる。

光は特に何も擁していない。

「よし、行こうか！」

「はい」

村を出た二人は、最初来た時通った橋を渡る。

水の流れの緩やかな川は、静かなせらぎを二人の耳に届ける。

歩を進めるたびに軋む橋板は、とこどころ朽ちていて危なっかしい。

最初きたときは暗くて気づかなかった。

よく渡れたな……と光は身震いしながら慎重に足を運ぶ。

橋を渡りきると、ドンゴロは左に進度を取り、川筋に沿って歩く。

膝丈のほどの草木が道の右端に生い茂り、道沿いにどこまでも続いていた。

「ここを入ってくぞ！」

「はい……」

しばらく歩いていけると、ドンゴロは光に声をかけ脇道に入る。

膝丈ほどの草木を掻き分け、ドンゴロは先に立ってどんどん歩を進める。

その背を目で押さえながら、光も必死の思いでついていった。

そのうち、水の流れる音が聞こえなくなり、辺りに濃い影が落ち

始める。

周りに繁る植物相が変わってきていた。  
膝丈ほどの草木は消え、代わりに背の高い木々がいく手を遮るように立ち並ぶ。

光は喉が渴いてきていた。

足は既に重く額には大量に汗をかいていた。

背の高い木の幹に手を掛け、重い足をふらふらと前に突き出す。

はあはあ……どこまではいつていくんだ……

顔を歪め前を歩くドンゴロの姿を追うが、ドンゴロは何歩も先を歩いていた。

化け物か、あのオヤジは……

若い光を置き去りにしそうな勢いで、最初のペースとほぼ変わりにく進む。

そのうち、背の高い木々が傾斜を伴って土の道の両側に姿を表す。

「この山あがっていくぞ……」

「はい……」

日はもう既に高く上がっているのか、真上から柔らかい木漏れ日が降ってきていた。

光は山道を登りながら、昨日のミリガンの言葉を浮かべて思う。

どこが近いんだよ……！

腹がすいて、少し苛立ち気味の光。

村を出た時の余裕は既になかった。

そんな時、山道の傾斜が緩やかになった。

少し開けた場所が視界に入る。

山の一角を人為的に切り開いたかのような広場。

広場の中央には苔の生えた古い倒木が横たわっている。

枝にも人為的に切り落とされた跡があり、高さも人間が座るには丁度良いものだった。

「よし、ここらで昼飯にしようか！」



「おお！　そうしましょう！」

ドンゴロが額の汗を拭いながら声を張り上げる。  
待ってましたとばかりに、光はドンゴロのもとへ駆け寄った。

古い倒木に二人並んで腰を降ろす。

ドンゴロは持ってきた大きな布袋を隣に下ろし、紐で縛った口を開けはなつた。

「朝、昼食も作っておいたんだ」

言いながら中に手を突っ込んで、二つの包みと竹の水筒のようなものを取り出す。

包みは植物の葉らしきものを折りたたみ、紐で結わいたものだ。

「ほれ」

「有難う」

光に濃緑の葉の包みと竹筒を渡す。

満面の笑みでそれを受け取り、すぐさま丁寧に重なった葉先を開いた。

中には饗応の席で食べた肉や魚が入っていた　　が、別のものもあった。

光はそれを見た瞬間驚く。

こ、これは……お・に・ぎ・り……？

現実世界で幾度も口に入れたことのある炊いた米を丸く固めたものの。

なぜこんなものが　　光は困惑していた。

おにぎりに目を凝らしながら、手の平においてドンゴロの目の前に持つて行く。

「これなんて食べ物ですか……？」

まさかと思い、光は聞いてみた。

「おにぎりだが、そんな事も覚えてねーのか……？」

「はい、まあ……」

呆れたようにドンゴロは言った。

当たり前のように言われて、光は呆然としながら、おにぎりの端を少し齧る。

不思議だ……この世界では……日本と共通するものが多い……  
ドンゴロの顔を眺めて微笑む。

大体、ドンゴロや、他の人々とも言葉通じるもんなあ……  
不思議に思ったが、光は特にそれについて深く考えることはしなかった。

梢の間から覗く空を見上げて、おにぎりを頬張り、しばらく安寧の時を過ごす。

「はあ、食った食った！」  
ドンゴロは食べ終わると、葉を元のように折りたたんで膝に置いた。

倒木の枝に吊るしていた竹筒を、手に取り蓋を開けて、喉を鳴らしながら中の水を嚥下する。

ゲップを一つ放ち、目を細めて青い空を眺めていた。  
時折、程よく冷たい風が、木々の間をぬって飄々と二人の後ろから吹き付ける。

柔らかい日差しの下で、光は倒木の幹に後ろ手について青空をみたままぼんやりしていた。

空腹が満たされ暖かい陽気の中、夢現の境を光は彷徨っていた。  
そんな時、

「なあ、光……」

ふいにドンゴロが、囁くような声で言った。

「なんですか」

光は間延びした口調で答える。

「おめー……実は記憶あんだろ？」

## 第四十一話、青空と勇者 回想その9

一瞬、喉にだらしく溜まっていた唾を飲み込む。

「う、ぐふ……ウ……」

上を向いたままの急な嚙下で、生唾が気管に入りかけて咳き込む。

「ぐほ……ゲホ……ふ……」

前屈みになって、しばらく喘いでようやく平穏が戻ると、

「そ、そんなわけないですよ、なんでいきなり……」

苦笑いを浮かべ、その場を取り繕うように言った。

ドンゴロは目を瞑って黙って俯いていた。

なんだいきなり!?

光は動揺していた。

全くの無防備なところに、今の予想外のドンゴロの言葉。

さしもの光も平然とはしていられなかった。

「ふ……俺達の目はごまかせねえよ」

光は狼狽しつつも、黙って相手の動向を見守る。

いつから……ばれた……?

「話してる相手の目みりゃわかるんだ」

「……………」

「お前……どこかの回し者じゃねえのか?」

ドンゴロは立ち上がると、袋から小刀をだして鞘から抜いた。

「おら、本当のこと吐いたほうが身のためだぜ?」

表情も一変して、殺気だった面持で小刀の切先を光の顎先に向ける。

「黙ってないでなにか言え!」

く……どうする……

予想だにしていなかった事態に、こめかみに冷たい汗を滴らせ当惑する。

詰め寄るドンゴロに怯み、半ば倒木に倒れるようにして背中をつける光。

小刀を握る手は振るえ、今にもその切先は振り下ろされるかに見えた。

「ふん……………」

だが、突然、ドンゴロが鼻を鳴らし、眉間に寄る皺を減らして立ち上がる。

「まあ、いい……………お前が吐かずとも知る方法はある……………そのためにここへ連れてきたんだし。」

「……………」

溜め込んだ怒気を抜くように息を吐き、光を見据えて言った。

呆然としながら、光は息を荒立てドンゴロを見上げる。

その瞳はまだ恐怖に打ち震えていた。

「立て！」

ドンゴロの右手にはしっかり小刀が握り締められている。表情は緩んだものの、口調にはまだ殺気のような緊迫したものが残っている。命令に従い、光は立ち上がった。

その後ろにドンゴロは回りこみ、背中に小刀の切先を当てた。

「あそこを入っていき！」

「は、はい……………」

光は顔面蒼白で、消え入るような声で答え命令に従う。

肩越しに前に伸びるドンゴロの手の示す方へ歩いていく。

広場を横切り、木々の一角に分け入り、その間を縫うように入っていく。

「よし、そこで止まれ……………」

光は言われるがまま立ち止まった。

ドンゴロに連れてこられた場所　そこには古びた木が立っている。

周りの木とは一線を描く独特の存在感を放っていた。  
ざらついた木肌は浅黒く、諸所の木皮が剥がれ落ちている。苔む

した根元は一部腐っていた。太い幹はここに根ざしてから長い年月が過ぎている事を見る者に容易に連想させる。

幹の中心付近は縦に裂けていて、丁度真ん中辺りに歪な空間を作り上げていた。

そこに広がる闇は深く、一種異様な雰囲気醸し出している。

「エンヤ婆さんよお、いるかあ？」

光の肩越しからドンゴロは声を張り上げた。

まるで、古木の亀裂に話しかけるかのように。

光は眼前の木から違和感のようなものを感じていた。

違和感というよりは 五感の外にある知覚が体の内でざわめいていた。

なんだ……この……

突然、どこからともなく、一陣の冷たい風が吹き抜け、周りを取り囲む木々がざわめく。

光の腕や足には鳥肌が広がっていた。

「おーい……」

ドンゴロはまた亀裂に向かって叫んだ。

だが、亀裂に吸い込まれた声が虚しく辺りに響くだけだった。

「……待つか……」

ドンゴロが光の肩を引っ張り、近くにあった岩に腰を下ろそうとした。

その刹那

「なんじゃああ……」

突然、光の目の前から気味の悪い声が聞こえ長く緒を引いた。

地から轟くような大きな声に、光は小さく悲鳴をあげ無意識のうちに横に飛びのく。

勢い余って倒れそうになるが、突き出した手をドンゴロに掴まれ事なきを得る。

「臆病じゃのお……」

「……………」

呆れたようにドンゴロが見下ろしている。

「あれを見てみる……」

ドンゴロがどこかを指し示す。

光はその先をみると、やはりさっきの古木があった。  
だが、何かがおかしい。

あの古木の根っこ……

古木の露出した根っこの部分が、最初見たときより明らかに数が  
増えていた。

そればかりか、見ている間にも形が変化しているように光の目に  
映る。

まさか……動いている？ それとも錯覚？

目を右手の甲でこしこし擦って再度見る。

明らかに……動いている……

地から生える幾筋もの根が蛇のように蠢いていた。

光は青褪めた顔でそれを見つめたまま、体全体を小刻みに震わせ  
る。

目の前で恐ろしい現象が続いていた。

古木の亀裂の暗い闇に、ぬうつと紅い光が二つ現れる。

亀裂を含む太い幹が、まるで暴風に煽られたように前後に揺らめ  
いていた。

そして

「おお…… ドンゴロか…… 久しぶりじゃのお……」

亀裂の闇の中から突然、くぐもった声が二人の耳に響いた。

ドンゴロはそれを聞くと、小刀を鞘にしまい腰に挿した。光の右  
腕を掴んだまま、その体を全身で推し進めするように古木まで歩い  
ていく。古木の前までやってくると、光の両肩を掴んで古木に向か  
せ、肩越しにドンゴロは亀裂に話しかけた。

「エンヤ婆さんも、元気そうだなにより」

「今日はよ、ちょっと用事があつてきたんだ」

「ほお……」

ドンゴロは顔を綻ばせて、亀裂から聞こえる声と話を交わしている。

古木の化生　ドンゴロはこの化け物をエンヤ婆と呼んでいた。

闇に浮ぶ並んだ紅い球体が、怪しく瞬き、光の顔を見据えている。

こ、こんな……化け物が……存在するな……んて……

眼前から受ける恐怖は並大抵のものではなかった。

日本では映画の特殊映像くらいでしかお目にかかれない代物が目の前に実存している。

光は倉皇として、その化け物との距離を離そうと後退するが、ドンゴロが後ろでがつちり厚い壁のように立ち尽くしている。

「いやあ、どうも、こいつ、化け物見るの初めてみたいなんじゃ」

「化け物って言い草は酷いのお……これでも木人、木の精の眷属ぞよ」

「まあ、大目にみてくれ、ハハハ」

光のわななきは後ろのいるドンゴロにも伝わっていた。

背後で退路を塞ぐように立ち、薄ら笑いを浮かべている。

「まあ……お前も……ここまで来たんだから……そう足掻くな……」

「え……？」

ドンゴロが耳元で声を潜めて言った。

光はその言葉を聞いているようで耳には入っていなかった。

目の前のエンヤ婆に気を奪われそれどころではない。

「ところでよあ、エンヤ婆、今日来たのはなあ、この青年、光っていうんだけどな、こいつを調べて欲しいんじゃ」

ドンゴロはエンヤ婆に頼み込むように左手を立てて言った。

それを聞いたエンヤ婆は、二つの紅い瞳を亀裂の闇で8の字を横にした軌道で転がし続ける。

しきりにドンゴロが自分の禿頭を、何度も指差すジェスチャーを

繰り返している。

「ほお、そうか、あれをしろっていうんじゃない」

エンヤ婆はドンゴロの意図を飲み込めたようで、紅い瞳をまた元の位置に戻した。

「うむ、頼む……」

低い唸り声が聞こえ、二つの紅い光球が亀裂の闇で歪に転がり始める。

闇の枠内をひとしきり、忙しく行き来した後、真ん中あたりで動きを止めた。

その紅い光の動きを無意識に追っているうちに、光はそれから目を離せなくなっていた。

眺めている間に、周りの空気がどろりと溶けるかのように滲んで見えてくる。

……眠い………

この光は一体……まさかさっきの……

光は瞼に受ける明るみを感じていた。

それをエンヤ婆の眼の紅い光だと思い、一瞬、身を竦ませる。

だが、意識は既に覚醒し、五感も明瞭に機能していた。

違う………それにここは……

背中に伝わる柔らかく心地よい温もり、手足や胸を覆う絹のような風合い。

周りに漂う暖かい落ち着いた空気は、日本の自室のそれと似ていた。

光はまさかと思い、目を静かに開けていく。

最初に目に入ったのは、白地に金色の丸い物体。

白く霞んで見えるので、目を擦って再度目を凝らした。



今度ははつきり見えた。

白い天井に吊るされた、金色の優美な装飾が美しいシャンデリアが映る。

体を少しだけ起こし、周りにゆっくり視線を流していく。

臙脂色の長いカーテンが視界に入る。

格子状の張り出し窓の横に据えられていた。

窓の片方にも同じものが一つ。窓の外には白いバルコニーが見える。

その向こうには青い空が眩く光っていた。

視線を近辺に戻してみる。白く清潔な布が胸の辺りまで被せられている。

アンティーク調の家具がそこここに見える。

まるでフランスかどこかの5つ星ホテルの一室のようだった。

ここは……どこだ……なんで俺はこんなところに……

光は頭を抱え混乱気味に記憶を手繰る。

あの化け物の眼を見た後……

だが、光の思考は途中で遮られる。

ハアハア……

空気が漏れるような音が、かなり近い位置から断続的に聞こえていたためだ。

光は耳に両手を当てて、音源を仔細に探りはじめた。

その音は 背後から聞こえているようだった。

何か後ろにいる……

背筋に冷たいものが走る。

光は人差し指を立てて、思い切って体を擦った。

「だ、誰だ！」

後ろを振り返るとそこには、ドンゴロが小刀を振り上げ立っていた。

第四十二話、青空と勇者 回想その10（前書き）

修正多めになっています。

## 第四十二話、青空と勇者 回想その10

やられる……

光は咄嗟にベッドから飛びのいた。

床に落ちて転がりながらも、肩膝をついた姿勢を取りドンゴロに向き直る。

その素早い身のこなしに、気後れした様子でドンゴロが回り込んでくる。

「中々やるな……」

手に持つ小刀を突然、部屋の隅に放り投げた。

「勝負しろ！」

拳をかち合わせて、ドンゴロが言った。

光は慌てて立ち上がる。

ドンゴロは腕を畳んで、ボクサーで言うファイティングポーズをとっている。

小刀を捨てた……肉弾戦か……しかし……

ドンゴロは握り締めた拳を胸元付近にかかげ、光を睨んでいた。闘志を漲らせている。

「どうして……」

光はわけがわからなかったが、思い当たる節はあった。

記憶障害の嘘がばれ、スパイ容疑をかけられている。

襲ってくる理由としては充分だ。

ただ、解せないことがあった。

エンヤ婆の紅い光を見ているうちに、気が遠くなったのは覚えている。

恐らく、あの後、気を失いここへ運ばれてきた。

そして、同じ部屋にドンゴロがいる。

ここへ自分を連れてきた一人であろうことは予想がついた。

なら……なぜ……今、襲われているのか？

光は頭を捻

るが、その理由が今一步掴めない。

連れてくる途中や寝ている間、いくらでも殺せる時間はあったはずだ。

「いくぞー」

ドンゴロは声を張り上げると、光に向かってくる。

右拳を固め後ろに引いて、殴りかかってきていた。

走る速度は、思ったほど速くはない。

仕方ない……

光は体を沈め、その拳の軌道を見極める。

ここだ！

頬をドンゴロの大きな拳が掠める。

だが、同時に光の拳も、ドンゴロに向かって伸びていた。

右クロス……

ドンゴロの顔面に深く拳が突き刺さる。

全身の体重を乗せて、そのまま拳を振りぬいた。

鈍い音が部屋に響いた。

カウンターパンチを受けたドンゴロは、背中から倒れこみそのまま床を滑って壁に激突した。

し、しまった……やりすぎた……

光はドンゴロが本気で襲ってきているとは思っていなかった。

小刀を捨てた時点で殺意はないと感じていた。

にもかかわらず、半信半疑なために、思いっきり殴ってしまった。拳を見つめながら、罪悪感に苛まれる。

「だ、大丈夫ですか？」

ドンゴロに駆け寄り、膝について屈む。

不可抗力とは言え、年老いたドンゴロに本気の拳を当ててしまった。

良心に咎められ、手を震わせて横たわるドンゴロに目を凝らす。仰向けに倒れたまま、ドンゴロは死んだようにピクリとも動かな

い。

頬は赤く張れて、鼻血が出ていた。

「ドンゴロさん、しっかりして！」

耳元で声を張り上げるが、反応がない。

まさか……

鼻に手を当てて呼吸を確かめる。

……息はしている……

左手首を掴んで脈を確認する。

脈もしっかりしていた。

光はほっと胸を撫で下ろす。

「おい、ドンゴロさん！？」

救急手当ての要領で、再度耳元で叫ぶ。  
すると、

「ぐが……」

ドンゴロは躰で返してきた。

寝てる？ いや、そんなはずは……

本当に寝ているように見える。

頭に衝撃を受けて……と光は考えていると、最悪の事態が浮ぶ。

「まさか……」

脳に障害が！？

光は立ち上がり、混乱気味に部屋を見回した。

救急車……！

咄嗟に電話を探していた。

しかし、ここは日本ではない。

真白になった頭の中に一瞬それがよぎる。

そうか……なら……人……助けを呼ばないと……

今自分が出る最善を尽くすため、入り口らしき扉へ走り開け放  
つ。

「きゃ！」

「え？」

そこには女の子が立っていた。

「どうしたんですか？」

大きな瞳を瞬きながら、少女はきょとんとした様子で光に尋ねた。

「君誰……？ いや、それどころじゃない、ド、ドンゴロさんが……  
大変なんだ」

「え……！？」

光は少女を中に招きいれ、ドンゴロが倒れている場所指し示す。

「ドンゴロさん！ どうしたの！？」

少女は一際大きな声を放ち、光を押しつけ傍に駆け寄った。  
青褪めた顔で変わり果てたドンゴロの姿を見下ろしている。

「ドンゴロさん、しっかりして！」

「ぐが……フゴ……」

声をかけると、やはりドンゴロは鼾で返した。

光は心配になり、申し訳なさそうに傍に歩み寄る。

少女は左手首の脈を取りながら、一方の空いた手を光に向けて、  
「あなたはそこで待ってて！ 気が散るわ！」

切迫した声に光は、びくりと肩を震わせ立ち止まる。

「脈は……あつたはずだよ、ただ、鼾が……」

少し離れた位置から、消え入るような声で囁く。

「脈……今停止してるみたい……」

「え？ そんなはずは……じゃ、じゃあ鼾は！」

と、光が狼狽して近付こうとすると、立ち上がった両手を開け行く手を遮る。

「これ以上何をしようって言うの？ 死んでる……彼は死んだの……」

光を真直ぐみつめて、毅然とした口調で光に言い聞かせる。

そして、間髪いれずに、

「何があつたか分からないけど、状況証拠だけ言えばあなたが……」  
ドンゴロを殺した事実を、静かだが明瞭に光に示唆した。

「そんな……俺が……人殺し……でも、相手が、ドンゴロが襲って  
きたんだ……」

光は少女に口ごもりながらも、正当防衛を訴えた。

「残念ながら、そんな言い訳はここでは通じないわ……人殺しは人  
殺し……」

冷めた口調で少女は酷薄に言い切った。

俺が……殺人犯……

「この国では……殺人犯は死刑……」

「え……？」

一言発して絶句する光。

俺……死刑！？

光のわななきが止まらない。

今にも膝を折り床に、崩れ落ちそうなる。

その光の右肩にそつと手を置き、紫色の瞳に悲壮感を漂わせなが  
らも微笑んでみせる。

「でも安心して……いまのところ、目撃者は私だけよ……、私が黙  
つていればばれないわ」

光は顔をあげ、優しさを湛える少女の顔をじつと見つめる。

この子……俺を救ってくれるのか？

藁にも縋る思いの中で、光の気持ちは少女に傾き始めていた。

それを感じ取ったのか、少女はしなやかな白い指で光の右手を絡  
め取り胸元へ運ぶ。

そして、光をみつめたまま、

「ここから離れましょう！一緒に逃げるのよ！」

凜とした表情で、語気を強めて光に訴えかける。

「ええ……でも俺、ここがどこだか、それに色々……」

しかし、光は突然の成行きに動転し口ごもった。

「一刻の猶予もないわ、私を連れてここから逃げるの！」

「へ？　なんであなたを？」

捲くし立てる少女のペースに飲まれかけた光だが、ふと違和感を感じて疑問を投げかける。

「なんでって、もうあなたと私は共犯者よ！　ここを出てどこかに身を隠してほとぼりが冷めるのを待つのよ」

それでも弁が立つ彼女に付け入る隙はなかった。確かに言っている事は道理に叶っている。自分を匿う以上、彼女も共犯者だと光は思う。普通であれば少女を巻きこまないよう、協力を拒んで一人で逃げるか、自首するのが筋だ。だが、光は死にたくはなかった。それに元々右も左も分らない異界。この世界の地理や文化に詳しくない光にとって、現地人である少女の同伴はありがたい。

この際……この子と逃げちまうか……

「とにかくここから出ましょう」

「そうしますか……」

光は腹を括った。

一蓮托生、この子と運命を共にする覚悟だ。

「この部屋の窓から外へ出れるわ」

窓を開けて外を見る、瞬間　膨大な風が下から吹き上げてきた。光の艶めく黒髪は逆立ち、激しく波打つ。

「うわ……ここは……」

真下に広がる白い雲海……

光はその雄大な景色に度肝を抜かれ、しばらく呆然と眺める。

「何ぼーっとしてるの！？　まあ、初めて見るんだから無理ないわね……この城砦は空の上にあるのよ」

「……………」

一瞬言葉を失う。

そんなおとぎ話に出てくるような城が……実在するなんて……



「でも安心して、私の魔法なら、落下速度を緩やかにできる」

「え？」

「時間がないわ、ほら、窓に足かけて」

無理やり背中を押され、窓の外に押し出されそうになる光。  
少女はぐいぐい押していた。

「ちよっとまったー！ 君達どこへいくつもり？」

#### 第四十三話、青空と勇者 回想その11

「ちょっと待っててくださいね」

「は、はい……」

部屋に入ってきた銀髪の男は少女と少し話した後、光に微笑んで言った。

優しさを湛えた目元、形のいい鼻梁、雪白の抜けるような肌を持つ美男子。

年の頃は光よりやや上、光は20後半くらいだと推測していた。

「はい！」

「あなたはこっち……」

作り笑いを浮かべて、光と一緒に居座ろうとした少女。

しかし、銀髪の男が表情を一瞬硬化させると、諦め顔で一緒についていった。

二人は仰向けに倒れているドンゴロの前で、ひそひそと話している。

光は怯えていた。

殺害現場からの逃亡に失敗した。

少女が言ってたように、裁判にかけられ死刑になってしまいうnderうるか？

そんな事を考えながら、不安げな視線を二人に注ぐ。

やがて、二人は小声ではあるが、激しい口論をしているようだった。

話すジェスチャーが荒々しくなっている。

男の束ねた長い銀髪が、頭の振りに合わせ白衣を着た背中では左右に揺れていた。

少女は肩まで伸びた緑の髪を掻き毟っている。

どんな口論を……

光はいたたまれなくなり、身を竦めて赤い絨毯に視線を落として耳を塞いだ。

もうなるようになるさ……

完全に外界からの刺激を遮断して内に籠る。

「もしもし」

突然、肩を揺すられ、現実を意識を連れ戻された光。

目を開けると、銀髪男が膝をついて下から覗き込んでいた。

気後れして顔をもたげると正面にはドンゴロが、その隣にはさっきの少女が立っている。

「うわ……わ……ドンゴロさん……」

光が瞳を驚愕に震わせ、思わず叫んだ。

口を魚のようにぱくぱくさせながら、二の句を告げようとすると、

「まあ、詳しい話はそのソファアーにかけて話しましょう」

銀髪の男が優しい微笑みを湛え、光の肩に手を置いて右手をソファアーに差し出す。

ソファアの片方に少女と銀髪の男、その向かいに光とドンゴロは腰を下ろした。

ドンゴロは銀髪の男に白い湿布のようなものを顔にはられ応急処置を受けていた。

「本当にごめんなさい、ドンゴロさん……」

「まあ、ルージュも反省してますし……」

ルージュと呼ばれた少女は、テーブルの上に身を乗り出し、目尻に丸い涙の粒をためて、向かいのドンゴロに頭を何度も下げる。その横合いから苦笑いを浮べつつ、二人のとりなしを続ける銀髪男。

「いやあ、気にせんでいいですよ、ハハハ、ルージュちゃんも反省

してるようですし」

最初はむくれていたが、二人の懸命な謝罪に折れたようにドンゴ口は口を開き苦笑いを浮かべる。

「ほんと、ごめんなさい」

「いいんじゃないよ」

「次から悪ふざけはやめようね、ルージュ」

「はい……」

そのうち話はまとまったようで、光以外はほっとした様子で安堵の表情を浮かべている。

だが、光は全く事情が掴めないでいた。

三人の話に入らず、部屋に漂う空気と一体化したようにひっそり座っていただけだ。

光は一人話題に取り残され、半ば妄想の中の住人となりつつあった。

そのうち、銀髪の男は忘れてたと言わんばかりに、光の顔を見て一言呻くと、

「あ、ごめん、自己紹介がまだだったね、僕はこのセギト城砦を管理するクライスって言います。よろしく」

屈託ない笑顔で光に握手を求める。

「え、あ、天草光といいます……」

光は気後れしたが、反射的に手を握り返した。

「私ルージュです！ よろしくね！」

さっきの少女が身を乗り出し、微笑んで手を差し出すので彼女の手も握り返す。

一先ず形式的に、全ての自己紹介が巡ると、見計らったようにクライスが口を開いた。

「それじゃえつと……光君、君は困惑してるだろうけど……さっきのルージュとの駆け落ちの件……、あれは全くの出鱈目ですから気にしないでくださいね。ルージュが魔法をつかって……悪戯しただけですから」

「はあ……」

クライスが歯切れ悪く語るが、光は何がどう悪戯なのか理解できなかった。

「気にするな光！」

ただ、ドンゴロは生きていたし、死刑になることはないと思っていた。

その点では幾らか安心してた。

ドンゴロが怒っていないか不安だったが、微笑みながら放ったこの言葉で杞憂だと感じる。

「光君は倭人らしいので、魔法とか言われても説明しにくいしねえ……」

クライスは独り言のように口元に手を当てて呟く。

何があつたのかを光にどうしても理解させたいようだった。

倭人ってなんだ……？

だが、光に新たな疑問を増やすことになっていた。

クライスは考えるように俯き、逡巡していると、

「私が代わりに砕いて話します！」

ルージュが割り込んできた。

「光君良く聞いてね、簡単に言つと……」

クライスは不安げにルージュを見るが、諦めたのか黙ったままその語りを見守る。

「あなたは私の魔法……つまり催眠術の一種に操られるドンゴロさんを殴り飛ばした。それは私の計算どおりで、あなたが部屋に飛び出してくるのも予想していました。そこで偶然を装ってドアの前でスタンバイしていた私とばったり会った。そこから私の思い描いたシナリオ通りに事を運び、あなたと下界に下りる予定だった……つまり……」

一呼吸おいて、ルージュは目を閉じたかと思うとかつと目を見開いて光を指差し、

「あなたは私の口車にまんまと騙されたってことなの！」

早口に勝ち誇ったように語気を強めて言った。

光は一瞬呆けていたが、

「まあ、もう済んだことだし……ハハ……」

特に心に波が立つこともなく、苦笑いを浮べて場を収めようとした。実際のところ、ルージュの説明を聞いても良く分からなかったが、もう既に光の中では済んだことと処理されていた。死刑や殺しの疑惑さえ解ければ経緯は光にとってはどうでもいい話だった。

だが、その光の大人の対応に逆に自分のしたことの恥を感じたのか、

「とにかく、悪いと思っています、ごめんなさい！」

ルージュは急にしおらしくなって素直に謝った。

緑の美しい髪が前方に流れ、その合間から目を堅く閉じている姿が光の目に映る。

何か良く分からないけど……

「ドンゴロさんは生きていたし、罪は晴れたようなので」

光はそう声をかけ宥めると、ルージュは顔を上げ頬を赤くして微笑んだ。

「さてと、光君、大体話はドンゴロさんから聞いています。まあ、この世界のこと一応ドンゴロさんに説明は受けたらしいけど、まだ分からない部分も多いと思う。ただ了承は得ているということなので、ゆっくりでいいですから慣れていってください」

「はあ……？」

クライスが突然堰を切ったように、事務的な口調で話す。

光はその内容が唐突すぎてよく理解できない。

「あの……」

「はい……？」

何のことかクライスに尋ねようとすると、

「あ、はい！ 光には重々説明しておりますので心配ありません！

「  
遮るようにドンゴロが話を進める。」

「じゃあ、他の詳しい説明は入隊式の始る前にでもしましょうか。  
まだ疲れがあるだろうから、3時間ほどしたら迎えにきます。その  
時まで私は失礼しますね」

「わ、分かりました……」

「じゃあねー！ また会いましょう！」

クライスは品のある笑みを浮かべて一礼し、白衣を翻し部屋を出  
て行く。

ルージユも無垢な笑みを光に投げかけ、クライスの後を追って外  
の廊下へ消えていった。

二人の気配が消えると、光は大きな溜息をついた。  
首の後ろでドンゴロの刃物が鈍く光っていた。

「すまぬ……ああするしかなかったんじゃ……」

「よく分からないんですけど……わけ有りですか」

「う、うむ……悪いな……説明もなんもなしでここまで連れてきて  
しまって……く、詳しいことは今から話そう……」

ドンゴロは光にそう話した後、素早く部屋の入り口に寄り、扉を  
少しあけて顔をだし廊下に誰もいない事を窺うと、扉をそっと閉じ  
て内側から鍵をかけた。そして、ソファーに座るよう光に促す。そ  
の向かいにドンゴロは座った。真剣な表情で光を見つめる。

「なぜここへ連れてきたのかとか……真っ先に聞きたいじゃろうが  
……その前にお前には知ってもらいたい事が山ほどある……段階的  
に話すぞ……まず、この場所、このセギトが浮いている国、その成  
り立ちから話そうと思う……」

ドンゴロは罰が悪そうに口を切ると、まず今いる場所について語  
りだした。

話を要約すると

クライスは今光がいる空に浮ぶ城砦『セギト』の管理者兼支配者である。

セギトはマイル共和国の領地内に浮いている。

マイルは以前はゼームス大陸に数ある人間が統治する国の一つであった。

しかし、二年前、現魔王の元、魔王軍は人間の領土に侵入を開始した。

その際、魔王軍に最後まで抗った国々の民衆や王族、兵士は多数惨殺された。

マイルはその国の一つであった。

魔王は抗う者にたして容赦はなかった。

しかし、本来の目的はゼームス大陸の覇権を握ることであって、人間の全滅を望んではない。

魔王に抗った国の王を殺し、魔王自らが選んだ魔族をその国の王としたが、その国で生き残った人間達を根絶やしにすることはしなかった。魔王は新しい魔族の王に、魔族と人間が共存共栄できる国を目指すことを公言させ、生き残った人間達にそれを求めた。

「なるほど……」

あまりに話しが壮大なために光は理屈では分かっていたが、俄かにイメージとして内に浸透してこない。感覚としては、歴史の講義を講師に聞かされているようなものだった。

「まあ、そういうことで、この国は一応は人間と魔族が共に暮らしてはいる……まあ、実質的には魔族の王が実権を握っていて、人間には不利なことも多い。当たり前っちゃ当たり前だがな」

「なるほど……」

光は話を聞いているうちに、少しは興味が湧いてきていた。

それと同時にこの世界の成り立ちについても薄っすらではあるが把握し始めていた。

「魔族の支配下に置かれてから、この国には魔族の移住が増えた。その中の一人がこのセギトの管理者クライス様じゃ」



「そうすると、あの人は魔族なんだ？」

「そういうことだ」

この時、光は大体の力関係は分かったが、魔王や魔族の存在やその詳細についてよく分かっていない。ただ、そういう民族がいると理解していた。そして、今それをここでドンゴロに詳しく聞こうとは思わなかった。話がややこしくなりそうだと感じていたからだ。

ドンゴロは一息ついて、少し間を空けた後、手を口にあてて一度咳き込む。

「しかし……俺がわざわざお前に、なんでこれほど細かい説明するかわかるか……？」

そして、片目を瞑って、神妙な面持で問いかけるように光に謎を投げかけた。

## 第四十四話、青空と勇者 回想その12

「さあ……分かりません……」

光は少し考える素振りを見せたが、答えを導き出せなかった。

「そうか……なら言おう、俺がこれほど詳しくお前に説明する理由、それはお前が倭人だからだ」

光はソファーに体を沈め、半ば呆けていたが倭人と聞いて、

「ああ、クライスって人も言っていましたね」

「うむ……先に伝えて置いたからの」

「ところで、倭人って何ですか？」

光が尋ねると、ドンゴロは返答に困ったように口を閉ざし首を傾げた。そのまま円を描くように首を回し、また元の位置に戻す。

「倭人とはつまり……このゼームス大陸が存在する空間の裏というか、向こう側というか……とにかく、今いる場所とは別次元に存在する倭国という国から何らかの方法でこちらへやってきた人間ということじゃ」

ドンゴロも実際のところ、その倭国の存在について曖昧なことしか言えなかった。

何しろ噂で聞いただけの話である。実際にこちらへやってきた倭人と会うのは光が始めてだった。

が、光はそれを聞くや目を見開いて驚いたような顔をした。

まさか……倭国って日本のことじゃ……もしそうなら……俺が日本からこの世界に迷い込んだ人間だと知ったってことか？

光は不可思議な高揚感に身を包み、鳴りを潜めて話に耳を傾ける。「お前をここへ連れてくる決め手になったのも、やはりお前が倭人であるからなんだ」

「何ですか？」

「またはなすと長いんじゃないが……クライス様の求める人材として倭人は都合がいいからだ、そうだな、次はここへ連れてくることにな

った経緯を話そうか……」

ドンゴロは大きなため意をつき顔をしかめた。

気短で長い話を順を追って話せるほど能弁でもなく、頭が良いわけでもない。

しかし、ここへ光を連れてきた以上義務を果たさなければならぬい。

不承不承ながらも、拙い言葉で散乱した記憶をばつぽつと口から捻り出していく。

マイルの領土の上空に浮ぶセギト城砦。

クライスはこの城砦を魔族の国ラフレシアからマイルに移動させた。

その理由は興味本位もあったが、何より人間達との交流を持つがためだった。

クライスは元々、純粋な魔族ではない。人間と魔族の間に生まれるたいわばハーフだった。

一人の魔族を慕った人間の母、その魔族と結ばれてきた子供がクライスだった。

魔族の中でも身分の高い魔侯の爵位を持つクライスの父。

人間の女と契りを結ぶ事に周りの魔族からは猛反対を受けた。

有史以来、魔族と人間は何度も争いや紛争を起こしいがみ合ってきた。

その禍根は悠久の年月の中で多少は癒されたものの、まだ各々の通底には差別意識や敵意は依然として残されている。故に、クライスの父と母の契りは祝福されたものではなかった。

それでも、周りの反対を意に介さず、クライスの父は母を魔族の国の自分の屋敷に迎えた。

クライスは母に人間の国での話しをおとぎ話のように幼少から聞かされ育った。

そういうこともあってか、人間には他の魔族が持つ蔑みや嫌悪の感情はもっていない。それどころか、憧憬や好奇心の対象として人間や、その文化を捉えており、魔族の統治下に置かれ足を踏み入れることができるようになると、真つ先にマイルの国に城砦を移動し住む事に決めた。

「そういった家系で育ったクライス様は地上に降りて、無論、様々な村や町、王都を巡り、人間達と積極的に触れ合いなされた。そして、その文化を堪能された。最初は怯えていた人間達だったが、クライス様はそんな彼等に心を開けて優しく話しかけた。相手の文化を否定せず、それでいて、魔族であることを鼻にかけない鷹揚な姿に徐々に人間達は打ち解けていった。そうした活動もあってか、今じゃ……クライス様は、マイルで最も信頼され、親しまれている魔族の一人になられた」

しかし、クライスが人間に好かれれば好かれるほど、それに不満を覚えるものも多い。

特に王都に居を構える魔族の中には、クライスを煙たがっている者は少なくない。

例えばセギト城砦が空にあるといっても、クライスに反感を抱いた者達が邪魔に思い、手練の暗殺者を送り込んでくる可能性もなきにしもあらずだった。魔族の中には空を自由に行き来できる飛行能力を持つ者もいる。クライスの城砦には一応兵と呼べる者達はいたが、その数は決して多くはない。ハーフの魔族は純粋な魔族からは嘲弄の対象とされていた。そんなクライスに仕えようとする魔族は少なかった。

「クライス様のお父上は身分の高いお方だ。それなりに屈強な魔族をクライス様のもとへ護衛に送ってはいる。だがそれでも、数の面でいえば決して充足されているとはいえない。クライス様は用心深く先見性に優れたお方だ。万が一のことを考えて兵の増強策を考えているうちに思い至った。魔族がだめなら、人間の兵を集める事に……。クライス様は人間達から騎士見習いの名目で兵を募ることに

した。だが、魔族も住むマイルで公にそれを募集することは何かとやりくい。そこでクライス様は人集めを信頼のおける者に依頼することにした」

クライスは人間達との交流の中で顔を広げ、信頼に足る者にだけその事を話した。

そして、三人ほどその委託を許諾してくれた者がいた。

「その一人がうちのミリガン様じゃ……」

クライスは一人連れてくることに報酬として3万ジルを約束している。

この国での3万ジルは高額である。

クライスは委託する際、人を絞る条件をつけていた。

まず、天涯孤独の身の上である、

年若い青年であること。

必ず相手の了承を得ること。

これらの条件を満たしたものでないと、この任の話はしないことも付け加えられている。

ドンゴロはたまたま道すがらで何の因果か光と出会った。

記憶障害のある青年、条件にあうかは微妙だった。

「だけどよー、俺達も結構ギリギリの生活をしていてな……この仕事はおいしいわけよ。だが、誰でもいいわけじゃないし、ターゲットを絞るために人の多そうな町や村を探し、その近くに掘っ立て小屋でも立てて見つかるまで数日はそこで過ごさなければいけない。移動にしても路銀はかかるし、衣食住にも金にかかる。それに加え、調査するにしても、口利きを雇ったり、誘い出すのにそれなりの土産を持参したりと、コストも時間もそれなりに費やすことになる。報酬はそれを差し引いても高額には変わりないが、やはりコストと時間はできるだけ削りたいのは本音だ。だからといって、面倒だからって手当たり次第浚うわけにもいかない。そんな事をすれば人目について、その土地に留まっていられなくなるし、クライス様にそんな乱暴なやり方が知れば愛想をつかされ、信頼を失ってしまう。

だから、一応俺達の目利きで選んで、条件にあうかな？　って思えた奴と交渉することになっている」

「それで俺を……？」

ドンゴロは光に聞かれ、複雑な表情で口を一字に結んだ。

ふーっと息を吐いて、目を細めると口を歪めて話し始める。

「あの日はよ……俺は趣味の山菜取りをするためだけに創世の森に来たんだ。はつきり言つて、クライス様の仕事の事は頭になかった。森近くで倒れてるお前を見て、最初は無視していたんだ……しかしよ、あの時言つたが、あの辺りは知能の低い凶暴な魔族がうるうるしててな……ほっとけば、十中八九お前は食われてしまう。俺もよ、善人なぞでは決してないんだけどよ、何か気にかかつて声かけてしまったんじゃ。最初は適当に話して別れるつもりだった。実際別れたしな……しかし、お前は俺に記憶喪失だと話し縋ってきた。見れば、お前は年だけ言えばクライス様の求める人材に当てはまる。これで天涯孤独なら儲けもんだ。だが、記憶障害があるためそれは分からないときやがる。だがよ、もし本当に記憶がないなら巧く言いくるめれば条件にあうかどうか怪しくてもクライス様の元へ送り込めるのではと、思ったわけよ。俺はついついそんな調子で安易にお前をアジトへ連れ帰った。しかし……」

ドンゴロは光を連れてきた詳細をミリガンに話した。

しかし、ミリガンは安易な判断で光を連れてきたドンゴロに、拳を固め怒りを露にした。

「そんな理由で氏素性の分からねえ人間をアジトに連れてくるなんてどやされたよ……俺はお前の顔が嘘をついているように見えなかったのと軽い気持ちで連れてきたんだけどよ。ミリガン様は用心深いお方だ。お前が記憶障害と偽っているんじゃないかってまず疑いなさった」

取りあえず、ミリガンは連れてきてしまった者は仕方がないと、ドンゴロと二人で光と対面はして見ることにした。それ以外の者には小屋から出ることを一切しないように命じていた。

光と面と向かって話しているうちにミリガンの懷疑の念は募っていった。

「お前も感づいているかもしれないが……俺たちや真つ当な者の集りじゃなくてよ……」

ミリガンは光には行商一座などと話したが、実際は盗賊まがいのことでもやっていた。

各地を巡っては道で出会った人間から追剥をしたり、商人の一団のキャンプを襲ったりもして金や食料を巻き上げていた。そんなこともあつて、場所によってはその国の治安警備隊から監視の対象とされていたり、実際追つ手を差し向けられたこともあつた。

「そんな事もあつて、ミリガン様はお前をそいつらがアジトの場所を発見し、送り込んだスパイではないかと疑つたんだ……つまり、俺達の動向を内部から探つて、あわよくば盗賊の実態や繋がる組織まで暴こうとする王宮のスパイじゃないかつてな……」

「なるほど……だからか……」

光はそこまで聞いて、最初の予測とは違っていたが、納得がいったように腕を組んだ。

しかし、早い段階から疑われてたんだな……

動揺してたとはいえ、あの時の自分の浅薄な推測の数々に気恥ずかしい思いで、話を続けるドンゴロにまた耳を澄ました。

「ミリガン様や仲間にいらぬを心配をかけて、俺はその時は本当後悔したよ……」

取りあえず、ミリガンは饗応でもてなし事を荒立てることなく光と話して探つてみた。その間、アジトの周りをジャニスに探索させた。仲間が見張っているかもしれないからだ。

だが、ジャニスの報告から取りあえず、近い位置に敵の脅威がない事を知った。しかし、光のスパイ疑惑はまだ拭いきれていない。

拷問しても吐かせても良かったのだが、スパイを痛めつけて王宮を刺激しては後々締め付けもよりきつくなる。殺害などしようものなら王宮は盗賊殲滅に本腰を入れることになるだろう。

ミリガンはそれだけは避けたいと思う。ただ、これまでのスパイ疑惑は飽くまで仮説に過ぎない。光がスパイである確証がない今の時点では動きは取りづらい。

「ミリガン様は頭の良いお方だ、連れてきた者は仕方がないと仰つて、今の状況を乗り切ることに全力で頭を捻つてらっしゃった」

饗応中に、それとなく嘘情報を流し相手の動向を見守ることにした。

すると、光はミリガンの話を肯定し、了承した。

「お前が了承したことで、またミリガン様は悩んだが……」

ミリガンに光の意図が今ひとつ分からなかった。嘘の話だと分かっていて了承をした。スパイであるなら、しばらく言われるがまま、行動を共にし情報を引き出そうという考えかもしれないと思った。しかし、どこに連れて行かれるかも分からないのに、長居するのはスパイにとつても命がけである。ミリガンは決断した。ある程度自分の考えたシナリオの中で光を泳がしてみることにした。スパイであるかどうかは、あの場所にさえ連れて行けば……という気持ちがあったからだ。

「つまり、ミリガン様はお前をエンヤ婆の元へ連れて行くことに決めたんだ。お前は分からないだろうが、この国には相手の頭脳の中の情報を引き出す吸引という魔法があるんだ。それさえ使えば、お前が何者であるかを突き止めるのは造作もないことだった。しかし、俺達の仲間にそれを使えるものはいない。あの魔法は高等な魔族とごく一部の人間しか使えないんだ」

「なるほど……そのために……俺をあの化け物の元へ……」

「そう、エンヤ婆はあの山の主である木人だ。木人は知力に長けた魔族でな、魔法の類にも広く精通している、吸引を使える数少ない魔族だ。俺とミリガン様は彼女のちよつとした知り合いでな、今回利用させてもらうことにしたんだ」

吸引さえすれば、相手の思考は読み取れる。ミリガンはドンゴロに光を連れて行く任を与えた。そして、万が一を考え、石橋を叩い



て、夜のうちに仲間と共にその場所を移ることにした。

「まあ山に着いてからエンヤ婆に合わせる前にお前を小刀で脅してみたがな……責任の負い目もあったし、少しくらいなら良いかと思つて小刀をちらつかせて、何か吐かないか試してはみた。無論、それは脅しによつて正体をあぶりだす意図もあったが……途中で時間の無駄だと思いやめた……」

やつぱり、この爺さん侮れねえ……

エンヤ婆は催眠の魔法を使い、光の意識を奪つた後、その情報を取り出した。

『おお、こやつ、この世界のものじゃないぞ』  
『なに……？』

エンヤ婆は少し記憶を見ただけで、光がこの世界の住人ではなく倭人であることをつきとめた。

「俺は最初は戸惑つたが、倭人のことは聞いたことがあったので、しばらく考えて、取りあえず、ミリガン様に報告をすることにした。その際、遠距離にいる相手と念話を使つて意思交換ができる念交玉を使つてその旨を伝えてみた」

念交玉はこの大陸で最もポピュラーな交信手段だった。

見た目はエメラルド色に光る拳サイズの丸い玉だ。持ち運びに適したサイズだった。

ミリガンはその時、川筋を下つた先にある小さな森の中に潜伏していた。

ドンゴロの口から倭人である事を聞くと、しばらく低い唸りを長く引いていたが、急に声を穏かなものに変えて、ドンゴロにクライスの元へ光を送るよう指示した。

「俺は驚いた……ずっと慎重に事を運び疑いを光に向け続けていたミリガン様が、ここに至つて、いきなり光をクライス様のところへ……しかし、話を聞いているうちにその疑問は解けていった。倭人

であれば、この世界に見知った存在はいない、つまり天涯孤独も当然。年若い青年。二つの条件をクリアできていた。了承を得ることについては、多少はミリガン様も悩んでらしたが、お前は嘘話を聞かせた時点で、どこぞの分らない屋敷に向かうことを承諾したので、今回の話をしても大丈夫だろうっていうミリガン様の思惑だった。故に柵から牡丹餅とばかりに、急遽ミリガン様はお前をクライス様に送ることにしたんだ」

「なるほど……」

光は長くなってきた話に、適当に相槌を打ち聞いていた。

裏側でこれほどまで組織的且、計画的に事を運んでいたことにある意味感銘を受けていた。

「だがな……クライス様はあの通り、品があり粗暴な行いを嫌うお方じゃ。お前をこんな荒っぽい方法で連れてきたことがばれると、大目玉を食ってしまう。故に手厚くもてなし、噛んで含めるような説明をして了承を得たって事をクライス様に伝えた」

「はは……」

光は苦笑した。罰が悪そうに光を一瞥してドンゴロは一度咳き込んだ。

伝えた後、光に説明をして了承を得て、そのままクライスの城砦へすぐに向かうはずだった。

しかし、エンヤ婆の術の効果で眠りに落ちた光だったが、効果時間が長いせいか、中々目を覚さまそうとしなかった。エンヤ婆の元へ戻って術と解いてもらうこともできたが、ドンゴロと話した後エンヤ婆はまた眠りについてしまっていた。一度眠りにつくと木人は3日は目覚めない。連絡をした以上、早急にセギトに向かわなければいけないのでドンゴロは焦った。光を平手で叩いたり体を揺り動かして懸命に起こそうとはした。

だが、光はどうやっても目覚めなかった……仕方がないのでドンゴロはまた念交玉を使ってクライスに連絡を取り、向かう途中で光

が魔物の急襲を受け、眠りの魔法を受けたと伝えておいた。

「しかしじゃ……セギトへ着いてもお前は目覚めない……早く本当のところを説明したかった。変な間で起きられて説明もなしにクライス様と接触することは避けたかった。俺はいちかばちか、刃物を抜いて、お前の顔を刃先でつついてみようと考えた」

「え……？」

思わず顔を青くして、光は顔の表面を隈なく両手で触る。

しかし、傷はついていないようだった。

「大丈夫じゃ、何もしてはいない、邪魔が入ったんで……俺は刃物の先を軽く降ろそうとしたとき、急に眠くなった……」

それはルージユが魔法を使って自らの計画を実行させようとドンゴロを利用したせいだった。

「で、次、目覚めたら、俺は手傷を負って、目の前にクライス様がいるじゃねえか、ほんとルージユにも困ったものだよ、可愛い顔してやることが度を越す子でな……」

「なるほど……」

「まあ、とにかくお前は倭人なんだ。今更見知らぬ土地で一人生きていくのも難しかろう、ここは一つ俺達の意を汲んでここで頑張ってみないか？」

光は少し間を空けて考える素振りを見せた。

ドンゴロはここで了承をしないと、次に何をしてくるか予想がつかない。

事実、微笑んでいるように見えるが、目が笑っていないかった。

光にとってもそう悪い話ではない。実際、今一人でこの世界に投げ出されれば生きて行く自信はなかった。ドンゴロに言われるまでもなく答えはイエスだった。

#### 第四十四話、青空と勇者 回想その12（後書き）

一杯一杯です……未知の領域（能力を超えた部分）に入って、四苦八苦しながら書いています……

## 第四十五話、青空と勇者 回想その13

3 時間後 クライスは言ったとおり部屋に戻ってきた。

ドンゴロと光は大体の話を終えて、静かに座っていた。

「光君、調子はどうかな？」

「おかげさまで、大分疲れは取れました」

光の瞳は澄んだ輝きに満たされていた。

ドンゴロの話を聞いてある程度得心が行き、当面の落ち着き先もみつきり生活面では目処が立った。とはいえ、騎士見習い 大事な事をするのか見当がつかない。不安がないと言えは嘘になる。

「そうか、じゃあ私の部屋へいきましよう。そこで君に詳しい話を  
するよ」

「はい」

しかし、考えたところで知る由もなく、クライスに導かれるまま付いていく他なかった。

「お別れじゃ、光頑張つてな！」

ドンゴロは満面の笑みで光に手を振る。

「有難う、ドンゴロさん……」

光は名残惜しい様子でドンゴロに振り返ったまましばし眺める。

この世界に来て最初に出会い、短期間ではあったが色々世話になったドンゴロと今こうして、袂を分かつ事に後ろ髪惹かれる思いがしていた。光を連れてきたドンゴロの目的は決して褒められたものではない。だが、化け物のうろつく創世の森から光を連れ出し、先を立て歩き光を導くその背中中、未知の世界に來たばかりの光にとつてどれだけ頼もしいものであったか。お腹のすいた光に饗応の際、振舞ったご馳走、朝食、山で手渡されたおにぎり……これまでを振り返ると、胸に熱い思いが去來する。すぐにこの場を去る気にはなれなかった。

「……………光……………達者でな！ またいつか会おう！」

ドンゴロも感じるものがあつたのか、光に一瞬何か言おうとしたが、俯いて言葉を飲み込んだ風で、最後には元の明るさを取り戻し、力強い口調で光を送り出す。

光はそれをみて勇気づけられたのか、踏ん切りがついたようで、手を二三度振ると、

「またどこかで！」

と快活に言つて、クライムと顔を見合わせ頷き部屋を後にした。

先に立つて、石材を敷き詰めた廊下をクライスが歩いていく。

突き当たりの階段に來ると、そこを昇り、長い廊下にでると三つ目の扉の前で足を止めた。

「さあ入つて！」

「はい」

部屋にはいると、高級そうな木材を使った机が部屋の真ん中に鎮座していた。

その奥にクライスが座り、その向かいに置かれる丸い椅子に光は腰を降ろす。

青い壁に書架が一つ、大きな窓らしきものがあるが、琥珀色のカーテンで閉ざされている。他にはあまり物が置かれていない。今までの部屋に比べると殺風景だった。面接室のようなものと光は思う。

「まあ、気楽にしてくれ」

クライスの後ろの壁には大きな地図が張られていた。

これが……ここの地図か……

瓢箪型の大きな大陸が示されている。そのまわりに小さな島らしきものや、太陽を司つたと思われる不思議な絵が認められていた。

「君はドンゴロさん達にここで騎士見習いを募っていると説明を受け、そして騎士見習いの任を受ける意志を彼らに示しここにやって

きた……相違はないかな？」

「は、はい」

クライスは念を押すように光に聞いた。  
首を縦に振り、光はそれを肯定した。

クライスは目を閉じて机の上で手を組んで間をあける。

そして、細い目を見開き、光の内奥まで見通すかのような青い瞳で光を見据える。

喉をぐくりと言わせて、クライスを真直ぐ見つめる。そのうち無言のまま、クライスは口元を綻ばせた。

「本気のようなね……さてと……話をしましょうか、といっても……」

テーブルの上で手を擦り合わせ、クライスは言葉を搜しているようだった。

額にかかる銀色の髪を一度上側に撫でつけたかと思うと、口を切り始める。

「……詳しい話をすると言いましたが……特に話すことはないんです。あなたには……この世界にまずなれてもらい、世界を知ってもらうことが先決です」

「はい」

光はクライスの言い様に安堵を覚える。

「……やりやすい……」

クライスは光が異界の住人だという事を前提に話している。

その事は光にとって何よりも有難かった。

「取りあえず、これから行動を共にする仲間と顔合わせしてもらい、彼等と親睦を深める事に尽力してもらいたい。そして、色々彼等からこの世界の知識を吸収して欲しいと思います」

「はい」

「私から今話せるのはこれだけなんです……何か質問あれば何でも聞いてください」

クライスは淡々と話を進めた。

考えればいくらでも質問は浮ぶが、敢てそれを口にはしなかった。これから目で見て肌で感じるうちにそれは分かってくるだろうと光は考えた。

「じゃ皆に合わせましょうか、一階の控え室で入隊式をします」

そう言った矢先、扉を誰かがノックした。

「どうぞ」

「失礼致します」

入って来た者を見て光は思わず息を呑む。

「光、彼は……」

「はじめまして、ここの執事をやっておりますフォルカスと申します」

クライスが紹介しようとする前に、さらりと自ら名乗った。

その容貌を目にした光は、異相とも言えるフォルカスの風采にしばし呆然と口を閉ざす。

濃紺の長衣を身に纏った老人　それだけなら驚きはしなかった。しかし、丸みを帯びた皺だらけの顔には大きな目が一つしかついていない。

つむじの辺りから聳える白い角、根元に皺が寄った長い鼻、どこをとっても……

化け物……

光は身を竦めてその姿に怯えた視線を置きっぱなしにした。

黙ったまま縮こまる光に苦笑いを浮かべて、どうしたのかな？

つとクライスは背を屈めて覗き込む。間近にクライスの顔が迫ると、光は呪縛を解かれたように我に返った。

「は、はじめまして……人間の光言います……」

一瞬沈黙が降りるが、

「ははは……光君は倭人なんだ、あっちでは……魔族は珍しいみたいなんだよ……」

クライスは光が倭人である事を強調しフォルカスを見て言った。



「なるほど……」

フォルカスは一つ目の下に赤い亀裂を横に引き低く笑った。

「じゃあ、フォルカス、私も後で行くから、彼を控え室に連れて行ってくれ」

「分かりました……」

軽く手を振り、白衣を翻してクライスが足早に去っていく。

扉が閉められ、石床を叩く足音が遠ざかっていく。

全くその気配が消えると　フォルカスの態度が一変した。

長い鼻の付け根にある鼻腔から息をふんと吐き出し、一つ目に瞼を伏せてじつと光を見下ろした。

「弱そうだな……」

独り言のように呟き、値踏みするかのように光の姿を丹念に睨め回す。

息を吞んで、光はじつと立ち竦む。

クライスとはまるで違う険悪な雰囲気、光は当惑していた。

異相の姿も合わさり、恐怖すら感じて慄いていた。

フォルカスは萎縮した光を見て嘲笑するかのように口端を吊り上げる。

そして、くるつと身を反転させたかと思うと、

「さてと……今からお前を控え室へ連れて行く……遅れるなよ……」

面倒くさそうに言い放ち、長い裾を床に引きながら部屋を出て行く。

気後れして、その後姿を最初は見送っていたが、

「ま、待ってください……」

はっとして声を上げ、急いで後を追う。

フォルカスは光と背の高さはあまり変わらない。

しかし、光は付いていくのに早足で追っていた。

なんて早いんだ……

石畳の床を滑るように進んでいく。

それだけの速度を維持しながら、裾の内からは足音すら聞こえてこない。

薄暗い回廊を抜けると、急に明るさを増し赤い床が敷き詰められた廊下に出る。

右側には金色の枠で縁取られた開閉式の窓が等間隔に並んでいて、青い空がその向こうに広がっている。左側には赤い扉が同じように間隔をあけて白亜の壁を区切っていた。突き当たりまでやってくる、茶褐色の木の階段が下へと繋がっている。

フォルカスは階段においても、足音すら立てる事無く同じ速度で降りていく。

が、光はそうはいかない。その背を追って、バタバタ足音を響かせ階段を走り降りなければいけなかった。階下に下りると、白亜の壁が続く廊下がまた現れ、赤い扉が並んでいる。

2つ、3つと進むうちに、フォルカスは突然足を止めた。

「お前何してるんだ？」

「え？」

反射的に光は身を竦め声を漏らした。

しかし、フォルカスは光とは逆の方向を向いたままだ。

俺のことじゃないのか……？

光はフォルカスの頭の角度から、視線の先の大体の見当をつける。そちらを見やると、真白な石像が置かれていた。

半裸の女性が右手を掲げ、少し上向き加減で虚空を見つめている。その石像以外は何も見当たらなかった。

「3階の警備を言い渡したはずだぞ」

だが、フォルカスは石像に向かって続けた。

光はじつと石像を見るが動き出しそうな気配もない。

だが、足元に視線を落した矢先、何かが動いたような気がした。

石像の前で陽炎のように揺らめく得体の知れない輪郭

何かいる……

光がそれを見咎めた瞬間、

「フォルカスにはかなわねえな……………」

突如、どこからか声が響く。

次にペタペタと足音が聞こえ、しばらくして途絶えた。

光は音のした方に目を凝らすと、何も無い空間に色が滲みはじめていた。

見る間に透明のキャンパスが染め上がっていく。

全体が濃緑に染め上がり、頭と思われる場所に赤い目玉が浮かび上がる。

まるで爬虫類のトカゲを思わせる風体　そんな化け物がフォルカスの前に姿を現した。

「よく見つけたなあ……………」

「ばればれだガイル……………」

ガイルと呼ばれた化け物はフォルカスと親しい口振りで話す。

「お、そいつ新人かい？」

「そうだ……………」

ガイルは光を見つけると、ぺたぺた足音を鳴らしながら歩み寄る。  
「よう、俺はガイルってんだ、セギトの警備を任されている者だ、よろしくな！」

澁刺とした声で自己紹介をし手を差し出す。光はまた気後れを覚え間を空けてしまう。エンヤ婆、フォルカスと出会い、多少は異形に慣れてきたはずだった。しかし、このグロテスクな姿を目にしてたじろいでいた。ガイルが差し出した右手に目を凝らす。細長い6本の指の間には白い水かきのようなものがついている。

気持ち悪い……………」

生理的嫌悪が先に立つが、内から勇氣のようなものを振り絞り、

「光です、人間です、よろしく……………」

仕方なくそのべたついた手を握る。ひんやりと冷たく、ぬめりがあり、不快な感触に顔が歪みそうになるのをぐっと堪えなんとか笑

顔を作る。

「ほら、もういいだろ」

「じゃまたなー!」

フォルカスに怪訝な顔で睨まれると、ガイルは光に手を振りながら走り去っていく。

その後ろ姿は光の目に、どこことなく陽気に映った。

……悪い化け物ではないかもな……

フォルカスはまた歩みを再開し、少し行ったところで足を止めた。

「ここだ……」

赤い扉の前で光に言った。

その扉に手を押し当て開け放ち、先に中へ入る。

「フォルカスだ……」

「お前等、仲間連れてきたぞ……」

中から数人のざわめきが光の耳に届く。

## 第四十六話、青空と勇者 回想その14

フォルカスは光を招き入れると、

「じゃ、ジース後は頼む……」

一言残し一つ目を細めて部屋内を軽く見回した後、扉を開けて部屋を出て行った。

光はぽつねんと立ち尽くしたまま、部屋にいる数名の好奇の眼差しを一身に受け止める。

俯いて顔をほんのり朱色に染めて、恥ずかしそうに両手を臍の辺りでもじもじさせる。

幾重の視線を交わすかのように、光はちらりと辺りに視線を散らした。

中はゆったりして奥行きがあった。青い壁に覆われた部屋には、壁際に縦に長い金属の箱が敷き詰められている。しかし、その他は奥に長いベンチがあるだけの質素な部屋だ。ベンチに二人、壁際に一人、真正面に座り込んでいる三人、光含めて七人がこの部屋にいる。

正面に座る三人の一人はルージュだった。床に寝そべり、笑顔で光に手を振っている。

ルージュの隣に肩膝を立てて座っていた青年が立ち上がった。動きやすそうな青い衣服を身につけ、スカイブルーの蓬髪の根元を青い帯のようなもので縛って整えている。精悍な顔立ちには凜としたものが漂う。背は光よりも少し高いようだ。

「初めまして、このリーダーを務めるジースだ、よろしく」

爽やかな笑顔で光に握手を求める。

「光です、よろしく願います……」

光は握手を交わし自己紹介を終える。ジースが戻ってくるのを見

計らって、正面の他の二人が立ち上がり光に駆け寄った。

「俺……」

「私が先よ！」

「もうルージュは先にあつてんだろ！」

猪首の浅黒い肌を持つ大柄な青年が名乗ろうとすると、ルージュがその大きな顔に片手をめりこませ遮る。押し合いへし合いしながら、我先にと光の前で揉み合っている。

「こら！ 子供じゃないんだから。サンチョ先な！ ルージュは次！」

「はい……」

ジースに一喝されて、ルージュは勢いが萎みうな垂れる。

その彼女に勝ち誇った顔をサンチョは向けた後、光に向き直り、

「光、サンチョだ、よろしく！ 一緒に頑張ろう！」

袖を捲り上げて太い腕で光の手を強引に掴み、満面の笑顔で上下に腕を振って光の入隊を快く迎え入れた。このサンチョもジースと同じ格好をしている。ルージュも桃色ではあるが衣服の形態は同じようだった。たぶん、制服のようなものと光は考える。

「ルージュです！ さっきはもう少しで駆け落ちできたのに惜しかったね！ まあ、よろしくね！」

「よろしく……」

光は後ろ頭に手を当て、苦笑いを浮べルージュと握手を交わす。しかし、ルージュの冗談めかした挨拶に、いち早く反応し声を張り上げた青年がいた。

「か、か、か、か、駆け落ち！？」

奥のベンチから血相変えて、ルージュに駆け寄ってくる。

茶色がかった黒髪が丸い頭に満遍なくぺたりと張り付いている。小脇に黒い生き物を抱えている。

「ル、ルージュ駆け落ちってなんだよ！」

語気を荒げてこめかみに汗が滴るその姿は真剣そのものだ。

「二人だけの秘密よ、ねー光君！」

「ひ、ひ、ひ、光って誰だ？」

ルージューは目を眇め、すすすつと光の傍に擦り寄る。

それを見るや、青年は光に血走った目を向けた。

おいおい……いきなり……

唐突に渦中に放り込まれた光は、鼓動を高鳴らせて俯く。

最初は目を剥いて青年は光を睨んでいたが、そのうち懷から柄のついた丸いレンズを取り出した。

柄を握り、観察するかのようにレンズを通して光の体に視線を這わせている。

何なんだろう……

不思議に思いながらも、初対面の相手なので、

「は、はじめまして……光です」

引きつった笑みを浮べ手を差し出す。

その瞬間、レンズが光の手に向けられ、最後に光の顔を間近で覗き込む。

一連の奇矯な所作に、光は気味が悪く思い、顔を後ろに逸らしていた。

そのうち青年はレンズを静かに懷にしまい、右脇に挟む黒い生き物を左脇に移した。

「どうもどうも……はじめまして、シルクと言います、今後ともよろしく……」

光と目を合わさずに淡々と抑揚なく言った。

握った手は汗ばんでいる。

左脇に抱えた黒い生き物が奇妙な声を上げて欠伸をしていた。

気持ち悪い生き物だな……

鶏のような姿をしているが、鶏冠がなく代わりに頭から細い触角が二本伸びている。

光との挨拶が終わると、シルクは真つ先にルージューに駆け寄った。

はつきりとした形のいい長い眉の端を吊り上げ、

「で、駆け落ちってなんなの……？　どういうこと……？」

今度は声を潜めて、ルージュに耳打ちをした。

「冗談だって、本気にしないでよ……」

「するよ……びっくりするじゃないか……君は僕の彼女なんだからね！」

シルクが顔を押し付けるように、ルージュに囁いていたが、気持ちに語尾に強くでたためか、最後の方だけ周囲に声が漏れる。瞬間、後ろから二人を冷やかすかのように口笛の音が飛び交った。

「熱いね〜！　お二人さん！」

「アハハ……」

シルクは顔を上気させていた。

「さあ……ムク……さっきの話をしようか……」

居た堪れなくなっただのか、シルクは小脇に抱える黒い生き物ムクに語りかけながら、奥へすこすこ戻っていく。さっきのシルクの一言で、顔を赤くしていたルージュは壁際を見て、

「あ、次、ジャンヌ姉ちゃん、ほら、ね！」

照れ隠しのように甲高い声を響かせた。

壁際に佇むジャンヌと呼ばれた女性は金髪を艶かしく揺らし、ルージュに顔を向けた。

すらりと長い足に滑らかな曲線を描くきゅっと締まった腰、桃色の少しゆったりとした衣服の上からでも、そのスタイルの良さは確認できた。それに加えて、端正な顔立ちと襟切りから覗くぬけるような白い肌、目の醒めるような美しい女性だった。

「……………」

ジャンヌは深い溜息をついた。

艶やかな金色の髪に手をいれ、右に掻き分けながらゆっくり歩き始める。



光の前までやってくると、ルージュが笑顔を振り撒く。

「ガツンと名乗ってあげて！」

「はいはい……」

呆れたような顔をルージュに向け、そのまま光に視線を流し見据える。

間近でジャンヌの顔を見ると、思わず光は視線を下に逸らした。

眉間に軽く皺を寄せたジャンヌの端正な顔立ちには、対峙した者にだけ分かる気迫のようなものが漲っている。その気迫の籠った瞳に気圧されて目を逸らしたのだ。

し、しっかりしないと……

気後れを覚えながらも手を差し出して、

「は、はじめまして光です……」

握手から……っとひきつった笑みを浮べ視線を上げる。

少し間を空けて、ジャンヌが重々しい口を開いた。

「握手はしない主義……」

「あ、すみません……」

光は反射的に謝り手を引っ込める。

冷や汗をかいて困惑する光を、ジャンルはじつと目を細めて眺めている。

妙齡ではあるが、どこか達観したような大人びた空気を身に纏うジャンヌ。

弱いな……この手のタイプ……

光は首筋に手をやって、落ち着かない様子で摩っていた。

しかし、少しすると、ジャンヌは切れ長の美しい瞳を閉じて、薄い桃色の唇を綻ばせた。

「硬くならなくていい、私はジャンヌ、あなたの入隊歓迎するわ……でも、ここは厳しいところよ、覚悟はしといてね……」

淡々とした口調の中に峻厳を含みながらもどこかに優しさが漂う。

「は、はい！」

さっきまでの重苦しい空気との落差のためか、何故かその微笑に

心を打たれて力強く答える。

ジースはジャンヌが元の場所に戻ると、立ち上がって光の元へやってきた。

「えーっと、みんな紹介終わったか？」

周りを見渡して、確認をとるかのように各々の顔に視線を置いていく。

「ビグがまだだよ」

サンチヨが奥のベンチに壁に向いて寝そべる青年を指差し言った。  
「ビグ！ 挨拶くらいしろよ！」

「……はあ？ なんで？」

壁に向いたまま、ビグは面倒臭そうに髪を掻きながら答える。

「俺の命令だからだ」

ジースは一呼吸置くと、鋭い眼光をビグに向けて言い放つ。

周囲の仲間はその様子を息を呑んで見守っていた。

「………分かったよ………」

舌打ちをして、体を転じて床に足を揃え、肩を左右に揺らしながら立ち上がる。

額に垂れた灰色の髪の間から覗く黒い瞳は炯炯とした光を宿している。

のそのそと光に向かって歩き始めた矢先 彼の体が突然、蒸発したかのように消えた。

「あいっ………」

「あの野郎、逃げたか！」

周囲がざわめく中、ジースは舌打ちをして怪訝な顔を浮かべる。  
その時、光は事態が飲み込めず辺りを見回していた。

「よう………新人」

すると、突然、背後から低い声がした。

驚いて光が素早く振り向くが、後ろには誰もいなかった。

「何だっただんだろ………」

光が鼻先をかいて、呆けていると

「光避ける！」

「光君！ 危ない！」

ジースが叫んだ後、不意に横からルージュが覆いかぶさってくる。光はたたらを踏んだ後、勢い余ってルージュと共に床に崩れ落ちる。

「いきなり、どうしたの！？」

体を振り覆いかぶさるルージュに言った。

「危なかった……」

ルージュはふーっと深い息をつくと、片手について半身を起こしどこかを眺めている。

光は彼女の視線の先を見やった。

そこには黒い擦り切れた襪で身を包んだ怪しい化け物が立っている。

白骨の手には長い柄が握られ、その先に長く切れ味の良さそうな鎌が鈍い光を放っていた。

そのうち、襪の隙間から覗く漆黒の顔がゆらりと光に向けられた。

「気をつけて！ また来るわよ！」

## 第四十七話、青空と勇者 回想その15

化け物が鎌を持ち上げ切りかかってきた時だった。

「風の刃よ！」

左方から声がしたかと思うと、眼前の化け物が真つ二つに裂けると、同時に散り散りになってその禍々しい姿は空に溶ける。

「ふー助かった……」

「……………」

光は何が起こったのか理解できなかった。しかし、隣で身構えていたルージュが安堵の息を吐き、壁越しのジャンヌを見やると、

「さすが、ジャンヌ姉ちゃん」

笑顔を投げかけ、親指を立てた。

ジャンヌは吐息を漏らし、安堵の色を瞳に浮かべる。

「ふー……やれやれ……」

奥のベンチでシルクは両足を開き床を踏まえ、両手を胸の前で合わせていた。

胸元で瞬く青い光が徐々に色褪せていく。

ルージュがころころ笑い始めると、手をだらんとさげ同じく安堵の息を漏らしそのまま腰をすんと落とした。

「ビグの仕業だな、どこにいったー」

「いないな……」

ジースは喚きながら辺りを見回す。

その剣幕に吊られて一緒にサンチョも探すかビグの姿はなかった。「タイミングといい、あいつに違いない！」

ジースはさっきの化け物と呼び寄せたのがビグだと決め付けていた。

挨拶をしにビグが出向き、その途中で姿を消した後の化け物の出現。

普段から素行の悪いビッグが疑われるのも仕方がなかった。

そんな時　突然部屋の入り口の扉が開いた。

瞬間、一斉に皆の視線がそちらへ吸い寄せられる。

「あ？　なんだ……？」

ビッグは白い布地で手を拭いながら、怪訝な目つきで周囲を見渡す。

「お前どこ行つてたんだ？」

「トイレだが……文句あるか……」

淡々とジースの問いにビッグは答える。

ジースは憤然として肩を震わせた。

「どうやって出て行つたかは知らないが、お前出て行く前に、光に向けレブナント放つただろ！？」

ジースはビッグを睨んで質した。

「知らねえよ……」

不機嫌そうにビッグが口を尖らした。

方耳に小指を突っ込みながら、奥のベンチへ足を踏み出した。

「そんなわけねーだろ！　お前しかいねーだろうが！」

その態度に激昂し、ジースは有無を言わずビッグに飛び掛った。

「うわ……ジース落ち着け！」

「お前はいつも俺に恥かかせやがって！」

襟割りを掴み、ジースはビッグの顔を右拳で殴りつけようとした。

ビッグはその拳が打ち出される前に右手で掴むと、

「何しやがる！」

渾身の左ストレートをジースの横っ面に叩き込んだ。

もうそれからは　お互い足を止めての殴り合いに発展していた。殴り殴られ、お互いの顔は赤く張れ上がっていく。

「落ち着けよ！」

サンチヨが二人の間に大きな体を割り込ませた。

二人の距離を力づくで離し、喧嘩の仲裁に入る。

光とルージユはただ呆然と眺めていた。

「まったく……男って奴は……」  
美しい金髪を振り乱しながら、ジャンヌは壁に寄りかかり溜息をついた。

「お前じゃないっていつのか!？」

「そうだ……俺はお前が挨拶をしろっていつので……新人に声をかけ……すぐに外へ出た……」

「嘘つけ! どこかに隠れてお前がレブナント放ったんだろ!」  
「俺じゃない……」

話は堂々巡りで治まりがつかないように見えた。

しかし、ビッグは殴り合いの後でも、終始落ち着いていて、ジースの辛辣な責めにも動じずただ否定を繰り返す。さすがのジースも自分の推測に懷疑が紛れ込み、

「おかしいな……どうも嘘をついている風じゃないような」

「ジース決め付けは良くない……」

サンチョの宥めも重なつて、自身の判断に迷いが生じ始める。

「じゃ、一体誰が……あのレブナントを？」

「さあ……」

ジースとサンチョが顔を見合わせ、悩む素振りを見せ黙り込む。

ビッグは二人の間を縫って奥のベンチへすたすたと歩き始めた。部屋内を不穏な空気が満たしていた。

だが、また入り口の扉が軋みを立ててゆっくり開けられた、同時に、

「あれは私が放ちました……」  
朗々とした声が響く。

ジース達が声をした方を見やると、クライスが扉に手を掛けて立っていた。

「なんで……クライス様が？」

混乱気味にジースは言葉を漏らした。

「私が扉の陰から放ちました」

「え…… な、なぜ、そんな事を？」

ジースや他の仲間は動揺を隠し切れない。

重々しい空気を纏い、黙り込むクライスの次の発言を固唾を飲んで見守る。

「一つには……」

静寂を破ると、クライスは光を見据える。

「光君を試す意味もあり、そして、魔法がどんなものであるか知ってもらおうとも思いました」

クライスは言った後、ジースの反応を観察するかのようになり、光から視線を移す。

「そ、そんな怪我でもしたらどうするんですか？」

ジースが困惑して言うのと、クライスは困ったように口を閉ざす。

「ふん…… あれくらい倒せないようなら……ここにはいらん」

ビグが吐き捨てるように言った。

横槍を入れられ、ジースはかつとなつて白い歯をむき出し、ビグを睨む。

「確かに……」

クライスは鼻を右手で包み少し考える素振りを見せた後、同調したかのようにビグを見た。

「倒せとは言わないまでも、化け物の殺気を敏感に察知し、初撃をかわすくらいはしてほしいところですけど……」

「素人ですよ……」

ジースはクライスにためらいがちに言った。

「ですよね……」

クライスは顔全体を手で覆って溜息をついた。

既に自分のやった行いに、悔悟しているようだった。

周囲が黙ると、さすがにクライスも自らの行いの正当性を貫けな

くなつたようで、

「今言つたことは実は建前です……苦しい言い訳とでもいいましようか……」

苦笑いを浮かべながら、皆に向けて両手のひらを左右に振って、実際のところを話しはじめた。

「私は扉を少し開けて、君達の顔合わせをほぼ最初から盗みみていたんです。どこかぎこちない自己紹介を見てて、少し物足りないなあと感じていました。そこで、ここは一つ私が……盛り上げてやろう！　と思つた瞬間、つい魔が差して、魔法を放つてしまいました……やりすぎました！　光君申し訳ない！」

光に申し訳なさそうに手を合わせてクライスが頭を下げる。

「えっと……いや……僕は何もできなくて……情けないです、しかも……」

頭を掻きながら、クライスに決まりの悪そうに光は言いながら、ルージユをみつめる。

「女の子に助けてもらうなんて……」

間を空けて、光が俯き内省する素振りを見せると、

「光君は全然悪くないよ、さっきのは仕方ないわよ、いきなりあんな出したクライス様が悪い！」

ルージユの胸裏に潜む母性本能が燦り始めたのか、光を弁護した後クライスを一方的に悪者に仕立て上げる。

「ご、ごめんなさい！」

肩膝を地につけ頭を何度も下げるクライスにルージユの容赦ない叱咤が続いた。

「クライス様は普段は冷静なのに、時々思いつきで行動するからいけない！」

「はあ……痛いところを……その通りかもしれません……」

そのやり取りを見ていた仲間達は、くすくすと押し殺し気味に笑っていた。

しかし、ビグはベンチの端で我関せずと寝そべっており、もう片



方の端にペットの世話に耽溺するシルクが座っていた。

「じゃ、ドームへいきましようか」

クライスは騎士見習いの鍛錬場へ光を連れて行くことにした。  
控え室から目と鼻の先にそれはあった。

「行こう！」

クライスの呼びかけにぞろぞろと部屋を出て行く。

「光君一緒に行きましょう！」

「そうそう！」

「ごめん！ 着替えまだだから、後から行きます」

部屋に敷き詰められた金属の箱の中に制服があることをクライスに教えられた。

奥から三番目の箱が光のものだった。

開閉式の箱には取っ手がついていて、手前に引くと前面の扉が開いた。

ロッカーみたいなもんだな……

中にはジース達が着ているものと同じ青い制服が入っていた。

光は着替えながら、ベンチに座るビッグを目の端で捉える。

なんで、まだここにいるんだ……？ まさか……俺待ち？

横っ面に刺さる冷たい視線を感じながら、制服をさっさと着替え終える。

「さあ……行こうかな」

わざと声を漏らし、部屋を足早に出て行こうとした時、

「ちよつと待てよ……少し話しいいか？」

奥から低いがよく透る声が光を呼び止める。

「は、はい？」

動揺しながらも、体をおもむろにビッグに向けた。

前に垂れる灰色の髪の下に、黒い瞳が爛々と輝き光を見つめる。

光は内心焦っていた。あからさまに危険な空気が漂うビッグと二人きりで話す事に、不安は禁じ得ない。しかし、いつまでも下を向いて接しては相手に舐められてしまう。

最初が肝心だと思い、なけなしの勇気を振り絞りビッグの瞳を真っ向から受け止める。

その物怖じしない光の態度を見て、ビッグは唇を薄く開き白い歯を覗かせた。

「臆病者ってわけでも……なさそうだな……」

ビッグは立ち上がった、光の傍までゆっくりと近付く。

真ん前まで来ると、囁くような声で切り出した。

「クライスの言ったことを鵜呑みにしないほうがいいぜ……」

「え……？」

「アイツは……無鉄砲に見えるが……その行動には絶対の自信と確信を持っている……つまり……」

光は何となく言っている意味は読み取れた。

しかし、そんな事は言われるまでもなく分かっている。

「大丈夫です、俺はここで鍛錬して強くなって見せます」

「違う……そんな事を言ってるんじゃないやねえ……」

光に更に詰め寄り、声を潜めて続けた。

「俺が……トイレから帰ってきた時、部屋内に殺気の残滓が微かに残っていた……レプナントを放ったと言っていたが、あの殺気がレプナントのものだとすると……」

「おい、何してんだ、早く集れよ！」

ビッグが話を続けようとした時、ジースが部屋の扉を派手に開け放ち怒鳴る。

「ち……！」

ビッグは舌打ちをして、光の肩を右手でぽんと叩くと、

「まあ、気をつけたほうがいいぜ……」

光はビッグの言ったことが理解できなかった。

ただ、よく分からない不安だけ植えつけられてしまっていた。

どういうことなんだ……

手の平を顔付近に持つてきて眺め、思いつめたように黙り込む。後ろを振り返ってビッグがその姿を認めると、

「まあ、とにかく……俺はお前を歓迎するぜ……」

と言つて、低く笑いながら扉から駆けて出て行く。

ジースが首を振りながら光の右肩に手を置いた。

「えらいのに……見込まれちまったな……」

憐憫を瞳にこめて、光の肩を二三度ぽんぽんと叩いた。

## 第四十八話、青空と勇者 回想その16

うわ、広いなあ……

暗い廊下の先の赤い扉を開け放ち、目に飛び込んできたものに驚嘆の声を上げる。

ドームと呼ばれる鍛錬場は想像以上に広く光を圧倒していた。まさしく内部はドーム状の広大な造りになっている。

乳白色のタイルが床一面ばかりか、天井に向かう壁にまで敷き詰められている。

建物の奥にも何か見えるが、光の位置からは確認しづらい。

光は後ろを振り返ると、不思議な形をした像が入って来た扉を挟むように置かれている。

像の向こう側には壁に扉がいくつか見える。天井には丸い光源がいくつかあり内部を浩々と照らしている。

「光、こつちだ！」

「おいで」

ドームの少し入ったところに、整然と並ぶ騎士見習い面々。

その前にはクライスが手を後ろで組んで立っていた。

光は待たせてはいけないと、急いで駆けていく。

「お待たせしました」

「やっと主役がきたか」

クライスが微笑みながら言った。

「光君ドームは広いだろ？」

「はい、とても……びっくりしました」

「ここは、主に魔法や剣術の修業のための場所なんだ。だから、それ用に大きめに造られている」

「さてと、いきなりで悪いんだが……光君、今日ここに来てもらったのは、他でもない、君の現在の剣術の腕前と魔法の潜在能力を確かめるためなんだ。光君一人でも良いのだが、今日は入隊式の一貫として皆にも来てもらった」

「はぁ……」

光は呆けた顔で説明を聞いていた。

「魔法の潜在能力を確かめるのは簡単だ。入り口にある魔力測定器で測ればすぐ済むんだ」

「魔力測定器？」

「入り口を挟むようにしてある像があるだろ？ あo像の前に立てば測定できる」

「なるほど……」

説明を受けたものの、全ては光の理解の外にあるものだ。

「だから、先に今から剣術の腕を見せてもらおうと思う」

クライスがそう言うのと不意に右手を高く伸ばし、手の平を宙で反転させた。その直後、地鳴りのような音がどこかで聞こえすぐに止んだ。

「な……」

驚きの声を漏らし光は慌てたが、他の者は座ったままどこかを眺めている。

その視線の先を光は見やると、乳白色の床の一部が盛り上がり四角いステージのようなものが出来ている。

盛り上がった床の側面には赤い石材が使われていた。

「今から、あの上で君と今いるメンバーの誰かと軽い試合をしてもらう」

「ええ？」

光は面くらい、しばし言葉を失う。

しかし、時を移さず、ジース達がざわめき始めた。

「俺が相手します！」

「いや、俺が！ リーダーだしな！」

「ずるいよ、ジース、こんな時はリーダーは関係なしだ！」

ジースとサンチョが光の相手候補の座を狙って揉めていた。

しかし、さざめくのはその二人だけで、それ以外の者は黙っている。

ジャンヌは俯いたまま目を閉じているし、ビグは宙に虚ろな眼差しを置いたまま不動。

シルクはこの前とは違う生き物を相手に囁いている。

その隣にはルージュがいて、サソリのような形をした黒い生き物を指で突付いていた。

「よし、じゃあ、光君の相手はジャンヌにしておうか」

クライスはメンバーにさらっと目を配った後、ジャンヌを即座に指差した。

「そんな……」

不満の声を上げるサンチョ。

ジースもいささか納得がいかない顔をしていた。

「まあまあ……」

二人を宥めるように手を宙で泳がせ苦笑いを浮かべる。

「ジャンヌ、お願いできるかな？」

「クライス様がそう仰るなら謹んでお受けします」

四角く盛った場所向き合って立つ光とジャンヌ。

「その模擬場の枠から出ないように、出たら負けね。」

あらかじめクライスが光に言った。

決められた枠内で剣をあわせる様式はさながら剣道のようなのである。二人にはクライスからモックソードと呼ばれる剣を渡されていた。刀身は黒いが材質は柔らかめで、それなりに当たれば衝撃はあるだろうが、大きな怪我に結びつかないだろうという代物だった。

模擬場の周りをクライスと仲間たちが取り巻いている。

ビッグも模擬とは言え、新人の剣合わせに興味あるようで傍にきて眺めている。

一人相変わらず、興味なさそうに座っているのはシルクだった。ペットにエサのようなものを与えている。

「はじめ！」

静かな立ち上がりだった。

光の柄の握りは剣道の握りと酷似していた。

臍の辺りに柄の先を固定し、切先を自らの肩付近の高さで止めてジャンヌに向けている。

片や、ジャンヌは両手で握ってはいるが、拳と拳の間に隙間はなく剣道のそれとは違っていた。

切先を右斜め下に落とす構えは、切り上げからの攻防を得意とするものだ。

両者はまだ動かなかった。四角い枠内を円を描くように距離を置いて足を運ぶ。

その動きがピタツと止まった瞬間、光は気合の籠った高い声を上げ間合いを詰める。

「メーーン！ メン！ メン！ メン！」

凄まじい速さで連続して、ジャンヌを上から切りつける。

その発する言葉はまさしく剣道そのものだった。

「コテ！ メン！ メン！ メン！ メン！」

時折りコテを放ち下に振りながら、ジャンヌの防御の型を揺さぶる。

初撃こそ切り上げて払ったジャンヌであつたが、上下の揺さぶりや連続した頭への早い切り込みを受けるのに精一杯で攻撃に転じられないでいるかに見えた。

しかし、次の瞬間 乾いた音が響き渡り、光の剣が宙を舞った。

「それまで！」

一瞬の出来事だった。

光はとてつもない速度で剣を払われ、伝わった衝撃のため手が痺

れていた。

早……

光の前に立つジャンヌが近付いてくる。

かなり近い位置で光と向き合って足を止めた。  
前髪を指先に絡め右側にさらりと運ぶ。

光の鼻腔にジャンヌの柔らかい香りが漂う。

「初めてにしてはいい動きだった……何かやってた？」

「ええ、子供の頃剣道を少々……」

小学生の頃、父徹に進められ始めた剣道。高校に上がる頃には3段を取得していた。

「ケンドウ……？ 変わった名前の剣術ね、ふん……とにかく良かったよ」

この世界には剣道はないらしく、ジャンヌは少し首を傾げて低く唸り、口元に微笑みを浮かべた。

「ジャンヌさんも……」

感極まった様子で、光は言葉がうまく出てこない。

これほど呆気なく勝負に負けたのは初めてだった。驚嘆と憧憬の思いが胸を焦がし光の顔は火照っていた。

「ジャンヌさん……凄かったです！ 驚きました！」

光は一度空気を飲み込むと、ジャンヌを熱い思いを込めて称えた。既にジャンヌは踵を返して背中を向けて反対側へ歩いていたが、光の称賛に返すように肩辺りで右手を振った。圧倒的な力の差を見せ付けられた後のジャンヌの後ろ姿や素振りは、これまでとはまた違った印象を光に与えていた。

格好いいな……

「光、初めてにしては上出来だよ！」

ジースが笑顔で褒める。

隣のサンチヨも腕を組んでそれに頷き同調している。



「光君良かったよー！」

ルージユが親指を立てて微笑む。

「確かにいい動きでした、そうですね、剣術の腕はD判定ってところでしょうか」

クライスは光の一連の動きを見て一定の評価を与えた。

黒い金属の板を指先で押すような動作をしていた。

ビグは既に座り込んで、両膝を抱きこんでその間に顔を埋めていた。

「次は魔法の測定だ。光君はこっちきてくれるかい？」

「はい」

クライスは入って来た扉の傍にある像へ一直線に歩き始めた。

「これなんだけどね……像の前に背筋を伸ばして立ち、手を像の両手に重ねて欲しい」

「はい……」

目の前にはどこかで見たような像が置いてある。

大きな目が二つついてあって、どこかずんぐりむっくりとした体型……

これは……土偶！？

日本の遺跡で発掘された遮光器土偶に似ていた。

瓜二つだった。違う所といえば、人間大の大きさと手が奇妙に曲がり大きな手の平を相撲取りのツツパリのように光に向けているところだろうか。

光は言われたとおり、土偶の手に自らの両手の平を重ねた。

「よし、始めるよ……」

といって、クライスは土偶の肩付近を手で摩った。

瞬間　モーターが動き出したような低い音が聞こえる。

音がある程度の高さで一定し始めると、土偶の目の部分に突然、

赤い光が宿った。

そして、その両目が瞬いたかと思うと、赤い光条が二つ伸び、光の体の表面を素早く照らし無軌道になぞる。

「はい、終わり」

クライスが言った時には、既に伸びた光もその目の赤い輝きも消えていた。

あっという間の出来事だった。

「さてさて、どんな結果が……」

クライスは屈みこんで、土偶の足元の影の部分に手を突っ込んだ。そして、何かを土偶の中から引きずり出した。

透明の板のようなものに、何かの絵と数字が羅列されている。

「君の魔法相性とキャパシティが分かりました……」

「はぁ……」

言われてもよく分からず生返事をした。

「言いますよ。CP1500、火、3、地、7、水、7、雷、7、風、4 闇2 時空1 ですな」

「はぁ……」

「簡単に言つと……君の魔力の最大値は1500で、地水雷の魔法と相性がいいということです」

光はそう言われても、ピンとこない。

クライスは鼻を手で包んで、光にどう説明しようか考えているようだった。

第四十九話 追憶に沈む夢の跡。(前書き)

投稿してから修正多めになっています。すみません。

## 第四十九話 追憶に沈む夢の跡。

「勇者様〜！ 勇者様〜！」

肩を揺さぶられ、はっとして体を起こした光。

目に映るは夕暮れの空と膝の上に置かれた拙い絵が書かれたスケッチブック、そして、横から覗き込む丸顔の少女の顔だった。

「寝てたの？ 勇者様」

「うん、夢を見てた……」

柔らかい日差しがのびやかまる日向で、回想に耽っていた光はいつの間にか寝入ってしまった。

そうか……夢か……いや……

回想がまどろみに溶け、夢となって光に見せた過去の出来事。

それは紛れもなく、光が実際に異界のゼームス大陸において肌で感じ体験してきたものだ。

俺が勇者か……

勇者はスケッチブックを脇に置き、隣に座るルージュの顔をじっと見つめた。

いつになく優しさが滲む黒い瞳は、ルージュの顔に置かれたまま穏かに揺れていた。

ルージュの鼓動は否応がなしに高まり始める。

ふっくらとした頬は赤みを帯び、見つめ返す円らな瞳は小刻みにたゆとう。

そのうち、目を静かに閉じた。

音もなく唾を嚥下した後、薄桃色の唇を軽く尖らせ勇者の口元へ運ぶ。

ルージュの鼓動は臨界点に達していた。

「う……？」

しかし、近づけた唇にはいつまでも何も伝わってこない。

片目を開けると、勇者の姿は既にそこにはなかった。

ルージユが勘違いしている間に立ち上がり移動していたのだ。  
その場を取り繕うように咳払いし、勇者の姿を探す。

勇者は欄干に両手を置いて寄りかかり夕暮れの空を眺めていた。

「はつきよしよい！」

ルージユの足元には熟睡し、鼻を吸るドンゴロが横たわっていた。

「あの後さ……俺はクライス様に軽い魔法の説明を受けて、自分の部屋をもらったんだ」

「うん、一人一人個室をもらえるから」

勇者は夢でみたゼームス大陸での出来事の続きを、ルージユと共に語り合っていた。

「俺は最初魔法の存在なんて……半信半疑で、説明うけても自分が使える気がなかったよ」

「ふーん、でも、いつの間にか、大地の魔法使えるようになってたよね」

「うん、使えるようにはなっただけ……発動の仕方も知っているけど……」

勇者の表情に突然暗雲が垂れ込める。

ルージユは勇者の変化をいち早く察知したのか目を伏せる。

会話の流れから勇者の言わんとすることを把握していた。

「まだ記憶が抜け落ちたままなんだ……？」

遙か下にあるマンシヨンの駐車場を眺めながら言った。

「うん……俺がクライス様のところで、これからやっと色んな事を学ばうって時から……見知らぬ洞窟の内部で……一人蹲ってた頃までの記憶が……すっぱり抜け落ちたままなんだよな……」

勇者は欄干に置いた手に力なく頭を乗せて、独り言のように呟いた  
大きく溜息をつき、虚ろな眼差しを暮れなずむ空にしばし向けていた。

「冷蔵庫か、すごいな……何でも入ってやがる」

もう外はすっかり日が落ちて、時刻は6時を回っていた。

ドンゴロは冷蔵庫の中を物色している。

今晚の夕飯はドンゴロが作るようになっていた。

料理の腕前は三人の中では頭一つも二つも抜けている。

紅一点のルージュだが、料理の心得はまるでなかった。

一階のキッチンでドンゴロが食事を作ってる間、勇者とルージュは二階へ上がってテレビを見ていた。

「あはは！」

「……………」

広さ10畳の洋室には長い白いソファがあり、ルージュは寝そべりながら前に置かれたプラズマテレビに夢中になっていた。見ている番組は子供向けのアニメだった。ゼームス大陸にはテレビは存在しない。ルージュにとってそれは今まで目にしたことのないもので、リモコンで移ろう映像にいつまでも興味が絶えることはなかった。

光はソファアールの上部に首をだらしく反らせている。真白な天井には青白い光の丸い電灯が点いていた。光はその電灯の真ん中辺りをぼんやり眺めながら、まだ夢の続きに思いを捉われ続けた。

あの時、気がつく……見知らぬ場所で一人……俺は這いつくばっていた……

冷たい空気を頬で感じた時、俺は暗い洞窟の中で一人蹲っていた。どうやって、そこに入ったのか……なぜそこにいたのか……まるで覚えていない。

体を起こそうと湿っぽい岩肌に手を掛けた瞬間、激痛が体中を駆け巡った。

声も出せないような痛みにも、また元の場所に前のめりに倒れこんだ。

全身に走る酷い痛みから、理由は分からないが相当の深手を追っている事にその時気づいた。

暗い闇に包まれ遠のく意識の中、このまま……野垂れ死にするのかもしれないと漠然と思った。

どのくらいの時間、そこにうつ伏せに倒れていただろうか……

次に覚醒した時、俺は自らの体の異変にきづいた。

体全体を覆う暖かみ……不自然だった。

最初の覚醒の際は凍てつく寒さに体は冷え切っていたのを覚えている。

手や足の感覚がないほどに、体中の感覚は麻痺していて筋肉は萎縮し動かしづらかった。

だが、その時は違った。

体中を駆け巡る血液の流れを感じる事ができた。

肌を感じる火照りは内部から湧き起こるものと確信していた。

恐る恐る拳を握り足を揺り動かすと、不思議なことに全身に広がる痛みは消えていた。

試しに立ち上がろうとその意志を体に伝えようと、頭で描いた通りに体はしなやかな動きで従った。

俺は立ったまま一息つくと、確かめるように足を一步步ずつ前へ前へと踏み出した。

そのうち、洞窟の出口らしき場所から入る眩い白光を受けて思わず目を閉じた。

俺は洞窟を抜け出すと、赤黒い岩地がどこまでも続く大地に立っていた。

見知らぬ場所……といつても、この世界全て俺にとって未知。しばらく立ち尽くしたまま、呆然と上に広がる桃色がかった青空を眺めていた。

大きく深呼吸をし、その場の空気に身を馴染ませた。

体に目を配ると、諸所に生々しい傷跡があるのに気づいた。

しかし、どの傷跡の表面も粘液質の液体でコーティングされたように塞がっていた。

体のいたるところに、赤い金属製の断片らしきものが付着していた。

金属片はどれも、激しい高熱で溶けたような痕跡があった。

ただ、可笑しな事に体のどこにも焼けどの跡はなかった。

股間の辺りは歪だが溶けた金属片がきっちり覆っていて、陰部が露出する事態にはなっていなかった。

それには少し安心した。

冷たい風が火照った体に当たると心地よく、ぼんやりした頭が次第にはっきりしていった。

空洞と化した頭の中に、ふと、セギトにいた頃の記憶が浮んでは消えていく。

その去来する記憶の断片をかるうじて掴んだ時、曖昧なイメージが明瞭な輪郭を伴ってくっきり浮かび上がっていった。その瞬間、焦燥に駆られセギトに帰らなければと思ったたち、せかされる様に走り出した。

走り出してそれほど経たないうちに、俺は違和感を感じた。

いや、違和感を感じないことを不審に思つて足を止めた。

移動中に景色が後ろへ吹き飛んでいく異常さに、なんとか気づくことができたのだ。

まるで高速道を200キロのスピードで走行する車の窓の中から張り付いて見ているようだった。



俺はいつから、これほどの速さで走る事ができるようになったのか……

無意識に飛び移っていた岩の群を振り返って眺めた。

岩と岩の間は優に10メートルを超えていた。

それを知って更に俺は愕然とした。

さっきまで当たり前のように走り飛び跳ねていたが、その動きは人間のものではなかった。

しかし、頭の奥ではそれが当たり前のように認識されている。

不思議な感覚だった。

まるで、アメリカ漫画のマーブルスーパーヒーローズに出てくる超人にでもなった錯覚を覚えた。

その事実を何度も検証し、疑いようのないことを悟った後は

俺は驚喜して辺りを闇雲に駆け回った。

途中何度も堅く大きな岩にぶつかったが、怪我をするどころか岩の方が砕け散っていた。

俺はそれを見て歓喜に打ち震えた。言いようのないほどの興奮が体を満たしていた。

それから 水を得た魚のように猛進し各地を巡った。

セギトに帰るのはあちこち回ってからでも良いと思った。

その心変わりには力を得た慢心が大きく影響していたかもしれない。

何度か見知らぬ村や町を見つけては滞在した。

もちろん金など持ち合わせていなかったが、言葉は通じる。

最初訪れた村では、俺のみずばらしい姿を見た村の老女が、哀れに思ったのか家にこないかと誘ってきた。

言われるがままついていくと、青っぱい布地の清潔な衣服をくれた。

俺のために美味しい食事まで作ってくれた。

作り笑いを浮かべ、その老婆に笑顔で接し感謝の意を伝えた。

その日はそこで一晚寝ることになった。

そこを出てからは、また放浪の旅を重ねていった。徐々にこの大陸の地理にも詳しくなり、この世界の知識も深まっていた。

日々の路銀を稼ぐために、旅芸人の一座の下でしばらく色んな芸を学んだこともあった。

元々身体能力はずば抜けていたため、すぐにその芸の技を自分のものとしていった。

他にも何でも屋みたいな仕事もやってみた。

行方不明の猫を探したり、遠くの届け先へ荷物運びを依頼されたこともあった。

山間にたむろする山賊どもを素手で蹴散らしたこともある。

山賊といえど人間、それを傷つける事は以前なら考えられなかった。

身に宿る得体のしれない力が、以前持っていた良心の呵責や人の生死の道徳的概念を飲み込み、俺の人格を変えてしまったのだろうか。その真偽は定かではないが、命を奪うことに躊躇うことをあまりしなくなっていた。

それから自らの力を思う存分振るって、衣食を確保しあちこち旅をした。

俺は90Gの間、日本で言う所の一年に当たる月日、そんな暮らしを続けていた。

ある日、手の平に乗せた緑の石を眺めながら考えていた。

街の雑貨店で売られていたものをお金をだして買ったものだ。

この石は念交玉と言われている。

この世界で唯一の通信手段だ。

石に額を当てて、連絡を取りたい相手を思い浮かべる。

その相手が念交玉を持っていれば、頭の中で会話ができる代物だ。

クライス様と騎士見習いの仲間達とあまり連絡をとるきになれなかった。

一年も結局合わずにいて今更という気分が強かった。それに加えて、俺の記憶の中では自己紹介を終えたばかりの仲で止まっている。

だが、それだけではなかった。

なぜかクライス様の事を思い浮かべると、体が竦み積極的に連絡を取ろうと思わなかった。

理由は分らないが、俺の心の中に深く沈む潜在意識が会うことを拒んでるように感じた。

一年の間、結局、セギトに帰らずにいたのもそれが本当の原因だったのかもしれない。

自分の直感を信じ、彼らと連絡をとることは断念した。

そうになると、念交玉を持っていて、俺が交信したいと思う相手は一人しか浮ばなかった。

数日の付き合いだったが、別れる間際に感じた気持ちに嘘偽りはない。

いつかまたどこかで再開することを誓った相手、ドンゴロだった。

ドンゴロに連絡を取ると、普通に返事が返って来た。

最初は驚きしばらく感動していた。

ドンゴロはその時、俺と同じようにぶらりとあちこちを回っていたらしい。

俺と別れた後も、ミリガンの元で生活を共にしていたが、マイルでは盗品を売り捌く闇市への締め付けが厳しくなり、マイルを拠点として活動するミリガンファミリーにおいては実入りが期待でなくなっただけらしい。

ドンゴロはミリガンファミリーを抜ける事を決意し、抜けた後リアーザ王国へ向かった。

そこは魔族にいち早く降伏したために、魔族の王が統治するのを

未然に防いだ国だった。

そのため、そこに住まう種族はほぼ人間が占めている。

リアーザでは魔族に直接支配されていない利をいかして、日ごろから人々に害をなす魔族達に賞金をかけ、それを討伐する闇ハンターギルドが存在していた。

もちろん魔族に平伏したリアーザで表立って魔族に抗うことはできない。

飽くまでならず者が集る非合法組織である。

ドンゴロはそこに登録して、その時生計を立てているらしかった。連絡をとり、現在の状況を話すと、即座にそちらへ来るよう誘われた。

そんなこんなで、成行きに身を投じてギルドに登録。ドンゴロとタッグを組んで魔族達を蹴散らす日々が続いた。

そんな殺戮に満ちた日々のなかで急に虚しさが俺の中を走りぬけた。

魔族を蹴散らすのはいいが、どうも現場は近辺ばかりが主で見知った場所の往復に嫌気がさしてきていた。

それをドンゴロに話すとギルド長に話をつけて遠方の仕事を拾ってきてくれた。

久しぶりの遠方の旅に俺は柄にもなく心躍る思いで旅に臨んだ。

ドンゴロと辺境の地に向かう途中で、鄙びた村を通りすがった。

長旅で疲れたドンゴロはここで休憩する事を訴えるので、俺も疲れていたでそこで一時の憩いを取ることにした。アーチ状の古びた門らしきものをくぐる。

すると、入って間もなく、俺にいきなり体当たりをしてきた不埒な少女がいた。

俺は闇ギルドに入ってから、思春期を迎えた少年のように暴慢に振舞っていた。

郷に入れば郷に従え、朱に染まれば赤くなるを自ら実践している最中だった。

無論、少女にはドスの効いた声で怒鳴り散らした。

少女は怯むかと思いきや、俺が放った言葉の100倍返して罵倒を浴びせかけてきた。

だが、顔を見た瞬間、二人の時間が止まった。

相手はクライスの元にいたルージュだった。

## 1章完結、第五十話 過去との決別

ルージュは俺の顔を見ると、口を両手で包み驚いたように目を見張った。

『おお、ルージュちゃんか奇遇だね』

ドンゴロは間の抜けた挨拶をした。

しかし、ルージュの黒目がちの瞳には俺しか映っていないようだった。

『光君……光君なの？』

声を震わせて確かめるように言った。

『あ、ああ……ていうか、なんでこんなところに……』

俺はセギトに長い間帰らなかった後ろめたさもあってどんな顔をすればいいか分からなかった。

しかし、俺がへどもどしていると、ルージュは突然目端を吊り上げて捲くし立ててきた。

『そんな事はどうでもいいの！ それより……今までどこで何してたの！？ みんな心配してたのよ！』

『……………』

俺はしばらく無言を決め込んで、その間に言い訳を考えていた。

『……ちよつとその辺歩いてくるわ……』

俺達の込入った様子を見て、ドンゴロはなけなしの気を使って二人にしてくれた。

粗暴に見えて、敏感にその場の空気を読む速さは年の功か……

俺はどう返答しようか迷っていた。

洞窟の中で寝ていて、起きたら超人になってたもんだから、調子こいてあちこち放浪して、でも、セギトには帰る気なくて今まで流浪人してた　と真実をありのまま言えば、ルージュは納得するとは思えなかった。

『私だつて……心配してたんだから……』

悲哀のこもった搾り出すような声で言つて俯いたまま黙る。しかし、まだ言い足りなさそうに、口を引くつかせている。

俺はその様子を見て、もう少し黙ってみることにした。

少しルージュの口から何か引つ張りだしてからの方が、言い訳しやすいんじゃないだろうか。

洞窟で目覚める以前の記憶がないのに、下手に作り話をでっち上げて噛みあわないと話しがややこしくなる。

そう思つて、だんまりを長引かせて、ルージュの動向を見守ることにした。

『ジャンヌ姉ちゃんに念交玉で聞いたんだけど、ギガントを倒した後、行方不明になつたつて言つじゃない！』

何を言っているのかさっぱり分からなかった。

ただ、俺の抜け落ちた記憶の一部分である事は確かだった。

ルージュは語気を強めて続けた。

『私はね、途中で脱落して……みんなと一緒に行くことはできなかったけど……こんな辺境の村にいても、ずっとみんなの事を思つてたわ……絶対ギガントを倒してくれるつて、そしてあなたたちは倒したわ……でもその後、あなたは姿を消してしまつた』

ルージュの目尻に透き通つた涙の粒が溜まり始めていた。

今にも声を上げて泣こうつて風に、ふっくらした頬を赤く染め口元を振るわせていた。

涙が持ち上がった頬の上で小さな泉をこしらえ、今にも決壊しようとした時、

『ちよつと待つた！』

俺は叫んでいた。

ここでわあわあ泣かれては、体裁が悪いし俺が質問ができるようになるまで長引いてしまう。

そう思つて、大きな声を放つてルージュの涙を留め置いた。

そして、抑揚のない低めの声で刺激しないように切り出した。

『ここじゃなんだから、君の家で話さないか？』

辺境の地とは聞いていた。

しかし、ここまでとは思っていなかった。

藁葺き屋根の住居が点々と建ち並んでいた。

木造高床式の造りは日本から遙か南にある東南アジアの村を彷彿とさせた。

北方のリアーザにいた時は、袖の長い衣服を着ていても肌寒く感じたが、ここは半袖でもいいくらいだった。

ルージュも肩が露出した白い衣に赤い民族衣装のようなものを身に着けていた。

『取りあえず、長旅してきたんでしょ、飲み物でも持ってくるから座っててね！』

一時の感情の高まりは治まったらしく、ルージュはあっけらかんとした微笑みを湛えて部屋の奥に消えていく。

ルージュの背中を見送りながら俺は違和感を覚えていた。

涙を流してまで俺の帰りを心配してたと訴えるのはなぜだろうか？

確かルージュはシルクって奴と恋人同士だったはずだ。

まあ……失われた記憶にその理由も隠されているのだろう。

『助かったなあ……偶然とはいえ、ルージュちゃんいて本当助かったわ』

確かに……こんな辺境の地の寒村じゃ知り合いでもいなければ、休憩もままならなかったに違いない。

ルージュが戻ってくると、変わった味の飲み物と甘い香りが漂う果物でもてなしてくれた。

俺はその甘い飲み物を啜りながら、訥々とこれまでの経緯をルージュに伝えていった。



『記憶がなかったんだ……』

目を見開いて驚いた風に、口を薄く開けて呆けていた。

『はあ〜ん、また記憶喪失になってたんか』

『いや、今度のは嘘じゃなくて本当の記憶喪失だよ』

ドンゴロにはそれまで詳しい話しをしていなかった。

会った当初も、クライス様のところを首になった程度の会話しかしていなかった。

ルージュは俺の記憶喪失について、最初は疑ってたが毅然とした態度でそれを強調していると、やっと信用したらしく、噛んで含めるようにこれまで起きた出来事を話し始めた。

『ギガントはマイルを治める魔族の王の名よ、ギガントは人間達を蔑み、税の負担を人間側だけ大きくしたり、諸政策においても人間に不利なものばかり作ってマイルの人々を苦しめていたわ。クライス様は常日頃から、そんな圧政に苦しむマイルの民を哀れに思っていた。そして、見るに耐えかねたのか、それとも時機を見計らったのかは知らないけど、ある日 騎士見習いのみんなにギガントの暗殺を提案したの……最初は皆戸惑ったけど、この国が平和になるなら素晴らしいって最終的には賛同したわ、そして、決行することになったの』

『え……でもそんな事しても、どうせまた似たような魔族が王に……』

『その点は抜かりなかった。クライス様は魔族の上層の方と太いパイプがあるらしくって、その方が現魔王にマイルの次期王にはぜひクライス様をつて根回ししてくれてたらしいの。つまり、ギガントが倒れれば、自動的にクライス様がマイルの王となるのよ。実際、皆がギガント討伐に成功して、今、クライス様はマイルの王として君臨しているわ。マイルの虐げられていた人間達は快くクライス様を迎え入れた。そして、騎士見習いのみんなは今マイルのクライ

ス王、直属の騎士団の中核として頑張っているわ……でもそこに本当ならあなたがいたはずなのよ」

俺はルージユの話で失った記憶の大部分のピースを集めることができた。

ここまで聞いた時、俺はある一つの推測が頭に浮かんだ。

クライス様は最初つからギガント討伐に向かわせるために、騎士見習いと称して人間を集めたんじゃないのかって。

セギトに着いたばかりの時のドンゴロの話しを思い出した。

確か、騎士見習いの募集の条件に天涯孤独である事があった。

ギガントを暗殺する際、クライス様自ら出向くのは論外、そしてセギトの正規騎士である魔族を使うのも難しいはずだ。誰の目にも触れる事無くギガントを倒しその場をひっそり去ることができれば問題ない。だが、途中で王都の魔族にその姿を見られたり、万が一、負けて無様に死体を敵地で晒すようなこともないと言い切れない。ギガント暗殺に関わった者が同族だと知れば、魔族内で様々な懷疑や憶測が飛び交いクライス様に結びつくこともありうる。そうすれば、クライス様に同族殺害の嫌疑がかかってしまう。

その点、信頼のおける人間を通して集めた身寄りのない人間を使って、その暗殺を試みれば、それが成功しようが失敗しようが、クライス様に結びつくことはまずないだろう。人間であるだけで良い気もするが、身寄りのあるなしを含めたのは、万が一にも親類縁者にクライス様との繋がりが漏れる事を危惧してのことだろう。

更に、セギトは孤立した要塞だし、ルージユの話しでは、騎士見習いの面々はセギト中心部の極秘の部屋から、人気の全くない古びた遺跡の地下までの空間を時空魔法で結んで出入りしていたらしい。しかも、外へ出る日は一週間に一度と決められ、外では全て足先から頭まで覆う赤い鎧を着せられてたらしい。

その存在が世に知れることは皆無と言っていい。

推測の域は出ないが、この徹底した用意周到ぶりを考えると間違いないだろう。

まあ……でも、そんな事は俺の中ではどうでもいい話だった。

気になるのは、俺はギガント討伐に参加して、実際、マイルの王都に出向いて、皆と一緒にギガント暗殺に絡んだらしい事実。そして、ギガントを倒した後、どういう理由からか俺だけその場を去っていた。

一体この時、何が俺にそうさせたのか

もしくは……俺の身に何が起きたんだろう……

この時に記憶を失わせる何かが起きたに違いない。

一部始終をルージュに聞いたその後、ルージュも一緒に旅がしたいとこねるので、ルージュもギルドに登録させて、三人で旅をすることになった。

仕事をこなしているうちに、ルージュは俺を勇者様と呼ぶようになった。

俺はその呼び方はやめてくれとルージュに訴えた。

しかし、頑として受け付けようとしなない。

圧倒的な力で魔族をなぎ倒す俺は、勇者と呼ぶに相応しいと言うのだ。

俺はパーティが三人になったことも踏まえて、一度、規律みたいなものを作ろうと三人に提案した。

もちろん俺を勇者と呼ばず、横の繋がりを大切にしようと言うつもりだった。

だが、事態は逆へと流れた。

日頃からの俺のずば抜けた強さをドンゴロも認めていた。

俺がパーティのリーダーとなるべきだとドンゴロは声を張り上げた。

こうなると、もう俺には止めようがなかった。堰を切ったようにルージュが話しを進めた。

結局、パーティ内の約束事として

俺がこのパーティのリーダーを務める事。

それぞれを特定の名称で呼び合う事。

俺は勇者、ルージュが魔法使い、ドンゴロは僧侶だった。

その方が格好よく周囲の人々も親しみやすいと、示し合わせたように二人の意見が一致していた。

俺はもう何も言わずそれを受け入れる他なかった。

この二人に言っても無駄だと分かっていたからだ……

そうして、肅々と三人で仕事をこなしていると、ある日　闇ギルドに大きな仕事が入ったのだ。

依頼主は匿名だった。その案件とは、ゼームス大陸の実質支配者、現魔王の討伐だった。

最初はその仕事を受けるなんて気なんて更々なかった。

何といっても相手は魔王、いくら俺が強いといっても……

だが、この依頼の情報を拾ってきたドンゴロは、やってみたいと言いつ出した。

ルージュも乗り気だった。二人はギルドの一般的な仕事に飽き飽きしていた。

俺が強すぎて、あつという間に魔族を倒してしまうので面白くないとか不平を述べていた。

魔王なら少しは楽しませてくれるはずとか無謀な事を喚いてた。

何勘違いしてるんだ……あんた達が強いわけじゃ……と言いたかったが、面倒なので口にはしなかった。

結局、魔王の城には行っだし、はっきり言って相手は思った程強くなかった。

むしろ、弱かった。

ルージューは岩陰で他人事を決め込んでたし、ドンゴロは死にかけてはいたが……

俺との一騎打ちで歴然とした力の差を悟った魔王は、恐れをなして逃げようとしていた。

俺は面倒と思いつつもしとめにかかった。

逃げる者を追う趣味もなかったが、あそこまで追い詰めて逃がす道理もなかった。

じりじりと魔王に詰めよった。しかし、なぜか……その途中で、魔王に向かう足が鈍る。

その一瞬の躊躇が魔王を逃がすことに繋がったが

まあ、魔王なんてどうでもいい……問題は、ギガントを倒した後、俺に何が起きて、なぜ記憶がきえたのかだ……

「ねえ、まだ悩んでるの？」

「ああ……」

既にルージューはテレビを消して勇者の顔を横から覗き込んでいた。「前も言ったけど、過ぎ去った記憶なんてどうでも良いと思うの。」

過去に縛られて今が楽しめないなんて、つまらないよ！ それにもうゼームス大陸に帰れないわけだし、あの時の記憶思い出しても仕方ないよ」

「おい、飯できたぞー！」

階下からドンゴロの野太い声が響いた。

「はい、今行きますー！」

ルージューは明朗な声で階下に伝えると、勇者の腕を引っ張りながら、

「ほら、美味しいご飯食べに行こう！」

屈託ない笑顔を向けた。

そうだったな……俺達はいつだって……今って瞬間を大

事にして生きてきたんだ……そして、これからも……  
「よし、行くか！」

.....

下記はボツにします。

彩（27話〜30話参照）は大学の講義を終えると、彼氏である卓と喫茶店に立ち寄っていた。

閑静な住宅街にある、美味しいケーキが評判の落ち着いた外観の喫茶店だ。

「ミルフィーユとホットレモンティー……」

彩は自分の注文を伝え、視線を流し向かいの卓に目配せをした。しかし、卓はそれに気づかず、喫茶店の窓の外を虚ろな眼差しでぼんやり眺めている。

「ちょっと、卓……何にする？」

彩が声をかけるが、昏く虚ろな瞳は反応を見せない。  
さすがに間が長引きすぎて、注文待ちのウェイトレスの目が気になり始める。

確かいつもは……そうだ

「後〱レアチーズケーキとホットコーヒーで！」

苦笑いを浮べ、ウェイトレスに対応する。

事務的な口調で注文を復唱し、ウェイトレスは営業スマイルと軽い会釈をして奥へと消えていく。

彩は大きな溜息を一度吐いた。

「卓！ おーい！ もしもしー！」

周囲の目を気にしつつ、声を抑えながら卓に言った。

それでも眉一つ動かさない卓。彩は業を煮やして、卓の顔付近に右手を持っていた。

そして、親指と人差し指をすり合わせてパチンと乾いた音を響かせる。

「お、ああ、どうした……？」

「どうしたもこうしたも……催眠術じゃないんだから……」

彩は頭を右手で抑えながら、呆れたように顔を歪めて呟く。

元々彩と卓は近所に住む幼馴染というありふれた関係だった。

だが、地元の同じ高校に進学した頃、卓の横顔を眺めているうちに、ふと胸の内に浮ぶ特別な感情に気づいた。

彩は最初は気のせいだと感じ、それを心にしまいこんだのが、ある時、学校が終わって二人で帰る途中にふと、卓に呟いた。

「私たち周りからどう見えてるんだろう？」

彩はなんとなく口を衝いて出た言葉に驚いていた。

何言ってるんだろう……私……

唐突な彩の言葉に卓も驚いたような顔をして、

『さあ……』



黄昏の夕日を受けて、二人は無言で歩を進めた。

その途中、卓は何か決心したみたいに喉をぐくりと動かし、右手に触れる彩の手をさり気なく握った。

『こ、恋人同士に見え……てるかもよ？』

少し間を置いて、顔を赤らめ卓が声を上ずらせて囁いた。

彩は期待はしていたが、本当に返ってくるとは思いもしなかった言葉に動転し、鼓動が高鳴るのを感じた。

二人の関係が幼馴染の垣根を越えた瞬間だった

懐かしいなあ……

彩はそんな出来事を遠い過去のように感じながら、夜ベッドの上で回想に耽っていた。

あの後、結局、卓に告白させちゃって……

甘い過去に陶酔し微笑む彩だったが、それも束の間、見る間に表情を変えて口先を尖らせる。

だけど、今の卓にはあの時の面影がどこにも……

体を反転させて、桃色の枕にうつ伏せに抱きつき顔を埋めた。

そして、なぜか、漆黒の視界に映るは魔王の姿だった。

今、どうしてるんだろ……魔王さん……

枕元の携帯を手に持ち、しばらく人差し指で弄んでいた。

彩が卓の事を思い悩みながらも、睡魔に負け眠り込んだ翌日の朝、

魔王は最強の敵を迎えていた。

「魔王よ……ゼームス大陸を混迷におとし入れた罪……許しがたい

……今ここで屠る！」

魔王はほっかむりの漆黒のローブを脱ぎ捨てた。

「ハハハ……愚か者め、闇の支配者である我の力を知らぬ痴れ者には……当然死あるのみ！」

魔王は対峙する敵対者に、手の平を向け構えた。何やら口ずさみながら、禍々しい気を手に集めている。

大きな手の平に集約され形を成す青白い光の玉。それが凄まじい勢いで対峙する相手に放たれる。

「魔光波！」

長い白光の緒を引きながら、一直線に対象に向かうエネルギーの塊。

だが、待ち受ける敵は事もなげにそれを交わした。

数瞬後、的を失った光は、その少し向こうの地に着弾した。

地鳴りのような爆発音が轟き、吹き上がる炎で生じた高熱が辺りに風を撒き散らす。

「魔王覚悟！」

爆風と砂煙が目に入るのを腕を盾にして防ぐ魔王。しかし、それを好機と見るや、敵対者は一瞬で間合いを詰め、魔王の背後に回っていた。

「なんの！」

唸りを上げて振り下ろされる白刃を、体を反転しながら交わし敵対者の脇に入り腕を上から押さえつける。

「さあ、どうする！？」

魔王は敵対者の腕に強い力を加え、鈍く光る白刃をその手から地に落とさせた。

「まだまだあ」

甲高い声を上げると、自らの右手を上から押さえつける魔王の腕を、巻き込むように前転して魔王の大きな体を宙に舞わせた。しかし、前につんのめりながら魔王は片手を地に着き、腕の力でとんぼ返りして離れた位置に着地する。

「ははは……中々やるな！だが、もう剣は……」

「剣よ！我が手に！」

上空で声がすると、地に横たわる剣がまるで生き物のように震え一直線に空へ飛び立つ。

魔王が空を仰ぐと、太陽を背に受けた小柄なシルエットが目映った。

飛んできた剣の柄を握り締めると、

「炎よ！ 剣を焦がし灼熱の剣を我に！」

と叫んだ瞬間、どこからともなく蛇のように蠢く長い炎が湧き起こり、敵対者の持つ剣に絡みつき赤く染め上げていく。

「その技は……」

太陽の眩しさに手を翳して、魔王は叫んだ。

灼熱の炎を纏う剣が、上空から魔王に振り下ろされる。

しかし、その切先が魔王に届く瞬間、魔王の姿が地に潜り込むように消えた。

「こつちだ、こつちだ！」

見ると、魔王はいつの間にか離れた場所に移動していた。

「時空魔法か……やるわね」

「うむ、姫もなかなかだったぞ」

二人から殺気のようなものが急激に和らいでいく。

「魔王ちゃんも、たまにはこつやって体鍛えないとね、中年太りするよ」

「俺の体は人間とはちよいと違うんだ。そんなことにはなりはせん！」

朝から魔王と姫は魔王の作った箱世界の中で、模擬戦をしていた。姫の持つ剣はモックソードだ。ゼームス大陸の模擬試合で広く使われる刃のない刀だ。

それでも魔法剣を使えば、それなりの破壊力は付与することができる。

最初に放たれた魔光波も死なない程度の破壊力ではあるが、直撃すればそれ相応の火傷を相手に負わせる。

模擬戦といえど、ある程度のリスクを背負って二人はさつきまで戦っていた。

「お疲れ様です！怪我はないですか？」

薄い青白い寝着を身に纏ったリーシャが、傍らから声をかけた。

「ちよつと腕に焼けどが、よろしくね」

「はい！ 腕を出してくださいね」

リーシャに赤くなつた腕を姫は差し出した。

「清浄の水よ！」

リーシャは目を閉じて、口元でぼそぼそと口ずさんだ後叫んだ。足元の土の地面から水滴が幾つも浮かび上がり、姫の腕の火傷の部分に集い覆っていく。

透き通つた青く光る水滴は姫の火傷に吸い込まれるように消えたかと思うと、焼け爛れた肌を潤すとともに火傷を癒していく。

「はい、完全に治りました！」

「有難う、リーシャさん！」

今リーシャが姫に施したのは、ゼームス大陸に伝わる神水魔法の『癒しの水』と呼ばれるものだ。

水のエレメンタルを利用して様々な効果を生み出す神水魔法にある呪文の一種だ。

リーシャはこの系統の魔法を得意としていた。

魔王達がある程度傷を負う覚悟で戦えたのも、彼女の治癒魔法が念頭にあったからだった。

「ちゃんと、見せてみて」

魔王が姫の細い白い腕を優しく手にとり、隈なく視線を這わせる。

「大丈夫だってば……」

「うむ、完全に消えてるな……すまぬ、次から魔光波はやめとくわ……」

姫は手加減するなと最初に言つたが、それでも10分の1程度の力に抑えて魔王は戦っていた。

しかし、それでも姫に火傷を負わせてしまい、魔王は酷く反省し

ていた。

「はあ、俺のかわいい目に入れても痛くないくらいかわいい  
姫の真白な腕を俺は……」

消沈した様子で猫背気味にうな垂れる。

「あ、リーシャさん、そろそろ仕事いく準備しなきゃ！」

リーシャはそれを聞くや、青褪めた顔で懷から巨大な目覚まし時計を取り出した。

「きゃあああああああ！！ 急がなきゃーーーー！ 姫様ーーーー  
早くーーーー！」

甲高い悲鳴を響かせ、取り乱してその場で右往左往するリーシャ。彼女は時間には正確でなんでも物事が決まった通りに運ぶのを好む。

執事系タイプの魔族に共通する性質だ。

決まったスケジュールどおり事を進めて初めて安堵を得る。

その行動は常に直線的で、故に、一度その規則正しいリズムが崩されると脆さが露呈する。

今日は姫と魔王との模擬戦という不測の事態が入り、その戦いに目を奪われているうちに時間の把握を怠ってしまった。

「ああ、急がなきゃー！」

リーシャは魔王の丸太小屋へ物凄い勢いで走った。

途中、マランガが自らが住む木の扉を内から開けて、

「お、リーシャさん、早起きじゃねーか！」

リーシャの姿を認めて、笑顔で声をかけた。

が、彼女は動転していて周りが見えていない。

素っ気無く障害物を払った手は、とつもない力を孕んでいた。  
悲鳴とも嗚咽とも取れる声が青空の彼方に吸い込まれていく。

「あ、マランガ、おはよ！」

時間差置いて、一時的に冷静を取り戻すがそこにはマランガの姿はない。

「それどころじゃないー！」

一瞬で彼の存在を忘却の彼方に放りこみ、我に返ったリーシャは丸太小屋の中へ消えていった。

姫達は苦笑いを浮べその一部始終を見ていたが、姫は隣にいる魔王に振り向いて、

「じゃ行ってくるね、戸締りよろしく！」

「おう、任せとけ！」

魔王が力強く言うと、姫は青い空を仰いだ。

青い一条の光が天に向かって消えていく。

リーシャが姫のアパートの部屋に飛び立ったのだ。

「リターン！」

姫は青い光の筋を見て微笑むと、魔王に手を二三度降っておもむろに呪文を叫んだ。

[illegible]

こういう恥ずかしい切り方しておいて何ですが、プロットが出来  
次第一氣に書いていこうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9396e/>

---

魔王降臨伝

2010年10月10日18時41分発行